
或る小悪党の苦悩

黒雨みつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る小悪党の苦悩

【Nコード】

N4566W

【作者名】

黒雨みつき

【あらすじ】

それは金に目が眩んだ愚かな小悪党への天罰なのか。近代をイメージした架空世界を舞台に、『小悪党』を自認する不健全な男と、不幸な誤解によってともに生活することとなった空回る少女と、そんな彼らを取り巻くやはり小悪党な人々による、ときどきコメディ、だいたいシリアス、おそらくラブな物語。全七話完結済みです。 個人サイトとの重複投稿です。

その1『不幸のはじまり』

ガラガラガラガラ……

馬車がレンガ道の上をやかましい音を立てて走っていく。

初秋の風が涼やかに人の波を縫うようにして吹き抜け、空では薄雲の隙間から太陽がその顔を覗かせていた。道行く人々は楽しそうな笑い声を上げ、子供は両親に手を引かれながら、道ばたの露店を指さして何事かねだっている。

賑やかな喧騒。

二十五年ほど前に、剣と血と軍馬のいななきがこの町に遺し、残った爪あとも今は昔の話。この時期、町のメインストリートはいつもこんな感じだった。

うだるような暑さはすっかり影を潜め、町の人々もどこか嬉しそうに通りを行き交う。

人が行き交うから、商売人たちも商売に精を出す。賑わう。

その光景はまるで、この世の全てが幸せの固まりで出来ているんじゃないかと錯覚してしまうほどの、そんな明るさと前向きさに満ち溢れていた。

が、それはあくまで錯覚でしかない。

何故かって？

それは少なくともここに一人、不幸に捕らわれてしまった人間がいるからだ。

（冗談じゃねえぞ、ったく）

あれ、ちょっとおかしいぞ、という感じはあった。脳裏にちらつ

いた大金の気配に事を急ぎすぎてしまったという面も確かにある。ただ、前者はその当時においてはあくまでほんの些細な疑問にしか過ぎなかったし、後者についてはその時を逃すと大魚をみすみす逃してしまう可能性が高かったのだから、必ずしも判断ミスだったとはいえない。

となれば、俺が陥っているこの状況はまさに運が悪かった、つまり不幸だったということに他ならないだろう。

秋風は冷たい。

それはきつと、この俺が貧乏だからだ。だってほら、道行く奴らは誰も彼もが暖かそうだろう？

そう。俺は貧乏なのだ。

まあそれは今に始まったことじゃないし、言っても仕方ないのだが

ああ、なんか支離滅裂になってきた。

これ以上は愚痴しか出てこないだろうし、ひとまず自己紹介といこうか。

俺の名はカーライル。

ファミリーネームはない。

歳は今のところ二十歳とそこそこで通しているが正確なところは俺にもわからない。俺の生活範囲において正確な年齢を聞かれるなんてことはほとんどなかったし、それで困ったことも特にはなかった。

背は高いほうだが町中を歩いていて目立つほどではない。ただ体はやや細身だ。これは意図してその体型をキープしているわけじゃなくて、食事が質素なのと毎日をそこそこに動かしているためだ。

ルックスは……自分でどうこういうのも難なのでノーコメントとしておこう。仕事仲間が言うには、普段と怒ったときのギャップが激しい容貌をしている、らしい。女に不自由したことはないが、これは俺がモテるという意味じゃなく、女にウツスを抜かしてられるような身分じゃないってのが正しい。そんなものに情熱を傾ける

暇があつたら金策に走っている。女よりは圧倒的に金が大事な人間だ。それは断言しておこう。

金策　そう、職業か。

これは答えるのが非常に難しいところだが、最も適切な言葉で答えておこう。

ズバリ『小悪党』だ。

……なんだそれは、って？

何も深読みする必要はない。法律スレスレ、中には完全にアウトなヤツも混じってるが、そんなようなことをして糊口を凌いでいる、つまり俗に言う小悪党ってヤツなんだから。

もう少しだけ具体的に言つと、この見た目を活かしてちよつと乱暴な借金の取り立てとか脅迫の片棒を担いでみたり、ご禁制のちよつと危ない薬の売り子をしたり。その他に人身売買の斡旋なんてのもたまにやるが、これは最近取り締まりが厳しくなつてきているから本当に条件がいいときにしか手を出さない。

……やなこと思い出しちゃったな。

ま、自己紹介はこんなもんでいいだろう。

で、次に説明しなきゃならないのは、要するに俺がどうして不幸なのかってことだ。

先に断つておくと、貧乏イコール不幸、なんてことを主張したいわけじゃない。さっきも言つたように貧乏なのは今に始まつたことじゃないし、そもそも裕福だったことなんて一度もないから、貧乏であること自体はそれほど不幸であると感じない。

事の始まりは、そう。

人身売買の斡旋。

滅多にやらないその仕事が久々に舞い込んできたことから始まつた。

斡旋といつても俺は『小』悪党だから、人さらいとかそういう大胆なことはやらない。俺がやるのは孤児院やそれに類する施設、その他、身寄りのない子供が出そうなところを歩き回つて、依頼主の

希望に沿ったのを見つけてくるだけだ。

条件の合う子供が見つかったらあとは簡単。全くの家無しなら適当な甘い言葉で釣り上げてやればいいし、孤児院や施設にいるのならちよつといい服を着て、適当に身分証明を偽造して言うだけだ。

『ナントカ家の者ですが、主人がどうしてもそちらの子供を引き取りたいとおっしゃっております』

なんて。

言葉はそのときによって様々だが、設定は毎回ほとんど同じ。要するに小金持ちぐらいの子供のいない老夫婦が、孤児を自分の子供として引き取りたいと言っている。自分はそこから使いで来た者だ、と。

そんな簡単だと思うかもしれないが、これが驚くほど簡単だ。戦争からの復興が進んできたといいながらも、孤児院だの何だのつてのはまだ経済的に余裕のないところがほとんどで、基本的に子供がどこかに引き取られていくことを喜ぶ。

ついでに言うと、そういった施設の大半はよほどきちんとしたところじゃない限り、相手のことをきちんと調べる余裕なんてあてられない。

だから、多少乱雑な身分証明でも意外にすんなり通ってしまう。もちろんこつちも最初からそういう施設ばかりをターゲットにしている。

で。

今回の依頼主の注文はこんな感じだった。

『十歳から十四歳ぐらいの、健康で容姿の整った娘』

依頼主は四十代でまだ独身の、この界限ではちよつと有名な男。バルバ＝フラックマンという。

ただ、有名つつつても権力者だとかそういった類のもんじゃない。まあ、それなりに財のある男だが、そいつが有名なのはそういう意味じゃなく。

彼は、男としてあまり好ましくない十字架を背負わされた、悲劇

の人物なのだ。

……あー、ちょっとカッコ良すぎるか。

ぶっちゃけた話、ロリータコンプレックス、略してロリコンなのだ、そいつは。

そんな男の依頼だから連れてこられる娘の行く末も知れたものだが、それは俺の考えることじゃない。この世知辛い世の中、孤児なんてのは早いタイミングで自立するか引取先が見つかるかしなきゃ、どこからともなく闇の手が伸びてきて、男だったら労働力として死ぬまで家畜のように働かされるし、女だったら大抵は娼楼、あるいはそれ以下の地獄へと消えていくことになる。

それに比べたら多少はマシってもんだろう。

……まあ、依頼主のバルバって男は結構飽きっぽい性格で、何人もそういう娘を拾ったり捨てたりしてるらしいが、それは努力次第だ。せいぜい頑張って飽きられないようにするしかない。

とにかく。

俺が言いたいのは、俺にはそんな見も知らぬ他人の行く末を気に掛けてやるほどの余裕はないってことで、その仕事の報酬が俺の微かな罪悪感などあつさりと打ち消してしまうほど高額なものだったってことだ。

もちろん、俺は血眼になって条件に合う娘を探した。何度も言うように俺は貧乏だから、出し惜しみできる労力などこれっぽっちも持ち合わせていない。いつでも全力で仕事に取り組むし、そうしなければやっていけない。

さて、依頼人の言う『容姿の整った娘』だが。

これがなかなか難しい注文だった。

何しろ具体的な指定があるわけでなし、つまりは選ぶ人間の感性に任せるってことになるのだろうが、当然、俺の選んだ奴を向こうが気に入らないことだって有り得る。そのことでいちゃもんを付けてきて報酬をケチられる可能性もあるし、それどころか、俺以外の同業者にも打診しているんだらうから、せっかく苦勞して連れて行

っても門前払いとなる可能性さえある。

選ばれれば信用度アップだし、選ばれなければ信用度ダウンだ。この界限、そういう話が広がるのは結構早く、信用が落ちると他の仕事にも色々と支障が出てくる。

だから俺も慎重に選んだ。

そりゃもう、誰が見ても文句のない娘を探そう、と。

難航したことは言うまでもない。この世の中、孤児や浮浪児なんて別に珍しくもないが、整っている容姿の娘なんてそう多くはないだろうし、そういう娘はそれだけで色々な価値があるわけで、早いうちに他の連中に取りられてしまっている。

だから、ある程度の運と、あとはとにかく足で稼がないとそうそう出逢えるもんじゃないのだ。

普段ネグラにしている町から離れ、色々な場所を回った。幸い、そのための時間と必要な金は事前にそれなりに与えられていた。

そして……そう。

現在、俺が陥っている不幸の元凶であるところの『そいつ』に出会ってしまったのは、仕事の期限が徐々に迫りつつあった頃、その道中で立ち寄った村でのことだった。

以下、回想。

村に入った途端、陰気な空気が鼻についた。

都からは大きく離れ、周りには人の集まるようなスポットもなく訪れるのは盗賊か、あるいは俺のような訳ありの旅人ぐらいのものじゃないかというような、そんな寂れた村だった。

田舎だから、というだけじゃない。この空気の元凶は村のあちこちから流れてくる荒廃感だ。

道端では真っ赤な顔をした男がいびきを立てている。手には酒の

ビン。

たまに素面の人間が歩いているかと思えば、死んだ魚のような目をした老人。

子供の姿なんてどこにも見えやしない。

おそらくここは、何度も賊の驚異に晒された場所なのだろう。それが村を荒廃させ、ロクでもないならず者たちを引き寄せる。若者たちは村を捨て、残った老人たちは氣力を失い、抜け殻のようにただ生きている。

別に珍しいわけじゃない。俺は他に幾つもの場所を見てきたし、それに対して感傷的になれるほど世間知らずでもなかった。とにかく俺は、ここに一晚の宿を取れさえすればそれで良かったのだ。

夜の酒場は賑わっていた。

といっても、この村の現状を考えれば想像もつく。そこはガラの悪い男たちの溜まり場で、奴らが毎晩ドンチャン騒ぎするための場所に過ぎない。が、それでも金を払えば酒は出てくるし、一人で黙って酒を呑むだけならよほど運が悪くない限りトラブルになったりすることは無い。

何より、一向に進展する気配のない仕事に俺も若干の安らぎを求めていたし、そして残念ながら、今、俺の心を癒してくれそうなのは酒しかなかったのだ。

「あいよ」

やはりどこか陰気くさいオヤジが麦酒のジョッキを持ってくる。

俺は無言でそれを受け取ると、立ち去るオヤジの背中を一瞥してからそれに口をつけた。

「！……！」

周りは相変わらず騒々しい。

聞こうとしなくとも耳に入ってくるのは、下品な笑い声と、旅人から金品を強奪したあの、近くの村から女をさらってきたあの、

悪事自慢ばかり。

誇張されたものがほとんどだろうが、おそらくは事実も混じっている。

そんな奴らの集まりだ。

……思うことは特にない。

そりゃ悪党なりのポリシーもルールも持たず、そんなことを自慢している奴らに不快感を禁じ得ないことは確かだが、俺だって奴らと同じ穴のムジナ。それを自慢するかしないかの違いに過ぎないし、それで迷惑を被る奴らにしてみればどちらも同じだ。

一杯目の麦酒を飲み干して、すぐに追加をオーダーする。

今日は三杯までと決めていた。それ以上は明日の行動にも支障が出るし、金銭的にも余裕はない。

二杯目は少しペースを落とした。と同時に、別に興味もなかったが、周りに少し視線を向けてみる。

俺の座るカウンター席の奥では、相変わらず陰気そうなオヤジが緩慢な動作で洗い物をしている。

カウンターに座っているのは俺だけで、店の中にはあと数人の客。テーブル席で騒いでいるのは五人組の、見るからにならず者という雰囲気 of 男たち。俺がいることを除けば、ほとんど奴らの貸し切りと言ってもいい状態だった。

他に人影はない。

……いや。

俺の視線は店の中のある一点で止まる。

壁際にポツンと置かれた椅子。

そこにもう一人いた。

(……なんだ?)

服と呼ぶのに若干のためらいを覚えてしまうボロボロの服を身にまとい、薄黒く汚れた顔とボサボサに伸びきった髪。

あまりのみすばらしさに性別すらも一瞬わからなかったが、よく見てみるとどうやら女の子のようだ。十歳を少し過ぎたぐらいだろ

うか。手には鈴をいくつか束ねたものを握りしめていて、それだけがまるで借り物のように綺麗　いや、それだけがまともだった。

この村の荒廃した雰囲気にはピッタリの少女だが、酒場であることを考えれば場違いでもある。座っている粗末な椅子とその位置を考えれば客ではないし、動かないところを見ると給仕つてわけでもない。店に来た男どもを惹き付ける役にしては　無いともいえないがさすがに幼すぎるし、それならあんな薄汚い格好はしていないだろう。

いずれにしても、店の関係者だとすれば何らかの役目を与えられているはずだ。

少し興味を持って見つめていると、ふと視線がこちらを向く。

「……」

こちらを見たというより、たまたま視線がこちらを向いたというほうが正しいか。少女は俺に対して特別な反応を見せることはなく、少し困ったような顔をして忙しくキョロキョロとしていた。

やがて、店のオヤジが俺の視線に気付いたらしい。

コン、コンと壁を叩いて、

「ファル」

少女に合図をした。

それがどうやら少女の名前らしい。

「あ、は、はい！」

おどおどした印象の少女は弾かれたように顔を上げ、オヤジの方を見る。

その声は年相応の幼さを残していたが、意外にも暗いイメージの少ない、透き通った声だった。

「えっと……い、いいんですか？」

ならず者どもの大声に掻き消されそうな声で、少女はオヤジに何らかの伺いを立てる。

「……」

オヤジは何も答えずに再び洗い物を始めたが、それが肯定である

ことを少女は知っているだろう。

大きく深呼吸をして、それから自分を落ち着かせるように二度、三度、胸の辺りをポンポンと叩いた。

シャン。

手にした鈴の束が音を立てる。

シャン……シャン……

それが規則的なリズムを刻む。

相変わらず男どもの声はうるさいが、集中すればそれほど気にはならない。

（なるほど）

そこまで来て、俺はようやく少女の役目を悟った。

鈴の音は演奏というにはあまりにも貧相だが、ないよりはマシだろう。

問題は、おそらく少女がこれからやるであろう『歌』の方だ。

（さて……）

常識的に考えると、こんな場所でまともな歌が聴けるとは思えなかった。が、それでも俺がほんの僅かにでも耳を傾けたのは、先ほど少し聞いただけの、少女の透き通るような声があったから。

あの声ならもしかしたら、と思えたのだ。

シャン……シャン……

そして、鈴の音が十数回目のリズムを刻んだ後。

少女はゆっくりとその口を開いた。

次の日の夜。

「……！……！」

酒場は相変わらずだった。

後ろを振り向けば、昨日と似たような顔がそこにある。……いや、実際、そこにいるのは昨日と全く同じ連中だろう。もしかしたら一

人ぐらい入れ替わっているのかもしれないが、俺には見分けられない。

そして俺も、やはり昨日と同じようにカウンターに腰を落ち着いていた。

（まさか、二度もここに座ることになるとは、な）

一杯目の麦酒をゆつくりと口にしながら苦笑が漏れる。

酒は決して美味くはない。店のオヤジは相変わらず陰気くさいし客は最悪。いくら呑もうとも白けてしまうような、一人で酒を楽しむには最低の雰囲気だ。

普通ならこんな店に二度も来たりはしないし、そもそもこの村自体、今日の早朝におサラバする予定だった。

そんな俺をここに縫い止めたのは、言うまでもない。

昨日の、あの少女だった。

店の思惑通りだったかどうかはともかく、あの少女が俺の興味を惹き付けたのだ。

昨晚聴かされた少女の歌は、期待通りなかなか良いものだった。

ズバ抜けて上手いというわけじゃなかったが、耳障りの良い歌声で一人で酒を呑みながら聞くには最適だった。

そしてそれ以上に。

（あいつはもしかするとピツタリかもな）

そう思ったから。

今、俺の視線の先、若干おぼつかない足取りで椅子に腰掛けようとしている少女は、格好こそみすばらしいが顔の作りは整っているように見えたし、髪をきちんと整え、汚れを落としてそれなりの服を着せてやれば、おそらく美少女と言って差し支えないものになる。俺の目が正しければ、そのはずだ。

今日は、その身边を探ることに時間を費やすことになった。

保護者がいるのかどうか、知人は多いのか、どうやって生活しているのか。

特に保護者、つまり身寄りがあるのかどうかは、人さらいをやら

ない小悪党の俺にとっては非常に重要なファクターだった。

だが、それについては難なくクリア。

少女が住んでいたのは村の一角、土手にある小さな洞穴。そこで一人、風雨を凌ぎ、この酒場から僅かな金銭をもらって、それで食いつないでいる生活だった。

誰かと接触するような気配も全くなかったし、あるいはもともとこの村の人間ではないのかもしれない。

そうなれば、事は非常に簡単だ。

（あと一日様子を見て、それで大丈夫なようだったら、やるか）
俺はそう決意を固めていた。

期限を考えるとこの二日のロスは致命的だ。もしこれがダメだったら、今回の仕事は成果無しの報告をしなきゃならなくなる。

ただ、俺にはかなりの自信があった。

将来性もさることながら、今でも、磨きさえすればあの少女は必ず化けるはずだ、と。

「ファル」

俺が見つめていることを悟って、店のオヤジが昨日と同じように少女に合図を出した。

「あ、はい」

俺のことを覚えていたのか、こっちを向いて歌い始める。

ただ、少女は決して俺と視線を合わせようとはしなかった。気の弱そうな少女だから俺のことを怖がっているのか、あるいは歌うことに集中して自分の世界に入り込んでいるのかもしれない。

（最後の最後で、とてつもない拾い物かもな……）

微かな満足感を感じながら麦酒を傾け、俺はじつと少女の歌を聴いた。

「……」

どこかで耳にしたことのあるメロディー。題名なんてものはまったくわからないが、どこか懐かしさを感じさせる歌だった。

（郷愁、か）

自分の考えに思わず笑いがこぼれた。

郷愁の念なんて、この俺が感じるはずはないのに、と。
そう思ってた。

そしてそれは、俺が一杯目の麦酒を飲み干した、そのときのことだった。

甲高い破裂音。

「！」

俺の視線の先で、何かが弾け飛んでいた。

少女の歌が止む。

弾けたのはグラス。

どこから飛んできたグラスが少女の足下で砕け散ったのだ。

「うるせえぞ、こらあつ！」

投げつけたのは考えるまでもない。大声で騒いでいた一団の中の一人。そいつは椅子から立ち上がって、グラスを投げつけた体勢のまま少女を威嚇するように睨み付けていた。

「っ……」

少女は脅えて、

「ごっつ、ごめんなさい……！」

「ごめんなさい、じゃねえんだよ、このクソがッ！」

男がドンツと足を大きく踏み鳴らす。

「っー！」

少女が耳を押さえて体を震わせると、後ろの一団から笑い声が上がった。

どうやら少女の歌が気に触ったというわけではなく、ただ彼女の脅えるさまを見て楽しんでいるだけのようだった。

(……ちっ)

少女は助けを求めるように店のオヤジを見たが、オヤジはまったくの知らんぷりで助け船を出す様子はない。

トラブルはゴメンだってことなのだろう。

「おい、どーするよー。そいつ、お前のせいで、ぶち切れちゃった

みたいだぜー？」

一団から笑いとともにはやし立てる声が飛ぶ。

「あ……え、えっと……あの……」

少女は泣きそうな顔をしながら、オロオロと周りを見回して、

「ご……ごめんなさいっ！ ごめんなさいっ！」

体を震わせながら何度も何度も謝った。

……それが無駄なこととはわかっていて。が、少女にはそうすることしか出来なかったのだろう。

（仕方ない……）

俺は席を立った。

男たちの言動は理不尽そのものだったが、昨日と今日に関しては俺が歌うことを要求したのだから、ここは助け船を出してやるべきだろう。

そう考え、俺は男たちのところへ向かった。

「……？」

その視線がこちらを向くなり、俺は口を開く。

「悪かった。俺がそいつに歌うよう要求したんだ」

「はあ？」

案の定、男たちは一斉に怪訝そうな顔をした。当然だ。連中にしてみれば少女がどうして歌い始めたのかなど、まったく興味のないことだったのだろうから。

だが、俺は間髪入れずに言葉を続けた。

「詫びとして全員に一杯ずつ奢らせてくれ。……オヤジ！ この全員に麦酒を頼む！」

注文してからもう一度、

「ホントにすまなかった」

そう言って頭を下げる。

「……」

白けた空気が流れ、やがて店のオヤジが麦酒を運んでくると、男たちは自分の席に戻って再び馬鹿騒ぎを始めた。

所詮、こいつらもセコい小悪党。麦酒一杯で大人しくなるのだから安いものだ。

俺は席に戻るなり、オヤジに金を払って店を出ることにした。

「あ、あのっ」

後ろから少女の呼び止める声が聞こえたが、足は止めなかった。

あそこで少女に礼を言わせると、再び男たちが因縁をつけてくる可能性が高かったし、何より、これから商品として見ようとしている少女に恩を売ったような形になるのも嫌だった。

そしてまた次の日。

今度は昼間のうちに偶然を装って少女と話すことにした。

少女の住んでいるところは昨日のうちに調べがついていたし、ほとんど出歩かないらしいこともわかつている。

土手にある小さな洞穴。奥行きはせいぜい四、五メートルぐらいだろう。川のすぐそばだから大雨が降れば水も来るだろうし、そうでなくとも土に水が染みてベチャベチャになるはずだ。

入り口には穴の開いたむしろのようなものが掛けられていて、一応、風を和らげる役目は果たしているようだったが、家と称するにはあまりにも粗末なものだ。衛生的とはとても言えない。

俺がそこを訪れたとき、少女はちょうど川で洗濯をしているところだった。

「よう」

「？」

声をかけると、少女はびっくりしたように振り返った。

そして俺の顔を見るなり、

「あ、えっと……もしかして、昨日の……？」

はつきりとは覚えてなかったのか、少し怪訝そうに眉をひそめていた。

イエスと答えると礼を言われそんな雰囲気だったので俺はそれには答えず、

「洗濯か」

「あ、はい」

それでも少女は俺が昨日店に来ていた人間だと確信したのか、少しでも笑顔が浮かべた。

（……間違いない）

それを見て確信する。

この少女はやはり今回の依頼にピッタリの素材だ、と。

俺は逸る心を抑えながら世間話を続ける。

「洗ってもあまり綺麗になってないようだが」

ボロボロの服を見てそう言つと、少女はちよつとだけ苦い笑いを浮かべた。

「あはは、はつきり言つんですねー」

「遠回しな物言いは苦手なんだ」

「それでも」

少女はすぐ明るい笑顔に戻って、

「それでも実は女の子だったりするので、少しは気を遣うわけです」
「そうか」

声の印象と同じで明るい性格のようだった。境遇を考えれば、意外なほどに、という枕詞を付けてやってもいいぐらいだ。

「……」

「……」

それから少し無言が続いたが、今度は少女の方から口を開いた。

「あ、あの……えっと」

「カーライル」

名前を聞かれるのだろうと予測してそう答えると、

「えっと……それじゃあカールさん、ですね」

少女はニコニコしながらそう言った。

「……」

俺はそんな少女に少しあからさまな不快の表情を向ける。

「カーライル、だ」

口調を強くしてそう言うのと、

「あ……」

少女は言葉に詰まって視線を落とす。

「ご、ごめんなさい……」

「いや」

すぐに口調を戻したが、少女がそう呼ぶことを許すつもりはなかった。

これはビジネスだ。会話を交わす必要はあったが、不必要に親しくなるつもりはない。

「……カーライルさんはこの村の人ではないですよ？」

少女はためらいがちな口調になったが、それでも話しをするのはやめなかった。

もしかすると話し相手に飢えていたのかもしれない。

それは俺にとっても都合なことだった。

「そういうお前は どうしてこんなところで一人で生活してるんだ？
親はどうした」

わかりきったことだが、一応聞いておかなきゃならない。

案の定、少女はちよつとだけ表情を曇らせつつ、

「いいんです」

それでも明るい声で、あっさりとそう言った。……強がっている
のがわかる言い方ではあったが。

「そうか」

そんな彼女の態度に、俺は少しだけ好感を持つ。

こういう子供ってのは何か恵んでもらうために同情を買おうとする
態度の者が多い。それは決して悪いことじゃなく彼らにとって必
要なことだし、そうして生きていこうとするのは当たり前前で、
その点、この少女はあまり賢くないとも言える。

ただ、それでも。

俺としては、ギリギリまで他人に頼ろうとしないその姿勢に好感を持つのだ。たとえそれが賢くない行動なのだとしても。

「さて」

これで俺の用は終わった。

保護者がいないのは確かで、知人もどうやらほとんどいない。酒場で歌うことで日当を稼いでいるが、昨日の様子を見ると、店のオヤジともそれほど強い関係はないようだ。

これなら少女がある日突然いなくなっても、行方を必死に探そうとする人間はいないだろう。それにこの生活なら、俺についてくることはこの少女のためにもなるはずだ。

言い訳をするつもりはなく、それはおそらく事実。

（決まり、だな）

今日はひとまず宿に戻り、段取りを考えなくてはならない。

「あ……あの」

立ち去ろうとしたところへ、少女が少し慌てたように声を掛けてきた。

「なんだ？」

足を止めると、少女は俺の顔を見上げて、

「私、まだ名乗ってませんでした。……ファリーナです。酒場のオヤジさんにはファルって呼ばれてます」

「ああ」

ファルという呼び名の方は知っていたが、本当の名の方は知らなかった。

「ファリーナか」

「あの、ファルって呼んでいただけば……」

言ってから、少女は思い出したように慌てて、

「あ、あの！ 別に愛称で呼んでくださいとかそういうのじゃなくて、ただそっちの方が呼びやすいみたいですから！」

「……ああ」

その慌てぶりに、俺は思わず苦笑してしまった。

俺が愛称で呼ばれることを拒んだ理由を、おそらくはこいつなりに察したのだろう。

「わかった。なら、俺はお前のことをそう呼ばせてもらう」

「あ……はい！」

少女　ファルはホツとしたような顔をした。

夜。

昨日、一昨日よりも少し遅い時間に俺は酒場へ足を運んだ。

本来、今日は酒場に来る予定はなかったのだが、昨日のトラブルのこともあって少しだけ様子を見に来たのである。

すると、案の定。

酒場に入った途端、俺の目と耳に飛び込んできたのは、早くも聞き飽きた下品な笑い声と、思わず胸がム力ついてくる光景。

そこでは酔っぱらった数人の男たちがよってたかつて一人の少女を苛めていた。

おそらくはわざとやったものだろう。床には大量の麦酒がぶちまけられており、ファルは膝をついて黙々とそれを拭いている。彼女の服装はいつもより軽装。いつも着ていたボロボロながら多少厚めの服ではなく、まるで下着のような薄い布だけだ。

それもそのはず。

床を拭いているその布きれこそが、彼女のいつも着ていた服だったのだから。

「……」

俺は眉をひそめてそれを見ていたが、男たちの注意を引く前にカウンターに移動した。

……前からこういう状況だったのか、あるいは昨日のことが引き金になったのか、それはわからない。どちらにしろ、今日は俺が出しゃばっていく理由を見つけられなかったし、円満に彼女を助ける

のはどう見ても不可能だった。

「麦酒」

注文して、俺は知らんぷりを決め込む。

俺はまだあいつの保護者でも関係者でもない。助ける義理はないし、何よりも複数の男たち相手のトラブルはなるべく避けたかった。
「……………」

男たちの怒声や笑い声に、剥き出しの肩を震わせながら、ファルは黙々と床を拭いている。

……俺が来たことには気付いただろうか。俺が知らんぷりをして
いることに多少の不満を覚えているかもしれない。

だが、そうだとすれば尚更、彼女を助けるわけにはいかなかった。
不満を覚えるということは、つまり俺が助けてくれるかもしれない
と期待しているわけで、俺に何らかの見返りを求めているという
こと、そういう関係であると錯覚しかけているということだから。

それは俺の望むところじゃない。

頼られたり懐かれたりするのにはゴメンだった。

……ただ。

それにももちろん限度つてものがある。

「おい、ちよつと待て」

俺がついに口と手を出したのは 出さざるを得なくなったのは、
それから五分ぐらい後のこと。

「なっ……………」

俺に手首を掴まれて、男は怒りの声を上げた。

「てめえ！ 何しやがるッ！」

「殴るのはやめておけ」

ファルに暴力を振るおうとした男の手首を押さえ、俺は静かな声
でそう言った。

男の後ろにいた一団が不穏な空気を感じ取って席を立つ。

俺はそっちも見据えた。

「こいつ……………」

手首を掴まれた男は抜け出そうともがいたが、もちろん俺は離さない。

（さて、精一杯すごんでみせなきゃな……）

この程度の男が相手なら苦勞することもないが、問題はその後ろに控える複数の男たちだ。

「あ……」

そのときまで、ファルは俺が店に來ていることに気付いていなかったらしい。

驚いたように顔を上げて俺を確認し、

「カーライル、さん……？」

「……」

ヤバいな、と思った。

俺としてはただ、依頼主の元へ連れて歸る予定の少女に怪我を負わせるわけにいかなかっただけ。顔など殴られたら大事だし、それだけで俺の仕事がパアになってしまうのだから、止む無く間に入っただけにすぎない。

だが、この状況では、俺が『好意』や『正義感』で彼女を助けたのだと思われてしまう。

それはゴメンだった。

彼女の中に変な感謝の念が産まれる前に、釘を刺しておく必要がある。

「服を着ろ」

俺はファルにそう言うのと、押さえていた男の手をゆっくりと離してやった。

そして、今度は後ろに控えた男たちに向かって言う。

「あんたたちと事を構えようとは思ってない。俺は明日にはこの村を出て行くし、その後は好きにすればいい。……だが、今日だけは俺に免じて、穩便に済ませてもらえないだろうか」

「なんだと……この……！」

手首を掴んでいた男が怒りで赤くなつた顔を向けてくるが、俺が

少し目を細めてやるとすぐに口を噤んだ。

「……」

同時に後ろの連中も静かになる。

ハッターだが、効果があったらしい。こういうとき、どうやら威圧感があるらしい俺の外見は非常に便利だ。

「オヤジ」

今度は店のオヤジに向かって言う。

「今日はこいつを帰してやってくれ。支障があるならその分の金は払う」

「……ああ。別に構わないよ」

陰気なオヤジは嫌そうな顔をするでもなく、ただ店の中で大きなトラブルにならなかったことを安心するように、ホッとした表情を浮かべた。

金を出してオヤジに渡すと、ファルはすでに服を着終えていた。

麦酒でびしょびしょになっていたが、あんな格好で外を歩くよりはマシだろう。

男たちは相変わらず動かなかったが、何人かは諦めたように腰を下ろしている。

そして俺はすぐさま身を翻し、

「じゃあ……白けさせてすまなかったな」

また彼らの怒りが再燃しないうちに、俺はファルの手を少し強引に引いて店を出ることにしたのだった。

「……あの」

「まず、先に言っておく」

店を出た後、しばらく歩いて口を開いたファルに、俺は早速釘を刺しておくことにした。

「もし万が一にでも礼を言おうと思っているのなら、それは口にしてないでおけ。俺がお前を助けたのは善意でも好意でも、ましてや正義感からでもないし、礼を言われる筋合いなんてこれっぽっちもないからな」

「う……」

やはり礼を言おうとしていたらしい。

あんなことがあった直後ですすがに昼間のような明るさはなかったが、それほど取り乱したところがないのを見ると、ああいった仕打ちを受けることは初めてのことではないのだろう。

ただでさえ、普通の子供よりは圧倒的に不幸な境遇にいて、その上、今日のような出来事が続いたのでは、この先の不安と自らの不幸を嘆いて生きる氣力を失ってもおかしくはない。それでも泣き出したりしないのは、やはり見た目に似合わぬ芯の強さがあるのだろう。

強いな、と、少しだけ感心させられた。

ただ、ここで励ましや慰めの言葉を掛けるつもりはない。

仕事を成功させるために、こいつに俺の言葉を信用させる必要があるが、信頼されることは必要なく、まして、余計に好感を持たれるのは最悪だ。小悪党には小悪党なりのポリシーがある。特にこういう仕事の場合、相手の感情に対してはかなりの気を遣う。商品として扱おうとしている以上、人間らしい交流は最低限に留めておく必要があった。

それが俺のためでもあるし、こいつのためでもある。

「あの……聞いても、いいですか？」

「内容による」

おずおずと口を開いたファルに、俺はいつもの口調でそう返す。

ためらったが、それでもファルは口を開いた。

「あの、どうして、私を二度も助けてくれたんですか？」

「……」

予想してはいたが、実に答えにくい質問だ。正直に答えることは今はまだ避けたいし、嘘をつくのはもっと避けたい。

少し思案した後、結局、適当に誤魔化しておくことにした。

「それを聞くことが、お前にとってプラスになると思っのか？」

「え？ それはどういっ……」

ファルがわからない顔をする。

俺は答えた。

「例えばの話、『俺はとんでもない変態で、実はお前の体が目当てだったんだ、ぐへへへ』と言えば、それはお前にとってプラスなのか？」

「……そ、そうだったんですか？」

「断じて違う」

「そ、そうですねー……」

ファルはホツと胸を撫で下ろして、

「あ、それに、もしカーライルさんがそういう人でも、きっと私みたいな薄汚い娘には目も止めないです」

「……」

目的こそ違うものの、その薄汚い娘に目を止めたのは間違いなかったら、内心ちよつとだけ微妙な気分だった。

「ってか」

話題を変えることにする。

「お前、いつまで俺の手を握ってるつもりだ」

店を出たときから、ずっと。俺の方はとっくに離そうとしていたのだが、こいつの方はがっしりと俺の手を握ったままだった。

「あつ……ご、ごめんなさい！」

フツと、その手から力が抜けかけて、

「で、でも、その、できればこのまま……ちよつと怖いので……」
再び、その手に力が入った。

「怖い？」

その言葉に周りを見る。

辺りは真っ暗で明かりもほとんどない。今日は月も雲に隠れているし、確かに怖がる気持ちはわからなくもなかった。

だが、あんなところで一人で暮らしているような奴が、夜の暗闇が怖いとは。

（変な奴だ）

ただ、今日あの酒場から連れ出したのは俺なのだし、こいつの家にづくまではそれを許してやることにした。

「服、替えはあるのか？」

「あ、はい。あの…… 昼間に洗濯した服が」
「なるほどな」

つまり、替えの服はそれしかないってことだ。

「ああ。それと」

俺は思いついて、ポケットからいくらかの小銭を出し、

「連れ出した以上はお前の日当も払ってやらなきゃならないな。これで足りるか？」

「あ、いえ、そこまでしていただくわけには」

「足りるか？」

有無を言わさぬ口調で言い、その手に金を握らせてやる。

「……」

ファルは観念したように自らの手の中の小銭を親指で数えながら、

「あ、あの…… これはちよっと多すぎです」

「多すぎ？」

俺としてはこいつの状況と、あの酒場での立場を考慮した上で提示した金額だったのだが、どうやら思った以上に過酷な生活を強いられているらしい。

（なるほど。時折足がふらつくと思ってたが、全く栄養が足りてないらしいな）

納得しながらそこから少しの金額を取り除いて、

「じゃあ、こんなもんか」

「……」

ファルはもう一度、親指で小銭を数えると、やはり小さく首を振る。

「……遠慮してるんじゃないのか？」

「そ、そんなことはないです」

慌てたように言ったが、どうやら嘘でもないようだ。

「……」

改めて、彼女の手の中の小銭を見つめる。

そこにあるのは、おそらくギリギリ切りつめた最低限の一日の食費にも満たない額。

俺はため息を吐いて、

「ああ、わかった、もういい。じゃあこれだけやる」

そのまま彼女の手を閉じてやる。

本当の金額を聞いてしまったら、俺の気分が悪くなりそうだった。「い、いいんですか？」

びつくりしたように聞き返すファルに、もう一度ため息が出てしまう。

（……こいつは一体どんな生活をしてたんだ）

不幸な子供なんてこれまでにいくらでも見てきたが、こいつはその中でもかなりの上位に入る不幸っぷりだ。

（不幸、か。……哀れだな）

生きることを諦めてしまった奴に対しては、どんな境遇であろうと不幸だなんて決して思わない。

だがこいつの場合、この境遇にも生きることを全く諦めておらず、そのための精一杯の努力をしているからこそ、その哀れさがさらに際だってしまうのだ。

考えなくともわかる。

もしもこのまま、あと二、三年ほど月日が流れれば、こいつはもうこの場所で生きてはいられなくなっているだろう。

運が良ければ、つまり、俺のようにこいつの容姿の良さに気付く奴が現れれば、どこかの娼楼辺りにいるかもしれない。

だが、おそらく九割以上は、この近くでのたれ死んでいるか、その辺のならず者に遊び半分でなぶり殺しにでもされているだろう。

そう。いわばこいつは、もう詰んでしまった状況なのだ。

この村にいて、この生活を続けている限りは。

いくら本人が生きようと努力していても、どうにもならない。

(ちっ……)

そこまで考えて、俺は軽い自己嫌悪を覚えた。
俺がそんなことを考えたのは、別にこいつの行く末を心配したからじゃなく。ただ単に、これから俺がやろうとしていることを、多少なりとも正当化しようとしているだけだ、と、そう気付いたからだ。

小さいながらも悪党であろうとする以上、自分の悪事に対しての言い訳など決してしてはならないことなのに。

「カーライル、さん……？」

気付くと、ファルが不思議そうに俺の顔を覗き込んでいた。

「ああ……いや」

小さく首を振って、色々な考えを打ち払う。

……余計なことを考える必要はない。今はただ、目の前のビジネスに専念するべきだった。

そして、俺は口を開く。

「お前、ここを出たいと思ったことはないのか？」

「……え？」

当然、ファルは呆気にとられた顔をする。

「俺の考えを正直に言わせてもらおうが」

俺は構わずに言葉を続けた。

信用されているかどうかはまだ微妙だし、少し早いか、とも思うが、明日こいつが酒場に行けば今日よりもっと酷い目に合うはずだ。そうなると色々厄介だし、連れ出すなら明日の早いうち。

だから、説得するとすれば今しかなかった。

「今のままこの生活を続けていたら、お前はこの先きつとロクな目に合わない。……酷な言い様かもしれないが、近いうちに必ず命を落とすことになる」

「っ……！」

ファルの表情が急激に強張った。

いきなりこんなことを言ってどんな反応が返ってくるかと思って

いたが、あるいは本人もこの現状にある程度の限界を感じていたのかもしれない。

「で、でも……」

自然と口調が強くなる。

「わ、私、これでも頑張ってます……！」

俺の言葉が引き金になったのか。

今まで押さえつけていたものが溢れ出したかのように。

その様からも、彼女がこれまでどんな苦勞をしてきたのかが窺える。

「が、がんばって　！」

語尾が震えた。

「わかってる」

そんな彼女の様子に、少しだけ胸にモヤモヤしたものを感じながら静かに頷く。

たった二、三日の付き合いだが、こいつが生きるために頑張っていることはよく理解しているつもりだった。風雨を凌ぐために洞穴で生活し、ひどい扱いを受けながら酒場で歌い続け、そして雀の涙ほどの日当をやりくりし、何とか生き抜こうとしている。

いつからこうした生活を送っているのかは知らないが、それは並の子供にはとても難しいことだった。

「けど」

俺はそれでも彼女の努力を否定しなければならない。

「頑張ったってどうにもならないことは、世の中にいくらでもある。

……残念だが、今のお前はそういう状態だ」

それは正直な意見であり、またおそらく事実でもあった。

「！」

顔が歪んだ。

泣き出すかと思ったが、それは直前で堪えたようだ。

「だから　ああ、いや。先に言っておこう」

本題に入る前に、俺はいつものように釘を刺しておくことにする。

「俺はこれから、お前に違う道を提案してやるつもりだ。その道は、少なくとも今よりは努力次第で生き続けていられる、そういう道だ」
「……？」

突然の俺の言葉に、ファルは怪訝そうな顔をした。
続ける。

「けど、それは好意でも善意でもない。お前のために提案するわけじゃない。俺が、俺自身のために提案するものだ」
「？」

いまいち意味が通じなかったらしい。
だが、それはいずれわかることだった。

「選択肢は二つ」

そう言って、ファルの目前に指を二本立ててみせる。

「このままの生活を続けるか。あるいは俺についてくるか、だ」

「ついていく……？ カーライルさんに……？」

「ただし」

一瞬、その表情に俺の望まない感情が走ったように思えて、もう一度釘を刺す。

「俺がお前の面倒を見てやるわけじゃない。俺はただ、お前の新しい居場所へ案内するだけだ」

「……」

俺の言い方に、それが決して単純なことではないと悟ったのだろう。

握る手に、ほんの少しだけ緊張したように力が入って、

「で、でも……私なんて何の特技もないです。歌うぐらいしか……」

「そんな心配はいらない。ただ、お前がそこでの生活に耐えられるかどうかだけだ」

「い、痛いのはあまり得意じゃないです……」

「そういう苦勞もあまりない。食い物の心配もおそらく必要ない」
「……」

ファルは黙ってしまった。

そろそろこいつの家も近い。

すぐに結論を出せというのも酷な話だろう。

俺はそう考えて、

「考える時間は明日の朝までだ。村を出る前に一度だけここに寄ることにする。それまでに結論を出しておけ」

「……」

ファルは無言のままこちらを見上げた。

俺は何も答えず、少し強引に手を引き剥がす。

これ以上の会話は、ビジネス上必要のないことのように思えた。

「じゃあな」

「あ……」

ファルが何事か呟いたようにも聞こえたが、呼び止めるものではなかった。

しばらく歩いた後、暗闇が怖いらしいことを思い出し、一度だけ振り返ってみたが、どうやらちゃんと洞穴の中に戻ったらしい。

安心して、宿への道を辿っていく。

（あとは明日、か）

考えながら、ゆっくりと雲のかかる夜空を見上げた。

手応えはよくわからないが、おそらくついてくるのではないかと思った。

……その理由を考えると、少しだけ苦いものが胸を過ぎる。

（ちっ……）

先ほど、俺についてくることを提案したとき、彼女が一瞬見せた表情を思い出すと、やはり胸がムカついてきた。

たったの二、三日。それも少し会話を交わしただけだというのに、どこでどう間違ったのか、俺は彼女に多少なりとも信頼感を持たれてしまったようだ。

（……くそ）

言い様のない怒りが込み上げてきて、道端の石ころを思いっきり蹴り飛ばす。

仕事は上手く行きそうだというのに、俺の心が晴れることはなく。結局、それは夜中、俺が完全に寝付くそのときまで続いたのだった。

次の日の早朝。

「はっ、はっ……！」

俺は朝っぱらから全力疾走という過酷なノルマを課されるハメになっていた。

「はっ……はあっ……くそっ……！」

朝飯を食った直後のことなので体が重いやらわき腹が痛いやらで苦しいことこの上ないのだが、止むに止まれぬ事情が発生していたのだ。

拳には、先ほど酒場のオヤジを殴ったときの感触が鮮明に残っている。

（ふざけやがって！）

ついでに言うと、俺の頭の中は怒りで煮えくり返っていた。

……朝、俺がファルの元を訪ねたとき、洞穴は無人だった。入り口に掛けられていたむしろがボロボロにちぎれて落ちていたのと、穴の中の荒れ具合を見れば、何が起きたのかは一目瞭然だった。

俺はすぐさま酒場に走り、渋るオヤジからならず者どもの溜まり場を聞き出した。

ついでに聞いた話だと、ならず者どもはつい先ほどまで酒を呑んでいたというし、だとすればあいつが連れ去られてからまだそんなに時間は経っていない。

急いだ。

向かった先は、村の一角にある大きな倉庫。

もともとは家畜を飼っていた農家のものであるう、人気のない場所だ。

バンッ！

大きな音を立てて扉を蹴り開けると、視界に映ったのは見覚えのある三人の男。間違いなく、昨日ファルをいびっていた一団のメンバーだ。

そしてその奥。

隅に積まれた藁の上にファルは転がっていた。

右の頬が赤くなつて目に涙を浮かべてはいたが、どうやら間に合ったと言つて差し支えのない状況らしい。

「……またてめえかつ！」

「……」

無言で、男の鳩尾につま先の一撃をお見舞いする。

「ッ……！」

男はうめき声をあげ、口から大量の汚物を撒き散らしながら倒れた。

「て、てめえっ！！」

続いて残りの二人が同時に向かつてきたが、幸い昨日ほどの人数ではなかった上、酔いもまるで覚えてない。

残りの二人が揃つて地面に伏すまでには、それほどの時間はかからなかった。

「……クソどもが」

約一分後、地面に倒れて動かなくなつたそいつらを見下ろしてそう吐き捨てると、俺はすぐにファルの元へと向かった。

（……大丈夫だったか）

見たところ、怪我らしい怪我もなさそうだし、赤くなっている頬もそれほど思いつきり殴られたものではなさそうだ。

これならとりあえず支障ない。

「大丈夫か」

「あ……う……」

俺が声を掛けると、ファルは少し錯乱しているのか、一瞬、怖がるような素振りを見せた後、

「力……カーライル……さん……？」

確認するように、俺の名を呼んだ。

「ああ」

そう答えつつ『来るかな』と思った瞬間、

「わっ……わたっ……！」

案の定、ファルは手探りで俺の元まで這うようにやってくると、服を掴んで、そして泣き出した。

「わ、わたし……なんにも悪いことしてない……のに……っ！ そっ……それなのに……っ！」

「わかってる」

ファルはさらに俺の胸に顔を押しつけてきたが、ガタガタ震えている小さな肩を見ていると、振り払う気にはなれなかった。

「なっ……なんでわたしが……っ！ どうしてこんな……っ……！」

何も言わなかった。

そんなこいつの疑問に答える言葉を俺は持っていない。

『運が悪かった』

『産まれた環境が悪かった』

そう言えば納得するのだろうか。

……俺がこいつなら、納得しない。

だから、ひとまず無言でいた。

「うっ……っ……！」

その後はファルもただ泣き続けるだけだった。

……ひとまず落ち着くまで待つてやることにする。

そして 五分ほどもそうしていただろうか。

「……私……」

ようやく泣き止んだファルは、少し落ち着いた声で口を開いて。そこから飛び出してきたのは、予想通り、俺の待ち望んでいた言葉。

葉。

「私……カールさんについて行っても……いいですか？」

これで全て、上手く行った。こいつを連れて帰れば、おそらく向こうに気に入られるであろう自信はあった。

つまり、この時点で今回の仕事は大成功間違いなしと言ってもいい。

望んでいた大量の報酬も目前だ。

なのに。

(……なんだ、これ)

素直に喜べなかった。まるで自分が、後ろで倒れているならず者どもの仲間になってしまったかのような、そんな錯覚を覚えてしまう。

……偶然だ。

確かにこいつが俺を信頼するようになったのは、このならず者たちから何度も助けてやったからだろう。そしてそれは言い換えれば、彼らのおかげで俺の仕事が上手く行ったのだとも言える。

だが、俺にそんなつもりはなかった。

……なかったはずだ。

(なんなんだよ……)

俺はそんな苛立ちを抱えながら、挙げ句の果てに、

「ホントに……来るのか」

そんなとぼけたことまで口に出していた。

(……最低だ)

そうしてまた自己嫌悪に陥る。

こいつが今更意志を曲げないことはわかりきっていた。だから俺がそんなことを口にしたのは、やはり自分の行為を正当化しようとしただけの薄汚い行為に過ぎない。

「連れてって……ください。お願いします……カーライルさん……」
ファルの言葉はいつもより弱々しかった。元から栄養の足りてない体に精神的な疲労。

いずれにせよ限界だったのかもしれない。

もしも俺がここで突き放したなら、冗談ではなく死を選ぶのでは

ないかと思えるほど。

つまり、今のこいつは俺に全てを依存している状態だった。

(……くそっ)

俺の苛立ちもピークに近い。

だが、こんなはずじゃなかったといくら心の中で呟いても、俺に他の選択肢があるはずもなく

「わかった」

そう答えるしかない。

……予感があった。

おそらくこの仕事は、これまでで最も後味の悪いものになるであろう、と。

「なら、これ以上のトラブルが起きないうちに出るぞ。支度はすぐ出来るか？」

顔を埋めたままのファルをそう言って促すと、彼女はゆっくりと顔を上げた。目は真っ赤で目尻にも涙の跡が残っていたが、気持ちはもう落ち着いているようだ。

ゆっくりと自分の足で立ち上がると、

「あ……はい。えっと、替えの服さえ持ってくれば……」

そう言いながら目尻を拭う。

俺は頷いて、

「それなら必要ない。すぐ行くぞ」

「あ、で、でも、私、替えの服がないと洗濯もできないですし」

「途中で買ってやるって言ってたんだ」

そのまま、俺はファルの手を引いて倉庫を出た。

「かつ……買ってくれる、ですか!？」

大袈裟な反応を示す。

「その格好で隣を歩かれると、俺が迷惑だ」

「……あ」

恥ずかしそうに顔を伏せる。

少しずつ元気も戻ってきているようだった。

あとは早いうちにまともな物を食わせてやらなきゃならないだろう。

(……余計なことは考えないでいい)

そして俺は何度も自分に言い聞かせる。

(全ては上手く行った。あとはこいつを渡してやればいいだけのこと)

それで終わりだった。

それで俺は大金を手にすることができた。

それで一件落着だ。

次の仕事に手を付け始めた頃には、いつものように、もう名前も思い出せなくなっているに違いない。

そのはず、だったのだ。

だが

俺が違和感に気付いたのは、村を出てから一時間ほど歩いたときのことだった。

「おい。お前、なんでずっと俺の手を握ってるんだ」

空には眩しいほどの太陽が顔を出している。

「え？」

相変わらずフラフラと危なっかしい足取りのファルは、俺の言葉に顔を上げて、

「あ、あの、怖いので……」

「はあ？」

先ほども言ったように、今はバリバリの昼間だ。辺りは当然明るいし、こいつが怖がるような暗闇はどこにも存在していない。

「何が怖いんだ。まだ昼間だろうが」

もしかしたら甘えられているのかもしれないと思い、その手を振りほどこうとすると、

「わっ……ま、待ってくださいっ！」

ファルは今度は両手で必死に俺の腕を掴んだ。

そして、泣きそうな顔を向けてくると、

「あ、あの、わ、私、ほんとーに怖いので！　でっ、できれば離さないでいたっ……いただけると、ひ、非常に嬉しいのですがっ！」

切羽詰まったような声。

何だかイマイチ良くわからないが、確かに甘えているという雰囲気ではなかった。

「だから。何が怖いんだよ。……お前、暗闇が怖いんじゃないのか？」

「……え？」

今度はファルが不思議そうな顔をする番だった。

そして、ハツとすると、

「あの……もしかして、気付いておられなかったりします……？」

「なにが」

もちろん何のことだかわからなかったのですが、そう問うと、ファルは少し取り繕うような笑顔を浮かべて言った。

「あ、あの……私、目が見えないので、手を引いていただけないとすぐにはぐれてしまいますので……」

「……ああ」

その言葉によく納得する。

「なるほど。目が見えなかったのか」

そして、直後、ピタツと足が止まる。

「……目が、見えない？」

驚愕。

「目が見えない、と言ったのか、今？」

「は、はい」

ファルは緊張した声だった。

「待て……ちょっと待てえッ！」

俺はグイッとファルの顔を引き寄せ、その目を見つめた。

「カ、カーライルさん……あの……」

ちよつと脅えているようにも見えるが、俺にはそれを気に止めてやるほどの余裕はなかった。

（……マジ……か）

言われてみれば確かに。傍目には普通と変わらないように見えていたが、こうして近くで見てやれば、全く焦点が合っていない。

（そついや……）

俺はふと、今までのことを思い出す。

酒場で椅子に座るとき、俺と手を繋いで歩くとき、頻繁にふらついていたこと。

歌ってる最中、俺の方を見ながらも全く目が合わなかったこと。

そして何度か、俺の姿を見てもすぐに俺だと気付かなかったこと。

確かに盲目だったと考えれば、それらは全て当たり前のことだった。

「……はは」

確認して、俺は乾いた笑い声を漏らす。

（馬鹿な）

バチが当たったのかもしれない、と思う。

だが、今更気付いたところで、もう全ては取り返しがつかない状況になってしまっていた。

依頼主の要望は『健康で容姿の整った娘』だ。

『健康で』である。

盲目だけと体は健康です、なんて、そんな主張が受け入れられる可能性は 考えるまでもなくゼロだろう。それどころか依頼内容もまともに確認できないのかと失笑の的になること請け合いだった。

（マジかよ……）

ファルから離れ、俺は思わず天を仰いだ。

そしてこうなった以上、今更こいつを置き去りにするわけにもい

かない。彼女にもう帰る場所はないのだ。まして盲目であれば、なおのこと。置き去りにするということは、すなわち『そこで死ぬ』と言ってるのと同じこと。

何度も言うように俺は『小』悪党だ。間接的とはいえ進んで殺人など犯したくはない。

(……ってことは)

ファルは不安そうな表情で俺を見上げていた。

おそらくは、俺の気が変わらないかと心配になっているのだろう。その意味で言うと、彼女のそれは余計な心配だったと言えるが。

(しばらくは……俺が面倒を見るしかないの、か……)

それは金に目が眩んだ愚かな小悪党に下った天罰だったのか。

こうして俺は人生最大の不幸をこの身に抱え込むことになってしまったのだった。

ガラガラガラガラ……

「カーライルさん？」

馬車の音と怪訝そうなその声、そして手の平から伝ってくる感触が俺の意識を現実世界へと呼び戻す。

「急に立ち止まったりして、どうかなさったんですか？」

その声に視線を動かすと、そこには不思議そうな顔で俺を見上げるファルの顔があった。

俺は答える。

「いや。ただ、人生の無常さと己の愚かさを改めて噛みしめていただけだ」

「？」

あれから一週間。

俺はついに、ネグラとしているこの町に戻ってきていた。

本来ならもっと早くに帰ってこられるはずだったのだが、盲目の

人間を連れていることもあり、いつもの五割増しぐらいの時間がかかってしまった。

もう仕事の期限は切れていたが、それは今更どうでもいい。いや、どうしてもよくはないのだが、どうしようもなかった。

「ひとまず、家に帰ることにするか」

「家、ですか」

ファルがパアツと顔を輝かせる。

「なんだか、とても楽しみですっ」

「……」

そんなこいつの無邪気な反応は、残念ながら俺の陰鬱な気分を増幅させるだけだったが、盲目である少女には、そんな俺の表情を確認することさえできないわけで。

ファルはニコニコと笑顔を浮かべながら、

「こんなわくわくした気持ちになるのはとても久々です。ホント、

カーライルさんにはどれだけ感謝しても」

「言っておくが」

少しイライラが増してきたのを感じながら俺は強引にその言葉を遮り、ビシツとその眼前に指を突きつけてやる。

「盲目であることに気付かなかったことが原因とはいえ、結果として俺はお前をあゝの場所から連れ出した。だから俺には、少なくともお前が最低限生きていける場所を見つけてやらなきゃならないという責任がある」

「はあ」

ファルは足を止めたものの、特別な反応は示さなかった。

残念ながら盲目の少女に指を突きつけても何の意味もなかったらしい。

「あの、それって、やっぱり私が、あらかじめ目が見えないことを言わなかったのがいけなかったのでしょうか……」

「……」

それは多分、気付かなかった俺が悪いのだろう。

というか、だからこそ俺に責任があるわけで。

「つまり、俺が言いたいのは、だ。すでに何度も言ったことだが」
俺はゆっくりと歩き出しながら、

「お前の面倒を見てやるのはそういう理由であって、決して善意や好意じゃないってことだ」

「……はあ」

「だから、感謝などする必要はない。……その代わり、変に馴れ馴れしくするのもやめてくれ」

「あ……」

俺の言葉に、ファルの表情はみるみるうちに曇った。

「ご、ごめんなさい……」

明るかった表情が、一気に奈落の底へ。

どうやら浮き沈みの激しい性格らしい。

「……」

何だか子供をいじめているみたいで（実際子供だが）あまりいい気分ではなかったが、こういうことは先にしっかりっておかきやならない。

勘違いして変な幻想を抱くと、必ず後で苦しむことになるのだから。

……俺の家は町のメインストリートから大きく離れた、暗い路地の中にある。その一帯に住むのは、いわゆる社会的弱者かあるいは犯罪者まがいかのどちらかで、暴力沙汰なんてのは日常茶飯事。その辺に死体が転がっていたりすることも、まあしょっちゅうではないにしろ十分に有り得るような、そんな場所。

そこは、メインストリートを幸せそうに歩いていたような奴らには、全く想像もつかない世界だ。

「はぐれるなよ」

俺は先ほどまでよりも若干力を込めてファルの手を引いた。

もしも今、はぐれるようなことがあれば、その時点でこいつの人生は終わると言ってもいい。

決して誇張じゃない。

「はあ……」

普通の奴ならこの雰囲気には怖じ気づくものだが、盲目であるが故か、ファルはいつもと全く変わらない様子で、見えなくせにキョロキョロと辺りを見回している。

(……なるほど)

こういう普通っぽい仕草をするから盲目と気付かなかったのだと今わかった。察するにこいつの盲目は後天的なものなのだろう。

「おっ……カールちゃんじゃないの」

その途中で声を掛けてきたのは、近所に住む顔見知りの男だった。大柄でいかにもな風体だが、実際はスリだとかせこい詐欺だとか、そういううちましましたことしかやらない、まあ俺と同じような小悪党だ。

こいつの名前は三つぐらい知っているが、どれが本名なのかは知らない。いや、おそらくどれも本名ではないのだろう。

この辺に住む悪党はそのほとんどがこういうせこい小悪党ばかりで、まあそれも当然。生粋の悪党つてのは檻の中かもつと豪華な場所に住んでいるもんなのだ。

「お？」

と、そいつは俺の手の先にあるモノに目を止める。

「なんだ……おいおい。どっから拾ってきたのよ、それ」

「拾ったんじゃない」

「？」

ファルは何が起きているのかわからない様子で、

「カールさん？ お知り合いですか？」

そう言っただけで小首を傾げた。

「いや。知らない奴だ」

「おいおいおい。そりやないでしょう、カールちゃん」

そいつは俺の肩に手を回して、

「身も心も許しあったあの夜のことを忘れちゃったの？」

「殴るぞ、キサマ」

「はあ……？」

幸い、ファルには何のことだかわかってないらしい。

拳げ句の果てに、

「もしかすると、つまるところの、親友というものですか？」

「そう！　そういうことなのよ、お嬢ちゃん！」

「……」

頭が痛くなってきた。

「行くぞ」

「わっ」

強引に手を引くと、ファルはちよつと足下をふらつかせながら、

「あ、あの、それでは失礼します……」

必要もない挨拶をして、手まで振りやがった。

で、その後も、顔見知りは何回か出会い、似たような反応をされる。

…… ああ、非常に惜しいことだが、風呂に入れて髪を整えさせてまともな服を着せてみた結果、こいつは俺の想像通りの素材だった。つまり美形だ。それも、かなり強烈な。

ただ、それは『美形』という点のみに関して言った場合であり、女としての魅力なんてものはこれっぽっちも備えていない。

要するにガキなのだ。

ただ、それでもやはり人目を引いてしまうのは仕方のないことで。

「お前ら、言つとくが！」

いつの間にかぞろぞろと集まりだしたギャラリーに、俺は少しイラつきながら言い放った。

「こいつは拾ったわけでもさらってきたわけでもねえし、ましてや俺の愛人でも奉公人でもねえ！　……わかったらとつと失せろっ

！」

途端、ぶつくさ言いながらも潮が引くように離れていくギャラリー！。

中には近寄ってきてファルの顔を興味深げに覗き込む輩もいたが、触れることは俺が許さなかった。

「はー……」

さすがのファルもそんな状況には気付いていたようで、少し呆気に取られたような顔をしながら、

「カーライルさんって、お友達が多いんですねー……」

「そんなじゃない」

素っ気なく答える。

別に照れ隠しではなく、本当に友達だなんて言える連中じゃなかった。

(……けど、ま、早いうちに顔を通しておけたのは良かったか)

そう思う。

これで下手にファルに手出しする人間は確実に減るはずだ。

いくら小悪党どもの集まりとはいえ、こういった場所にもそれなりのルールが存在している。その中でも、ご近所さんに迷惑を掛けないことは、基本と言っていいほどの最低限のルールだ。

仲間、という少し聞こえが良すぎるが、こういった場所ですべていくには、やはりそれなりの結束が必要になってくるわけで。だから俺の身内だということを通しておけば、この近辺におけるファルの安全性は格段に上がる。

まあ、それでも他の場所と比べて安全とはお世辞にも言えないが。

「……さて、と」

独りのときの二倍ほどの時間をかけて、俺たちはようやく我が家の前に到着した。

我が家と言っても貧乏な俺が家など持てるはずはなく、もちろん借家だ。なかなか年期の入った平屋だが、周りから見ればかなりマシな部類に入るだろう。

ただし。

「入る前に言っておく」

そこまで来て、俺はようやくファルの手を離すことができた。

「あ……」

ファルは少し不安そうにしたが、俺に動く気配がないことを悟って、

「ええっと……なんでしょうか？」

「俺の家には同居人がいる」

「あ、ご家族ですか？」

「違う」

その反応が返ってくるのはわかっていたので、即座にそう答える。

「ただの知り合いだ。互いの利害が一致したから一緒に住んでいるだけの」

「はあ」

いまいち理解できなかったらしい。

ま、そんな事情などこいつに理解してもらう必要はない。

俺が言っておかなきゃならないのは一つだけだ。

「そいつは俺と比べれば少しぐらいは愛想がいい。おそらく、お前のこともそれなりに構ってくるはずだ」

「ほ、ホントですか？」

嬉しそうな顔。

これも予想通り。

「だが」

俺はすぐに言った。

「そいつと話をするのは必要最低限にしろ。仲良くなろうとは考え
るな」

「……え？」

案の定、ファルは呆気にとられた顔をした。

「あ、あの……仲良くしたらいけないんですか？」

「そういうことだ」

「……」

無言。

俺の意図が全く理解できないらしい。

「いいか」

その理由をいちいち説明するのも億劫だったので、俺はずっと続けてきた言葉を繰り返す。

「お前と俺は単なる義理の関係だ。それ以上でも以下でもない。だから、俺の周りに対しても常にそういう気持ちでいる。馴れ合おうとするな」

「……」

「そうしていれば、俺はお前に対して最低限の責任を果たしてやる。それだけは、約束する」

「わ……わかりました」

しゅん、としながら頷く。

納得できない様子は見て取れたが、それでも反論する気はなさそうだった。

（それで、いい）

俺に対する不満を抱えてくれるのは一向に構わない。

そもそも、最初からして少々俺に踏み込みすぎていたし、少しぐらい幻滅してくれた方がやりやすいってもんだ。

満足してドアを開ける。

「段差がある。気を付ける」

再び手を引いてやると、

「は、はい」

ファルは慌てたように付いてきた。

「お前の最初の仕事は、この家の構造を覚えることだ。一人で動けるようになれ。……ここがトイレだ」

玄関を入ってすぐ左手のドアに触れさせ、場所を覚えさせる。

「風呂は近くに公衆浴場がある。行きたいときは言えば連れていてやる。言わなくても、俺がいるうちは二日に一回は連れていく」

それから中に入った。

「それと、いくら慣れてきても絶対に一人で外を出歩こうとはするな。俺が迷惑するからな」

部屋は二つしかない。入ってすぐ、台所と兼用になった八畳ぐらの部屋と、その右手奥に六畳ほどの部屋。

「……」

約一ヶ月ぶりの我が家には、埃が溜まっていた。

俺は眉をひそめて、右手奥の部屋に声をかける。

「おい。いないのか？」

「んー」

かったるそうな返事が返ってきた。

……どうやらいるらしい。

そしてその部屋からひよこつと顔が出てくる。

もちろん見知った顔の、おそらくは俺よりも若干年上ではないかと思われる女。正確な歳は知らないし、もちろんわざわざ聞くつもりも調べるつもりもなく。

名前　これも本名かどうかは知らないが、ひとまずは『レベッカ』という名前で通っていた。もちろん、俺もこいつを呼ぶときはこの名で呼んでいる。

で、顔を出したレベッカはこいつ特有の、女としては低い音質の声を出す。

「ああ、おかえり、カール」

「おかえりじゃねえよ」

俺は部屋の惨状を眺め回しながら、
「そりゃ一ヶ月も留守にしてんだ。俺の部屋に埃が溜まってるのはまあ仕方ないでしょう。……けど、な」

目を細めてレベッカを見る。

「……お前のものらしきゴミまでが俺の部屋に溜まってるのは一体どういうことか？」

「おや」

そいつはさも今気付いたと言わんばかりの顔をした。

「小人さんが悪戯したのかな？」

「ふざけんな！ とつとと片づけろッ！」

「やれやれ。わかったわかった」

自分が悪いにも関わらず、いかにも仕方ないといった顔。理不尽極まりないが、一瞬、俺が悪いのかと勘違いしてしまいそうになるから不思議だ。

「ん？」

そうやってめんどくさそうに部屋から這いずり出て来て、ようやくファルの存在に気付いたらしい。

じいっとその全身を上から下まで眺め回すと、

「カール、趣味変わったんだ」

「……言うことはそれだけか」

「別に、君の内面には興味ないしね」

本当に興味なさそうに俺の前を通り過ぎ、そのままファルの顔を覗き込んだ。

で、一方のファルはといえば、

「……あ、あの！」

何やら焦っていた。

「わ、私！ も、もしかすると、とんでもないお邪魔虫な状態なのでは！」

「同じことを言わせるつもりか？」

ある程度予想していた反応に、軽く頭を小突いてやる。

「こいつはただ一緒に住んでるだけの……あー、まあ仕事仲間みたいなもんだ」

そう表現するのは本当は正しくなかったが、それを説明しようとするれば、俺のやっている仕事の内容まで明かすことになるので、あまり都合が良くない。

それにそもそも、こいつがそんなことまで理解する必要はないはずだった。

「仕事仲間、ですか？」

ファルはホッとため息をついて、

「あの、それじゃカーライルさんの奥様とかそういうことではない

「のですね」

「ぷっ」

その言葉に『奥様』が吹き出した。

そりゃ俺だって、あまりの馬鹿馬鹿しさに大口開けて笑い出した気分だ。

……実際にはやらないけどな。

「で、なに？　もしかすると、君がこの子の面倒を見ることになったわけ」

「しばらくの間、な」

「へえ。珍しい」

驚いたような感心したような、そんな感嘆の声を漏らして、再びファルの方へと向き直った。

そして、

「じゃ、ひとまずよろしく。私はレベルカ。……えーと」

「あ、ファ、ファリーナです！　あ、でも、他の方からはずっとファルって呼ばれてました！　ので、えっと……」

「ああ、堅くならなくていいよ。自然体、自然体」

そう言ってレベルカは自ら肩を回してみせる。

と……そうやっていて、こいつはすぐに気付いたらしい。

少しファルの顔を覗き込んだ後、俺の方を振り返って、

「この子、もしかして、目が？」

「……ああ」

負けたみたいでなんだかちょっと悔しかった。

「ああ、そうか」

そして納得顔のレベルカ。

「つまり君は、早とちりをして失敗したわけだ」

「……察し良すぎだぞ」

そりゃこいつは俺の今回の仕事のことを知っているし、予想するだけの材料はあるかもしれないが、それにしても。

「それで面倒を見るって？　……ふうん」

レベツカはチラツとファルを見て、それから小さく首を振ると、
「らしくないな、カール」

「……そうか？」

「君はもつと非情なのかと」

「そういうことじゃない」

非難する口調だったわけではないが、それに対しては反論せずにいられなかった。

「無関係の人間にはなるべく迷惑をかけないのが俺のポリシーだ。かけちまったなら、ある程度のフォローは必要だろ」

「そっか」

レベツカはそれ以上何も言わない。

……胸の中のイライラは相変わらず収まる気配がなかった。

（連れてくるべきじゃ……なかったのか？）

もしかすると、俺はとんでもなく愚かな行動を取ったのかもしれない。

人を養うつてのがそう簡単なことじゃないのは良く理解しているというか、現時点で俺一人が食っていくのだって苦労しているのだ。食費だって馬鹿にならないし、一応、人の多いこの町で暮らす以上は服だってまともなものを着せる必要がある。

出来れば早いうちに落ち着き先を見つけるつもりではいるが、それだって実際にどのぐらいかかるかわからない。義理を果たすとなれば、少なくとも、常識的に言ってまともな待遇の場所を見つけてやる必要があるだろう。

だが、盲目であることを考えれば、それもそう簡単に行くとは思えなかった。

（ちっ……）

我ながら馬鹿な失敗をしたもんだと思う。いや、まともな小悪党なら、あそこで見捨ててくるのかもしれない。

だとすれば、俺は小悪党としても欠陥品ということか。

レベツカがあんなことを言ったのも、当然のような気がした。

と。

「へえ。その服、カールに買ってもらったのか」

「そーなんですよ。私、自分では見えないんですけど……似合ってますでしょうか？」

「悪くないよ。ただ……残念ながら、彼の趣味が丸出しになったような服だね」

「え、そ、それはどーいう……」

「そりやもう、口に出すのも恥ずかしいくらい××で××な××××

×
」

「ちよつと待て！」

いつの間にか、ファルとレベツカが話に花を咲かせていた。

しかも、ひどく俺の名誉が傷つけられそうな内容の。

「帰ってきて早々嫌がらせか、こら」

顔を寄せて思いつきり睨み付けてやると、レベツカの奴はしれつとした顔で、

「だってホントのことだし」

「嘘つくな！ しかもそんなの、こんな子供に言う言葉じゃねえ！」

そう言いながらファルの方を指さすと、

「せ……××で××な××××……」

「おい。お前もそんなの信じるんじゃ」

」

「つて、なんですか？」

お約束のボケだった。

「ふううう……」

脱力。

旅の疲れが見事なまでに倍増した。

「……とにかく」

腹の底から沸き上がってくる殺意を押さえるのに数秒を要し、俺はなんとか平静な声を出す。

「お前、俺がさっき言ったことを忘れたのか」

「え……」

ファルは少し呆氣に取られた顔をしてから、ハツとして、

「あ……ご、ごめんなさい……」

「わかってりゃいい」

そうしてファルを黙らせてから、今度はレベツカの奴に釘を刺す。
「お前もこいつには一切構わないでくれ。調子に乗って勝手なことをされるようになったら困るからな」

「なんだ」

レベツカはつまらなさそうに首を振って、

「生意気に独占欲か」

「貴様は俺の人格まで否定する気か！」

再び猛烈な勢いで沸き上がってくる殺意。

今の俺なら視線だけで蟻ぐらいは殺せるに違いない。

……が、その視線を向けられた当の本人はまるで意に介した様子もなく、

「はいはい」

あしらうようにして自分の部屋に戻っていく。

「……くそっ」

残ったのはやり場のない怒りだけだった。

あいつと会話した後は、いつも妙な敗北感にさらされる。いい加減、精神衛生のためにも、奴を駆逐する方法を真剣に考えるべきかもしれないかった。

「……」

ふと、不安になってファルを見る。

すると案の定、

「はあ……独占欲ですか……」

呟いて、何やらボーっとしていた。

「……違うからな」

「はっ」

まるで夢から覚めたかのような表情で、ファルはピンと背筋を伸ばした。

「べ、別にそういうことを考えていたわけでは！」

「なら、いいが」

口にまで出しといてから否定してもまるで説得力ないが、敢えてそれ以上は突っ込まない。

どうせ、そんな風に妙な幻想を抱いていられるのも、最初のうちだけなのだから。

その2『空回る少女』

風の冷たい、薄暗い路地。

この町の貧困町は細い路地が縦横無尽に走っていて、夜になると、貧乏ながらも比較的まとまな生活を送っているような連中は全員家の中に閉じこもる。

そこから先は、俺たち大小含めた悪党どもの時間だ。

そしてそんな貧困町の中で、比較的メインストリートに近い方の路地。

「カーライルさんってのは……あんた？」

若い男が声を掛けてくる。服装を見るに中流家庭の出。年齢は十四、五歳ってところか。

俺はそいつを一瞥すると、手にした火の点いてない煙草を揺らし、

「火い、持ってるか？」

「え？……あ、ああ」

そう言って、そいつは少し大きめのマッチ箱を出した。受け取って中を見る。

入っていたのは、小さく折り畳まれた紙幣。俺はそいつを素早く数えて、数が合っていることを確認すると、

「サンキュ。じゃ、こいつは礼だ」

言って、小さな袋を差し出した。

中身は薬。と言っても、風邪薬だとか頭痛薬だとかじゃない。少しでもだけ摂取すると幸せな気分になれて、やりすぎるとアッチの世界に旅立つことのできる高級な薬だ。

「これが……そうか」

男は小さく喉を鳴らした。

どうやら初心者らしい。

「これはどうすればいい？ このまま飲むのか？」

「いくつか方法はあるが、初心者なら経口をオススメする。それで物足りなくなったらまた別の方法もあるし、別のモノもある」

俺は型どおりの文句を口にした。

見た限り、こんな薬に手を出すほどの理由があるとはとても思えない。働かなくなつて食っていける。親の金で学を身につけられる。屋根があり、隙間風の入ってこない家で、暖かい布団で寝ることができる。

そもそも、そうでなくてはこんな薬に金を出す余裕なんてあるはずもない。

こいつらは一体、何が不満なのだろう。

（知ったこっちゃない、か）

こいつらの存在が俺の朝食に化けているのだと思えば、文句なんてあろうはずもなかった。

（しかしやれやれ、こんなはした金じゃ、な）

少し歩いた後、マッチ箱から金を出してポケットに詰めた。

そこにあるのはそれなりの金額だったが、薬の仕入額を考えれば俺自身の収入はさほどでもない。

冷たい秋風が吹き抜けた。

（家賃と二人分の食費、か）

性には合わないが、今日も残業する必要があるそうだった。

盲目の娘ファルの面倒を見るようになってから約半月。秋風が徐々にその冷たさを増し、冬の気配が僅かに顔を覗かせ始めていた、そんな時期。

もちろん、半月程度で周囲に劇的な変化があるはずもなく。ついでに言うと、あいつの引取先を探す作業は予想通り難航していた。ヘタをすると、月どころか年単位での長期戦を覚悟しておく必要があるかもしれない。

貧乏は相変わらず。仕事の量は増えたが、余裕は減っていくばかり。万が一のために少しずつ貯めていた金も、僅かに切り崩す必要

が出ていた。

まあその出費についてはあいつの着る冬物の服だとか、そういった初期段階の投資が大部分を占めていたので、これからはもう少し楽になるだろうし、今すぐ資金が底を突くとかそういう心配はないただ、これがもともと負う必要のない出費だったのだと考えるとやはり腹立たしいことこの上なかった。

（とんでもない貧乏くじだ……）

あいつが来て変わったことといえば、毎日の支出が目に見えて増えたことと、それと比例するように俺のストレスの増加率が上がったこと。

メリットなんてありはしない。

何しろ、あいつにはどうやら学習能力がないのだ。

あれだけ馴れ合おうとするなど言っただにも関わらず、隙を見せれば近付いてくる。

最初のうちはちょっとしたことだった。

『カーライルさんはどんなお顔をされているんでしょうか？』

とか、

『カーライルさんのお誕生日って、いつなんですか？』

という類の質問。

そのたびに『出っ歯でギョロ目のハゲ男だ』とか『お前に会った日の前日だ』とか適当に答えてやってるうちはまだ良かったのだが、それが効果ナシと悟ると、さらに踏み込み始めた。

俺が何かするたびに手伝わせると言い出したり、少し疲れた様子を見せるとマッサージさせてくれと言ってみたり、拳げ句の果てには、目が見えないクセにメシを作ろうとして手に怪我をしてみたりと。

そこまで来ると適当にあしらって終わりというわけにはいかず、その差し出がましい行為に対して怒りをぶつけてみせる必要があった。

俺は別にサディストじゃない。半ばフリとはいえ怒ってみせれば

ストレスは溜まるし、それでもめげないあいつに対して苛立ちもつのってくる。

半月。

決して気が短い方だとは思わないが、それは俺の忍耐力を限界ギリギリまで追いつめるのに十分すぎる時間だった。

その日、俺が自宅の敷居を跨いだのはちょうど太陽が昇り始めたぐらいの時間。職業柄、基本的に昼夜逆転の生活を送っている。

「あ、おかえりなさい、カーライルさん！」

扉をくぐるなり、元気の良い声とともに疲れた体を刺激する匂いが漂ってくる。

「や、カール。今日も遅かったね」

仲良くテーブルを囲んでいたのはファルとレベッカの二人。

「……」

残業続きで寝不足の頭に、この光景はまさに悪夢だった。

「……どうして和気藹々とテーブルを囲んでる？」

「え……あ、あの！」

不機嫌そうな俺の口調に気付いたのか、ファルが慌てて弁解を始めた。

「た、たまたまです！ たまたま一緒に朝食になりましたし、それにそろそろカーライルさんも帰ってらっしゃるから、たまにはみんな一緒にと思って」

「……」

どうやらこいつには何を言っても無駄のようだ。

小さい舌打ちを返してレベッカを見ると、ヤツはいつものようにしれっとした顔で、

「大丈夫。君の大事なハニーには手を出してないから」

その冗談に紛らせた口調に、ついカツとなる。

「そいつと無闇に関わるなって言ってたんだろっ！」

怒鳴ると、ファルがビクツと体を震わせる。

そして、すぐに取り繕うように、

「あ、あのっ、カーライルさん……！」

「お前は黙ってる」

「っ……！」

ファルは脅えたように口を噤んだ。

「関わっちゃいけない？　へえ、じゃあ」

一方のレベツカは全然堪えてない様子で、小さな笑みを口元に浮かべる。

「手を出して、いいってことか？」

「！」

そのニュアンスの違いにはもちろん気付いた。

「レベツカ、お前……」

俺が少し低い声を出すと、レベツカは笑顔を俺に向けたまま、

「君はここがどこなのか忘れたの？」

まるで弟を諭す姉のような態度で言った。

「……それとこれとは話が別だ」

「別じゃない。……じゃあ私じゃなくてもいいよ。たとえばお仕事
が忙しくて頻繁に家を空ける君がここにいないとき、私が彼女に近
付けないとしたら、誰が彼女の安全を保障してくれるんだ？」

「……！」

正論だった。

「親切で言ってあげてるんだよ、カール」

レベツカはゆっくり席を立て近付いてくる。

そして、俺の胸元に人差し指を置いて声を潜めた。

「君が変な意地を張るのをやめれば可能な限り無償で彼女の面倒を
見てあげようじゃないか。君のいない間に彼女が姿を消す確率はき
つと減る」

「く……」

「君の言いたいことはわかる。君の仕事に対する考え方だって少し
は知ってるつもりだ」

言いながら、レベツカは俺の耳元に口を寄せた。

「でも、いつまでここにいろかわからない彼女を、完全に蚊帳の外に置いたままにするのは不可能だよ。まして私だって一端の小悪党だ。無関係だというのなら、私はいつでもあの子をどこかに売り飛ばすことだってできるんだよ」

「……」

俺と敵対することをデメリットと考えなければ不可能じゃないだろう。そしてこの女にはおそらくそれができる。

反論の余地はなかった。

それを察したのか、レベツカは相変わらずの笑みのまま、

「お利口さん」

ポンポン、と、俺の頭を撫でる。

完全にこつちを馬鹿にした態度だが、言っていること自体は確かに正しい。

ここは家の中にさえいれば何事も起きないと保証できるような土地じゃない。本来ならレベツカに金を払ってでも、ファルに手を出さないことと、出来る限り彼女の安全を保障してもらうように依頼する必要さえあった。

それについては、こいつが正しい。

「ああ、それと。イライラしてたらしいのはわかるけど、大人げない態度は謝っておいた方がいいかも。ほら。彼女、かなり落ち込んでいる」

「……」

「一緒に住んでる人と仲良くしたいと思うのは当たり前のことだよ。君に突き放されるようなことを彼女がしたとは思えないな」

「お前は」

そんなレベツカの言葉に再び苛立つ。ただ、先ほどすでに怒鳴ったこともあって、今度は比較的冷静に返すことができた。

「お前は何もわかつちゃいない」

「そうかもね。結局他人の気持ちなんてそう簡単には理解できない

もんだ」

否定はしなかった。

「それでも君の言い分はやっぱりメチャクチャだ。日常会話すら許さないのなら、どうしてここに連れてきたんだ？」

「それは……俺に責任があるからだ」

「責任、か」

テーブルで成り行きを見守るファルをチラッと見て、レベツカは少し考えてから言った。

「一人きりで暮らす貧しい生活と、同居人がいながらそれに関わることを否定された生活。……彼女にとっては、果たしてどちらが苦痛だろうか、ね」

「そんなの」

決まっている。

「生きることを保障された生活の方がいいに決まってる」

「そう」

レベツカは目を閉じる。

「なら、君が正しいのかもしれない」

そう言つて背を向けると、テーブルの方へ戻つていった。

いつもながら勝手なことばかり言ってくれる奴だ。それがまったく意に介す必要もないくだらない発言ならともかく、それに一理あることは俺にだって嫌というほどわかつている。

だから余計にタチが悪い。

そりゃ俺だつて、あんな子供をいじめるようなことを望んでたわけじゃない。ただ、それでもレベツカの意見を受け容れることなどではしなかった。

危険なのだ。

俺がレベツカたちと付き合つていられるのは、これが表面上の、利害関係のみの付き合いであることを互いに理解しているからだ。こつちの都合で切り捨てても、なんの後腐れもない。だから付き合い合つていける。

ファルはおそらく違う。あいつはきつと、俺が少し心を許せばあっさりど、まるで何の抵抗もなく飛び込んできてしまうだろう。

それは俺にとって苦痛であり、負担でもある。

もしもあいつが必要以上に俺に依存し、俺をアテにし続けたとしても、俺にはあいつの面倒を見続けることなどできはしない。だから俺はもちろん、そのときがくれば躊躇うことなくあいつの手を離すだろう。

そしてそのとき、俺に依存していたあいつはきつと途方に暮れることになる。

そういつのはイヤだ。

それは俺にとって耐え難いほどに後味の悪いことだった。

……たぶん、そこに俺とレベツカの大きな意識の差があるのだろう。

（妥協、できるのか……）

ある程度受け入れながら、それでいて情を移されないように距離を保つ。

そんな器用なことが、この俺に可能なのだろうか。

結論は、すぐに出る。

（無理だ）

自信がなかった。

それならやはり、俺の取るべき道は一つしかない。

「……寝る」

「あ……カールイルさん……あの、朝ご飯は……」

躊躇いがちにファルが声をかけてきた。

「今はいい。それと……」

彼女を一瞥してそう答える。

「前言は撤回だ。そいつとならいくらでも仲良くしていい。……レベツカ。それでいいんだろ？」

「……」

レベツカはチラッとこつちを見て、それから肩を竦めた。

「え、あ……」

戸惑う表情のファル。

嬉しそうではなかった。

おそらく、その言葉の裏にある俺の意図に気付いたためだろう。

（レベツカは仕方ない。……けど、俺はやっぱり距離を保つべきだ）

それが最善。そう思える。

ベッドに転がった。

レベツカの部屋を除けばここには一部屋しかないので、当然、ベツドは彼女らのすぐそば。そこに背を向けて布団をかぶる。

「……頑固な奴」

ボソツと呟いたレベツカの言葉は独り言のように聞こえるが、まづ間違いなく俺に聞かせるために発した言葉だろう。

「……」

一方のファルは何も言わない。

俺が彼女の前であれだけ怒鳴ったのは初めてのことだし、おそらく何か言って俺の機嫌を損ねることが怖いのだろう。

（それでいい）

体は疲れているはずなのに、眠気はなかなか訪れなかった。

原因は明らかだ。

……苛立ち。

結論は出たはずなのに、それはなかなか俺の胸から消えてくれようとしないうとしない。

（……ホント、とんでもない貧乏くじを引かされたもんだ）

睡眠だけは取っておかないと、今日の仕事にも影響してしまうというのに。

そうして悶々としてみると、しばらくして。

「あの……私」

ファルの声が聞こえた。

それはおそらく、俺が寝付いたと思つてのことだろう。

「私、わからないです。どうしてあんなにカーライルさんに嫌われ

ちゃったのか……」

沈んでいる。実際にはどうだかわからないが、声の調子を聞く限り目に涙ぐらい浮かべているのかもしれない。

「私って、そんなに気に触るようなことしてるんでしょうか？ 少しは……仲良くなれるように頑張ってるつもりなんですけど……」
やはり学習していない。

そうすることこそが、俺に強い苛立ちを覚えさせているのだと、直接的にも間接的にも何度も言っているのに。

……あるいは。自分が頑張りさえすれば、少しは歩み寄ることができるなんてことを考えているのだろうか。

（馬鹿な）

それは子供の理論だ。

努力することは悪いことではないし、努力する人間はそれをしない人間よりよほど生きる価値があるとは思うが、それと結果はまた別の話だ。

頑張れば、努力すれば何事もどうにかなるなんて、そんなのは夢物語に過ぎない。

努力する奴は好きだが、無駄な努力をする奴はただの馬鹿だ。

「んー」

対するレベッカの返事はいつも通りの調子。

「別に嫌われてないんじゃない」

「で、でも……」

ファルは少し強い調子で反論する。

「カーライルさん、いつもはもっと普通です。レベッカさんに対しても、他の人に対しても……私が関わったときだけ、いつもあんな感じで……」

「だから嫌われてるって？」

「だ、だって、そうじゃないですかー……」

「ん、まあ、この子は色々難しいからね」

（……ちっ）

聞きたくもない話が次々と耳へ飛び込んでくる。

まるで盗み聞きしているようで気分が良くない。かといって、起きていることをわざわざアピールするのも馬鹿らしい。

結局、軽く寝返りを打っておくことにした。

それで話をやめてくれれば良かったのだが、一瞬、会話が途切れたものの、

「好きか嫌いかで言うなら」

レベツカは言葉を続けた。

俺が起きていることをわかってやっているのかもしれない。

「カールはほとんど全員嫌いだから。いや」

一瞬の溜め。

……やはり俺が起きていることに気付いているようだ。

「嫌おうとしてる。でももしないくせに」

(……くそっ！)

意地の悪い笑みを浮かべるレベツカの顔が頭に浮かんで、俺は猛烈に耳を塞ぎたい気分だった。

「嫌おうとしてる……？」

理解できてない声。

「難しい年頃なのさ」

知ったふうな口を利いて、

「だから君が特別嫌われてるってことはないよ。ただ、少々怖がられてはいるかも」

「こ、怖がられてる？」

驚く声が上がった。

「わ、私、どこか怖いんですか？ え……あの、もしかして私って化け物みたいな顔してたりします？」

「ぶっ」

吹き出すレベツカ。

(……馬鹿か、こいつ)

多分、間違いなく馬鹿なのだろう。

ただ、あまりにとぼけたこいつの反応は、ほんの僅かではあったが俺の中の苛立ちを緩和してくれていた。

「そういう心配はいらないな、きつと」

レベルカの言葉も妙に楽しそうだ。

「逆の心配なら必要になるかもしれないが」

「？」

「手を出されないよう、注意」

（……野郎）

俺が口を挟めないのいいことに言いたい放題だった。

「？ 私、まだカーライルさんに叩かれたことはないですよ？」

そしてこいつも相変わらずボケまくりだ。

「ん、ま、それでもいいか」

（……いいのか）

どうやらどーでもいいらしい。

（ふう……）

心の中で大きく息を吐いてみる。

少し陰鬱な気分が抜けていた。

冷静になって、ふと考える。

（やっぱ、大人げなかったか……）

相手はどうしようもないほどに子供だった。じゃあ、少しぐらいは長い目で見る必要もあるのかもしれない。

これからはなるべく脅えさせることのないように、冷静に拒絶しよう。そうしていれば、いつかは俺との距離の保ち方というものを理解するはずだ。

レベルカはああやってファルを庇うような発言をしてはいるが、俺よりもずっと距離の保ち方が上手い。仲良くはしても、懐かれるようなヘマはしないだろう。

（あとは……なるべく早く……あいつの……落ち着き先を……）
そうこうしているうちに、ようやく睡魔が俺に襲いかかってきたのだった。

数日後。

「よう、カーライルさん」

朝方、太陽が昇ってすぐの肌寒い時間。

最近ではこのぐらいが俺の帰宅時間だ。つまり毎日が残業明け。その上、仕事の経過が思わしくなかったとすれば、とっとと酒でも呑んで寝てしまいたいと思うのは当然のこと。

そうして帰宅を急ぐ俺の前に、あまり好きではない人種の男が現れたとすれば。

そのときの俺の気分は察して余りあることだろう。

「今、帰りか。大変そうだなあ」

肩越しに振り返って視界に入っただのは、俺よりいくつか年下である男。背は小さいが、眼光は鋭く、口調は軽薄。

「……何か用か？」

自然、俺の口調は陰を持つ。

眠たいこともあったが、それだけじゃない。

そいつは近所に住む見知った男だ。ここにやってきたのは数ヶ月前のことで、やはりまともにお天道様の下を歩いているような人間じゃない。

「おいおい、いきなりそれかよ？ 随分と嫌われてるみてえだな」

馬鹿にしたような口調で両手を広げる男。

「わかってるなら、声をかけるな」

俺は不快感を隠さずに答えた。

この辺に住む小悪党たちにも色々いる。俺のように小口の仕事をちまちまとこなす奴から、スリ、詐欺といったもので生計を立てる奴。中には強盗など、他人を直接傷つけることによって金銭を稼ぐ奴もいる。

こいつは最後に挙げた例の、その中でも最も俺の嫌いなタイプの、

とある少年グループのリーダーだった。普段はその辺を仲間と遊び回り、金がなくなると行き当たりばったりに路上強盗、恐喝を繰り返す。狙う相手はだいたい力のない老人、女性。とにかく、何のルールもポリシーも持たない、俺の基準からすれば小悪党ですらない。ただのチンピラ集団の頭だ。

「おお、こわ」

似合いもしない仕草でおどけてみせて、それから俺の方へとじり寄ってくる。

「ところで聞いたぜ、カーライルさん。あんた最近、どこから可愛い女の子を連れてきたそうじゃないか」

「それがどうかしたか？」

答えながら、軽く舌打ちをする。

……どこから漏れたのだろうか？ 確かに特別隠していたわけではないが、この連中はそれほど情報収集能力の高い集団じゃない。風呂に行く以外あまり外に出していないし、それほど広がることはないと思っていたのだが。

（甘かった、か……）

ここへ戻った日、周りに自由に騒がせすぎたことを後悔する。。

「そいつは、あんたの商品か？ それとも、ちよつとした遊び相手か何かかい？」

男は気に触る笑みを浮かべた。

ぶん殴つてでもその笑いを止めてやりたかったが、残念なことに俺はそれほど短絡でもなかった。

「どつちだとしても、お前には関係のないことだ」

「おいおい、カーライルさんよ」

おざなりな言い方が気に触ったのか、男の声も少しだけ陰を帯びた。

「そんな邪険にしなくてもいいだろ。俺はただ、商品だったらい取引先を紹介してやろうつてただけなんだからよ」

「取引先？」

俺は少し聞き咎めて、初めて体を男の方に向ける。

「初耳だな。お前らがそんな商売に手を出し始めたなんて」

「そりゃ、俺だっていつまでも今のままじゃねえさ」

「なるほど」

ピンと来た。

「新しい商売の手付けとして、ひとまず手頃な娘を探してるってとこか」

「……」

一瞬とはいえ黙り込んだことで、それが凶星だったことが容易に伺える。

（……考えそうなことだな）

本気で商品となる娘を探そうとすれば、それなりの経験も人脈も苦労も必要になるし、いくら奴らが強盗紛いのことを繰り返してきたとはいえ、人を売り買いするとなればかつて間違ってくる。だからひとまずは仲介人のような立場を取って、パイプを作ろうというのだろう。

そこにタイミングよく、ファルの話が耳に飛び込んできたってわけだ。

「……んなことはどうでもいいだろ」

男の口調がさらに低くなった。

凶星を指されて少し苛立っているらしい。

「とにかくどうなんだ？ そいつは商品じゃねえのか？」

「残念だな」

俺は笑みを浮かべた。自分でも意地の悪いことだと思ったが、相手の思惑が外れたことが楽しくて仕方ない。

「あいつはそんなんじゃない。売る気で連れてきたわけじゃないし、もちろん気が変わることもない」

もちろん、その取引先とやらがあいつの落ち着き先として最適である可能性は、万が一にもなかった。それほどの依頼主が、こんなチンピラに打診するはずもない。

「……そうかよ」

案の定、男は不機嫌になった。

「用件はそれだけか」

むろん、これ以上付き合う理由はない。最後に少しだけ愉快的気分にさせてくれたから、まあ構ってやったかいも多少はあった。

「じゃあ俺は行く。お前も知つてのと通りの残業明けでな。あまり長いこと付き合つてられる気分じゃないんだ」

「ちっ」

俺の言葉に苛立った様子で舌打ちする。

「……ああ、そうそう」

そんな男に、俺は背を向けてすぐに肩越しに振り返ると言った。

「一応言っておくが、変な気は起こさないでくれよ。商品じゃねえつて、俺はお前にそう言つたからな」

「……わかつてる」

口元が不機嫌そうに歪んではいたが、それでも男は素直にそう答えた。

「あんたの身内に手を出すほど馬鹿じゃない。その娘のことは諦めるさ」

「なら、いい」

そして俺はその場を去った。

その間に、太陽は軽く視線を上に向けた位置にまで昇っている。

（……少し、注意した方がいいか）

途中でそう思った。

あの場ではああ言つたものの、相手は行き当たりばつたりの刹那主義者だ。いつファルに手を出してくるかわかつたもんじゃない。

（また、厄介ごとが一つ、か）

これだけ苦労してるのだから、たまには一つぐらい良いことがあつてもいいと思うのだが、どうも今月はとことん最悪の運勢になっているようだ。

こうなつてくると、どこまで沈み込むのか逆に楽しみにもなつて

くる。

……もちろん、やけくそになりかけてるってことだが。
ガチャ。

「あっ……」

ドアを開けると、最近では毎日のことになった、いつもの光景。
それと、ほんの僅かに食欲をそそる匂い。

「おかえりなさい、カーライルさん！」

今日もファルは元気だった。

そして、

「今日はレベツカさんに手伝ってもらって、野菜炒めを作ってみました！ その、たまには朝ご飯を……」

「朝はいらないと、言ってるだろ」
相変わらずめげない奴だった。

レベツカはすでに朝食を終えたらしく、部屋の方に引ッ込んでいる。が、もちろんこっちのやり取りは聞いているだろう。

俺はそのままテーブルの前を通過し、ワインの瓶を手を取ってベツドに移動した。

「あ……」

一瞬、ファルは淋しそうな顔をしたが、すぐに取り繕うようにして、

「その、味見だけでも、どうでしょうか……？」
「いないと言った」

出来るだけ乱暴にならないように言い放つ。そうしながらコルクの栓を外して、瓶に直接口を付けた。

それほどがぶ飲みするわけじゃない。ただ、すぐに寝付くことができればそれでいい。

「そうですか……」

ファルは目に見えてガツカリした表情をしていたが、

「あの……じゃあ、勿体ないから、私、全部食べます……」

「……」

チラツとテーブルの上を見ると、そこにあるのはどう見ても一人で食べる量ではない。おそらくこいつ自身の分もまだ手を付けてない状態なのだろう。

(……やれやれ)

このやり取りももう数回に及んでいるというのに、未だ懲りてないらしい。

「食べるつもりなら、腹を壊さないようにしろよ」

「……くすん。せっかく作ったのに」

かろうじて冗談っぽく取り繕ってはいたが、落胆しているのは本当だろう。

(結果がわかっていて、どうしても頑張るんだか)

これまでも何度かレベッカに手伝ってもらって簡単な料理を作っているが、俺は一度もそれを口にしたことがなかった。

朝はいつも食べないし、夕方近く、俺が起きる頃だとレベッカが留守なので作ることができない。そのためか以前、一人でやろうとしたことがあったが、軽い怪我をして俺にひどく怒鳴られている。

別に一度ぐらいは食ってやってもいいのだが、こいつの場合は一度許すと際限なくなりそうで、結局俺は頑なにそれを拒否し続けていた。

ワインの瓶をサイドテーブルに置いて布団をかぶった。

いつものようにファルに背を向けて眠る。

すると、

(ん……?)

ふと、ベッドから漂う微かな香りが鼻をついた。

(……これは)

そう強いものではないが、香水の匂いだ。しかもそれは、レベッカがたまにつけるものと同じ香りだった。

「おい……」

身を起こす。

「ふぁ……ふぁい……?」

振り返ったファルは口に食べ物を含んだまま、少し青い顔をしていた。

それはいいとして、だ。

「レベツカの奴にもらったのか何なのか知らんが、香水をつけるなら朝起きてすぐ、少量にしろ。布団に匂いを残すんじゃない」

ウチ　　というか、俺のこの部屋にベッドは一組しかない。ファルと俺では生活時間帯が違うから、同じベッドを交互に使っている状態だ。レベツカがこの布団を使う理由は思い当たらないから、布団に残った匂いがこいつのものであることに疑う余地はない。

「ふぁ……！」

青白かった顔が僅かに赤みを帯び、素早く口の中の物を飲み下すと、

「……あ、あの！　それは、なんというか……その、素晴らしい香りだったもので、つい！」

「別に悪いとは言っていない。布団に匂いを残すんじゃない、と言えるだけだ」

「うう……」

ファルは小さく呻いて困ったような顔をした。

「何かあるのか？」

どうやら別の理由があるらしい。突っ込んで聞くと、ファルは何度かためらった後、ようやく観念した様子で、

「そ、その……」

そして、赤みがかった顔をさらに赤くする。

「いつも私が寝た後だと……汗の匂いとかもありますし、カーライルさん、もしかしたら嫌な思いをなさっているのではないかと……」

「……なるほど」

納得。

「それでレベツカの奴に相談したわけか」

どうやら色気づいたとかそういうことではなく、布団に香水の匂いを残したことも意図的だったらしい。

俺はため息をついて、

「余計なことに気を回しすぎだ」

「で、でも……」

「そんなこと別に気にしたこともない。布団からこんな香水の香りがするよりは、お前の汗の匂いでもしてたほうがよっぽど自然で遙かにマシだ」

「は……」

ファルは驚いたように大きく目を見開いて、それからやはり慌てたように顔を真っ赤にしたまま言った。

「あ、あの！ カーライルさんがお気に召されたのでしたら、添い寝でもなんでもいたしますが！」

「……そういう意味じゃない」

俺は変態か。……向こうの部屋でレベッカの含み笑いが聞こえたのは、おそらく気のせいではないだろう。

「それと。お前ぐらいの歳なら、もうそういうことは気軽に口に出ない方がいい」

「はあ」

わかってないようだ。

俺は再びため息をついて、

「……いい。なんでもない」

諦めて布団をかぶった。

なんで俺が教育係など務める必要がある。そんなのはそのうち自分で学習するはずだ。

（馬鹿らしい）

天然というのは、まさにこういう奴のことをいうのだろう。……

何だか、こいつの落ち着き先を探すのは不可能に近いんじゃないかとさえ思えてきた。

（かなりヤバいな、俺……）

至急、心の安息が必要かもしれない。

(……うう)

ベッドから寝息が聞こえ始めてしばらく経った頃、そのベッドの主の悩みの種であるところの少女は、やはり彼と同じぐらいの大きな悩みを抱えていた。

(私ってどうしてこうなのかな……)

今日はいつもほどではないにしろ、二度もため息をつかせてしまった。

それも、明らかに疲れたため息だ。

その原因が自分にあることは十分に承知していたし、おそらく自分が無知であることがそうさせている要因なのだろうとも理解していた。

(どうしたらいいんだろ……)

小さい頃に両親を亡くして以来、少女はまともな人付き合いというのをほとんどしたことがない。もちろん、彼のような人物と接したことも全くない。だから、何が彼の気に触るのか、何をしたら受け入れてもらえるのか、まるで予測がつかないのである。

が、

(……でも、頑張らなきゃ)

少女はくじけない。

何しろ彼女にとつての彼は、彼女が覚えている限り、両親以外で初めて優しくしてくれた人物であり、今は少し距離があるようにも思えるが、それでもこうして屋根と壁のある家で、人間らしい生活をさせてくれている。

もちろん、それだけでも大感謝だ。

あとは……ほんの少し。あとちょっとだけ仲良くなることさえできれば。それさえ叶えば、もう何も望みはしない。

そんな風に思っわけである。

（うーん、でもどうすれば……）

それが問題であった。正直、今は何をやっても裏目に出る状態だ。やることなすこと全てが、彼の気に触っているようにも思える。

少女の思考はやがて、その望みを叶えるための前提条件を導き出した。

（……もつとカーライルさんのこと知らないと）

そう。彼が何を望んでいるのかさえわかれば。それさえ知ることができたなら、それが彼女にとって絶対不可能なことでない限り、どれだけ頑張ってもやり遂げる。

その決意があつた。

……しかし、そこで再び悩む。

少女は盲目だった。それを調べようとすることすらも、自由に動けない彼女にとってはなかなかの難題だったのだ。

一応この家の構造とここから共同浴場までの道のりは覚えていて、そこまでは一人でも何とか行き来できる自信があつたのだが、それだけではあまりに行動範囲が狭すぎた。

一緒に住んでいる彼の友人、少女にとってはちょっと変わった優しいお姉さんであるところのレベツカも、そういった彼の内面に関わる質問にはあまり答えてはくれない。

というより、わからないとのことだ。

（あ、でも）

そこでピンと閃く。

（カーライルさん、お友達が多いみたいだから、誰かご存じかも）

ここに来た日のことに思い至った。

彼は照れて友達じゃないなんて言っていたが、愛称で呼ぶような相手なのだから、間違いなく友達なのだろうと思う。それに、共同浴場に行くときも毎回何人もの人に声をかけられているようだった。ということは、あの道を辿っていけばそのうちの誰かと会うことができるかもしれない……と、少女はそう思いついたのである。

(……よし)

もちろん勝手に外出することは禁じられている。バレたらまた怒鳴られるかもしれない。

だが、ここだけは彼女としても譲れない部分だった。

(絶対に仲良くなってみせます……)

拳をグツと握り締めて静かに立ち上がる。

いくら何度か通った道とはいえ、そこを一人で歩くのはかなりの勇気が必要だったが、その程度のことは彼女の目的と比較すれば些細なことではなかった。

(レベツカさんにバレたらきつと止められますし……静かに……)

それもやはり目の見えない彼女にとっては難問だ。が、この時間、レベツカはいつも本に集中しているので、不可能ではない。

ゆっくり、ゆっくり、音を立てないように玄関に移動し……そして外に出るまでに要した時間は五分以上。

その甲斐あって、どうにか気付かれずに済んだようだった。

ひとまず、作戦の第一段階は無事終了。

(……うう、寒い)

外の風はかなり冷たい。上着を着てこなかったことを少し後悔したが、今から戻るわけにもいかないので我慢することにした。この程度なら慣れているし、いくらでも我慢できる。

そこからは記憶と手探りを頼りにゆっくりと移動。

公衆浴場までは歩いて十分ほど。それまでの道はしっかり頭に入っていたし、丁度手で触れられる位置にある目印もいくつか確認済みだった。

あとは彼の友人の誰かが運良く声を掛けてくれるのを待つだけ。残念ながら、相手を確認することのできない彼女に、自ら声を掛けるなんてことは不可能なわけで。

(無駄だったらどうしよう……怒られ損だよね……)

途中、少し弱気になったものの、

(で、でも、カーライルさんと仲良くなるためだし!)

自らを奮い立たせて再び歩み始める。

……そんな状況だったから。

「ん？ ……おい、お前は確か」

「え？」

「カーライルのところの娘じゃないのか？」

正面から掛けられたその声に、

「は……はい！ あの、カーライルさんのご友人の方ですか！？」

嬉々としてそう答えてしまったのは当然のことだった。

「友人？ ……ああ、まあそんなところか」

目前にいる男（もちろん顔はわからなかったが、若い男性のようだった）はそう答え、そして今度は逆に質問してくる。

「確か目が見えねえって聞いてたが……カーライルはどうした？」

「あ……」

そんな男の口調に若干の不安を覚えた。

今まで会ってきた彼の友人たちとは少し違うようにも思えたし、何よりも彼のことを愛称で呼んでいなかったから。

（で、でも、お友達だって言ったし……）

少女はそう思い直すと、

「あの……実を言うと今日はカーライルさんには内緒で。少々、お友達の方にお聞きしたいことがあります」

「……内緒？ 聞きたいこと？」

「その……出来たらでいいんですけど、お話を聞いていただけますか？」

「……」

男は少し考えたようだったが、すぐに、

「……ああ。いいぜ。俺にわかることだったら」

そう言つて、どうやら笑顔を浮かべたようだった。

「あ、ありがとうございます！」

（よかった……）

そしてホッと胸を撫で下ろす。

まさかこんなに上手く行くとは彼女自身も思っていなかった。
頭の中が喜びで一杯になる。

（これでようやくカーライルさんと仲良くなれるかも
それは少女がここに来て以来ずっと望んでいたことだった。何度
も何度も試みて、その度に失敗して何度も沈み込んで。それでもな
お、諦めきることができなかった いや、諦めることを考えすら
しないことだった。

だから、

「んじゃ、立ち話も難だからちょっとそこまで行こうぜ。俺の家、
近所だからよ」

「は、はい！ お願いしますっ！」

それで浮かれていた彼女が、男の言葉の裏に隠されていた悪意に
勘付くはずなどなかったのである。

「カール……」

ゆさゆさ。

「カール……起きろ。起きなさい」

ゆさゆさ。

「……ん」

微かな揺さぶりとともに瞼の向こうから射し込んでくる強烈な光。
まだ、俺が起きる時間じゃない。というかもものすごく眠い。寝付
いてからそれほど経ってもいないはずだ。

（なんだよ……くそ）

ただでさえ疲れている体。微かに揺さぶられた程度のことでの
睡眠の魔力に抵抗できるはずがない。

「カール」

ゆさゆさ。

「……」

少しして、そばにいた人影が無言でスツと離れる。

（レベツカ、か……？）

朦朧とした頭でそれを認識した途端。

（！？）

強烈な悪寒が背筋を走って、頭が覚醒すると同時にガバツと身を起こす。

その瞬間！

ゴツ！

つい先ほどまで俺の頭があつた位置に『鉄製の鍋』が落下してきた。

「おっと。起きたのか」

「……」

ギギギツ、と、油の切れた機械のような動きで顔を横に向けると、そこには『何か』を投じた後のような格好をしているレベツカ。

「……」

再び、枕の上に目を戻す。

どう見ても鉄製の鍋。しっかりと枕を押し潰している。

「ふっ……」

数秒遅れて、ふっふつと怒りが沸き上がってきた。

「……ふざけるな！ 貴様、俺を殺す気かッ！」

が、レベツカはいつものしれつとした顔で言った。

「ふと思つたんだ。寝起きの悪い男には生きる価値がないのではないかと」

「そりやどこの国の理論だ！ ああっ！？」

「まあまあ。今はそれよりももっと大事なことがある」

「てめえの命以上に大事なものがあるかよッ！」

当然の主張だったが、レベツカは呆れたように肩を竦めて、
「狭量な男だね、君は」

「ふっ……！」

そこまで来て俺は、こいつにはいくら怒鳴ったところでまったく効果無しであることを思い出した。

（ダメだ……こういう手合いには何を言っても通じん……）

「ところで、カール」

レベツカは何事もなかったかのように、手をポンポンと払って、

「この部屋を見て、何か異常を感じない？」

「……はあ？」

熟睡してるところをムリヤリ起こされた上、あまりに理不尽すぎる攻撃に晒され、当然の如く不機嫌レベル最高潮であった俺にとつて、そんなこいつの言葉をまともに聞くことは、世界最高峰の山を制覇すること以上に難しかった。

「何も変わってねえよ。有り得ない場所に鉄製の鍋がめり込んでることを除けばな」

「なるほど」

レベツカは納得したように頷いて、

「つまり、君にとつての責任というのはその程度のものでしかないわけだ」

「責任？」

その言葉を聞いて、もう一度、部屋の中を見回した。そしてすぐに、こいつの言いたかったことを理解する。

「……いない？」

この部屋の中にいなくてはならない奴の姿が、どこにも見えなかった。

「そう。いないね」

「トイレ……じゃないのか？」

「トイレどころか、彼女が知ってるはずの共同浴場までの道も、先ほど探索してきたところだよ」

「……」

頭が痛くなってきた。

「……誰かが侵入して連れていったわけじゃないな？」

「それなら私も気付いてるだろうね」

そりゃそうだ。いくら寝ていたとはいえ俺だって気付いているだろう。しかし、この町においてあいつが知っているどの場所にも姿が見えないとなれば、迷子になったか、あるいは誰かに連れ去られたとか考えられない。

そしてこの場所において可能性が高いのは、圧倒的に後者だった。
「くそっ！」

ベッドから飛び下りて素早く着替えを始める。

吐き気がするほどの腹立たしさが込み上げてきた。

「あいつは！　どれだけ俺を困らせりゃ気が済むんだよ！」

「……ま」

レベツカは壁際に寄りかかって腕を組む。

そしてゆっくり目を閉じると、

「彼女にも言い分はあるんだろうけど」

その言葉にピタツと手が止まる。

「……なんだよ。俺が悪いつてのか？」

「そうは言わないよ。……ただ、君がもう少し打ち解けて、もっとこの場所の危険性を丁寧に説明していたなら、彼女ももしかしたら一人で出かけることを思い直していたかもね」

「……」

「もちろん、あとで思いつきり叱る必要はあるだろうけど」

「……んなことは後でいい」

反論はいくらでもあったが、今はそんなことをしている場合じゃなかった。

「レベツカ。早速で悪いが、頼みたい」

そう言つと、レベツカはチラツと俺を見て、

「君が起きる前に、もう網を張った」

「……そうか。助かる」

こういうとき、情報売り買いして生計を立てているこいつの人

脈は役に立つ。

「ま、安くしとくよ。ツケのほうがいいかい？」

「……利息は安くしといてもらえると助かる」

「出血大サービスの同居人利率でね」

それはつまり、他と変わらない利息ってことだ。

「ま、君の稼ぎになんて大した期待もしてないけど」

「……」

また生活が圧迫されるのは間違いなさそうだった。

「けど」

と、レベツカは壁から離れて、着替え終えた俺に近付いてくると、
「すぐに動いてくれればいいけど、どこかに長いこと潜伏されたら

厄介だよ」

「そうだな……」

「心当たりはない？」

「ありすぎて困る」

あれだけの容姿を持つあいつのことだ。道端で偶然すれ違った初
対面の小悪党に連れ去られたとしてもおかしくない。

「一応」

レベツカはトン、トン、と足先で床を二度叩いた。

考え事をしているときのクセだ。

「近くで彼女の悲鳴を聞いた人はいない。だから、彼女が自分でつ
いていったか、あるいはよほど手際よく連れ去られたかのどちらか
だろう」

「それでも見当なんて」

言いかけて、ふと思いついた。

「いや、見当違いの可能性はあるが……今朝、レイビーズとかいう
グループの頭が、あいつのことで俺に話しかけてきたな」

「レイビーズ、ね」

レベツカは素早く手にしたメモ帳に何事か書き込んだ。

「あの餓鬼どもの集団か。……ああいう餓鬼は無知で無謀だ。やり

そうではあるな」

「調べられるか？」

「あんな素人集団、一時間もかからない」

「頼む」

「追加料金と必要経費が発生するよ」

「……」

俺とレベツカは、前にファルに対して言ったような仕事仲間なんかではなく、単なる客と商売人、大家と店子の関係だったりする。

だから、料金を請求されるのは至極当然のことなのだ。

ただ、

「そつちはなるべく抑えてくれ……」

結構ギリギリだった。

「カール君。お願いには可能なことと不可能なことの二つの種類がある。餓鬼どもを調べるのが可能なことだとすると、今の君の願いはさて、どっちだろう？」

「……わかった。とにかく頼む……」

「了解」

満足そうに頷いて、レベツカとかいう名の守銭奴は家を出ていった。

（……さて）

もしファルを連れ去ったのが予想通りレイビーズだったとすると、さすがに俺一人では心許ない。奴らは単なるチンピラの集団でそれほど恐さは感じないが、そのメンバーは十数人にも上る。

（何人かに声をかけておくとして……）

それだってタダではない。

頭の中で素早くそろばんが弾かれて、

（……胃が、痛くなってきた……）

俺の寿命は一日ごとに、確実に縮まってきているような気がする。末路はおそらく胃の病気が餓死だろう。

レベツカの仲間から、どうやらファルがレイビーズの連中と一緒にいたらしいという情報が入ったのは、あいつの言葉どおり一時間も経たないうちのことだった。

そして俺が三人の仲間を連れ、レイビーズが普段溜まり場として
いる古い廃家屋に乗り込んだのは、それから十五分後。

「なっ……なんだ、お前らっ！」

無言で突入するなり、そこにいたレイビーズのメンバー九人を、
五分も経たないうちに無力化した。いくら人数が倍以上であっても、
暮らしてきた世界が違う。……というか、俺以外の三人が強烈な連
中なので、ぶっちゃけ俺はいなくても問題ないくらいだ。

「カ……カーライル……さん……」

今朝会ったばかりのグループの頭は、鳩尾と顔面に蹴りを一発ず
つ喰らっただけで、完全に降伏した。

あまりにも情けないが、あの三人の戦闘力を見せつけられては仕
方なくもある。

「余計なことは一切聞かない。お前が答えなきゃならないことは一
つだけだ」

ボロくなつたソファの上に倒れて咳き込む男の胸ぐらを引き寄せ、
グツと顔を近付ける。

「連れていった娘はどこにいる」

「っ……！」

男は脅えたような色を表情に浮かべ、慌てて答えた。

「な……七番通りの……仲間の家の物置に……緑の屋根の……」

「そうか」

パツと手を離すと、男は力なくソファに崩れ落ちてうめき声を漏
らした。

「おーい、カールちゃん」

言ったのは体格の良い、普段は詐欺とスリで生計を立てる俺の知
人。

微妙にオカマっぽいのがたまに傷だ。

「こいつら、とことんやつちゃってもいいのう？ 丁度みんな、こいつらの勝手さにはちよつと頭に来てたとこなよう」

「ああ……」

俺はチラッと振り返って、

「あとはお前らの好きにしたらいい。俺の依頼はここまでだからな」
「……そっちの手伝いはいらないのか」

ちよつと物足りなそうな顔の、細身の男。

普段は無口で大人しいが、見た目に似合わない喧嘩屋なんて商売をやっている。そのためか、一度体に火が点くとなかなか収まってくれないらしい。

が、

「お前が来ると事が大きくなりそうだしな」

「そうか……」

残念そうだった。

さらにもう一人、

「おうカール。あの可愛い娘によろしくな」

強面のヒゲ男が頬をポツと赤く染めながらそう言った。

「……わかった」

気持ち悪いことこの上ないが、手伝ってもらったのだし、そのぐらいは伝えておいてやることにしよう。

「んじゃ、カールちゃんの許しも出たことだし」

「もう少し教育してやるとするか……」

「可愛い娘をいじめる奴は許さんっ！」

「……っ……！」

（ほどほどにな……）

妙に勢いづく三人の男たちと、脅えた声を発する複数のうめき声を背に。

（さて、七番通りの緑の屋根、か……）

大体、どの家が見当はついていたので、俺はすぐさま『通称』七番通りへと急ぐことにした。

「あ」

太陽はもう頂点近くにまで昇っている。

「カール」

緑の屋根の家。緑といってももう年季が入って、かなり深い色になっている。

その近くにはおそらく違うルートから情報を仕入れてきたのだろう。すでにレベッカが待っていた。

「ここか？」

「間違いないね。中には餓鬼が三人。一人はこの借り主で、あとはその仲間。……ただ」

「どうした？」

不吉な予感がして尋ねると、レベッカは冷静な顔と声のままで、
「さっきまでファルの泣き声が少し漏れてたけど、聞こえなくなっ
た」

「そうか」

答えると同時に、胃の辺りからどす黒いものがせり上がってくる。
そんな俺を見て、レベッカは少しだけ眉をひそめた。

「多分、彼らにとっては大事な商品だろうし、口を塞がれたか気絶
させられただけだと思うけど。……カール」

「なんだ？」

「あんな奴らでも、殺すと厄介だ」

「……わかってる」

「じゃあ……ほら」

言って、レベッカはかなり大きめの木槌を差し出した。

「正面のドア、ボロくなってるし一撃だと思うけど」

「ああ……」

蹴破るつもりでいたが、そうすると怪我也覚悟しなきゃならない。
道具があるのは確かにありがたかった。

「でもあそこは多分借家だし、もしかしたら君に請求がくるかもし

れない」

「……知ったことが」

ここまで来ればどれだけやったところで同じことだ。

（貯めてた分で足りりゃいいけどな……）

レベツカに払う分とあの三人に払う分。それに加えてもしかするとドアの修理代……馬鹿にならない。

（明日からは仕事も残業どころじゃ済まないな……）

が、まあ今は考えても仕方あるまい。

ゴッ……ガァーンッ！

木槌で殴ると、ドアの鍵が一瞬で弾け飛んだ。

「なっ……！」

中から驚いた声が聞こえる。

「何者だ……てめ……！」

飛び出してきて、俺を見た男たちの顔が引きつった。

「おまえ……や、あんたは……」

「……」

無言で狭い家の中を眺める。

奥にはベッド。床に転がる酒瓶。……その左手奥に、微かに両開きのドアが見えた。

「そこか……」

「ちょ……あんた！ 一体ここに何の用……ぐっ！？」

迫ってきた、おそらくこの借り主であろう男の喉元を鷲掴みにする。

「白々しいな」

そこを掴んだまま相手の体を小さく浮かせて、そのまま乱暴に床に押し倒す。

ドンッ！

「っ！」

あまり手加減しなかったためか、男の顔が一気に赤くなり、それからすぐに青白くなり始めた。

そのまま、奥に控える二人の男に視線をやる。

「っ……………」

動かない。

所詮は、集団で老人や女を襲うことしかできない連中だ。

「いいか」

少し手の力を緩める。

「っ……………っ……………」

ようやく呼吸と同時に脳に血が巡るようになって、真っ青になりかけていた男の顔色が戻っていく。

「てめえらが外でどんなことをやってようと俺には一切関係ねえ。けど、ここで勝手な真似をするとうなるか……………」

ゴスッ！

「っ！？」

鳩尾に俺の拳がめり込んで、瞬間、男は目を大きく見開いた。

そのまま体を横に転がしてやると、途端、その口から汚物を吐き出し始める。

「……………」

奥の二人は青ざめていた。

あのグループの頭や、この床に転がる男よりもさらに年下。せいぜい十三、四歳ぐらいだろう。

「わかったら、そこをどけ。…………そのポケットに突っ込んだ手、刃物が入っているのかもしれないが……………」

ゆっくりと立ち上がって、近付いていく。

「そいつを出したら命はないと思えよ」

「っ……………」

手が震えていた。そのまま小さく首を振りながら、ゆっくりと物置とは逆方向にあるベッドの方へ後ずさっていく。

刃向かう意志は完全になくなったらしい。

「それで、いい」

それでも念のため、目で牽制しながら物置の方へ向かう。

そして、そのドアに手を掛けようとした、そのとき。
ダンッ！

床を蹴る音。

動いたのは、俺に鳩尾を殴られて床に転がっていた男だった。

手には、刃渡り十センチほどのナイフ

（……っの野郎……！）

一瞬、体中の血が沸騰しかけた。

そのとき男がそのまま俺に飛びかかっていたら、死ぬまで殴り続けるのをやめなかったかもしれない。

だが、男が床を蹴ってこっちに向かってこようとした、その瞬間。その体がまるでサーカスか何かのようにクルッと前方に四分の三回転した。

「っ……！？」

ドンッ！

驚愕が顔に張り付いたままで、男が再び背中から床に落ちる。と同時に、男の持っていたナイフが男の顔の横、僅か数センチのところに突き刺さり、

「ひっ……！」

さらにその直後、喉元に細身のナイフが突きつけられた。

「ふと思った。身の程をわきまえない餓鬼には生きる価値がないのではないかと」

「……またかよ」

あいつの手にかかる誰でも生きる価値がなくなってしまうそうだ。

「さて、坊や。私はそれほど気が長くないよ」

つぶっ……と、ナイフが男の喉にその先端を埋める。

赤いものが一筋流れ落ちた。

「っ……！」

動けない。

そのまま、顔が青ざめていく。

「すぐに消えるなら十秒間だけこのナイフを退けてあげよう」

「っ……………」

今度こそ、男は戦意喪失した。

「よし……………そっちの二人も行けっ」

レベツカがナイフで促すと、倒れていた男と壁際に張り付いていた少年は、足をもつれさせながら騒々しい足音とともに家を出ていった。

「ふう」

それを見送って、レベツカはゆっくりと腰を上げると、

「まったく。まさかこの私が肉体労働とは」

「悪いな、レベツカ」

礼を言くと、奴は相変わらずの表情で、

「これも別料金」

「……………勝手にしてくれ」

すでに抵抗する気力もなくなっている。

そのまま物置の前に立って両開きのドアを開けると、そこには手足を縛られたファルが横向きに転がっていた。

「……………んっ！　んんっ！！」

声が聞こえなくなっただのは、どうやら喋れないように猿ぐつわを噛まされていただけのようだ。衣服にはそれほどの乱れもなく、見たところ外傷もなさそうで、確かにレベツカの言うようにそこそこ丁寧に扱われていたらしい。

「……………」

無言で手と足を解放し、順序は逆だが、最後に猿ぐつわを外してやる。

「力……………カーライルさん……………っ！」

おそらく外から聞こえた声などで俺が来たことには気付いていたのだろう。ファルは目に涙を浮かべたまま、いつかのように俺の服の裾を掴んだ。

「わ、わたし……………！」

何かを言い切る前に。

パンツ！

「っ！」

平手打ちが飛んで、ファルは再び床の上に転がった。

「……………」

後ろからレベッカの視線を感じたが、何も言っていない。

「あ……………」

一方のファルは打たれた頬を押さえて、驚きの視線でこちらを見上げてくる。

「カーライル……………さん……………？」

それには答えず、俺はその胸ぐらを掴んでムリやり立ち上がらせた。

そして、顔を近付けると、

「……………どういっつもりだ？」

「っ……………」

脅えたように身を縮ませる。

「ここに来た日、俺はお前に言っただけだ。一人で外を出歩くな」と

「……………そ、それは……………」

「俺を困らせるのがそんなに楽しいか」

「っ……………」

ビクッと顔を上げ、ファルは思いつき首を横に振る。遅れて出てきた涙で、顔はぐしゃぐしゃになっていた。

「……………困らせるつもりなんて……………なかったです……………！」

「だったら、こんなふざけた真似は二度とするんじゃない」
胸ぐらを掴んでいた手をゆっくりと離してやる。

「あ……………」

ファルは力が抜けたように、ペタン、と尻餅をついた。

放心した表情で、

「そんな……そんなつもりじゃ……」

呟きながら視線を落とし、それから小さな嗚咽を漏らし始める。

「……」

俺は無言でそれを見下ろしていた。

胸のムカつきは収まらない。

（くそっ……）

俺だっけわかってる。おそらくこいつの行動は、俺を困らせるためでもなければ、単なる好奇心でしたことでもないのだろう。

他に何らかの理由があった。それは容易に推測できる。

ただ、たとえどんな理由があろうとも、どんな考えがあろうとも、そんなことは俺には関係ない。こいつの勝手な理由でこんなことをされてはたまったもんじゃない。

だからもちろん、理由を尋ねるつもりもなかった。

重要なのは、これから二度とこんなことをさせないようにすることだ。

そして　少しの間。

五分ぐらいは経っただろうか。

「うつ……うつ……」

ファルは泣きやむ気配がなかった。

基本的に我慢強いこいつも、一度泣き出してしまつとなかなか止まらないのは前回体験して良く知っている。

それに。

今回は前回のそれよりも遙かにショックを受けているように見えた。

「……カール」

そこへ痺れを切らしたのか、レベッカがそつと耳打ちしてくる。

「いつまでもこうしてられない。反省してるんだろっし、そろそろ許してあげなよ」

「……」

あまり気が進まなかった。

許してやることが、じゃない。というより、許すも許さないもない。何がどうであろうと俺はこいつに対する義務を果たさなくてはならないし、俺とこいつはそれだけの関係だから、許すとか許さないとか、そういう俺の感情は一切介入する余地がない。

気が進まないのは レベツカの言う『許す』ってのは、要するに優しい言葉を掛けてやれということだから。

怒られて泣いている子供を慰めてやれということだから。

そういうのは苦手だ。心にもない言葉で相手を安心させるってのは、俺にはなかなか難しいことだった。

……が。

ずっとこうしているわけにもいかないのも、また確かなこと。

（仕方ない、か……）

考えた末、なるべく本心を語ることで慰める方法を選び出す。

そして、出来る限り口調を和らげるよう心がけた。

「安心しろ。別に今回のことでお前を追い出したりということはない」

「っ……っっ……！」

収まる気配はない。

耳に入っているのかどうか……いや、おそらく入ってはいるのだろうが、今の言葉はあまり効果がなかったらしい。

（ちっ……）

面倒なことだ、と、そう思いながらも、このままではラチが明かないのでさらに言葉をかけてやることにした。

「いいか……前にも言ったが」

言って、フウツと小さく息を吐く。

「お前が素直に言うことを聞いてさえいれば、俺がお前の生活を保障してやる」

まだ、止まらない。

「もちろん、お前が落ち着くことのできる場所も探してやる」

止まらない。

「簡単なことだ。ただ、俺の言いつけを守っていればいいだけの話。何も難しいことを考える必要はない」

「っ……」

ピタっと。

ようやく、嗚咽が止まった。
が。

「……？」

少し不自然な止まり方だと思った。

ただ、その時点では俺は深く考えず、すぐに気を取り直して言葉を続ける。

「けど、それができないようだったら、俺だっていつまでもお前の面倒を見切れない。今後こんな馬鹿なことを繰り返すようなら」

「

そう言いかけた、そのときだった。

「っ……わたし……」

視線を床に落としたまま肩を震わせていたファルが、突然叫んだのだ。

「わたし……わたしはッ！」

「……？」

驚く。

涙声ではあったが、それは今までに聞いたことのないほどにヒステリックな金切り声だった。

「おい」

もちろん俺にとっては予想外の反応だった。が、ファルはそんな俺の言葉も聞こえてない様子で、声を絞り出すように叫んだ。

「そんな……そんなことじゃないんです！ 困らせるとか、追い出されるからとか……そんな関係ないんですっ！ わ、私……私はただ……！」

グッと拳を握り締める。

「私はただ、カーライルさんと仲良くなりたかっただけです！
…それでっ！」

「……それで？」

俺も一瞬の驚きからすぐに脱却して、冷静に言葉の先を促してやる。

「それで」

ファルもすぐに落ち着きを取り戻したのか、若干大人しくなった。
「それで……どうやったら仲良くなれるのか知りたくて……そうしたら、カーライルさんのお友達だっていう人に会ったから……」
「……なるほど」

それでこいつの悲鳴を聞いた奴がどこにもいなかったのか。

おそらくこの場所に来て、この物置に閉じ込められるまで、自分が騙されていることにすら気付いていなかったのだろう。

だが、

（馬鹿な）

そんなのは何の理由にもならない。

俺は言った。

「それも来た日に言ったはずだ。そもそも俺には、お前と仲良くなるつもりなんてこれっぽっちもないってな」

「っ……！」

息を呑む音が俺の耳に届く。

「……」

レベルカのため息が聞こえたような気がした。

ファルはゆつくりと、体を震わせながら顔を上げる。

「……」

案の定、泣いている。

それは予想通りだった。

が

（……なんだ？）

何故だか胸の中がざわついた。

それは　どこかで見たような泣き顔だった。
遠い昔、どこかで。

「そ、そんなの　っ!」
そしてファルは叫ぶ。

再び先ほどの、ヒステリックな口調に戻って。

「仲良くなれないのなら……それなら……そんなの意味ないじゃないですかっ!」

「……何が、意味ないんだ?」

ドクンッ……

心臓が、大きく鼓動を打った。

(……なんだよ)

視界が微かに歪んだ。

『……さん……おとうさ……ん……』

耳の奥で聞こえてくる。

誰かの声。

(なんなんだ……これ　)

ドクンッ……

「いくら食べ物があっても……ちゃんとした服が着られても……!」
ファルの言葉は続いた。

その度に、まるで心臓を直接揺さぶられているかのような嫌な感覚が俺を襲う。

『……ねえ……おかあさん……ねえ……さん……』

聞こえる。

聞こえる……誰かの声。

(っ……)

不快になる。

胸がざわめく。

そして、直後。

「一緒に暮らしてる人と仲良くできないんだっただけ……それなら一人で暮らしてた方がよっぽどマシじゃないですかあっ！」

「っ……！」

ファルの言葉が耳の奥に突き刺さった。

同時に、

(……くっ！)

眩暈を覚えて頭を押さえる。

ドクンッ……

意識が、剥離していく。

『だれか……だれか……ぼくとおはなしして……』

『だれか……』

『……だ・れ・か』

』

「くうっ……！」

「カールっ！」

耳元でレベツカの声が聞こえた。

そのおかげか、何とか意識が保たれる。

現実へと戻ってくる。

「うっ……！」

「……カーライル……さん……？」

突然の異変に何が起こったのかわからない表情のファル。

「……あ……？」

俺はいつの間にか床の上に膝をついていた。額と首筋にはびっし

よりと汗を掻いていて、妙な寒気がする。

「ど、どうしたんですかつ!? レベツカさん! 何が……っ!?!」
狼狽した様子で、手探りで俺の姿を探すファル。

「くっ……いや」

頭を押さえながら立ち上がる。

……頭痛も幻聴も、すでにその姿を消していた。

「なんでもない……少し眩暈がしただけだ」

「……」

ファルは心配そうに、キョロキョロと周りを見回した。

その意図に気付いたレベツカが答える。

「心配ないよ。本当に眩暈がしただけのようだから」

「そっ、そうですか……」

ホッと息をつく。

そしてすぐに、泣きそうに顔を歪めて、

「ごっ、ごめんなさい。私……私のせいですね……」

俯くと、ポタツと床に涙が落ちた。

「私がカーライルさんに無理ばかりさせてしまってるから……」

「……」

妙な感覚だった。

先ほどまではなんとも思わなかった彼女のそんな表情。

なのに、今は僅かに俺の心を揺り動かす。

どうして いや。

今の俺は、その原因に気が付いている。

(ああ……そういうことか……)

どこかで見た泣き顔だと思った。

「私、身勝手なことばかり言って……カーライルさんのこと、これ
っぽっちも考えてなくて……」

「……いや」

心臓の鼓動もようやく通常運転に戻り始めている。気持ちも落ち着いてきたので、俺は大きな息を吐くとともに、答えた。

「お前のせいじゃない。これは俺の持病だ」

「……え？」

ファルは少し意外そうな顔で俺を見上げて、

「持病……ですか？」

「ああ。だから、気にするな。とにかく……話の続きは帰ってからだ」

言って、ゆつくりとファルの手を取った。

……不思議と、こいつに対する腹立たしさはほとんど姿を消していた。体の調子は最悪だったが、気分はそんなに悪くない。

手を引くと、ファルは少しだけ抵抗した。

「あつ……あの……わ、わたし……こんなに迷惑をおかけして

」

「いいから、来い」

「あつ」

強引に連れ出すと、今度は抵抗しなかった。

「……」

レベル力は相変わらず何も言わずに腕を組んでいたが、その表情はいつになく真剣で。

道中は、誰も彼もが無言のまま。

そして太陽が最も高い位置に顔を出した頃、俺たちはようやく自分たちの家へと戻ってきたのだった。

「すー……すー……」

窓からは赤く染まった空が見えた。

カラスの鳴き声が、もう少して訪れる夜を知らせてくれる。

「すー……すー……」

ベッドで寝息を立てるのは、本日の騒動の原因を作ってくれた盲目の少女。緊張の糸が切れてしまったのか、家につくなり気を失う

ようにして眠りについてしまった。

俺も疲れていた上に寝不足だったのだが、まあこのぐらいを我慢するのは慣れていたし、何より、疲れた頭でも色々と考えておきたいことがあった。

「トラウマ、ってやつか」

ファルの寝顔を見つめながら、レベツカは壁に寄りかかって腕を組んでいる。

俺は答えた。

「そんなカツコイイもんじゃない。……ただ、未練がましく恨み続けているだけのことだ」

特にすることがなかったので、何となくファルの寝顔を眺めながら。その目尻には涙の跡が残っていて、悪い夢でも見ているのかちよつとだけ眉間に皺を寄せていたが、うなされてるというほどでもなく。

「……別に捨てられたこと自体を恨んでるわけじゃないんだ。あいっつら……俺の両親にしてみりゃ、自分らが食っていくのにも困ってそれで仕方なく捨てたんだろうからな」

「……」

レベツカは黙って聞いている。

あんなことがあった後のせいか、俺も珍しく自分のことを話したい気分だった。

「俺が言いたいのは」

目を閉じる。

「捨てるぐらいならどうして産んだんだった。大人のくせに、産む前にそんなことも考えられなかったのかって。ただそれだけのことなんだ。……だから、こいつのことも」

言って、少しだけ落ち着いた様子のファルの寝顔を見た。

「どうせ最後に手を離すなら、仲良くなっちゃいけないと思った。それをやったら俺は、俺を産んだあの連中と同じになっちゃまうってな」

「それはなんとなくわかるよ」

頷いたレベツカは、今度は少しだけ怪訝な色を浮かべて、

「じゃあ、少し歩み寄ることにしたってのは、どういう心境の変化？」

「……ああ。それがな」

俺は笑った。

「気付いたんだ。……あいつらと同じ轍を踏まないようにしていたつもりが、結局、同じことをしていたのかもしれないって」

「ふうん？」

レベツカはただそう呟いた。

説明を求めているようだったが、納得できない風ではなかった。

……もしかしたらこいつは、最初から俺の間違いに気付いていたのかもしれない。普段はああやって適当な振る舞いをしてはいるが、こいつは勘が鋭い上に、どこか俺のことを見透かしているような雰囲気もある。

話すかどうかは少し迷ったが、特に隠しておくほどのことでもないと判断して、

「捨てられる前の記憶が少しある」

結局、喋ることにした。

「けど、いい思い出なんて一つもない。思い出どころか、両親とともに会話した記憶もないんだ」

忌々しい記憶。

狭い家の隅で膝を抱える弟。あの泣き顔。両親の気を引こうと懸命に話しかける俺。それらをまるで無視して、ひそひそと自分たちだけで会話する、顔も思い出せない一組の男女。

モヤがかかったその薄暗い光景が、俺の最も古い記憶だ。

同じ部屋で暮らしていながら、俺たち五人はまるで他人のように分断されていた。

「俺が覚えている限り、母親の声をまともに聞いたのは一度だけだった。……それも、俺たちを捨てるとき、外に連れ出そうとして声

をかけてきた、その一度だけだよ」

言葉の最後は自嘲の笑みを伴った。

「なるほど。それで同じ轍か」

レベツカは頷いて、

「けど、それならきつと、今までの君の方がまだマシだろうね」
珍しく感情的な声を出した。

「……」

少し怪訝に思つて振り返つたが、表情はいつも通りだった。

……同情したわけじゃないと思う。それほど酔狂な奴じゃない。
あるいはこいつにも似たような記憶があつたのか。

この場所でこうして生きている以上、あつたとしても不思議なことではなかった。

「どこで間違えたんだろうな」

ため息とともに肩を竦める。

「最初からそうならないように、少しでもこいつに依存されないように、気を遣つてきたつもりだったんだが」

「さあ。……私の目には最初からそうだったように見えたけど」

「……そうか」

突き放していたつもりが、それでも甘かつたのだろうか。

……いや。

そもそも、まだ子供でしかないあいつには、義理と責任だけの関係というのが理解できなかったかもしれない。だから、單純に保護者代わりを務める俺を、擬似的な親として見てしまったのか。

「ま」

レベツカは小さく頷くと、

「いいんじゃない。というか、私は最初からそうすることを勧めていたわけだし」

「いいとは思えんが、こうなつた以上は仕方ないな」

「そう？ 親が子を捨てるのとは話が違ふと思うが」

そう言つて、チラツとファルを見る。

「少なくとも、いつか手放すってことを彼女に予告してあるんだから」

「それがこいつに理解できていけばな」

「それは大丈夫だと思う。別れを悲しむことはあるかもしれないけど、それは彼女の成長にも必要な経験かと」

「そういうもんか」

俺が疑問を投げると、レベツカはやれやれという風に首を振って、「いつか別れるんだし、全く後腐れのないようにとか思ってたんだろ？」

「そりゃ、その方がこいつに対する責任を果たせるからな」

レベツカはフウツとため息をつく、呆れ顔をして、

「永遠の愛を誓った恋人同士だって長く離れていれば冷めるし、赤の他人だって一緒に暮らせばそれなりに親くなる。……君のように最初から構えているならともかく、彼女が君に近付こうとするのは仕方ないことだ……これは前にも言ったが」

「ああ。それはよくわかったよ」

「なら、いい」

偉そうだったが、確かに彼女の言葉は正しかったのだ。

何よりも結果がそれを示している。

「……ふむ」

そして、レベツカは少し考えた後、ふと思いついたように、

「じゃあ、少しばかり成長した君に、私から新たな称号を贈ろう」

「称号？」

俺が怪訝な顔を向けると、ヤツはゆっくりと人差し指を向けてきて、言った。

「バルバ「フラックマン」」

「……やめんか！」

それはファルと出会うきっかけになった仕事の依頼人の名前だ。俺たちの間では密かに幼女趣味の代名詞となっている。

しみりとした場の雰囲気は、たったの一撃で見事なまでに台無

しと相成った。

「気に入らないか」

「当たり前だ！」

「バルバ。大声を出すとお姫様が起きるぞ」

「呼ぶんじゃないえッ！」

まさかあの変態成金男も、こんなところでネタにされているとは夢にも思っまい。

当然俺としても、そんな不名誉な称号を授けられることに、強く反論せずにはいらなかったわけなのだが。

ベッドのそばにいたことが仇となった。

「う……………」

「ほら、起きた」

「ぐ……………」

振り返ると、ファルが目を擦りながらゆっくりと体を起こすところだった。

「……………カーライル、さん……………」

上半身を起こしたファルは幸いまだ寝惚けているらしく、俺たちの会話も耳に入っていなかったようだ。

まあ、聞いていたところで意味を理解することはできなかっただろうと思うが。

「あ、あれ……………私……………」

目を擦って、見えなくせにキョロキョロと周りを見回しながら、
「確か誘拐されて、奴隷商人さんに売り飛ばされたはずで……………」

「……………」

俺はひとまず気持ちを落ち着かせながら、

「お前、夢と現実がごっちゃになってると思うぞ」

「……………はっ！」

どうやら意識がはっきりしたらしい。

直後、ものすごい勢いで布団をはね除けると、

「も……………申し訳ないです！」

ベッドの上でいきなり土下座を始めた。

「わ、私、カーライルさんにとんでもないご迷惑をかけて、その上、ベッドまで占領してしまつて　　！」

「そっちは壁だ」

「……はっ!？」

アホだ。

目が見えなくても声の方向でわかるだろう、普通。

「あ、えーと……」

さすがに恥ずかしかったのか、しばらく風船のように勢いを失つてしまった。

「その……申し訳ありませんでした」

「いやいやいや、まったく気にする必要はない」

「で、でも……」

「君のような可愛い子にかけられる迷惑なら、いくらでも大歓迎さ。ははは」

「え……ええッ!？」

かなり驚いた顔で真っ赤になるファル。

……そりゃ俺だつてびつくりだ。

「レベツカ……それは俺の真似のつもりなのか……」

ピクピクとこめかみが痙攣しているのが自分でもわかった。

「なかなか特徴を捉えていると思うが」

と、地声に戻すレベツカ。

「声は似せても中身が天と地ほど違うわッ!」

「え?」

一瞬、わからない顔のファル。

「今の、レベツカさんだったんですか?」

「いや」

レベツカは再び俺の声色で、

「俺が君のことを愛しているのは本当さ」

「やめんか!」

「あ、えーと……今のはレベツカさんですね」

二度目はさすがにファルも騙されなかったようだ。

……というか、あれでわからなかったらさすがにヘコむ。

ファルはおかしそうに笑いながら、

「よく聞くとやっぱり微妙に違いますね」

「微妙、か」

確かに、レベツカは女にしちゃ声が低いし、元々声が似通っている部分もある。だから、俺の声真似も似てはいるのだが、こいつが俺の真似をするときはさっきのように極端に俺とは異なった人格を演じるので、気付かなかった奴はこいつが初めてだ。

（ま、次からはきつとわかってくれるだろ……そう思いたい、な）
結構切実な願いだ。

と、

「それはそれとして」

おかしそうに笑っていたファルがいきなり真顔に戻る。

こいつの行動パターンもなかなか予測不能だ。

それから、今度はしっかりと俺の方を向いて深々と頭を下げると、
「私は、その、カーライルさんに多大なご迷惑をお掛けしてしまいました。これ以上、ここでお世話になるのはとても心苦しいところで」

「……あのな」

ヘンに馬鹿丁寧な言葉に、俺は頭を掻きながら、

「言っただろ。このぐらいのことでお前を追いつたりはしない」

「貯金が底を尽きかけたけど？」

「黙れ」

レベツカの横やりを一蹴して、言葉が続ける。

「そりゃ、何度もやられたらさすがに困るが、今回はひとまず警告までつてことにしとく。……それにお前、ここを出たらどうなるかぐらい今日のことでわかっただろ」

「お、お言葉ですが！」

何か知らんがいつも以上に敬語度が高かった。

「わ、私、ご迷惑をかけるばかりで、少しはカーライルさんのお役に立てることがないかと色々頑張ってきましたけど、いつもご機嫌を損ねてばかりで！」

「それについては確かにフォローの余地はないな」

「うっ……」

ぐさっ、という音が胸の辺りから聞こえたような気がする。

が、すぐに立ち直って、

「そ、それで、私……もうこれ以上」

一瞬、言葉が止まった。

そのすぐ後、

「これ以上は……カーライルさんに嫌われたくなくて……」

出てきたのは、涙声だった。

「……」

こう見えて我慢強い奴だ。ずっと堪えていたのだろう。

「それで、出ていくつてののか？」

俺が冷静な声を返すと、

「ぐすっ……」

ついには鼻声になる。

「力、カーライルさんは……私が生きてきた中で、お父さんとお母さん以外で初めて優しい声を掛けてくれた方なんです……だから……だから、どうしても嫌われたくないんです！……」

「……」

やっぱり勘違いされていた。

俺がこいつに声をかけたのは優しさからじゃない。

ただ、商売を上手く進めるため。

ただ、それだけだったのだ。

（……やはり、か）

確信する。

懷かれないうちに、懷かれないうちに、なんてことをずっと考え

てきたが、それは全く無駄なことだったのだ。
最初から、懷かれていた。

こいつと出会ったあの村で、すでに。

（逆に言えば、それだけ他人の優しさに飢えてた、か……）
誤算。

それも、今まで気付くことすらできなかったとは。

（……やれやれ）

とんでもないミスをしでかしたものだ。

ホント、今月の神様は俺をとことん沈めなければ気が済まないらしい。

……いや、もしかしたら今月だけじゃ済まないかもしれない。

「それで」

少しだけ落ち着いた様子で、ファルが再び口を開いた。

「今ならまだ……カールさんのことはいい思い出にできる気がするんです。そうしたら……きっとこの先何があっても後悔しませんから……」

「ちよつと待て」

考え事をしているうちに勝手に完結しようとしていたので、俺はそこでもうやく口を挟んだ。

「？」

不思議そうにファルが顔を上げる。

せつかくの整った顔立ちが一杯の涙で台無しになっていた。……

が、まあそれはどうでもいい。

「まず、勘違いしてるようだから言っとくが」

俺はふうつとため息をついて、その眼前に指を突きつけてやる。

「これ以上もなにも、お前はすでに底辺だ。だからこれ以上嫌えつつても、それは無理な相談だ」

「うつ……」

顔に縦線が入った。

「そ、それは……わ、私の唯一の希望ですのに……」

「勝手に希望とか思い出とかにされちゃ困る」

「そ、そんなご無体なあ……」

「……」

チラツと横を見ると、レベッカはいつの間にか姿を消していた。

……気を利かせたらしい。

少し安心して、コホン、と咳払いをする。

「何度目になるかわからんが……もう一度、言っておいてやろう」

「？」

ファルが首をかしげた。

「つまりだ。あー……」

慣れないことを言おうとしている自覚はある。だから、なかなか言葉が口についてこなかった。

それでも何度が咳払いをした後、ようやく、

「……お前が一人で外出することは禁じる、と、そういうことだ」

「？」

意味がわからなかったらしい。

(くそ……)

それで察して欲しかったが、仕方あるまい。

こうなったらやけくそだ。

「要するに！ お前をここから追い出すことは、俺自身が作ったルールに違反する！ だから却下だ！ 以上！」

早口で一氣にまくし立てた。

「……はあ」

再び惚けたような声のファル。

が、徐々に意味を理解したようで、

「あ、で、でも……その、先ほども申し上げましたとおり、私は

「

「口答えも却下！」

「は、はいっ！」

条件反射か何か知らんが、ファルは正座したまま背筋をピンと伸

ばす。

……そんな反応も、今は何故だか少しだけ可笑しく思えた。

「あーっと」

俺は自然に浮かんできた笑みを何とか噛み殺しながら、補足する。
「お前がここを出ていくのは、俺が見つけた保護者に連れられて、
だ。それまでは、俺が面倒を見てやる。そういう約束だろう？」

だが、ファルは少々戸惑った様子で、

「で、ですが……私、何をすればカーライルさんに嫌われずにいられるのか、全然わからなくて……」

「それについては」

コホン、と咳払いして、

「今まで通りでいい」

「……は」

きょんとした顔。

「そ、それは一体どーいう」

「前も言っただろ」

まるで理解できてない様子のファルに説明してやる。

「俺はお前と仲良くなりたくなかった。だから、俺と仲良くなろうとするお前の行動自体が気に触っていた。……ただそれだけだ」

「……？」

ファルは少し考えるような顔をして、

「それってつまり、私は何をしてもダメだったってことですか？」

「ま、そういうことだ」

「そ、そんなあ……」

また泣きそうになった。

「じゃ、じゃあ、私、ずっとカーライルさんに嫌われたままですか

あ
「……」

「……察しの悪い奴だな」

いい加減、わざとやってるんじゃないかと思えてくる。

「気が変わったんだよ。……少しぐらいなら、歩み寄ってやること

にした」

「……はあ」

「だから、今まで通りでいい。そういうことだ」

「は……」

ファルはもう何度目になるかわからない惚けた返事をしかけて、ようやくハツとした。

「……そ、それってつまり！ 私と仲良くしてくれるってことです
かっ！？」

相変わらずの過剰反応だ。

（……大袈裟な奴）

実際、それだけ嬉しいのか。前だったらそんなこいつの反応にいちいちイラついていたものだが、今はそんなことは全くなくなって
いた。

人間の気持ちつてのもなかなか不思議なものだ。

と、そんなことを考えつつ、

「お前の思ってるてほどじゃないかもしれないが……それに」

言って、コホンと本日十回目の咳払いをする。

「仲良くなれるかどうかはお前次第だろ、ファル」

「！？」

ファルは何故だかさらに大きく目を見開いた。

「力、カーライルさん！ い、いま……いま、なんて言っただんです
かっ！？」

「はあ？」

今度は俺が怪訝な顔をする番だった。

大したことを言っただつてもりなど、もちろんない。

「だから、お前次第だつて」

「そ、その後です！ その後！」

「……その後？」

少し考えてみたが、思いつく言葉は一つしかなかった。

「ファル？」

「それです！」

ファルはベッドの上でまるで飛び跳ねるように身を乗り出して、
「カーライルさん、私の名前を初めて呼んでくれましたッ！ー」

「……そうだったか？ いや、そんなはずないだろ」
眉をひそめる。

一ヶ月近く一緒にいて、名前を呼んだこともないなんてこと、あ
るはずがない と思うのだが、

「そんなはずあるんです！ いつも『おい』とか『お前』とか『
あいつ』とかで……毎回ちゃんと確認して、密かにへこんでまし
たから間違いないですッ！」

「そ、そうか……」

本当に自覚がない。

「それは大変だったな……」

「はー……」

ファルはとてつもなく満足そうだった。

「何だか色々幸せすぎて頭の中がパンクしちやいそうです」

「……実際、お前の頭の血管は確実に切れかかっていると思うがな」
極度に真っ赤な顔にボソツと呟いてやったが、耳には入らなかった
ようだ。

「でも……」

ふと、不思議そうな顔をして、

「どうして突然？ 私、カーライルさんに迷惑かけっぱなしでした
のに……」

「……」

「何だか急に優しくして……あ、いえ！ ものすごく嬉しいんですけ
ど！」

「あー……」

まさか子供の頃の話をこいつにするわけにもいかないだろう。い
くらなんでもそれは恥ずかしすぎる。

なので、当然、適当にごまかすことにした。

「それを聞くことが、お前にとってプラスになると思っのか？」

「うわ！ ま、またですか！？」

どうやらこいつもいつかのやり取りを覚えていたらしい。

再び顔に縦線が入る。

……が、直後。

やはり頬を赤くして、

「あ、で、でも、それはそれでちょっとイイ……かも……」

ゴンッ！

「いたっ！」

「アホか」

言うまでもなくアホだ。

しかし、それでも。

（結局、俺が押し負けた形、か……）

偶然とか、昔のこととか……確かに全てがこいつ自身の力ではないだろうが、少なくとも今のこの状況は、こいつがここまでの行動を取らなければ起こらなかった結果だ。

（……子供の行動力には勝てん、か）

「？」

俺が笑っているのに勘付いたのか、ファルは少し不思議そうな顔をしたが、それはすぐに笑顔に戻る。

本当に、笑顔以外の表情になれない、といった様子だった。

「……」

それを見ていて、ふと不安になる。

（……本当に大丈夫なのか）

レベル力は別れも経験になると言った。

それは確かにそうなのだろうと思う。別れを経験しない人間などどこにもいやしないのだから。

だが、それをわかっていても、なお不安なのだ。

……こいつのこれは、大丈夫なのだろうか、いつか訪れる別れは、本当にこいつの糧になるのだろうか、と。

残念ながら、俺にはわからない。

俺がたった一度経験した別れは、物心がついて間もないときのことと、別れが訪れることも知らなかったし、黙ってそれを受け入れることしかできない年齢だったから。

（お前は本当にわかつているのか？ ファル……）

だが、どっちにしてもそれはもう、俺がどうこうでできることではなかった。

ただ、こいつが理解していることを願う。

……ただ、それだけのことでしかない。

その3『せつない恋人たちの子守唄』

「それじゃ、お預かりします」

封筒を受け取った飛脚屋の男が馬車へと乗り込んだ。

「頼む」

その馬車の中にはたくさんの荷物が積まれ、ここから少し離れた町へと向かう。

俺の郵便物は、その町のとある診療所に宛てたものだ。

「……雪、か」

俺がファルのことを少しは受け入れようと決めたあの日から、すでに三ヶ月が経過していた。

冬のもっとも寒い時期は過ぎ去り、こうして雪を見ることも珍しくなりかけてきた頃。未だ、あいつの落ち着き先は見つかる気配がなかった。

やっぱり盲目というのは厳しい。

たとえ本人にやる気があっても、そうそうまともな仕事ができるはずもない。あの年齢では孤児院にも引き取り先を見つけないく、個人的にもその場所にはあまりいい印象がなかった。

だから、あいつはまだ我が家にいる。

「ふう」

うつすらと白くなった細い道を歩きながら、今し方受け取ったばかりの手紙を裏返してみる。差出人は書いてない。が、もちろん俺はそれが誰からのものであるか知っていた。

「カール」

家の前まで行くと、俺が戻ってきたことに気付いたレベッカがちょうど家の中から出てくるところだった。

「ちよつと出かける。君が仕事に行く頃には戻っていると思うが」

「ああ。いつも悪いな」

相変わらずレベツカの奴にはファルのことを頼んでおり、二人揃って家を空けることはない。もちろんこいつの方にどうしようもない理由があるときには、仕事を休んでも俺が家にいるようにしていた。

いい加減、少しは報酬を払ってやらなきゃならないな、ということも考えているのだが、レベツカの奴が言うには、

『そっちの方は出世払いで構わない』

とのことだ。

余裕のない俺にとっては有難い話だ。

「じゃ ああ」

いったん離れかけて、レベツカは俺が手にしているものに気付いたようだった。

「金、送ったのか」

「ああ」

こいつもその正体が何であるか知っている。……借金を待ってもらう身である以上、話さなくてはならないことだった。

「悪いな。いつかの代金は……もう少し待ってくれ」

「とりあえずはいいいよ。今のところは私も少し余裕があるしね。踏み倒さない限り、多少は待つ」

素っ気なくそれだけを言って、レベツカは去っていった。

その背中に素直に感謝の言葉を心の中で呟き、それから家の中へと。

「おかえりなさい、カーライルさん！」

話し声で俺が戻ってきたことに気付いていたのだろう。扉を開いた途端、目の前にファルの姿があった。

「ああ」

それも特に珍しいことではなく。

「上着、お預かりします！」

最近こいつの中でブームなのか、まるで使用人気取りだった。特

にそれを拒否する理由もなかったので任せると、すっかり家の構造を把握しているファルは俺の上着を脱がし、迷うことなくそれを掛けに行く。

その後、まるで目が見えるかのようにしっかりと足取りで俺の後ろをついてきて、

「お昼はどうしましょう？　少し遅いですけど、食べます？」

「ああ……そうだな」

太陽は頂点から西側に傾きかけている。今日は朝方に仕事から帰り、そのまま昼まで寝て、それから出かけた。だから腹は十分に減っていた。

「そうですか！」

ファルはパツと顔を輝かせると、ニコニコしながらテーブルにつく。

「サンドイッチ作っただんです。もしかしたらカーライルさんも食べるかなと思って、私も食べないでおいなんです。一緒に食べませんか？」

「……？」

こいつの思惑通りになったのは不本意だが、腹が減っているのは確かなので仕方ない。

向かいに腰掛けて、皿の上のサンドイッチに手を伸ばす。そうしながら、もう片手で手紙の封を切った。

「……？」

そんな俺の行動に気付いたのだろう。ファルは見えないくせにこちらを覗き込むような仕草を見せて、

「えっと。うーん。紙を破るような音でしたけど……」

「ああ。手紙の封を切った」

「へえ、お手紙ですかー」

興味津々といった表情。

「どなたからなんです？」

「ああ……」

答えるべきかどうか一瞬迷ったが、このぐらいは教えてやってもいいだろう、と、そう思い、

「弟からだ」

答えて、手紙の内容に目を通す。

中身は、特に代わり映えのしないものだった。

診療所での生活、最近の体調、毎月の送金に対する礼。それと最後に『会いたいから訪ねてきてくれ』といういつもの言葉。

ひとまず変わらないようで一安心。

ふうつ、と息を吐いて、手紙を折り畳む。

「弟さんがいらっしゃったんですか？」

読み終わったのを察してか、ファルがさらに尋ねてきた。

「ああ。双子の弟がな」

一緒に生まれ、一緒に暮らし、一緒に捨てられ、一緒に苦労した弟。一卵性でないためか、顔はそれほど似てもいなかったし、俺と違って体も弱い。その上、小さい頃の苦労が祟ってか、今は寝たきりに近い状態で診療所の世話になっていた。

もう十年以上にもなるだろうか。回復の気配はなかったが、今のところ命を落とす危険もそれほどない。

そんな、奇妙な状態が続いているようだった。

「それはぜひお会いしてみたいです」

ファルはそう言ったが、それほど強い要求ではなかった。手紙をやり取りするところから遠くにすることはわかっているんだろうし、あまり無理は言えないと自分で判断したのだろう。

そんなファルにチラッと視線を送って、それから二つ目のサンドイッチを手を取った。

三ヶ月。

あつという間に過ぎ去ったその時間はおそらく、こいつの人生からしてみればそれほど長い時間でもないだろう。

にもかかわらず。

この三ヶ月でこいつの身体は確実に成長していた。背も伸びてい

るのが目に見えてわかったし、少しの変化ながら、間違いなく全体的に女っぽくなってきている。

食生活が少しはまともになって、荒れ放題だった肌や痩せぎすだった体が健康になってきたから、ということもあるのだろうが、おそらくそれだけじゃない。

それは確実な、成長期だろうと考えても驚くほどの変化。

（完全に、騙されたか）

そんなこいつを見ていて、最近そう思う。

この急激な変化は、遅れていた成長分を今になって取り戻し始めているためなのだろうか。初めて会ったときは確かに十歳を少し過ぎた程度に思えたのだが、今、改めて見てみると、確実にそれより三つは上に思えた。

まだもう少し急激な変化が続くと仮定すると、実際の年齢はさらに上、下手をすれば十五、六歳ぐらいだと思った方がいいのかもしれない。

こんなんじゃ、そのうち嫁のもらい手を探した方が早くなってしまう。

（女は、難しいな）

とはいえ。

「そういえばですね。今日、レベツカさんにお聞きしたのですけど

……」

言って、ファルはうーんと唸る。

「雪って、雪女さんが空をスーッと通り過ぎた後に降るそうですよ。私、今まで知りませんでした」

「……」

「雪女さんってメルヘンの中の人かと思ってたんですけど、本当にいたんですねー」

「……騙されてるぞ、お前」

中身はあまり変わっていなかった。

レベツカは言葉通り夕方に帰ってきた。

「あ、レベツカさん。おかえりなさい」

物音に素早くファルが反応する。

最近はドアを開ける音だけで俺かレベツカか、あるいはその他の人間なのか判別することが可能になってきたらしい。

「ただいま」

レベツカはいつものように素っ気なく答えると、俺の部屋を素通りして自分の部屋へと進んでいく。

そんな彼女に、俺は何気なく声を掛けた。

「今日は仕事だったのか？」

「……」

レベツカは少しだけ怪訝そうに振り返った。

「なんだよ」

聞くと、

「いや」

言って、レベツカはチラッとファルの方を見る。

そして、すぐに俺に視線を戻すと、

「君がそういうこと詮索するの、あまりなかったと思ってね」

「……嫌なら二度と聞かないが」

「別に」

相変わらず、何も考えてなさそうな表情で、

「君と違って、詮索されるのが嫌いだったりしないよ、私は」

「よく言う」

そんなはずはない。詮索されることで機嫌を損ねたりというわかりやすい反応は確かにないが、それに対して答えることもしない。こいつはそういう奴なのだ。

実際、今だつてすんなりと質問をかわしている。

「仕事だよ」

いや、答えた。

それはつまり、こいつにとって答えることに何の支障もない質問

だったか、あるいは平気な顔をして嘘をついているかのどちらかだ。そしてレベツカは部屋の入り口で足を止めたまま、少し考えると、「彼女の影響かな。君がそういうこと聞くようになったのは」「別に変わったつもりはないが」

そう言ってから、ふと考え直した。

「……いや、そうでもないか」

確かに以前は、仕事帰りのこいつにわざわざ声をかけるようなことはなかった。といっても、それは俺が変わったということではなく、前はこうやってこいつが帰ってくる時間に部屋でのほほんとしていることがなかったからだ。

大抵は寝ているか、あるいは外に出ているかのどちらかで。

ファルが来たことによつて、こういう状況が生まれたという意味なら、確かにその影響と言つていいのかもしれない。

「あのー……」

と、そんな俺たちの会話にファルがおずおずといった様子で片手をあげ会話に割り込んでくる。

「その、彼女さん、つてどなたなのでしょう？ も、もしかしてカイルさんの恋人さんのことなのでしょうか？」

そして相変わらずのボケっぷり。

「全然違う」

説明するのも馬鹿らしい。というか、こいつのこういう類の返答にいちいち律儀に答えを返していたら、あつという間にストレスで押しつぶされてしまう。

故に、いちいち答える気にはなれない。

と、そこへ、

「ファルは最近、顔立ちが女っぽくなったな」
いきなり話題を変えるレベツカ。

「え？」

そして困惑した顔のファル。

「あ、その。私、男の子だったことは、多分ないと思うのですが」

多分じゃない。

「大人っぽくなってるってこと」

そんなボケに、いつもはスルーのレベッカが珍しく律儀に説明した。

「はあ。なるほど」

納得顔のファルは小さく首をひねって、

「でも私、鏡を見ることができないので、顔立ちなどはよくわからないのです。ですから、大人になってるかどうかは全く実感ないですわねー」

「そう？」

言って、レベッカは正座するファルの全身を下から上まで眺め回して、

「顔立ち以外にも、色々と成長してるはずだけど」

「……わ！レ、レベッカさん！そ、そーいうことは、できればカーライルさんのおられないところで――！」

慌てた様子でブンブンと手を振る。

「……」

別にそんなことを聞いたところで何を感じるわけでもないのだが、こいつの中ではそういうものでもないらしい。

「そんなの気にしなくていいんじゃない」

と、レベッカが珍しく俺の心を代弁してくれた。

「カールだって聞きたがってるんだから、聞かせてやればいいのに」
「……待て」

訂正。全く代弁してなかった。

「そ、そーなんですか？」

頬をうつすらと赤く染めて上目遣いのファル。

「んなわけあるか」

ガキじゃあるまいし、そんなことにいちいち反応するはずもなく。ついでに付け加えておいた。

「言っとくが俺は女に対する興味が元から薄いし、ましてお前のよ

うな低年齢層にはまるで興味が無い」

「う……」

ちよつと落ち込んだ表情のファル。

（言い方が悪かったか？）

なんて一瞬思ったが、ファルはすぐに立ち直った様子で顔を上げると、

「あの……カーライルさんにとっての低年齢層というのは、具体的にどの辺までなのでしょう？」

「具体的に？」

「たとえば、ですね」

と、ファルは少し考えて、

「その、レベツカさんはすでにそこから抜けてるわけですよ」

「まあ……」

「というか年上だし」

俺の曖昧な返答にレベツカが付け加える。

「あ、そーだったんですか？」

どうやら初耳らしいファル。

「実際どうだかは知らんがな」

「年上」

お互い実年齢は知らないくせに、レベツカは妙に自信満々でそう言い張った。

そんなに俺より優位に立っていたのだろうか、こいつは。

そこへファルの奴が急に思い出したように言った。

「そういえば私、カーライルさんもレベツカさんも、どのぐらいのお年なのか全然知らないのです……」

「だろうな」

目が見えないのだから声で判断するしかない。とはいえ、俺もレベツカも　まあレベツカの奴はちよつと特徴的な声だからわからんが、それほど老けた声はしていないはずだ。

だが、

「もしかしてカーライルさん、四十歳過ぎのおじさんだったりしますか？」

恐る恐るといった様子で聞いてくる。

「その、若い方にしてはこう、結構落ち着いた感じもありますし、口調は若いですけど、もしかしたら若作りを」

「アホか、お前。俺が四十歳過ぎならレベツカの奴はそれより上だぞ」

「はっ。そういえばそうでした……」

気付いて、自分の馬鹿さかげんにしゅんとする。
そこへレベツカも追い打ちを。

「私、まだ十八歳だけど」

「ええっ!？」

「カールは十六歳」

「えええっ! ホントですかっ!」

「……」

ホント、騙されやすい奴だ。

「と、ということは、私よりほんのちょっと上ぐらい……」

「また騙されてるぞ」

俺はため息とともにそう言うと、

「正確な歳は自分でも知らんがな。俺はおそらく二十歳を少し過ぎたくらいだ」

「そして私は十八歳」

またまた掻き回すレベツカ。

「貴様はさっき俺より年上だっつたろーが」

すると、案の定しれっとした顔で、

「十八歳だけど、精神的には年上ということだ」
カチン。

「……それはつまり、俺の精神年齢が低いということをお願いしたいのか？」

「つまらんことですぐに怒るのは餓鬼の証拠」

「ぐ……」

一撃で反論を封じられてしまった。

「？」

そんな俺たちのやり取りに、ファルが混乱し始める。

「え、えーと、つまり、カーライルさんが二十一歳か二十二歳ぐらいで、レベツカさんは十八歳だけどカーライルさんより年上なのですね」

「つまり何も、致命的な矛盾があるぞ、それ」

「そ、それはどーでもよいのです」

どーでもいいらしい。

「つまり、私がお聞きしたいのは、あと何年ぐらいすれば私は低年齢層から抜けるのでしょうかということ……」

「……」

なるほど。

「ふーん」

レベツカが何やら意味ありげに呟くと、ファルは急にアタフタし始めて、

「あ！ あ、いえ、別にだからどーだというわけでもなくてですね！ ただ、参考までにということ……」

「そうだな。大体十七歳ぐらいかな」

素直に答えてやった。

「な、なるほどー……ということは、えっと多分、あと二年ぐらい……」

指を折って何事か数えているファルに、俺はもう一言。

「二年後には十九歳だ」

「は……？」

きょとんとした顔。

「三年後には二十歳だな」

「そ、それはつまり、一年ごとに一歳ずつ増えていくということですか？」

「まあ、そういうことだ」

そんなはずはなかったが、そう答えておいた方が良さそうだった。
「そ、そんな！ それは……その、横着すぎますっ！」

「お前、多分言葉を選び間違えてると思うぞ」

もしかして横暴と言いたかったのか？

「うっ……」

突っ込まれていつものようにへこむファル。

こうして見ているとなかなかに面白い奴だった。
しかし。

（……こういうのは、困るな）

そう思う。

最近、こいつはこうして、何かにつけて俺に気があるかのような素振りを見せることが多くなってきた。本人は隠しているつもりなのかもしれないが、結構あからさまだ。

まあそれに関しては、おそらく依存心を恋愛感情と勘違いしているのだろうし、そういうことに憧れる年頃でもある。

だから、それはいいにしても。

俺が困るのは、

「大丈夫大丈夫。口ではああ言ってるけど、カールは幼女でもいけるクチだから」

「そういう冗談はやめろッ！」

こうやってレベルカにからかわれることで、溜めなくてもいいストレスを溜めてしまうということだ。

もともと、酒以外にストレスの発散方法をあまり持たない俺としては、これはなかなか深刻な問題であった。

「さ、さすがに幼女ではないと、自分では思ってたりするのですが

……」

苦笑いのファル。

「……」

つい最近までそのぐらいだと思っていたことは黙っておこう。

（……たまには外に連れてくべきかもな）

ふと、そう思った。

こいつをここに連れてきてから約四ヶ月弱。一人での外出を禁じている上、俺がずつと仕事で忙しかったから、こいつは風呂に行く以外ほとんど外に出ていない。

ただでさえあんな村で乞食同然の生活をしていた奴だ。世間のことをあまり知らないのは見ていてはつきりわかるし、これからどうなるにしろ、少しはそういうことをわからせるべきなのかもしれない。

それで視野が広くなれば、こいつの一面的な見方も少しは改善されることだろう。

（それはいいとして。問題はどこに連れて行くか、だな）

それは考えてみてもすぐには思いつかなかった。が、まあ、別に今日明日の話ってわけでもなし、それについてはゆっくり考えることにしよう。

そんなことを考えつつ、俺はこの日もそのまま仕事に出かけたのだった。

それから数日後。

仕事帰りに一眠りした後、少し町の方を散策してみようかと思い、俺は昼を少し過ぎたぐらいに家を出た。

数日前に降った雪は思った通りすぐに溶け、道端に微かにその名残を残す程度。町には本格的な春の風が訪れようとしており、これぐらいの気温ならあいつを連れて歩くのに丁度良いかもしれない。

（しかし、目が見えないんじゃないやどこに行ってもイマイチだな……）

俺が元々娯楽に疎いこともあって、行き先はなかなか決まらなかった。パツと思いつくサーカスだとか演劇だとかってのは、やはり目が見えないとあまり意味がない。雰囲気だけを感じ取れというの

も酷な話だろう。

と、そんなところへ。

「ん？」

町を散策していて、ふと足を止める。

「……なんだ？」

どこからか、メロディが流れていた。

それに合わせて聞こえるのは、

（歌、だな……）

興味を引かれてその方角へと足を向ける。

閑散とした通りの中を少し歩くと、五、六人の見物客に囲まれ、

楽器を手にした四十歳過ぎの男と、歌を口ずさんでいる少年がいた。

どこか顔立ちが似ている。親子だろうか。

（流し、か）

少年の歌はなかなかのレベルにあり、これなら金を取れてもおかしくない。

特に興味があつたわけではなかったが、一曲終わるまでそこで待った。

その間にも一人、二人と客が集まってくる。

「〜」

気持ちよさそうに声を張り上げる少年と、その隣に足を組んで座り楽器を演奏する男。

どこか聞き覚えのあるメロディが通り過ぎていく。

俺は特に歌に興味のある人間ではないが、それでも聴くのが嫌いなわけじゃない。だから、少年の歌は俺にとってもそれなりに心地よいものだった。

やがて演奏が終わる。

親子が一礼し、客が拍手して用意されたケースに金を投げ入れ始めた。俺も丁度ポケットに入っていた小銭を投げ入れて、その場に背を向ける。

しばらくして、次の曲が背中に聞こえてきた。

（いいかもしれないな）

少しずつ遠くなっていくそれを耳の端に捉えながら、俺は名案を思いついていた。

思い出すのは、あの村でファルに出会ったときのこと。

あいつに目を止めたきつかけ。容姿の端麗さもさることながら、俺はそれよりも先にあいつの歌に魅力を覚えたのだ。

興味があるのなら、歌を聴かせに行ってみるのがいいかもしれない。それなら目が見えないことは関係ないし、あいつにとってもいい刺激になるだろう。

（近い内に連れてくか）

町の中心にいけばちょっとしたコンサートを聴く場所ぐらいはある。詳しいことは俺もわからないが、それはレベルに聞いてみればいい。

そして俺は足を自宅へと向ける。

行き先が決まった以上、これ以上町中を歩き回る理由もなかったと、その帰り道の途中。

「お。よう、カールじゃねーか」

町のメインストリートから外れ、路地に入ったところで、道の先から見覚えのある人物が近付いてきた。

雪が溶けたとはいえ、まだ風は僅かに冷たさを孕んでいる。そんな中を、袖がない薄い服とボロいベストだけで歩いているひげ面の男。

「見てるだけで寒いぞ、お前」

「なに言ってるやがる。若いくせにだらしねーな」

そう言って笑うそいつは、以前ファルがさらわれたレイビーズと一件で協力してくれたうちの一人だ。少しオヤジくさい外見から想像できる通り、俺よりも一回り以上は年上。おそらく四十歳近いと思うのだが、正確な歳は知らない。

ここにいる、いわゆる『微妙に太陽の下を堂々と歩けない』連中ってのは、ガキの頃からこっちの世界に足を踏み入れてる奴が多い

が、このおっさんは珍しく三十歳過ぎまで堅気の生活を送っていたらしい。

詳しい事情は知らないが、その時代に二年ほど牢屋に入っていたこともあるようで、この辺りに住むようになったのはそれ以降のことだそうだ。それ以前は普通に結婚して子供までいたという話だが、もちろんそんなところまで本人に確認したことはないし、そんなことには大して興味もない。

俺にとつてのこいつは『可愛い女の子が大好きな腕っ節の強いオヤジ』といったところでしかなかった。

「で？ おめえんとこの……あー、例の娘は元気にやってるのか？」
「今まで通りさ」

可愛い女の子が大好き、といったが、どうやらファルのことも例外ではないらしく、こいつは俺の顔を見る度にあいつの様子を聞いてくる。どうやらよほどのお気に入りらしいが、未だに名前すら覚えていないところが実にこいつらしいところだ。

場所柄、本来ならこういう風に興味を持ってくる奴は敬遠し、注意すべきところなのだが、こいつの場合はあまりそういう心配がない。こいつの可愛い女の子好きは、どちらかというと赤ん坊や愛玩動物に対するそれに近いのだ。

「そうか。そりゃ良かった」

俺の言葉を聞いて、本当に楽しそうに笑った。

「……」

もしこいつに子供がいたという話が本当なら、きっと親馬鹿だったんだろうな、と俺は思う。

それはまったく無駄で無意味な想像ではあったが。

「そっぴゃ、お前」

ふと、俺は思い出して尋ねた。

「最近、そこそこデカイ仕事が入ったらしいって聞いたが本当か？」
「おっと」

俺の言葉にニヤツと笑う。

「レベツカの嬢ちゃんから聞いたのか？ 相変わらず情報が早えな」
「別にお前の動向なんて、情報ってほどたいそうなもんじゃねえだろ」

言ってやる。

実際、それはレベツカから世間話のように出てきた話で、そもそもそれがあいつにとつての『情報』なら、タダで手に入るはずのないものだった。

「言えてんな」

否定せずにやはり笑い声を上げる。

どうやら今日はいつにも増して上機嫌のようだった。いい仕事が入ったからなのか、あるいは他の理由があるのか。

まあ最近はファルの影響か、俺と話すときはいつでも上機嫌なのだが。

「せいぜい気を付けてくれよ」

俺はいつものように、そう言った。

仕事の内容までは知らないが、デカイ仕事ってことは相応に危険な仕事でもあるはずだ。

「気が付いたら牢屋にぶち込まれてたなんてことがないようにな」

「んなヘマしねえよ」

向こうもいつものようにそんな返事をして、ふと思いついたように、

「ああ。そっぴゃおめえ、あの娘の引取先ってのは見つかりそうなのか？」

「いや、全然だな。……心当たりがあるのか？」

少し期待して聞き返す俺に、小さく首を横に振って、

「いんや。ただ、なんだ。何なら俺が引き取ってやろうか、と思つてよ」

「冗談だろ」

落胆をため息にして吐き出す。

が、向こうは意外にも真面目な顔で、

「この仕事が上手くいきや俺も結構余裕が出るしな。別に引き取ってんじやなくても、しばらく面倒見てやってもいいぞ」

「……本気か？」

意図が読めない。

こう言っちゃんだが、その日を生きるのに精一杯な俺たちにとってあいつを引き取ることは何の利益もない。レイビーズのようにどこかに売り飛ばすだとか、あるいは多少無理してでも自分の女として囲いたいってんなら話は別だが、こいつにそんな意図があるとは思えなかった。

「ま、こんな話をおめえにするのもアレなんだけどな」

そう前置きすると、

「おめえも俺の昔は少しぐらい聞いたことあるだろ。俺の娘が丁度、あの子と同じぐらいでな」

「身代わりにしたいってことか？」

「ま、簡単に言やあ、そういうことだ。それに俺もそろそろ、一人きりで意地張って生きてくのが寂しい歳にもなってきたしな」

「……」

赤の他人を自分の娘に見立てて一緒に暮らしたい。

容易には理解できない感情だったが、それは俺が実際に子を持つたことがないためなのだろうか。

「おめえがあの子の娘の引取先を見つけるまでもかまわねえ。ちょっと真面目に考えといてくれよ」

表情は、嘘をついている風ではなかった。元々、ここに住む人間にしては嘘をつくのが下手な奴だ。俺のこいつに対する認識が大幅に違ってもいない限り、それはおそらく本心だと思っていいだろう。

（ファルをこいつに、か）

確かにそれが叶うなら、俺の負担はだいぶ軽くなる。あいつに費やしている食費や生活費はもとより、今よりもっと自由に家を空けられるようになるし、行動力が増せばあいつの引取先を見つけれ

れる確率も増える。

考える余地は充分にありそうだったが、

（自分の責任を肩代わりしてもらったのもな……）

利害が一致しているとはいえ、それはあまり気分のいいことではなく、たくさんの利を考慮に入れた上でも受け入れにくいことではある。

色々考えた末、

「ま、それなりに考えておく」

結局、そう答えた。

それはどちらかといえば消極的な方の返答だったし、もちろん向こうもそのことには気付いただろうが、

「おう。ま、頼むわ」

言って、すれ違いざまにポンツと軽く肩を叩いてくる。

真剣な表情だった割に、実質断られた言葉にもあつさりしているのは、それを予測していたからだろうか。

（考える余地は、あつたんだがな）

俺にとっては、効率と益を優先するか、ポリシーを優先するかの差でしかなかったわけ。

（……娘、か）

離れていく背中をなんとなくに見送る。

あいつはもしかすると、元々独りで生きていくことに向いてない人種なのかもしれない。

あるいは。

俺も一度家族を持ったりすれば、そういう風になるのだろうか。想像できなかった。

今は独りになることに淋しさなどは感じないし、ファルにしろレベツカにしろ、いなくなったらなったで特にどうとも思わない。

（ま、考える必要のないことか……）

どっちにしても俺には一生縁のなさそうなことだ、と、そう結論

づけると、俺も当初の目的を思い出し、それから再び自宅へと足を向けることにした。

嫌な予感なんて、別にしなかった。

俺がファルを連れてコンサートにやってきたのは、それから二日後のこと。

「カーライルさんと遠出するのは初めてですよ。ちょっとドキドキします」

天気は快晴。もちろんそれも今日という日を選んだ要因の一つで、厚手の上着はもう必要なく、肌着の上に長袖を着るぐらいで充分に歩ける気温だった。

町の中心に出ると、さすがに人が多い。冬の間、少し影を潜めていた活気が戻ってきている。

そんな中を、ファルの手を引いてゆっくり歩いた。

歩幅は俺の方が圧倒的に広く、少し気を遣ってやらないと後ろですぐに小走りになってしまう。

それでもこいつの表情は明るく、

「えっと……こういうのは、その、やっぱりデートっていうんでしょうか」

「……」

パツ、と手を離す。

「わっ！ カ、カーライルさんっ！」

慌てて手を泳がすファル。

少し間を置いて再び手を差し出してやると、すぐにそれをがっしりと掴んで、

「きゅ……急に手をつ……は、離さないで……！」
ちよっと涙目になっていた。

俺は冷ややかに、

「それが嫌なら、くだらんことを言うんじゃない」

「うう、カーライルさん、冷たいです……」

わけのわからんことを言って、ファルは上目遣いに俺を見た。

「わ、私はただ、他の人からしたらそーいう風にも見えるのかな、
と思っただけで……」

「ガキのお守りをしてるようにしか見えねえだろ」

「……くすん」

へこんだ。

（やれやれ）

ま、確かに。数ヶ月前ならともかく、今のこいつならそういう風に見えなくもないだろう。手を引いてやってるから、事情を知らない他人にしてみれば尚更のこと。

ただ、別に赤の他人からどう見られようと気にはしないのだが、こいつにそんな風に思われるのは正直勘弁してほしいところだ。

そもそも今回は、こいつのそういうところを少しでも直せれば、という目的で出てきたのだから。

「確か……こっちか」

レベッカに勧められたコンサート会場へ向かう。

あいつが言うには、今、そのコンサート会場には有名な歌姫が来ているらしかった。名前を聞いても俺は知らなかったのだが、他の連中に裏をとってみると、確かに有名な人物らしい。

チケットも手に入れてやると言うし、その値段も相応で、それならと思いレベッカに頼んだわけである。

（……しかし）

頭の中でこの町のマップを広げてみた俺は、少し疑問を感じていた。

（この先にあるコンサート会場なんて思い浮かばないな）

興味がないので記憶も曖昧だが、少なくとも俺の知っているどの会場とも違う方向だ。

あるとすれば、この町でも最も大きな中央のコンサートホールだが、そこは俺があいつに支払ったチケット代程度で入れるような場所じゃない。

はずだった。

「到着したんですか？」

その前で足を止めた俺を、ファルが不思議そうな顔で見上げてきた。

「……多分、な」

とりあえずそう答えて、そのコンサート会場の前にある看板とチケットを交互に見つめる。

間違いなさそうだった。

（レベツカの奴、どんなルートを使いやがったんだ）

だが、確かに。この会場で歌うぐらいなら有名な歌姫で当然だった。

（……外出用の服を買つといて正解だったな）

ファルにさせているのは数日前に買ってやった外出用の、ちょっとしただけ質の良いものだ。ここに来るような連中の着ているものよりは遙かに下だろうが、それでもパツと見て浮いてしまうようなことはないだろう。

そして俺たちは中に入った。

「はー……」

雰囲気を感じたのだろう。

ファルが物珍しそうに周りを見回している。

「キョロキョロするんじゃない」

注目されるのも嫌だったので、すぐに止めさせる。

（……というか、見えないんだから意味ないだろ）

あまり座ったこともないような上等な座席に腰掛け、時間を待つ。ステージはそれほど派手な造りでなくとも、どこか上品な雰囲気が漂っており、天井はとてつもなく高い。

俺だって、生まれてこの方体験したことのない場所だった。

（何を考えてやがるんだ、レベツカの奴……）

ますますわからなくなってくる。

さっきも言ったように、俺があいつに支払った金額はともこんなところで歌を聴けるような金額じゃない。どんなルートで手に入れたチケットなのかは知らないが、売ろうと思えばもっと高く売れるものだし、事実上、あいつがいくらか自腹を切ったようなものだ。気まぐれにしても有り得ないことだし、他の目的があるとも思えなかった。

（あいつがそこまでいれ込んでは思えんが……）
チラツと隣のファルを見る。

確かに一見、こいつとレベツカは非常に仲が良いように見える。だが、レベツカに関していえば、おそらくそれは表面上だけのことだ。

あいつはそういうところをきっちり割り切っている奴だ。

まあ、俺の知らない何らかの事情があつて、それでこいつに本気でいれ込んでいるのかもしれないが

（……ま、それならそれで、俺には関係のないことか）

会場内の明かりが徐々に暗くなつていった。

「そろそろ始まるようだな」

「は、はい。わ、私は準備オツケーです」

ファルは両手を胸の前で組んで、何やら緊張した面持ちだ。

「……そうか」

もちろん、こういうところで他人の歌を聴くのも初めてのことでろっ。

（さて、どう出ることやら）

全ての明かりが落ちて。

スポットライトがステージ上を照らした。

演奏が始まつて。そして、歌が始まる。

それから俺たちは一言も喋らずに、ステージ上を眺めていた。

その帰り道。

「」

町の中央を走る大通りを俺に手を引かれて歩きながら、ファルは
ずっと鼻歌を歌っていた。

「よほど気に入ったらしいな」

「はい！」

満面の笑顔で俺を見上げる。

「あんな……あんなに素晴らしい歌を聴いたのは初めてで！」

そう言ったファルの言葉は、未だ興奮覚めやらぬといった様子だ
った。

「途中、泣いてたぐらいだもんな」

「そ、それは……」

恥ずかしそうに顔を伏せる。

「その、あまりに切ない歌でしたので、つい」

「別に悪くないが」

思った通り、感受性は高いらしい。

そして、

（それにしても……）

俺はそんなこいつに少し驚いていた。

何に驚いたかというと

「お前、あの歌は初めて聴いたんだよな？」

「あ、はい。もちろんです」

「……なるほど」

全て初めて聴く曲。

「」

再び流れる鼻歌。

初めて聞いた歌であるにも関わらず、こいつはそれを一度聴いた
だけで、おそらくほとんど間違うことなく覚えていたようだった。

俺はそのことに少し興味を覚え、足を止めて、

「おい、ファル」

「はい？」

「鼻歌じゃなくて、ちゃんと歌ってみたらどうだ？」

「え……」

ファルはびっくりした顔を見ると、すぐに恥ずかしそうに顔を伏せて、

「で、ですが、あの後に私なんかの歌を聴いたら、せっかくの余韻が台無しになって」

「気にしないから、歌ってみろ」

有無を言わさぬ口調でそう言うと、ファルはちょっと困ったような顔をしながらも頷いて、

「え、えっと、それでは……どの歌がよろしいでしょうか？」

「お前が一番気に入った奴でいい」

俺がそう答えると、ファルはあまり考えることもなく、

「じゃ、じゃあ、六曲目の」

「ああ、それでいい」

何曲目がどの曲だったかなんて覚えちゃいないが、それはどうやらこいつが泣きながら聴いていた曲のようだ。

「で、では……いきます」

意味があるのか知らないが目を閉じて……そして緊張した面持ち。空白の時間が流れて、そして、ゆっくりとその口が開く。

「……あ、あの、ホントに歌いますよ」

「いいから早くしろ」

「は、はい」

必要以上に緊張していた。

再び、心を落ち着かせるように深呼吸し、そして指先で自分の太股辺りをリズム良く叩き始める。

そして今度こそ、ファルは歌い始めた。

「……………」

ゆったりとしたリズムの、静かな曲。

演奏はなかったが、原曲を聞いたばかりということもあって、俺

の頭の中にもそれが蘇ってくる。

歌詞の内容から察するに、悲恋モノ。お互いに愛し合っていないがら、誤解とすれ違いが重なり続けて離れ離れになってしまったせつない恋人たちの歌、という感じが。

まあこの世の中に溢れてる恋愛歌つてのはその大半が悲恋物だし、その方が大衆の心を捕らえるのだらう。ただこの歌の場合は極大解釈すれば、恋愛に関わらず人間関係そのものの難しさを歌っているともいえるかもしれない。

しかし、それはともかくとして。

（……驚いたな）

その事実言葉も出ない。

やはりこいつは全て覚えているのだ。歌詞すらも、おそらくは一語一句間違わずに。

先ほどのコンサートでやったのは、十曲前後。しかもこいつはその全てが初めて聞く曲のはずだ。

記憶力。音感。他にも色々な要素があるとは思うが、ともかく、こいつは歌うことに関してはかなりの能力を持っているのかもしれない。

（若干、声量が足りない気もするが、これは練習次第だろうな）
それに声と表現力。

俺は素人だから詳しいことはわからないが、あの酒場で初めてこいつの歌を聞いたとき、この俺が思わず聞き入ってしまったことを考えると、それかなりのレベルにあると思うていいんじゃないかと思う。

（歌、か……）

「~~~~~」

一番気に入っただけあって、感情の入り方もかなりのものだ。いつの間にか声も大きくなり、完全に自分の世界に入ってしまった。

気が付くと、俺たちの周りには数人の見物人が集まっている。

止めさせるかどうか躊躇ったが、結局歌わせておくことにした。

「……………」

最後に余韻を残すメロディで、歌が終わる。

途端、

パチパチパチパチ。

周りに集まっていた数人のギャラリーから送られる拍手。と、同時に、俺たちの足下にはいくつかの硬貨が投げ込まれ、チャリンチャリンと音を立てた。

「…………え？」

状況が掴めずに、ファルはびつくりした顔をする。

「あ、あの、カーライルさん…………？」

「お前の歌に対する、礼だとさ」

戸惑うファルに代わって落ちた硬貨を拾い上げ、それを手に握らせてやった。

それほどの額ではない。が、楽器もなしにいきなり路上で歌い出し、それに対して聞き手が金を出そうとしただけでも大したものだ。

「え？ え？」

それでもまだ状況が掴めてないらしい。

キョロキョロと辺りを見回してアタフタしている。

パチパチパチパチ。

まだ続いている拍手。

「あ、あのっ」

それでようやく状況を把握したのか、ファルが慌てたように頭を下げた。

「あ、ありがとうございますっ！」

その顔は真っ赤だ。

一際、拍手が大きくなって、止む。そうして見物人たちは少しずつ離れていった。

中には次の曲を期待しているのか、まだその場に留まる奴もいたが、ギャラリーがいるとわかつてはこいつもさっきのように歌えは

しないだろう。

「じゃ、行くぞ」

「は……」

まだ真っ赤な顔をしているファルの手を掴む。

「はい……」

夢でも見ているかのような表情だった。

以前にも歌っていたとはいえ、ここまでの賞賛を浴びたことはきつと初めてなのだろう。

「は……」

その帰り、ファルはずっと嬉しそうなため息ばかりついていた。

家に帰ってからのこと。

「あのー……カーライルさん？」

ファルが少し困った顔をしながらやってきた。

「なんだ？」

仕事へ向かう準備をしながら、言葉を返す。

「大したことじゃないなら後にしろよ」

今日は客との待ち合わせが早い時間に入っていて、あまり時間がなかった。

「あ、いえ、その」

ポケットをゴソゴソやって、何やら取り出すと、

「あの、私、浮かれててすっかり忘れるところでした。……これ」
「ん？」

見ると、手の平に乗っているのは、昼間こいつが路上で歌って手に入れた金だった。

「少しでも生活費の足しにしていただければ」

「ああ、そんなことか」

上着を着て、色々と必要なものを内ポケットにしまい込む。それを上からポン、と叩いて、ベッドから立ち上がった。

「それはお前が稼いだ金だ。お前が使えばいい」

「え　で、でも私はこうしてカーライルさんに養っていただいているわけですし……」

「何度言わせる気だ？」

ゆっくりと歩み寄って、ぐっと顔を近付ける。

「お前の面倒を見るのは俺の義務だ。それに対してお前が何か貢献する必要は全くない」

「で、ですが！」

「その話は終わりだ」

反論しようとするファルに、俺は無言を言わずに踵を返す。

「そいつはお前が自由に使え。使わないのなら貯めておけ。いつか役に立つこともある」

「う……」

それ以上の反論はない。

ただ、どこか不満そうだった。

と、思ったら、

「……あ」

急に何やら思いついたような顔をして、

「あのっ、これ、私の自由に使っていいんですよね？」

「ああ」

何度言わせるつもりだと思ったが、どうやら何か違うことを思いついたらしい。

さらに念を押すように、

「じゃあじゃあ、何に使っても怒らないですか？」

「そう言ってるだろ」

面倒臭そうに答えると、それでもファルはパツと顔を輝かせて、

「了解しました！」

何故か笑顔で敬礼してみせた。

「？」

いまいち意図が掴めなかったが、まあ、こいつが稼いだ金だ。何に使おうが俺が文句を言う筋合いはない。

「じゃあ行ってくる。……レベツカ！あと頼む！」

「あーい」

部屋から相変わらぬの返事が戻ってくる。

「行つてらっしゃいませー」

それに続くファルの声に送られて俺は家を出た。……出る直前、あいつが妙に嬉々としてレベツカに声をかけていたのが、気になるといえは気になったが。

（ま、なんでもいいさ……）

とにかくこれで、あいつが多少なりとも視野を広げてくれればいい。

事態が少しでも好転することを願いながら。

俺はこの日も仕事へと向かったのだった。

寢耳に水。

青天の霹靂。

それが朗報であればこれほど嬉しいことはないが、残念ながら俺たちの住むこの場所においてそれが朗報である確率は、その逆の割にも満たない。

それは、次の日の昼過ぎ、夕方も近くなっていた頃のこと。

仕事後の眠りから目覚めた俺を待っていたのは、一つの訃報だった。

「……死んだ？」

情報を持ってきたのは珍しくレベツカの奴じゃなかった。

「あいつが？」

俺の言葉の先には、暗い顔で胡座をかいた体格の良い男がいる。

冗談の好きな奴だ。

オカマっぽい喋り方で冗談を飛ばし、周りを笑わせるのが得意な奴だ。

……けど。

「冗談、じゃ、ないんだろうな」

残念ながら、そんな縁起でもない冗談を言う奴でもなかった。それが、こいつと仲の良かった人間の話であれば、尚更。

「彼、ワリのいい仕事が入ったって、言ってたでしょ？」

表情は沈んでいる。いつもの明るいトーンは影も形もない。

普段、どんなときでも明るい奴だけに、それがひどく痛々しく思えた。

「詳しくはわかんないけど、デカイ組織同士の取引に関わってトラブったみたい」

「……」

そんなもんだろう。

事故でも病気でもなく、あいつが命を落とす出来事といったらそのぐらいしか思い浮かばない。

「なるほど、な」

そうというのは別に珍しいことじゃなかった。そういったデカイ組織にかかれば、ここにいる連中なんて使い捨ての紙くずのようなもの。そういう仕事は大きな見返りも期待できるが、リスクの方が遙かに大きい。

それで命を落とした奴を、俺はこれまでに何人も見てきた。

「馬鹿な奴だ」

目先の利益に囚われてそれで命を落とすなんてのは馬鹿のすることだ。だから俺はコツコツとやる道を選んできた。

そして、それはあいつも同じ。……そのはずだった。

「馬鹿な奴」

そう言うしかない。

あいつはそれがどれだけ危険で愚かな行為であるか、十分にわかっていたのだ。

わかっていて首を突っ込み、そして命を落とした。

誰がどう見ても自業自得でしかなかった。

「……彼、最近おかしかったしね」

俺の言葉にそう返して、ゆっくりと立ち上がった。

どうやら、あいつと仲の良かった連中にこのことを伝えて回っている途中らしい。

「最近、滅多にしない自分の娘の話とか、よくしてたわ」

「……」

それは俺も直接聞いている。

加えて、今回の仕事が上手くいったらファルを引き取ってもいい、なんてことも、あいつは言っていた。

……本気だったのだろう。

もしかすると大金を手に入れて、それを元手に人生をやり直そう、なんて、そんなことを考えていたのかもしれない。

「はっ……」

自然と笑いが零れた。

どうして笑ったのか、自分でもよくわからなかった。

「……馬鹿な奴」

口をついて出たのは同じ言葉。

確かに、誰かを養おうとするなら。誰かとともに生活しようとするなら、俺たちの仕事では色々と不都合がある。金銭的にもそうだし、いつ官憲に捕まってもおかしくない身だ。

並の人間と同じ暮らしがしたいなら、そういう生活に戻りたいのなら、どこかで無茶をする必要は出てくる。

それはわかることだった。

けど。

「もう何年も独りでやってきたくせに、まだそんなもんに未練があったってのか」

「そういう男だったのよ、きつと」

「……ふん」

それは俺もわかっていた。

どこをどう間違っこんだところにやってきたのかは知らないが、

あいつはきつと、平凡で普通の暮らしが一番ピッタリな男だったのだ。わかっていた。だから、たとえあいつの行動に気付いていたとしても、俺にはそれを止めることも、あいつのために何かをしてやることも、できやしなかっただろう。

ここには、他人のためにそこまで動ける人間なんていやしないのだ。

みんな、自分のことで精一杯だから。

だから　それを考えた上での結論は、一つしかない。

「遅かれ早かれ、あいつは命を落とす運命だった。……そういうことか」

「……」

返事はなかった。

ただ、離れていく足音が一瞬止まって、それから玄関のドアが閉まっただけだ。

「……はん」

再び、意味のない笑いがこぼれて　静寂が訪れる。

ほんの一瞬だけ、視界がブレた。

「……」

そして自然と、サイドテーブル上のワインに手が伸びる。

仕事前のこの時間に呑むことなんてまず有り得ないことだったが、今はそれを考える気にもなれなかった。

「他人との繋がりがなんて、この場所で求めちゃいけねえってのに……」

……

蓋を外してそのまま口を付けると、三分の二ほど残っていたその半分の半分を一気に飲み干して、

「……馬鹿な奴」

口を拭って、眩きが自然と漏れた。

西向きの窓から射し込む赤い日射しがやけに眩しく、心なしか外の喧噪も遠い。

ゆっくり体を後ろに倒すと、コツンと後頭部が壁に当たる。

天井を仰いで、

「馬鹿な奴、か……」

思わずもう一度漏れた呟きは、自嘲の笑みを伴った。

「はっ……お前だって、本当は大して変わらないんじゃないのか……？」

自問する。

俺は自分がもっと冷静な人間だと思っていた。誰が死のうが、誰がいなくなるうが、それはそれと割り切れる人間のはずだった。

だが、実際のところはどうか。

ちよつと交流のあった男が一人死んだだけで、俺はこんなにもシヨックを受けてしまっている。

口で強がるのは簡単だったが、それで自分を誤魔化せるわけでもなかった。

「……いいさ。今日は思う存分弔ってやる」

今日はもう仕事に行く気がしない。

いや、これだけ呑んでしまっただけでも無理だろう。

特に大事な約束があるわけでもない。

ワインの瓶を目の前にかざす。

あいつと酒を酌み交わしたことはなかったが、不思議とどんな呑み方をするのかは想像できた。

あいつは意外にチビチビやるタイプだ。

俺も本来はそうだったが、今日はそんな気分でもなく。

再び、ワインの瓶に口を付け、一気に流し込む。

「……俺は、お前みたいにはならねーよ……」

そんな慣れない呑み方をしたせいか、最初のワインの瓶が空になる頃には完全に酔いが回り始めていた。

二本目の瓶を手にして再び目の前にかざし、見えない相手と軽く杯を合わせる。

「お前と違って、もともと家族なんてもんは知らない。誰であろうと、自分のためなら切り捨てられる……」

そんな、取り留めない思考の中。

ふと浮かんだのは、最近ではすっかり見慣れた少女の笑顔。

「……冗談じゃねーよ」

嘲笑した。

「あいつなんて、俺にとっちゃなんでもないさ……」

そう。あいつなんて、俺自身と、そして俺が大事にしているもののためなら、いつだって無慈悲に、無造作に、そして無感動に切り捨てられる。

断言してもいい。

俺にとつてのあいつは、まだその程度の存在でしかない、と。

「……まだ？」

思わず浮かんだその言葉に、自然と笑いが零れた。

「時間が経てば変わるってのか……？」

そう呟くと、何故だか笑いが止まらなくなる。

「は……ははっ……馬鹿馬鹿しい……」

そんなことがあるはずもなかった。

俺にとつてのあいつは、ストレスを上昇させる原因であり、家計を圧迫する穀潰しであり、単なる疫病神だ。

あいつは俺に何ももたらしてはくれない。そんな奴に対して、どうして俺が情を向けてやらなきゃならないのか。

そんなのはナンセンスだ。

「なあ……お前はそんな奴とでも一緒に暮らしたかったってのか……？」

理解できない。

たとえ、実の娘の影をその中に重ねていたにしても、それは俺には全く理解できないことだった

西に沈みかけた太陽の下。

人もまばらな路地の中を、ファリーナ　ファルという名の少女が、背の高い女性に手を引かれて歩いている。

「どうもすみません、レベッカさん。こんなことに付き合ってもらってしまいました」

「ん。ま、別に構わないよ」

「おかげさまで目的のものを買うことができました」

その胸元には両腕にすっぽりおさまるほどの包みがあり、少女はそれを大事に抱えながら嬉しそうにしていた。

「それにしても」

背の高い女性　レベッカという名の、ファルにとっては姉のような存在の女性が、少しだけ怪訝そうな声で問いかける。

「あのお金、君の自由に使えって言われてたんじゃないの」

「あ、はい」

その言葉にファルはニツコリと笑顔を返して、

「ですので、自由に使わせていただきました。……カーライルさん、靴がボロボロだから新しいのが欲しいっておっしゃってたんです」

「なるほど」

レベッカの言う『自由に』は、『自分のために』という意味であったが、どうやらうまく伝わっていなかった。

……いや。

厳密に言つと、確かにその買い物は彼女のためでもあったのかもしれない。

何故なら、

（カーライルさん、喜んでくれるかな……）

彼女はそれを想像して胸を躍らせていたし、もしそれが現実になったなら、間違いなく彼女自身にとっても喜ばしいことだったから。それに彼女は、生活費以外のお金の使い方というものを全く知らない。だから、これが彼女にとって最も自分のためになる使い道で

もあつたのだ。

「……」

自然、ファルの口から歌が零れ出す。

それは彼女が昨日のコンサートで最も気に入った『せつない歌』ではなく、聞いた中では一番陽気な歌だった。

「……」

しばらく黙ってそれを聞いていたレベツカだったが、やがて、まるで独り言を呟くように口を開いた。

「君は、カールのことが本当に好きなんだな」

「え？ はい、そりゃあもう！」

反射的にそう答えた後、ファルは少しだけ慌てる。

「……あ、いえ！ そーいう意味ではなくてですね！ その、カールさんはお父さんみたいな方ですから！」

「別に私には言い訳しなくても」

「あ……」

みるみるうちに頬が赤くなっていく。

「そ、その……」

恥ずかしそうに顔を伏せ、ギョツと胸の包みを抱きしめると、

「カールさんは、その、とても優しい方ですので……」

「優しい、か」

レベツカの口調は少し複雑そうだったが、盲目の少女にその表情を確認することはできなかった。

「あいつより優しくしてくれるのなんて、この世にはいくらでもいると思うのだが」

「……そうなのかもしれないです」

ファルは視線を下に向けたままで答える。

「でも、実際に手を差し伸べてくださったのは、カールさんでしたから」

「それはカールが」

言いかけたレベツカの言葉を遮って、ファルはゆっくりと首を横

に振った。

「わかってます。……カーライルさんもおっしゃってました。単なる失敗で、仕方なかったんだって。私も最初は本当にそうなんだと思ってて。でも……」

グッ……と、握る手に少しだけ力が入る。

「一緒に暮らしてて少し経ったら、なんだかそうは思えなくなつて口で言うよりずっと、私のことを気に掛けてくださってる感じがして」
「なるほど」

「……お恥ずかしいです。私の勝手な妄想ですからー」
そう言つて、ファルは照れ笑いを浮かべた。

「じゃあ、君は」

レベツカはピタリと足を止める。

自然、ファルの足も止まった。

「もしも叶うなら、カールとずっと一緒に暮らしたい？」

「え……？」

突然の質問に呆氣に取られて、ファルは顔を上げた。

その質問の意図を伺うかのように、少しだけ眉を動かす。

「ずっと、一緒に……？」

そしてすぐに視線が落ちた。

……彼女はそんなことを考えたこともなかった。一緒に暮らすのは一時的なことだと最初から言われていたし、有り得ないことだと思っていたから。

だが、もしも。

もしもそれが叶うとするならば 彼女の答えは決まっている。

「それは……もちろんですよ」

言つて、再び胸の包みをギュツと抱きしめた。

「そうなたらきつと、これ以上ないぐらい幸せに違いないです」

「……ふうん」

ファルには確認できないことだったが、レベツカは珍しく真剣な表情だった。

そのまま二人は再び歩き出す。

夕日の中、この薄暗い路地の世界に人影はほとんど見られない。あるとすれば、あまり大声では言えないような仕事にこれから出かけていく者たちの姿だけだ。

ひどく寂しさを感じさせる赤く染まった道を歩き、二人が自らの家に辿り着いたのは、辺りがすっかり薄暗くなってしまった頃。

「……ん？」

そこで怪訝そうな声をあげたのはレベツカだった。

「明かりがついてるな」

「え？」

その言葉に、ファルも意外そうな声を返す。

「でも、カーライルさんはそろそろ出かけている時間ではないですか？」

「そのはずだけど」

「もしかして、ど、泥棒さんでしょうか……」

「うーん」

適当ながらも否定的な意味合いの唸りを返すレベツカ。

その後、

「もしかして 情報が入ったか」

そう呟いた言葉の意味は、ファルには全く理解できなかった。

そして一瞬の逡巡。

「ファル」

「はい？」

「カールは今日、仕事を休むようだ」

「え？」

唐突な言葉にファルは当然のごとく驚いた。が、レベツカはそれを説明することはない、

「そして私はたった今、大切な用を思い出した」

「え？ え？」

「というわけで」

レベツカに引かれ、ファルの手は家のドアにまで達する。

「ここまでくれば大丈夫だろう？ ……じゃ、私は出かけるから」

「あ、あのっ……」

「それと」

呼び止めるファルの声を無視して、レベツカは一言、

「プレゼントを渡すのは、明日以降にした方がいいかもしれないな」

「……？」

「じゃ、そういうことで」

それだけを言うと、まるで状況を把握できていないファルを置いて、レベツカの足音は遠ざかっていった。

「……」

残されたファルは、しきりに首をかしげるばかりだ。

（……どうしたのかな？）

いくら事あるごとに『天然』とか言われている彼女でも、それが不自然であることは理解できた。

だが、それが一体何を意味しているのかまではわからない。

とりあえず、

（でも……何かあったんだよね）

それで自分を納得させると、ドアノブを握る手に力を込める。

（カーライルさんはお仕事お休みみたいだし……）

すぐにさっきまでの陽気な気分が帰ってきた。

（お布団はどうするのか……カーライルさんを床に寝かせるわけにはいかないから、私が毛布で床に）

浮かれながらドアノブを回し、

（……でも、もしかしたら、カーライルさんの隣で寝かせてもらえたり）

勝手にそんな妄想をして、勝手に照れまくっていた。

だが、彼女がそんな風に浮かれていられたのも、家のドアを開く、その瞬間までのこと。

「カーライルさん！ ただい」

言いかけた瞬間、すぐにその『異常』に気付く。

「え？」

異臭だ。

といつても、それは彼女にとっては比較的嗅ぎ慣れた匂い。

（これ……）

それは、そう。彼女がここにやってくる前の、酒場で歌っていた頃の記憶を呼び覚ます匂いだ。

（お酒の……匂い）

それは彼女を戸惑わせるのに充分すぎるものだった。

この部屋の主が全く酒を呑まないわけではない。むしろ、毎日のように口に出しているのを彼女は知っていたし、そのときにだってアルコール臭はしていた。

だが、それはいつでも朝、彼が仕事から帰ってきてすぐ、寝る前に少量だけ。もちろん悪酔いすることなんてなかったし、家の入り口からでもすぐにわかるような強烈なアルコール臭を漂わせているなんてこと、今までにはなかったことなのだ。

（……カーライルさん）

少女の中の嫌な想い出が蘇る。

その匂いは、彼女が最もみじめな生活を送っていた頃に、最も多く嗅いできたものだった。そしてそれは彼女自身に自覚はなくとも、トラウマに限りなく近いものを心の中に植え付けている。

「……」

足が震えた。

脳裏にいくつもの古い記憶がフラッシュバックしていく。

奥からの反応はない。まだ彼女が帰ってきたことに気付いていないのか。

（……ううん！）

自分を奮い立たせるように首を振ったのは、たつぷり三十秒ほどの時間が経ってから。

（カーライルさんは違う……あんな人たちとは違う！）

自らにそう言い聞かせて。

そして少女は両足に力を込め、家の中へと足を踏み出していった。

「ふん……」

目の前で、空になったワインの瓶が揺れている。

だいぶ酔っていることは自覚していた。ただ、まだ俺自身の思考を充分に保っていられるレベルだ。

現に俺の耳は、微かなドアの開く音さえ、すでに捕らえている。

「疫病神が……帰ってきたらしいな……」

いつもならもつと慌ただしく家の中に入ってくるはずだったが、もしかすると俺がまだ家にいることに戸惑っているのかもしれない。

「さて……と」

ワインの瓶をテーブルに置いて、ゆっくりと体を起こした。

あまりだらしない格好を見せると、あいつに対する俺の威厳が保てなくなる。いくらある程度の接近を許したといっても、それにも限度というものがあつた。

こっちの言うことを聞かなくなるほどに舐められるのはまずい。

「……っと」

立ち上がると足が少しフラついた。

どうやら長い時間真っ直ぐに立っているのは難しいようだ。

仕方なく、ベッドの上に腰を下ろす。

ファルが顔を出したのはそれとほぼ同時だった。

「カーライルさん……ただいまです」

壁を手で探りながら、ゆっくりと歩いてくる。

レベツカと二人で出かけていたはずだが、あいつの姿はどこにも見えなかった。俺が家にいることを察して、またどこかに出かけて

行っただのか。

「ああ。レベツカはどうした？」

「……あ」

そんな何の変哲もない俺の質問に、何故だかファルは少しだけ表情を明るくした。

「あの、レベツカさんでしたら、急に用事を思い出したとおっしゃいます！」

「……そうか」

甲高い声がいつもより耳障りに聞こえたが、これは呑んでいるせいだろう。もちろんそんなことで機嫌を悪くするほど子供じゃない。呑んで八つ当たりするなんて最低だ。

「買い物とやらは済ませてきたのか？」

「あ、はい。その……」

と、ファルは少し考えるような顔をしてから、すぐに、

「えっと、まだ秘密ということ……」

「別に興味はないが」

見ると、手の中に包みを抱えている。おそらくそれが買ってきた物なのだろう。

「今日はお仕事お休みなんですわー」

入ってきたときはどこか暗い表情をしていたファルだったが、荷物を置いて向き直ったときには、もういつもの表情だった。

いや、それどころかいつもよりも陽気に見える。

（……呑気なもんだ）

そんな様子を見て、少しイライラした。

こっちは全然そんな気分じゃないというのに。

「ああ、少し事情があつてな」

だが、もちろんそれもこいつには罪のないことだ。だから、それを表に出したりするようなことはない。

「でも、珍しいですねー」

相変わらずの笑顔で、近付いてくる。

「……」

『何が楽しい』

思わずそう言っでしまひそうになるのを、俺はギリギリのところ
で押し止めていた。

こいつは何も知らない。あいつが死んでしまつたことも、俺がそ
れで少なからずショックを受けてしまつてゐることも。

何も知らないのだ。

だから、仕方ない。

「カーライルさんがそんなにお酒呑むことなんて、あまりないです
よね」

「……」

異常に気付いてゐるのなら、少しは察して欲しい、と、そう思う
のも、理不尽な要求なのだろうか？

あるいは察していて、それで俺を元気づけようと明るく振る舞つ
てゐるのか。

そうだとするなら、それは余計なお世話だ。むしろ、今はこいつ
と喋つていたくない。顔を見るのもできれば避けたいところだつた。
こいつの顔を見ると、どうしてもあいつの最期の言葉を思い出し
てしまうから。

「ダメですよー」

そんな笑いながらの言葉に、俺の苛立ちはどんどん積もつていく。
その度に我慢しようと思ひて、それがまた違ふ腹立たしさを胸に残
していつた。

……いや。

そもそもその苛立ちは酒のせいなのだろうか。
違ふ。

これはきつと、必要以上に踏み込んでお節介を焼こうとする、こ
いつの無神経さに対する苛立ちだ。

だったら、そう。

だったら我慢することなんてないのかもしれない。

あいつが死んだことは仕方がない。それはあいつの自業自得だし、おそらくは回避しようのなかった出来事だ。それはわかっている。だからこそ、この俺の苛立ちはあいつの死に対する苛立ちではない。これは明らかに、目の前の、この少女に対しての苛立ちのはずだ。悪気がないのはわかっている。

それでも、こいつの行動が俺に不利益を与えてくる。だったら、それを押さえる必要なんてないんじゃないだろうか。

「お酒の飲み過ぎはすごく体に悪いそうですよ。やっぱり、なんといつても健康が一番ですからねー」

そんな説教じみた言葉に。

俺はついに、自分の中に積もり積もった感情を制御する術を見つけたことができなくなった。

「……うるせえよ」

「え？」

テーブルの横に腰を下ろしたファルが、ひどくびっくりした顔をこちらに向ける。

何を言われたのか、全く理解できてない顔だった。

だから、もう一度言ってる。

「うるせえって言ったんだ。……聞こえなかったのか？」

「……あ」

見る見るうちに顔が青ざめていった。

「あの……わ、私、何かカーライルさんのお気に触ることを」

「わからない奴だな」

俺は不機嫌なままに鼻を鳴らして、

「お前に説教される筋合いはねえって言ってんだ。……酒を呑もうが何をしようが、お前にはまるで関係のないことだろうが」

「そ、それはそーですけど……」

それでもまだ冗談に紛らせてしまおうというのか、ファルは少し無理したような明るい声を出した。

「なんといいですか、私もカーライルさんにはずっと元気でいてほしいですし……」

「……ふん」

なるほど、と思った。

あいつがこのファルという少女を自分の娘にしたいと言った気持ち、今なら少しだけ理解できる。

気が付かなかったわけじゃない。薄々は感じていた。

こいつは……そう。

『狡猾』なのだ。

「お前は意外に世渡りが上手いのかもしれんな」

「え？」

俺の口調がまるで変わらなかったせいか、その顔色は再び暗くなつた。

「あの、それはどういう」

「言っておいてやる」

問いには答えず、俺は苛立ちの視線を向ける。

「他の奴はどうだか知らんが、俺はお前に懐柔されたりはしない。

……その、無意識を装って媚びへつらう態度には吐き気がする」

「！」

一瞬にして、端正な顔が大きく歪んだ。

直後、唇を震わせながら、

「わ、私、そんなんじゃ……お、お酒のことは確かに出しゃばってしまったかもしれないけど……で、でも、カーライルさんに元気でいてほしいのは本当に」

「やめろよ」

冷たく遮る。

それ以上、こいつの言葉を聞く気にはなれなかった。

別に、だからといってこいつをどうこうしようというつもりはないのだ。ただ、俺がそのことを心に留めていればいいだけのこと……こいつに対する俺の義務にはなんら変わりはない。

「どうでもいいことなんだ」

だから、これ以上の話をする必要はなかった。

それはおそらく、俺にとってもこいつにとっても不利益になるはずだったから。

「ただ、いくらそうやって無駄だったことを言っておきたかっただけだ。……お前がどんな人間だろうとも、俺がやるべきことは何も変わらない。お前が何であろうと、俺にとっては何の意味もない」

「……」
ファルは一瞬、放心したような表情になった。直後、泣きそうに顔が歪み、同時にゆっくりと視線が落ちて、俯く。

「……ちっ」

そんなこいつを見ても、俺のイライラは増すばかりだった。

（くそっ……）

ベッドの脇にあった毛布を手にとって、ゆっくりと立ち上がる。

「あ……」

俺が動いたことで、ファルが再び反応した。

不安そうに、少し体を堅くしている。

……もちろん、こいつに何かしようとして立ち上がったわけじゃない。

「俺は寝る。晩飯はいらない」

横を素通りして、部屋の隅へと移動した。

ベッドはこいつに使わせてやらなきゃならない。床で寝るのは体が痛くなってあまりよくないが、まさか俺がベッドを使うわけにもいかないだろう。

「え……？」

ファルは俺の行動に、何故だか少し驚いた顔をしていた。だが、そんなのにいちいち反応するのも億劫で、フラつく足で場所を確保すると、そこにそのまま腰を下ろす。

そして、ゆっくりと体を横たえようとした。

そのとき。

「あ……カ、カーライルさん！」

突然、ファルが大声を出した。

「……なんだ」

「あ……その」

戸惑ったような表情。

俺の方に顔を向けたまま、まるで確認するかのように手探りで近くのベッドに触れた。

「あ……」

布団に触れて、枕に触れる。

何をやっているのか俺には理解不能だったが、

「カーライル、さん……」

そう言ったときの表情は先ほどまでとはまるで違っていた。

何故か。

「その、ひとつだけ……ひとつだけ、口答えするのを許してくださいませんか」

「……口答え？」

珍しい問い掛けた。

いつもならそのまま黙ってしまっつか、それとも感情のままに反論してくるだけだったから。

「……」

胸の中で葛藤が起きる。

何を言い出すのかは大体想像できた。そしてそれが、俺の苛立ちを増幅させるのは間違いない。

だからもちろん、そんなのを許す必要はないはずだった。

「お願いします……カーライルさん」

だが、何故だろうか。

こいつのそのときの顔は、容易にそれを拒否させてくれなかった。拒否してはいけない……そんな気にさせられてしまう。

……それもこいつの狡猾な作戦のうちなのだろうか。

ふと、そんな考えが、アルコールで鈍くなった頭の中を過ぎる。

だが、

「……言ってみろ」

結局、俺はそう答えていた。

結果はわかっていたが、その言葉は聞いておかなければいけないような気がしたのだ。

「は……はいっ」

向こうも俺の返答が意外だったのだろうか。

少し気持ちを落ち着かせるように大きく息を吸って……吐く。

そうしてから、今度は迷いのない様子で真っ直ぐに俺を見つめると、

「そ、その……カーライルさんに誤解されてしまうのは……それは悲しいですけど、仕方ないことかもしれないと、そう思います。ですから、そのお考え自体をどーこうするのは、多分私には無理なことでだと思うんです。でも……」

ゆっくりとそう言って言葉を切ると、それからもう一度深呼吸する。

そして、今度はさっきよりも少し強い調子になった。

「でも、カーライルさんに元気でいて欲しいとか、カーライルさんのために何かできたらいいとか、私の心がそう思ってしまうのは、それは……それは絶対に本当なんです。いくらカーライルさんに嘘だつて言われても、私の中のそれは絶対に変わらないことなんです」
「ふん……」

それはほぼ予想していた通りの言葉だ。

つまり、言い訳ではない。

「そんなの、口ではどうとでも言えるものだろ」

「そうです。カーライルさんのおっしゃるとおりです」

反論はない。

俺は畳みかけるようにして続けた。

「言葉なんてもんは、所詮、人間の上っ面でしかない。だから、お前がどんな言葉を使っただとしても、それが俺の心を動かすことは有

り得ない」

「それもわかってます。ですから……」

ファルは少し口調を落しながらも、視線を下げることはなく、
「今はただ、私自身の口から、カーライルさんにそうお伝えしておきたかっただけなんです」

「……なんだと？」

意図が掴めなかった。

……あれだけ必死になって、それで言いたかったのがたったそれだけのことは。

言い訳するにしてもあつさり引き下がったし、確かに、俺の考えを覆してやろうとか、そういう風には見えない。

ただ、不思議と落ち込んでいる様子は見られなかった。

それどころか、そこには奇妙なほどの意志の強さを感じる。

（だから……なんだっていうんだ）

それはつまり、俺に誤解されることを本心で悲しいと思っていないからか。

それとも

（……それとも？）

考えがまるでまとまらない。

頭の中がぐるぐると回って、まるで取り留めのない思考ばかりが飛び交う。

そして結局、

「……言いたいことは、それだけか？」

俺は考えることを放棄して、話を打ち切ることにした。

正直なところ、先ほどカツとしてしまったせいか、酔いが余計に回って頭が働かなくなっている。これ以上はまともな会話ができるとは思えないし、必要のないことまで口にしてしまう可能性もあった。

「だったら、俺は寝るぞ」

「……はい」

そう言ったときの表情にも、何故だか暗い影は一つもなかった。

……俺に厳しい言葉を浴びせられると、いつもなら落ち込んで暗い顔をしていたはずの、こいつが。

（なんなんだよ……）

毛布にくるまって背中を向けても、何故だか落ち着かない。

相手は盲目で、何も見えないはずなのに、強い視線をそこに感じて。

……ただ、それでも。

（どうして……おまえは……）

朦朧としていた意識が、闇の中に落ちていくまでにはそれほど時間がかからなかった。

レベツカが帰宅したのは、彼女がファルと別れてからきっちり一時間後のこと。

用事を終えて いや、元から用事なんてものはなかった。ただ、彼女自身のある考えに基づいた上で、口から出任せを言っただけのことだった。

「……ん？」

そんな彼女が家に近付いたとき、まず最初に気付いたこと。

中の明かりがすでに消えている。……いや、それは別におかしいことではない。少々時間が早い気もしたが、片方はやることがなければすぐに寝てしまう男で、もう片方は明かりなど点いていても意味のない少女であつたから。

だが、それ以上に彼女が怪訝に思ったのは、

「歌……？」

そう。真つ暗な家の中から、微かに歌声のようなものが流れてい

ただ。

「……………」

流れていたのは、どこかせつない印象のメロディ。

もちろん演奏などではなく、歌声もまるで子守歌のようによく小さいものだった。

曲自体に聞き覚えはなかったが、決して耳障りな音ではない。

「……………」

無言でドアに手を掛ける。

キツ……………」

静かに開いたつもりだったが、最近では立て付けが悪いのか、小さな音が鳴るようになってしまった。

「……………」

歌が止む。

仕方なく、レベツカは口を開いた。

「ただいま」

「あ、おかえりなさいませー……………」

奥から、潜めた声が返ってくる。

やはり住人の片方はすでに眠っているようだ。

「……………」

鼻を突くアルコール臭。

……………想像通りだった。

おそらくその原因となったとある人物の死を、彼女は今朝のうちにすでに知っていたから。

「カールは潰れたか」

薄暗い路地の中を歩いてきただけあって、目は十分に慣れており、明かりを点けるまでもなくレベツカは家の中へと足を踏み入れる。

「はい。もうお休みになりましたよ」

歌を口ずさんでいた少女はベッドの上に腰掛けていた。部屋の隅では、毛布をかぶった男が寝息をたてて横たわっている。

いつもなら寝ていてもこのぐらいの物音に反応するはずだったが、

このアルコール臭が示すとおり、彼は深い眠りに落ちてしまっているようだった。

「ファル」

状況を把握して、レベッカはベッド上の少女に声をかける。

「はい？」

「もう一度、聞きたい」

「え？ なんですか？」

「……君は」

何の疑いもなさそうなその声に、レベッカはほんの少し言葉に詰まりながらも、

「君はまだ、カールと一緒に暮らしていきたいと思っているか？」

「……」

沈黙。

暗がりの中、ベッド上の少女がどんな表情をしたのか、レベッカにはわからない。

だが、それもほんの一瞬のこと。

「もちろんですよ。どうして、ですか？」

口調に迷いはなかった。

そこから察するに、先ほどの沈黙は答えに詰まったのではなく、質問の意図が掴めなかったためのようだ。

そしてその回答に、逆に一瞬言葉を失ったのはレベッカの方だった。

「君は いや」

言いかけて、それから思い直したかのように首を小さく横に振る。

「カールに、何か言われなかったか？」

「……」

ファルはすぐには答えなかった。

何か考えるように小さく首をかしげて、

「えっと……はい。色々言われました」

それから少し不満そうな声を出す。

「ひどいですよね。私がカーライルさんのこと心配するの、口だけだとか、媚を売ってるとか言うんですよ」

レベツ力は少し不可解そうな顔をして、

「その割には、平気そうだ」

「そんなことないです」

ファルは首を横に振ると、

「最初はショックでしたー……頭の中が真っ白になっちゃって、目の奥が熱くなって、なんでそんなこと言うんだろって、悲しくな
って……でも、ですね」

そう言ってから、クスクスと笑い声を漏らす。

「可笑しいんですよ……カーライルさん、そんなに不機嫌そうなのに、寝るって言って、わざわざ一番薄い毛布だけを持ってベッドから移動したんです。……変ですよ。ベッドだって、布団だって、枕だって、本当はカーライルさんが使って当たり前のものばかりなのに」

「……」

レベツ力は無言のまま、部屋の隅の男に視線を向けた。

……やはり起きる気配はない。

かかっている毛布は一枚ではなく二枚だ。

次に、ベッド側のテーブルにあった空のワイン瓶を見る。

そこにあっただのは二本。そのうちの一本が中途だったにしても、彼は普段からそれほど呑む人間ではなく、泥酔に近い状態であったことは容易に想像できた。

それを確認してから、再び、ゆっくりとファルに視線を戻す。

「……それで私、思ったんです」

ファルは言葉を続けた。

「ああ、やっぱりこの人は、どれだけ機嫌が悪くても、たくさんお酒を呑んでいても、私のことを気に掛けてくださっているんだって

……私が見てきた、乱暴なだけの人たちとは全然違うんだって」
「でも」

ゆつくりと、レベツカはファルの側へと歩み寄っていった。

「彼が君にひどいことを言ったのは間違いない。……そうだろう?」
ピタツと目前で足が止まる。

見下ろす視線も、口調も、いつになく真剣で、低めの声質も相まってまるで詰問しているかのようにも感じられた。

だが、そんな彼女の言葉にも、

「……それは仕方ないんです」

声が少しだけ翳りを帯びたが、それでもやはり口調に迷いはない。
「カーライルさんが言っていました。言葉は、人の上っ面でしかないんだそうです。ですので、言葉だけで分かり合うというのは、すごく難しいことなんですよね」

「そうだね。……じゃあ、どうする?」

「それは……」

そこで初めて、言葉に詰まった。

少し考えて、そしてギュツと膝に置いた拳を握り締めると、
「わからないんです。……でも、それで諦めちゃダメなんだって、それだけは間違いないと思うんです」

「……ふうん」

レベツカは特に何の感情も籠もっていない声を出す。

……いや、邪推するならそれは、無理に感情を押し殺していたのかもしれない。

そして、一瞬の沈黙。

「……お気に入りの歌があるんです」

突然、ファルがそんなことを言い出した。

「歌?」

レベツカが怪訝そうに聞き返すと、頷いて、

「はい。……せつない恋人たちの歌なんです。二人とも心から愛し合っているのに、言葉とか態度とか、なかなか相手に本当の心が伝わらなくて、それで少しずつ離れていってしまうって……」

「ああ……君がさっき口ずさんでいた歌か」

ファルはびつくりした顔で、

「え……あ、聞いてらしたんですか？」

「外にも少し漏れてたからね」

「お、お恥ずかしいです……」

言葉通り、恥ずかしそうに身を縮こませるファル。

だが、すぐに気を取り直した様子で、

「そ、それですね。その歌の恋人さんたちが、何だか私自身と重なってしまつて……あ、その、私とカーライルさんは全然恋人なんかではないのですが！」

自分の言葉に再び顔を赤くしながらも、

「その……自分の気持ちがなかなか伝わってくれなくて、もどかしいところとか、すごくわかる気がするんです」

「でも、その歌の二人は最終的には別れてしまふんじゃ」

「そ、そーなんですけど」

レベツカの的確な突っ込みに、ファルはちよつと言葉に詰まりながらも、

「それは分かり合うことを途中で諦めてしまったからだと思うのです！　だって、どうやっても分かり合えないなんて、そんな風に思つてしまうのは悲しいですから！」

「なるほど」

強い口調に、レベツカは初めて小さな笑みを浮かべる。

「君の言いたいことは良くわかったよ」

そしてゆつくりと踵を返し、自分の部屋へと足を向けた。

……その途中、急に足を止めて、

「昨日、カールの友人が命を落としたんだ」

「え？」

「歌か。もしかすると下手な言葉より伝わりやすい媒体かもしれな
いな」

「……？」

不思議そうなファルに、レベツカは少しだけ彼女を振り返って、

「ま、これからも色々頑張つて」

「あ、あの……」

怪訝そうに呼び止めたが、返事が戻ってくることはなく。レベツカの足音はそのまま部屋の方へと遠ざかっていつてしまった。

「……」

ファルはしばらく困ったような顔で首をかしげていたが、少しして。

「……うん」

何事か決心した様子で、ゆっくりとベッドから立ち上がる。

そしてしばらく。

その部屋には、穏やかな子守歌が流れ続けていた。

寝覚めは近年最悪だった。

「~~~~~」

頭はガンガンするし、体はダルい上に節々がミシミシと音を立てそうな痛みを訴えている。

（くそつ、確か　　）

背中に感じる感触、窓から射し込む光の角度がいつもと違うことに気付いて、俺は昨日の状況を思い出した。

（ああ、二日酔いだな……）

頭が痛いのと体がダルいのはそのせいだろう。そして体の節々が痛いのは、床に直に寝ていたためだ。

「ちっ……」

激しい後悔が襲ってくる。

後になつて気分が悪くなるような飲み方だけは絶対にするまいと常日頃から心に誓っていたのだが、昨日の俺はそのことすら忘れてしまう状態だったらしい。

記憶は多少断片的になつていたが、もちろん原因はしっかり覚えている。

そう。……あいつが死んだこと。

「……ふうっ」

胃の奥から息を吐き出して、軋む体をゆっくりと起こす。

外はまだ薄暗く、太陽がようやく頭のとっぺんを出し始めた程度の時間。外は静かだし、家の中でも微かに寝息が聞こえてくる。

「……」

昨日のことを思い出して、ベッドの上を見た。

「すう……すう……」

寝息の主は確認するまでもない。

「……ちっ」

昨日、そのベッドの主と交わした会話を思い出して、俺は少し陰鬱な気持ちになった。

と言つても、こいつに対しての怒りが再燃したわけじゃない。

その、逆だ。

（完全に言い過ぎだな……）

そのときは素面なつもりでいたが、今思い返してみればやはり酔っていたのだろう。まったく心ないことを言つたつもりはないが、確信を言葉にしたわけじゃなかったし、何よりも言う必要のないことばかりだった。

つまり、結局は八つ当たり以外の何物でもなかったのだ。

「くそ……っ」

激しい自己嫌悪に駆られながら、フラつく足でトイレへと向かう。イライラと同時に急激な吐き気がせり上がってきたためだ。

「っ……かはっ……はあっ……！」

胃の中のを戻して漂ってきた匂いは、ファルと出会ったあの

村の情景を思い起こさせた。

吐けるだけ吐いてから、脱力してトイレの壁にもたれかかる。

「はっ……これじゃ、俺も思いつきり落伍者の仲間だな……」

眩きが漏れた。

今になつて気付いたことじゃない。けど、俺は自分自身で作った最低限のルールを守ること、そういう奴らとは一線を画しているつもりでいたのだ。

けど、昨日のザマじゃ、とてもそんな偉そうなことは言えない。同じだ。

道端で酒瓶片手に転がっていた奴らと。

「……っ」

トイレを出て、水で口の中を洗い流す。

吐いた直後で胸のむかつきは少しだけ和らいでいたが、頭の奥の痛みと激しい自己嫌悪だけは、まるで消える気配を見せなかった。

「はあっ……」

重いため息を吐いて、静かに部屋の中へと戻る。

（ひとまず）

俺はベッド上に目をやって、ファルの姿があることをもう一度確認すると、

（あれでまた飛び出していたりしなかったことが、不幸中の幸いか……）

自分がかぶっていた毛布の上に腰を下ろし、重苦しい体をそこに落ち着ける。

こういうとき、他の奴らなら煙草に火を点けたりするのかもしれないが、残念ながら俺にそういう習慣はなかった。

そして、再び昨日の出来事に思いを巡らせる。

（謝るべき、なのか？）

おそらくそれが正しい選択なのだろうと思う。……だが、そうすると、一体どんな説明をすればいいのだろう。

俺が言った言葉は、まったくのデタラメだったわけじゃない。全

て、少なくとも心の片隅に存在している思いだったし、本心に限りなく近い言葉も含まれていた。

全て嘘で、苛立っていたただけだと言いつけるのか。

（そんなわけにはいかねえよな……）

それこそ嘘の上塗りをするだけだ。

何よりもそんな言い訳じみたことは言いたくない。

（俺の本心は……どうなんだ？）

あいつが俺の体を心配したという、そのことについて。

あのときは勢いで、媚を売ってるだけだなどと言ってしまったが、あいつの普段の態度から考えると、本当に俺の体を心配していたのかもしれないとも思える。

いや、

（……違うよな）

『かも』じゃない。

そんなこと、考えるまでもなかった。

俺はずっと昔、あいつと出会ったそのときにすでに感じていたのだから。

あいつはおそらく、媚を売ったり同情を買おうとするような奴じゃない、と。

（俺が悪かった、か……）

とすれば、やはり謝らなければならないだろう。少なくとも、その発言については。ただ、俺の私生活に口を出してきたことについては、あいつに体を心配される謂われはないのだし、言い過ぎだったにせよ、発言を撤回する必要はない。

（……よし。そうするか）

そうと決まれば、もう思い悩む必要はない。

今回のことは、あの発言に関してだけは全面的に俺が悪かった。悪かったなら謝るべきだし、それについては立場の違いとか、あいつと俺との関係だとか、そういうものはまったく関係ないはずだ。素直に謝る。それが一番だろう。

(しかし、どうもな……)

今までなかったことだけに、妙な感じだ。

いや、別に他人に謝るのは珍しいことでもないのだ。例えばレベルカの奴に迷惑をかけたときとか、あるいは仕事をスムーズに進めるために悪くもないのに謝ったりすることとか、そういうのはしよつちゆうだから。

だけど、その相手がいっとなると、何だか妙に胸がざわさわした。

そもそも、まだ相手が目覚めてもいないのに、謝罪の言葉を探してしまっている時点ですでおかしい。

(……ま、そりゃあ、余計なことを言って、また飛び出されても厄介なんだが)

どうにもすつきりしない。

ゆつくりと体を毛布の上に横たえて、余計な考えを打ち払うために適当なメロディを小さく口ずさみ、そして、壁に背中をもたれかける。

何も考えずにそうしていると、気持ちも少しずつ落ち着いてきた。外は徐々に明るくなってきている。

そろそろ俺がいつも帰宅している時間だから、ファルとレベルカも目を覚ます頃だろう。いやレベルカの奴はもう起きているかもしれない。気配はあまり感じないが、そういう奴だ。

と、そのとき、

(……ん?)

ふと、違和感を覚えた。

と同時に、小さく口ずさんでいたメロディを止める。

(なんだ……?)

無意識に口について出ていた、適当なメロディ。といっても、それはもちろん俺のオリジナルなんかではなく、おそらく過去にどこかで聞いたことのあるメロディのはずだ。

だが、

「……」

もう一度、そのメロディを口ずさむ。

スローテンポの、微かに郷愁を呼び起こすような旋律……おそろくは子守歌だろうと思うのだが、

（……俺は今……何を歌っていたんだ？）

聞き覚えのない曲だった。

なのに、何故か頭の中に残っている、そのメロディ。

「……」

もう一度、口にしてみる。

……何故だか鮮烈に耳に残っている。

最近、こんな曲を聴いた覚えはない。ファルと一緒に行ったコンサートだって、こんな曲はなかったはずだ。

（……なんなんだ）

あるいは、遙か昔に聞いた曲が今になって頭の中に蘇ってきたのだろうか。

「……」

耳障りの良いメロディ。

自分自身の歌で気持ちが落ち着くなんてこと、俺にとっては初めての経験だ。

不思議な、感覚。

（……っと）

知らず知らずに音量が上がっていた。

歌を止める。

……と同時に、隣の部屋から人影が現れた。

「随分と機嫌良さそうじゃないか」

やはり最初から起きていたのだろう。……今、目覚めたのだしたらタイミングが良すぎる。

「よくねえよ。……二日酔いで頭は痛いしな」

俺が素っ気なくそう返してやると、

「気分悪いときには歌なんて出ないもんだ」

言いながら、レベツカは大きく背伸びをして水道の方へと歩いていった。

「お前……その格好は寒くないのか？」

「最近はこれで充分だよ」

そう答えて軽く手を振るレベツカ。

こいつは寝間着に着替える習慣がないので、冬は普段着で寝ているし、暑くなってくれば肌着のままで寝る。

今は、上は一枚薄い服を着ているが、下は肌着だけだ。

最初、こいつと暮らし始めた頃は、そういう格好で起きてくることにクレームをつけてやったものだが、こいつ自身がまるで気にする様子もないし、不思議と俺もすぐに慣れてしまったので、今では何も言わなくなった。

と、それはともかく。

「やれやれ」

確かに、起きた直後ほどの不快感はなくなっている。その点について、こいつの言うとおりだろう。

水の流れる音がして、しばらく。

「朝食はないのか」

タオルで顔を拭いながら、レベツカの奴が戻ってくる。

その言葉に眉をひそめて、

「それは俺が当然のごとく用意しなきゃならないものなのか？」

「別に強制はしないが」

言って、部屋の隅にあったクッションに腰を下ろすと、

「謝罪にはやはり誠意が伴ってないと」

「……お前って、ほんとに嫌な奴だな」

なんでこいつはここまで俺の行動が読めるのだろうか。

「謝らないのなら、私は君を軽蔑するよ」

言ってから、いつものしれっとした顔で、

「私も朝飯作るの面倒だし」

「……そっちが本音かよ」

相変わらず真意の掴めない奴だった。が、こいつの言うことにも確かに一理ある。

「はあ、やれやれ」

仕方なく、ズキズキ痛む頭とダルい体を奮い立たせ、朝食の準備をすることにした。元々がそんな贅沢なものを食って生きてるわけじゃないし、朝食といったってそれほど手間がかかるもんじゃない。（あー、いてえ……）

動くたびに痛みが走る頭に片手を添えながら、適当にメシを作っていく。

そうしているうちに外はどんどん明るさを増し、窓からも直接光が入ってくるようになってきた。

「……しかし」

そうしながら振り返る。

レベツカはいつまであの格好なのか、クッションの上で呑気に本なんか読んでいるし、ファルの奴は未だにベッドですやすやと寝息を立てていた。

「そいつ、この時間ならいつもは起きてるんじゃないのか」

「ああ、そりゃあ」

レベツカは本から顔を上げようとせず、

「昨日は夜更かししてたみたいだから」

「夜更かし？」

「子守歌を聴きながら寝たのなんて十数年ぶりだよ」

「……なんだ？」

いまいち意味がわからない。

「子守歌なんか歌わせて寝たのか？」

「いい声をしてるね、この子は」

微妙にずらした返答をして、

「例え前後不覚に陥った酔っぱらいでも、きっと安らかに眠れるに違いない」

「……」

間違いなく嫌味が混じっているのはわかるのだが、俺はあいつにそんなものを歌わせた記憶はない。

そもそも、昨日は意外にもすぐに寝付いてしまったわけで。

(……なんなんだ)

いまいち釈然としないまま、俺は作業に戻った。

そして、

「……ううん」

ファルが微かな反応を示したのは、俺が丁度朝食を作り終えたとき。

ベッドの上で微かに身じろぎしながら、

「カーライルさん……そんなに押したらベッドから落ちてしまいますー……」

「なんだよ、そりゃ」

またわけのわからない夢を見てるらしい。

レベツカもチラツとベッド上に視線をやって、

「なかなか楽しそうだね」

「うなされてるようにはか見えないが」

「願望が成就した夢でも見てるんじゃないの？」

「……ますますわからねえ」

なんとなく想像できなくもなかったが、知らないフリをするのがよさそうだ。

朝食をテーブルに並べながら、

「おい、レベツカ。そろそろそいつを起こしてくれ」

「古来より、お姫様を起こすのは王子様のキスと相場が決まって」

「それはもういいから、頼む……」

二日酔いの頭痛に加えてこいつにオモチャにされたのでは、精神的にかなりキツイ。

「仕方ない」

レベツカはクッションから腰を上げて、ファルの寝ているベッド

に近付いていく。

そして、ゆつくりとその耳元に口を寄せると、

「ファル、起きて」

「ううん……？」

「起きないとその愛らしい頬にキスをしてしまつよ……」

「……え……ええッ!？」

レベツカのセリフに、ファルがビクツと体を震わせて飛び起きた。

「……」

この際、俺の声真似ぐらいは許すことにしよう。

効果抜群みたいだし。

「あ、あれ……？」

一瞬、混乱していたようだが、さすがにレベツカの悪戯だとわかつたらしい。

「あ、お、おはようございますー……あ、あの、レベツカさんですよね？」

「正解」

レベツカは意外にも素直にそう答えてから、

「楽しそうな夢の最中に起こして悪かったね」

「……えっ!？」

寝起き早々、顔が真っ赤になる。

「あ、あ、あの……も、もしかして、私、何か寝言を言っていたりー

……」

「言ってたよ」

レベツカはまるで躊躇することなく頷いて、

「聞いている方が恥ずかしくなるような寝言を」

「そっ、そんなことを!？」

「子供が三人ぐらい出来てそうだった」

「っ……!」

「やな例えだな」

ゆでだこのようになって言葉が出せないでいるファルに代わって、

レベツカの悪戯を止めてやる。

と、

「あ……」

ファルはそこで初めて俺の存在に気付いたようで、

「おっ……おはようございます、カーライルさんっ！」

「ああ」

最後の皿をテーブルに置いて、ファルの元へ。

「ほら。顔を洗え」

「え……」

戸惑った様子の手を引いて連れて行く。

「あ、あのー……」

「タオル」

「あ、は、はい」

冷たい水に浸したタオルを渡してやる。

「あとは一人で出来るな？」

「そ、それはもう　じゃなくて！」

ファルは小さく首を振って、

「あ、あの……昨日は申し訳　」

「待て」

言いかけた言葉を制止する。

……この上、こいつに謝らせたりしたら、レベツカに何を言われるかわかったもんじゃない。

そしてどう言おうか迷った末、俺は結局、一番無難な言葉を選んだ。

「昨日は悪かったな」

「……え？」

きょとんとした顔。

拭こうとしたタオルが口元で止まっていた。

「俺が悪かった」

もう一度言ってやる。

「……………」

表情は動かない。

タオルも口元で止まったままだ。

……何故か徐々に顔が赤くなっている。

そして数十秒。

「……ぷはあっ！」

「筋金入りの馬鹿だろ、お前」

呼吸までフリーズしてたらしい。

が、こいつはそんな俺の言葉も耳に入っていない様子で、

「ああああの、わ、私、また何かカーライルさんのお気に触ることも……！」

普通に錯乱していた。

「……あ、わ、わかりました！ 運命の神様はきっとそうやって私のことを油断させておいて、あとでどん底に叩き落とすつもりなんです！」

いや、かなり高いレベルで錯乱しているようだ。
かまってるれん。

「いいから、とつとと顔を洗え！」

「はっ、はいいつ！！！」

ビシッと敬礼する。

……結局、こんな感じになるらしい。

（ま、とりあえず謝るには謝ったんだからいいだろ……）

タオルで顔を拭い始めたのを見て、俺はテーブルに戻る。

思ったよりも落ち込んでいなかった。今まで以上にきついことを言った自覚があったので、その辺は少し意外だ。

以前のあいつなら、昨日のような突き放す発言にはひどく反応していたものだが。

（前ほどは……俺に対する接近欲がなくなったか）

だとしたら、それに関してはいいことだ。

もし例のコンサートがその要因だとするなら、連れ出した甲斐も

あるというもので。

「顔が淋しそうだぞ、カール」

「……お前は」

俺はこめかみをピクピクと震わせながら、

「他人の心を読んだ上で、しれっとデタラメを吐くんじゃねえよ！」

「気のせいかな。……けど」

レベツカは相変わらず堪えた様子もなく、横目でファルの様子を窺いながら、少し意味ありげに口元に笑みを浮かべると、

「どっちにしる、君の認識は間違っていると思うけどね」

「……なに？」

いまいち意味のわからない言葉だった。

……いや。

「カーライルさん、あの」

顔を洗い終えたファルがやってくる。

大事そうに胸に抱えていたのは、見慣れない包み。

記憶は曖昧だったが、確か昨日、こいつが買い物に行って買ってきたものだったか。

「昨日は酔ってらしたので、お渡しできなかったのですが」

「……」

怪訝な目を向けると、そんな雰囲気を感じたのか、少し焦ったような口調になって、

「あのっ……わ、私、目が見えないのでデザインとか全然わからないんですけど、でも、カーライルさんに使っていただけだと思いますって」

恐る恐る、両手でそれを差し出してくる。

「……俺に？」

チラッとレベツカを振り返ると、やはり先ほどの笑みを浮かべたまま。

（……なるほど、そういうことか）

包みに入っていたのは、シンプルで動きやすそうなシューズだった

た。

レベッカがついていただけあって、サイズはピッタリ。デザインは正直、気にしないのでどうでも構わない。

「……」

俺の認識が間違っている、と、レベッカは言った。

それは、正しいのかもしれない。

「あの金で買ったのか？」

問い質すと、ファルはすぐに、

「はいっ、あのっ、好きなように使えと言われましたので……」

「……俺はお前に言っただけだ」

俺はシューズを床に置いて、ゆっくりと顔を近付けた。

「……」

目が見えないこいつにも、その気配は充分に伝わっているはずだ。若干ではあるが、表情に緊張の色が浮かんでくる。

「お前の面倒を見るのは俺の義務だ。それに対して、お前が俺に何か貢献する必要はない、と」

「……はい」

俺の言葉に少し押され気味だったが、ファルは素直に頷いた。

「わかってているなら……どうしてこんなものを買ってきた？」

別に詰問しているつもりではなかった。単純にその答えを聞いてみたかっただけだ。ただ、意識せず口調は若干厳しいものになっていたかもしれない。

だが、そんな俺の言葉にも、ファルはまるでためらうことなく答える。

「それが一番、私のためになる使い方でしたので……」

俺が黙っていると、ファルは補足するようにさらに言葉を続けた。

「その……本当に楽しかったんです。何を買ったらいいのかなとか、どんな反応をしてももらえるのかな、とか考えて……」

そうしているうちに、その表情に徐々に笑顔が戻ってくる。

声も弾んでいて、確かに本当に楽しそうで。

「……」

昨晚の記憶が刺激される。

（……そうか）

昨日見せていた陽気な表情は、つまりそういうことだったのだ。だからきつと、こいつの今の言葉は取って付けたものなんかじゃない。

そして　それならば尚更。おそらく昨晚、俺が発した言葉は、いつも以上の鋭さでこいつの心をえぐったことだろう。

その事実を知って、僅かに胸が痛む。

だが、それでもなお、こいつは懲りることもなくこうやって俺に近付いてくるのだ。

（これじゃ……レベッカの奴に言われて当然か）

そんな俺の胸の内も知らず、ファルはすでに満面の笑顔になっていた。

言葉はやはり弾んでいて。

「その、私が期待してたのとはだいぶ違いましたけどー……でも、色々想像するのが楽しかったんです。ですから　」

「……悪かったな」

「え？」

思わず発した俺の言葉に、ファルの表情が再び驚きに彩られた。

「あ……」

そしてすぐに思いついたかのように、目の前で手をブンブン振ると、

「あ、あの！　そ、それは、私が勝手に、その、喜んでくれるかなーとか想像してただけでして！　私としてはー……その、たとえばそのままゴミ箱に捨ててしまわれてもなんの文句もありませんので　」

「そっちじゃない」

そんなもったいないことをするはずもない。

錯乱気味のファルの手を引いて、ゆつくりとテーブルに着かせる。朝食はすっかり冷めてしまっているようだが、そこまでグルメなやつはいないから問題ないだろう。

「あ、あのー……」

いまいち意味が呑み込めていないようだ。不思議そうにこちらを見上げている。

……今度はかりは、ちゃんと伝えてやるべきか。

俺はポンツとその小さな頭に手を置いて、

「もう、昨日みたいな馬鹿な飲み方はしない」

「え？」

「体に悪いから、だろ？」

「あ、え……？」

きょとんとした顔。

目が大きく見開かれて。

一瞬、周りの空気が震えたような錯覚。

そして、

「あつ……あれっ……？」

戸惑ったような声とともに、こちらに向けたその瞳から涙が溢れ出した。

（……泣くのか）

俺にとっては一応予想の範疇だった。

だが、

「わつ、わわつ、なんでっ……？」

本人にとってはまるで想定外の出来事だったらしい。

慌てた様子で流れてきた涙を拭いながら、

「ち、違います！ わ、私、泣いてないですよ！？」

「……」

悲しくて泣いてるんじゃないのは俺にだってわかる。

当の本人が一番戸惑っていた。

「こ、これは……そう！ いわゆる心の汗というものでしてー！」

(……なんだそりゃ)

そんな錯乱状態のこいつが妙におかしくて、俺は声に出さないように笑いながら、

「もういい」

もう一度、軽く頭を撫でてやる。

「メシにするぞ。……おい、レベッカ！」

「もういいのか？」

気を利かせたつもりなのか、部屋に戻って着替えていたらしい。普段着だった。

……まあ、部屋に戻ったところで音声が遮断されるわけでもなく、結局は筒抜けなんだろうが、今は特に気にもならない。

「うっ……」

ファルは全員が席に着いてからもまだ涙を拭い続けていたが、それがようやく収まってくると、

「……そ、その」

少し、こちらを伺うように顔を上げた。

「なんだ？」

「えと、その、あ、ありがとうございます……」

「……」

謝ったことに対して礼を言われるというのも奇妙なものだ。ただ、晴れ晴れしたこいつの表情を見ると、別に突っ込む必要はないのかもしれないと思える。

「とりあえずとつと食っちまうぞ。……ま、もう冷めちまってるけどな」

「きよ、今日はもしかしてカーライルさんの手料理ですか!？」

「んな大袈裟なもんでもない」

だが、ファルは胸の前で両手を組んで、目をキラキラさせると、
「そんなことないですよー！ カーライルさんのお作りになられたものでしたら、たとえ炭の塊でもおいしくいただけます!」

「……食ってみるか？」

「あ……いえ、あはは……」

笑って誤魔化した。

もっいつもの調子だった。

「……」

そうやって喜ばれるのは悪い気分でもないが、別に俺が作ったものを食うのは初めてじゃないだろうに。

「料理の最高のスパイスは『愛情』だそうだ」

相変わらずマイペースに食事を進めながら、レベツカがボソツと言った。

「ふむ。とすると、カールには私に対する愛情がいまいち足りてないな」

「文句言うなら食うんじゃねえよ」

「あ、私はとてもおいしくいただいてますよ！」

「そうか」

フォローなのかもしれないが、実際、おいしそうに食べてはいる。別においしくしようと考えて作ったものでもないが、文句を言われるよりはよっぽどいい。

そして流れていく。

俺にとっては本当に久々の朝食風景。

「それですねー、昨日は……」

弾んだファルの声。

受け答えるレベツカの言葉も、今日はどこか違って聞こえる。

そして、おそらくは俺も。

懐かしい。

（懐かしい？）

何故だかそう感じた。

俺にとってこんな朝食は初めてのはずのに、どこか懐かしい。一家団欒なんてものがあるのだとすれば、こんな感じなのだろうか。

（疫病神、か……）

こいつは俺に何ももたらしてはくれない

今までずっと、そう思っていた。

けど、もしかしたらそれは

(……ヤバいな)

一瞬冷静に返って、そして初めて自覚した。

もしかすると、俺はとつくに捕らわれていたのかもしれない。

耳に届いてくる、明るい声。

俺に向けられる、無垢の笑顔。

そして帰ってきたとき、そこに誰かが待っていること。

『懐かしい』

それはここが、こいつのいるこの場所が、俺にとっての帰るべき場所になってしまっている証拠なのか。

(帰るべき場所、か)

それは、いつからだっただろう？

さつき、プレゼントを受け取ったときか？

数日前、一緒にコンサートに行ったときか？

それとも三ヶ月前、こいつの中に昔の俺自身を重ねてしまったときか？

あるいは

(……ダメだ！)

そんな考えをムリヤリ吹き飛ばす。

(冗談じゃない……)

俺たちがそれを望めば、どうなるか。あいつが教えてくれたばかりじゃないか。

明日を生きること何の保証もない、そんな俺たちが、たとえば一人でも他人の運命を背負い込むことは非常に困難だ。

そして現在、俺はすでに診療所にいる弟の運命を背負い込んでしまっていた。

いくら俺が頑張ろうとも、これ以上は絶対に不可能。

そんなのはわかりきったことだ。

(大丈夫。今は少し感傷的になっているだけだ……)

俺はいつの間にかこの生活を楽しんでいると感じてしまっている。

それは認めざるを得ない。

だが、たとえそうだとしても、俺はいつでもこの生活を捨てられる人間でなければならなかった。

全ては一時の幻想。

ハッと気が付いたとき、そこに待っているのは非情な現実でしかない。

いつものこと。

あの日　初めて優しく手を引いてくれた母親は、もう二度と俺たちの前には現れなかった。

期待したところで、待っているのはいつも同じ結果だ。そして今の俺には、そんな幻想よりも守らなければならないものがある。

だから、俺はまだそんな不安定なものに転ぶわけにはいかないはずだった。

……だけど。

「カーライルさん！」

「ん？」

ボーっとしてた。

しかも、ずっと目の前の人物を見つめたまま。

相手の目が見えなかったのは、不幸中の幸いかもしれない。

……まあ、別のところから、しっかりと意味ありげな視線が突き刺さってはいたが。

「どうなさったんですか？　急に静かに……あ、もしかして」

「なんでもない」

また余計なことを言い出すのはわかっていたので、先に釘を刺す。

「俺の口数が少ないのはいつものことだ。……それと、少し胸がムカムカしてな」

「あ……えと、それは、一般的に言うところの二日酔いというものですか？」

「ああ」

一般的以外の呼び名など知らんが。

するとファルは嬉しそうな顔と弾んだ声で、

「それなら、私にお任せください！」

ドン、と胸を叩く。

「私、二日酔いに効くツボを知ってますから！」

「ツボ？」

「はい！ えつと、ベッドの方に座っていただけますか？」

「……まあ、構わんが」

特に断る理由もなく、言われるままにベッドに腰を下ろす。

レベツカの奴は相変わらずマイペースに食事続けながら、しつかりとこつちの様子を見ていた。

「じゃあ、上半身裸になってください。……あ！ その！ 私はどうせ見えませんので　！」

「いちいち言い訳しなくてもいい」

たとえ見えたところで恥ずかしがるほど子供じゃない。

この場にいるもう一人に関しては尚更だ。

「んしょ……つと」

俺が服を脱ぐと同時にファルはベッドに上がり、そのまま背後に回った。

「で、では、失礼します」

その言葉とともに、ピタッと、脇腹にヒンヤリした両手が添えられる。

その冷たさが、少し心地よい。

「うわ……」

「ん？」

突然聞こえた妙なため息に、何事かと思ってチラッと振り返ると、

「た、たくましいですね……」

言いながら、何故か顔を赤くしていた。

「……」

ガタッ。

「わっ！ な、なんで逃げるんですか！！」

慌てて手を伸ばし、なんとか俺のズボンを掴んだファル。

「背筋が寒くなった」

「そ、そんなあ……」

「だったら真面目にやってくれ」

泣きそうだったので、とりあえず元の位置に戻ってやる。

「うう」

悲しそうにしながらも、今度は真面目に俺のお腹に手を当てて、

「えっと……この辺……」

「おっ……」

右肋骨の下辺りを軽く押し上げるように揉んでくる。

最初は軽く。徐々に強く。

「あ。体を軽く前に傾けていただけですか？」

「おう……」

何となく妙な感覚だ。

ある程度右を揉むと、次は左へ。

それを幾度か繰り返していく。

「どうですかー？」

「あ、ああ……」

答えはしなかったが、結構気持ちいい。

頭痛は取れないものの、胸のむかつきは間違いなく収まってきていた。

「んしょ、んしょ……」

懸命なファルのかけ声。

そうしているうちに、少しずつ手の平が汗ばんでくる。こっちはそれほど感じないのだが、やってる方にすれば意外に力があるのだから。

そうしていたのは、時間にして五分ぐらいだろうか。

「もついいぞ」

俺はそこでマッサージを止めさせた。

「え……？」

ピタツと動きが止まり、それから不安そうな視線が向けられる。
「あ、あの、全然ダメでした？」

「……いや」

ゆっくりと体を離し、脱ぎ捨てた上着を手に取る。

そして不安そうなファルに言っただけ。

本心からの言葉。

「だいぶ気分が良くなった。……サンキュな、ファル」

「は……」

一瞬。惚けたような反応。

直後。

「は、はい！ えと、またいつでも言ったださい！」

満面の笑顔がそこを支配した。

額に、微かな汗を浮かべながら。

「また、って、もう馬鹿な呑み方はしないって言ったはずなんだから」

「あ。そ、そういえばそうでしたね……」

ファルは少し残念そうな顔をした後、照れたような笑みを浮かべた。

「……」

そんなこいつの反応に、頭のどこかが熱くなる。

……わかってるのに。

たぶん、それはいつもの序章でしかないと、わかっているのに。

それなのに、俺の頬は僅かに緩んでしまう。

ひたむきで、真っ直ぐな少女の笑顔に。

「ああ……」

つられて微笑んでしまうのだ。

「いつか……また、頼むかもな」

いつしか染み付いてしまった、最近の日常。

そして、

「……」

そんな俺たちをレベツカは無言のまま、どこか複雑そうな表情で見つめていた。

何が言いたかったのか、そのときの俺は全く気付くこともなく。

……もちろん俺はわかっていたのだ。

甘い幻想はいつも、非情な現実の入り口でしかないのだと

その4『二つの楔』

雨。

外は吸い込まれそうな夜闇の最中であつた。

首筋に手を当てると薄っすらとした湿り気が手のひらに残る。初夏独特の湿った暑さに俺の苛立ちは否応なしに高まっていく。

「……くそ」

逃げ場所を失った苛立ちが自然と口をついて出た。

薄暗い家の明かりが、窓に俺の顔をうつすらと反射させている。

そのときの俺の表情は、おそらくこの心情をそのまま映していたことだろう。

苛立ち。

そして焦り。

家の中はしんと静まり返っている。ファルはレベルカに連れられ公衆浴場へ。雨降りの日にファルを外出させることはこれまでほとんどなかったのだが、降り止む気配のない連日の雨に、さすがに外出を許可した。

「これじゃ、今月分の家賃も待ってもらわなきゃならんな……」

ここ数日、俺は思うように仕事ができないでいた。といっても連日の雨が原因ではない。俺の仕事は基本的に天気に関係なく行われるし、そんなことで休めるほど俺は裕福じゃない。

理由は別。

……六日前のことだ。この町のある学舎の生徒たちに麻薬が蔓延していた事実が明るみに出た。広まっていた薬はかなり中毒性のある危険なもので、俺が扱っているものとは無関係なルートから出たものだったが、生徒たちの供述から何人もの売り子が捕まり、官憲連中はこの機会にさらに吊り上げようと、連日連夜のパトロールを強化している。

俺はレベツカからの早急な情報提供によって事なきを得たが、知り合いは何人が捕まった。俺にとっては非常に危険な状態でも仕事ができる状況にない。

仕事ができなければ収入がなくなる。

これは当たり前のことだ。

二人分の生活費を無理に捻出し始めて半年以上が経過し、これまではなんとか黒と赤の間をギリギリでキープしていたが、それはまともに働けていたときの話。

こつという事態になると生活が苦しくなるのはわかりきったことだった。

「わかつてはいたんだが、な」

ため息が雨音にかき消される。

念のため蓄えてあったなけなしの貯蓄は、全て弟の診療所への送金が途切れないようにするためのもの。

それも来月分ギリギリだ。

それに手を付けるわけにはいかない。

となると、近い内に生活費が底をつくのは間違いなかった。俺は多少食わなくてもなんとかなるが、ファルの奴を飢えさせるわけにはいかない。

（……またレベツカの奴に頼み込むしかないか）

それは不本意なことだった。あいつに頭を下げることは別に難しくないが、最近はなんだかんだと借金する機会が増えていたし、そのたびにあいつに頼りっぱなしになっていた。

とはいえ。

背に腹は変えられない。

と、そこへ、ドアの開く音がして、タイミング良く二人が帰ってくる。

「ただいま戻りましたー」

明るい声はファルのもの。

「ただいま」

あまり起伏のない声はレベツカ。

……話すなら早い方がいいだろう。

そう思い、ファルに軽く台所の掃除をやらせることにして、あとはレベツカの部屋で相談することにした。

「……だろうね」

話すまでもなく、レベツカは俺の現状を良く把握していた。

少し濡れた上着を脱いでその辺に投げ捨てると、履いていたズボンまでも脱ぎ捨ててベッドの上に勢いよく腰を下ろす。

「で、今月分の家賃を待つて欲しいと、そういうわけだな？」

「頼む」

言つて、頭を下げる。

「……ふうん」

レベツカはそう呟いて、頭を下げたままの俺の顔を覗き込むようにすると、

「わかつているのか？ 君が今、私にどれだけの借金をしているか」

「ああ。理解しているつもりだ」

当然、誰にどれだけの金を借りているかはきちんと把握している。レベツカに借りている金は 正直言つて結構な金額だ。ファルの問題が片付いて、そしてまともに働けるようになったとしても、一ヶ月や二ヶ月で返せる額じゃない。

「わかつていて、まだ借りたいというわけだ」

「働けるようになったら俺の食費を切りつめてでも返していく。だから、頼む」

ひたすらに頭を下げた。

今はとにかく、そうするしかなかった。

「ふむ」

レベツカは腕を組んで目を閉じ、しばし考えると、

「金貸しの視点で言つと、だ。正直言つて現状、君からお金が返ってくることはあまり期待できない」

「……」

「それでいて君に言われるままお金を貸し続けられるほど、私はお人好しでもないし、裕福でもないんだ」

「……ああ」

それはよくわかっていた。今まで目を瞑っていてもらえたことすら不思議なぐらいだ。だが、それでも今はこいつに頼み込む他に手段がない。今、万が一この家を追い出されてしまったら、ファルの面倒を見るのはますます困難になってしまう。

「頼む！ 近い内に何とか都合をつけてみせる！」

ファルに聞こえない程度に潜めた声で懇願する。

土下座しろと言われればするつもりでもいる。……が、こいつはそんな無意味なことを望みはしないだろう。

「ふむ」

レベツカはさらに何事か考えていた。

反応はあまり良くない。……が、考えてる以上は何か妥協案を探してくれているのか。

そしてしばらく。

「そうだな。じゃあ、こうしようか」

そして彼女の口から出てきた妥協案は突拍子もないものだった。

「四ヶ月、待とうじゃないか。その間、君たちの家賃、食費、その他の生活費は全て私が貸す。ついでに、今までの借金も含めて全てその期間は無利子にしてあげよう」

「生活費を全て？ 無利子？」

そこまでの提案はとても魅力的なものだった。

が、そんなうまい話が無条件に転がっているはずはない。

意図が見えない。

「……条件は？」

少し眉をひそめて問いかけた俺の言葉に、レベツカは頷いて、

「四ヶ月後、今までの分と、それまでに増えた借金を全てまとめて返すこと。もしそれができなければ」

いつになく真剣な顔で俺を見つめ、そして言った。

「私はあの子をどこかに売り飛ばすことにしよう。あの器量なら、君の借金を補って余るぐらいの報酬を出す男に心当たりがある」

「……？」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

そして、

「なん……だと？」

理解した瞬間、声が自然と陰を帯びた。

……当たり前だ。

「レベツカ。お前それ、本気で言ってるのか」

「本気だ」

そんな俺の声色の変化にも、レベツカはまるで動じることはなく。「それが受け入れられないなら、君が今持っている金を全て置いて、今すぐあの子と一緒に消えるといい。足りない分の借金には、今までのよしみで目を瞑ってあげよう」

「……」

俺は返す言葉を失って、呆然と立ち尽くした。

少しずつ沸き上がってくるのは、戸惑いと、怒り。

（レベツカ……）

こいつがこういう奴であることはわかっていた。情よりも利を優先させる、そういう意味でとてつもなくしつかりした奴だから、今の発言だって決して突然でも理不尽でもない。こいつ自身の利益を守る行動としては当然のことだ。

だけど。

その一方で俺は、こいつも少なからず、ファルに対して利害抜き
の好意を抱いているものだどこかで思っていたのだ。

全て俺の勘違いだったのか。

そうだとするなら、やはりこいつは、俺よりもずっと上手だ。少なからず懐柔されてしまった俺よりもずっとしつかりしていて賢い奴だった。

(……四ヶ月?)

不可能だろうか。

いや、決して不可能ではない。

ただ、それを可能とするにはいくつもの条件があった。

「先に言っておくが」

考え込む俺に、レベルカが釘を刺すように言う。

「他にも条件はいくつかある」

「……なんだ？」

返す声が少し低くなったのは仕方ない。

「第一に」

ピツと人差し指を立てた。

「当たり前だが、四ヶ月が経過するまであの子を手放すことは禁止じゃなきゃ、私が手を出しづらくなるからね」

「……ああ」

当然だ。が、それは同時に、目標達成の障害ともなる条件だった。達成するには、なるべく早くファルの行き先を見つけて、生活費を一人分にしてしまうことがもっとも手っ取り早いものだから。

「第二に」

中指が立つ。

「君が普段やっている以外の仕事は禁止だ」

「……なんだと？」

これは理不尽な要求だった。

「いつもの仕事だけで借金を返せつてのか？」

「無茶して捕まったり死なれたりすると、借金がすべてパアになるからね」

「それはそうだが」

「少なくとも、期間中、私は君にそういう仕事を回すつもりはない」
「……」

確かにそういう類の仕事はこいつ経由で入ってくることがほとんどだ。他のルートで入ってくることがないでもないが、その場合は

いろいろ余計な手間がかかるし、危険も大きくなる。

「最後に」

薬指が立った。

「私は今まで以上に、朝から夕方までこの家を空けることが多くなる。その間、あの子をこの家に一人にしたりしないこと」

「……それはつまり、朝から夕方までの時間には仕事をするなっ
て何か？」

「あの子を連れてならいくら働いても構わないが？」

レベル力はしれつとそんなことを言ったが、俺の仕事の性質上、
そんなことが簡単にできるはずもない。

言い換えればつまり。

高報酬でリスクの高い仕事は禁止。

仕事時間の延長も禁止。

と、いうことになる。

「……無理だ」

考えるまでもない。

それだと、二人分ギリギリの生活費しか稼げないことはすでにわ
かっている。

「そんなの、不可能に決まっている」

そう呟くと、同時に腹立たしさが込み上げてきて、俺はレベル力
を睨み付けるようにして言った。

「どういうつもりなんだ？ ここを出ていくか、あいつを見捨てる
か、どちらかを選べってことなのか？」

「そんなつもりはない」

「そう言ってるも同じだ！」

ついつい声を荒げてしまう。

……そりゃ俺が偉そうなことを言える立場じゃないのはわかって
いる。こいつには俺に金を貸さなきゃならない義務なんてないし、
それは仕方ない。

けど、それならそうと、はっきり断ってくれればいいのだ。

こんな無茶な条件は、悪質な嫌がらせとしか思えなかった。

「ま、どう取るかは君の自由だよ」

レベツカは相変わらず動じない。その表情から何を考えてるかを読み取るのは不可能だったが、

「ただ、一つだけ言わせてもらおうと」

ゆっくりと立ち上がって近付いてくると、俺の胸に人差し指を置く。

その瞳が、一瞬だけ異様な光を帯びた。

「よく考えて、後悔のない選択肢を選んだ、カール」

「……っ」

驚く。

いつも飄々としているこいつにはまるで似合わない。真剣で、切羽詰まっているかのような。……そう。もしかしたら、今の俺と同じような表情。

言葉を失った。

「君にとって大事なことが何なのか。君が守ろうとしているものの正体は何なのか」

「何を、言ってるんだ、お前……」

「考えろ、カール。私は理不尽な選択肢を突きつけたつもりはない」

「……」

指先で胸を軽く押されただけで、大きくよろける。

それほど呆然としていた。

「……」

レベツカはそんな俺を一瞥するなり、無言で横を通り抜けていく。そして一瞬の後、

「あ、お話、終わっただんですか？」

「ああ。……しかしカールもひどい奴だ。風呂上がりの少女に台所掃除を押しつけるとは」

背中越しに聞こえてきたのは、普段と変わらない二人の会話。

「え、あ、そんなことないです。私、お掃除好きですから」

「君が好きなのは掃除じゃなくてカールの方じゃないのか」

「そつ、そんなんじゃない……それにレベルカさん！ 声が大きいです！」

「大丈夫。彼は今、色々考え事をしているみたいだから。聞いてない」

「そ、そうですか……？」

「……」

まるで仲の良い姉妹のような。

（なんなんだよ、それ……）

わからなかった。

あいつが一体何を考えているのか。

何を考えて、一体、俺に何を期待しているのか。

（どうしろ、ってんだ）

神ならざる俺に、答えなどわかるはずもなかった。

日が変わった直後も雨は降り続いていた。

時折、閃光が暗い部屋を明るく照らし、遠くに聞こえる雷鳴が俺の陰鬱な気分をさらに色濃く縁取っていく。

（……四ヶ月、か）

暗闇に浮かび上がるベッドの上では、ファルが静かな寝息を立てていた。

（それで、どうしろってんだ）

そんな中、俺は壁際で片膝を立てて考え込んでいる。
四ヶ月。

俺の毎月の収入は決して少なくはない。税のことを考えなければ中流家庭における家主に近いぐらいの稼ぎはあるし、学も何もない人間にとっては十分すぎる収入だ。

だから本来なら、大して金がかかるわけでもない娘を一人養って

いくぐらいは問題ないのだ。借金などする必要だつてないし、無駄遣いさえしなければ現在の借金を返すのも無理ではない。

だが、俺にはもう一人。

いや『もう一人』という言い方はおかしいな。

唯一、絶対に見捨てることのできない存在がいる。

『兄ちゃん 』

少し離れた町の診療所で寝たきりになっている、双子の弟。

こんな俺にいつでも絶対の信頼を寄せてくれた、俺の分身。

両親の元では同じように無視され続け、その後、たまたま流れ着いた孤児院では同じように揃って虐待を受けた。

反抗的だった俺が余計に殴られると、庇おうとしてあいつも殴られた。

『大丈夫。大丈夫だよ 』

それでも笑顔でいることが多かったあいつの顔や体は、いつでもアザだらけで。もちろん俺も同じようにアザだらけだったが、双子であるにもかかわらず、あいつと俺とじゃ体の頑丈さがまるで違っていた。

十年前。

ついに孤児院を逃げ出したその夜。

多分、ずっと以前から限界を越えていたのだろう。

あいつは、自分で起き上がることでできない体になった。

思い出すと、今でもドス黒いものが胸の中に込み上げてくる。

……雲一つない夜空。

……ぽっかりと浮かぶ、丸い月。

……パチパチという火の爆ぜる音と、微かに赤く染まる空。

「……っ！」

頭痛がした。

同時に吐き気が胸を襲う。

「……くそ」

あの日のことを思い出すと、いつもこうだった。

忘れたくても忘れられない。

母親に捨てられた日。

そして、孤児院から逃げ出したあの日の夜だけは。

（もう、十年以上も前の話だったのに、な）

とにかく、俺の収入の大半はその弟への送金に充てていた。放っておけば、いつ命を落とすかわからない病だ。一月たりとも送金を怠るわけにはいかない。

それだけは、絶対だ。

（……他に、道があるのか？）

考えてみる。

たとえば、明日から仕事が再開できるとして。さらにギリギリ限界まで働き、ギリギリ限界まで切りつめたとする。

もちろん何もアクシデントが起きないという想定で。

計算し。

……途中でやめた。

するまでもなかった。

（……くそ）

どう頑張っても無理だ。

それは明らか。

となれば、選択肢はやはり二つしかない。

……ファルと二人でこの家を出ていくか。

……あるいは、あいつを生贄に捧げるか。

（逃げ道なんて、どこにもないじゃないか）

再び、レベッカに対する腹立たしさが込み上げてくる。

『後悔のない選択肢』

最初からそんなものは存在しなかった。

何よりも、その二択なら俺の選ぶ道は一つ。

後者しかない。

前者を選択したとしても、無一文で外に放り出された状態ではフルを養っていくことなど出来るはずもないから。

もちろん弟に送金を続けることだってできなくなるから。

後者しかない。

ただ、それは

（　　売る、のか？）

ドクンッ……

鼓動が強さを増した。

（あいつを　　売る？）

ドクン、ドクンッ……

胸に突き刺さる、鼓動。

頭の中が急激に熱くなってくる。

「……」

ゆっくりと腰を上げ、静かに、歩く。

閃光が、部屋を照らした。

微かに、床が軋む音を立てる。

雨音が、遠くなる。

雷鳴が……轟く。

「……」

ベッドの上で、少女は安らかな寝息を立てていた。

寝る直前、雷が苦手だと騒いでいた割には、無防備な、安心しきった寝顔。

それはおそらく信頼の証。

……信頼。

『兄ちゃん　　』

「っ…………！」

面影が、重なる。

「…………どうしろってんだよ…………」

指の隙間で、視界がぼやけた。

抗いようもない、ずっと恐れていたその事実気付いて、俺を襲うのは限らない絶望感。

…………抱えきれない荷物を背負ってしまった。

目の前に現れるのは、やはり選択肢。

さっきとは違う二択。

荷物はすでに、俺の限界を越える重さとなった。

このままでは、俺はもちろんのこと、背負った荷物すらも潰れてしまう。

どちらかを、捨てるしかない。

それは単純な結論だ。

ただ、その二つの荷物はすでに、俺の体と深く繋がってしまったていた。

捨てるなら、自身の一部すらも切り離す必要がある。

片方は脳裏の奥底に。

もう片方は左胸の奥深く。

…………つまり、これこそがレベルカの用意した本当の選択肢だ。

俺にとって大事なものが何なのか。

より大事な方を選び出し、不要な方を捨てると、つまりはそういうことだ。

「はっ…………」

笑みが零れた。

どうしようもなくなったとき、ついつい笑ってしまうのは俺のクセらしい。

（余計にタチ悪いよ……）

確かに弟への送金をやめれば、借金を返すことは可能だろう。レベツカの奴は元々、俺が送金することを認めてはいたが、良い顔はしていない。

俺の詳しい事情を知らないあいつにしてみれば、それはおそらく当然の反応だった。回復する見込みのない奴のために大金を送り続けるなんて、あいつにしてみれば理解できない行動だったんだろう。……けど。

「ファル……」

ゆつくりと身をかがめ、そっと少女の頬に手を置く。

たいして汗を掻いている様子はなかったが、湿気の多さからか少しだけしっとりとした感触だった。

「う……ん……」

寝返りを打って、少女の顔がこちらを向く。

小さく開いた唇から、微かな吐息が漏れた。

「ファル……」

名前を呼ぶたび、不思議な感覚が胸を支配していく。

視線の先に。指の先に。そこに存在していること自体が、俺の胸を揺り動かす。

もう、疑う余地などない。

俺は間違いなく、目の前のこの少女に特殊な感情を抱いてしまっている。

……レベツカの言うことはいつだって正しい。

『構えていない限り、赤の他人だって一緒に暮らしていれば仲良くなる』

もちろん、そんなことは俺だって承知済みだった。

ただ計算外だったのは、こいつが　このファルという少女が想像以上に自然に俺の心に入りこんできてしまったということ。

（まさか俺が、な）

こいつに関しては、本当に全てが計算外だ。

偶然のようなものがいくつも重なった。

この現状はその結果。

もしもこの世に『運命』なんてものがあるのだとしたら、こいつとの出会いこそがその『運命』だったのかもしれない。

（運命の出会い、か）

さつきとは違う意味で、思わず笑みが零れた。

俺には似合わない言葉だ。

（けど、これが運命の出会いだというなら）

すぐに、頬の筋肉が硬直する。

そつと手を離す。

（……別の奴に譲ってやればいいものを）

ゆっくりと立ち上がった。

自らの結論に、胸の奥が揺れる。

（ファル……）

視線を落とすと、そこには変わらない寝顔。

（……すまないな）

そつと、心で呟いた。

……やるだけのことはやってみようと思う。

だが、もしもそれでダメだったなら

（やるだけのこと、か）

可能性ということでは、いくつか思いつく。

レベツカとの約束が成立する前、つまりは今月の家賃の支払い期限である明日中に、どこか環境の良い引取先を見つけてしまえば。

それならその時点から俺の返済能力は元の通りに戻るし、レベツカの奴だって返済のメドが立つならおそらく文句は言うまい。

あるいは、そう。レベツカに出された四ヶ月という期限の間に、何かどんでん返しのような奇跡が起きて借金を返済できれば。

……しかし。

どちらも望み薄だ。

（なにやってんだ、俺……）

今の生活がとても危ういものだということには、最初から気付いていた。

当たり前だ。

元々、俺にはこいつを養っていくだけの力がないのだから。

それなのに、俺はこいつの引取先を探すことに、それほど真剣じゃなかった気がする。

(くそ……)

本当に腹立たしい。

一体、何のつもりでいたんだろうか。

引取先を探すのが難しかったのは確かだが、少なくとも現状得体の知らない場所に売られてしまうよりマシな場所は見つけられただけだ。

それなのに。

……まさか俺は心のどこかで、ずっと面倒を見ていくことを考えていたんだろうか。

もしそうなら、最悪だ。

まるでガキの我が儘じゃないか。

(……くそッ！)

頭を振る。

それに気付いたところで、今更どうしようもない。

(とにかく今は、やれるだけのことをやるしかない)

玄関に向かい、そこにあった上着と古い傘を手にする。

「カール。出掛けるのか？」

「……」

部屋から聞こえたその声に言葉を返す気にはなれず。

俺はそのまま雨の中へ出かけていった。

「……」

朝、雨はキレイに上がっていた。

屋根や道端の雑草に残った水滴が太陽の光でキラキラ輝き、おそらく空を見上げれば綺麗な虹が視界に入るに違いない。

「……………」

鼻歌の主は相変わらずの呑気な様子で洗濯物の皺を伸ばしている。目が見えないくせに、器用なものだ。

「……………」

「あ、カーライルさん」

何度目かわからない俺のため息に、ファルが敏感に反応した。

「あまりため息をつくとかダメなんですよ。幸せが逃げるんだって、レベツカさんが言っていました」

「…………それはつまり、ため息をつかなければ幸せになれるってことか？」

馬鹿らしい。本当にそうなら、いくらでもため息を我慢してやる。

（そもそも、逃げるほどの幸せもここには無い、か）

だが、そんな俺の皮肉めいた言葉にも、

「はい！　ですから私、その話を聞いてからは絶対にため息をつかないようにしてるんですよ！」

ファルはまるで疑った様子もなく、そう言い切った。

「また騙されてると思うが、な……………」

まあ、一般的にも良く言われる言葉だから、決して嘘を教えたというわけでもないか。

（それで空から金でも降ってくるなら、幸せにもなれるだろうが）

我ながら夢のない話だと思うが、それで現在陥っている状況から抜け出せることだけは確かだった。

「もしかすると」

そんな俺の思いも余所に、ファルは言葉を続けた。

「ため息を我慢してるから、こうやってカーライルさんと一緒にいられるのかもしれないですね」

「ちっぽけな幸せだな」

今の気分じゃ口をつくのはこんな皮肉ばかりだ。

ファルはそんな俺に言った。

「そんなことないですよ。……じゃあ、カーライルさんの幸せって、どんな感じなんですか？」

「俺の幸せ？」

言われて、一瞬、言葉に詰まる。

「幸せ、か」

考えたこともなかった。

少なくとも、この場所でこうして生きるようになってからは、ただひたすら、自らが生きるため、そして弟に送るための金を稼ぐことばかり考えていた。それ以上のことは、おそらく望んだことはない。……あるとすれば、弟の体が完治して欲しいと願ったぐらいか。「そうだな。大きなトラブルもなく、淡々と今まで通りの日が流れれば、それが幸せかもしれない」

結局、俺にはその程度の言葉しか思い浮かばなかった。

「そうですよね！」

パアツとファルの顔が明るくなる。

「それじゃ、私とおんなじです！」

「同じじゃないだろ。俺の言う『トラブル』には、お前の存在も含まれているんだから」

「……ああつ！ 今のは聞かなかったことに！」

ギョツと耳を塞ぐファルに、俺は思わず苦笑した。

（聞いてから塞いでも意味ないだろ……）

ホント、面白い奴だ。

（　　今まで通りの日、か　　）

ふと窓の外に視線を向けた。

あと一時間もすれば太陽は頂点に達する。

レベツカの奴は三十分ほど前に出掛けていった。

（遠い昔に感じるな……）

それもそのはず。

こいつと初めて会ったのが去年の秋口。すでに八ヶ月もの時間が流れている。

当初はこんなことになるなんて思いもしなかった。こいつのことでこんなに思い悩むことになるなんて。

とはいえ。

何の因果か知らないが、これまで続いてきたこの生活も、長くてあと四ヶ月の話。

そしてそれは、もしかすると今日、この場で終わりを告げるかもしれないなかった。

「ファル」

「……」

未だに耳を塞いでいた。

俺はため息をついて、その手を引き剥がしてやると、

「ファル」

もう一度呼びかけると、ビクツとして、

「は……はいっ!？」

「話がある」

「え？」

怪訝そうな顔。

直後、僅かに不安そうな色が過ぎる。

……俺の声色から、何かを察したのか。

(変なところで勘の鋭い奴だ……)

だが、俺はもちろんそのまま言葉を続ける。

「あのな。実は」

いや、続けようとしたのだが。

「あ! あ、ちょっと待ってください!」

「……なんだ」

いきなり慌てた様子で俺の言葉を遮ったファル。

あからさまに不審な態度だった。

「えっと、その……」

まるで、俺の話の内容をあらかじめ知っているかのように。

（まさか、な）

俺はもちろん話していないし、レベツカの奴だってこいつに直接そんな話をするはずはない。

「お話の前に、お願いがあるんです」

「お願い？」

「はい。先に聞いていただけないでしょうか……？」

「……」

もう一度、外を見た。

レベツカが帰ってくるまではまだ十分な時間がある。

急ぐ理由はないように思えた。

「……」

町角に流れる、透き通るような歌声。

演奏はなし。

それでも集まってきた数人の観客は、ただ後ろに突っ立っているだけの仏頂面の男にたまに奇異の視線を送りつつ、歌に聴き入っている。

もちろん『仏頂面の男』は俺のこと。

そして歌っているのはファルだ。

開始十分で、この場に留まっている観客は今のところ六人。

「……」

生ぬるい風が流れていく。

並木道の日陰に陣取ったためかそれほど暑さはないが、一生懸命歌っているファルの額にはうっすらと汗が滲んでいた。

客が一人去っていき、新たな客が二人やってくる。

二十分。

最初は緊張のためか声あまり出ていなかったが、少し慣れてきたのか、今は十分に伸びやかな声が出ている。

客は十人。

一曲終わるたびに贈られる拍手。

そして演奏もない稚拙なコンサートに、客は幾らかの金を投げ込んでくれた。

そのたびに顔を真っ赤にし、お礼を言いながら頭を下げるファル。少し休んで、俺が渡したタオルで汗を拭い、また歌い出す。

レパートリーはそれほど広くない。この前のコンサートで聞いた十曲ほど。残りは誰もが知っているような子守歌、唱歌。

たまに客から寄せられるリクエストには、ほとんど応えることができず。しかも演奏がない以上は、歌だけで全てを表現しなきゃならなかった。

だから、正直なところ驚いている。

こいつの歌に、これだけの人を惹き付ける力があるということに、もちろんこいつの容貌や、俺との組み合わせの奇妙さに興味を引かれて、という連中もいるだろうが、それだけなら長い時間留まる奴が現れるはずもなく。

三十分。

客は十数人。少しずつ入れ替わってるから、正確に何人いるのかはわからないが、大体それぐらいの人数だった。

『欲しいものがあるんです……』

ファルはあの後そう言った。

集まった金額は驚くほどのものじゃない。

それでこいつの欲しい物が買えるのかどうか。それほど高い物を望んでいるとは思えないが、どうなのだろう。

そして、

「……おい。そろそろヤメとけ」

俺がそう言ったのは、歌い始めてから四十五分ほどが経過した頃だった。

今は丁度六曲目が終わったところ。

一曲ごとに少しインターバルを挟んでいるが、所詮は素人の体力だ。疲労の色は目に見えていたし、いくら日陰とはいえこの暑さで

は限界も近いはずだ。

だが、

「え……もうお客さん、いなくなってしまうました？」

汗を拭いながら、ファルは俺を見上げた。

「……」

周りを見る。

いなくなるどころか、ざっと数えて二十人近くの人間が次の曲を待っていた。

「いや」

「じゃあ、まだ頑張ります」

「……」

表情には疲労が色濃く浮かび上がっている。が、それとは対照的に、そこにある笑顔は明るく、それでいてどこか強い意志に彩られているようにも思えた。

「……あと二曲だ」

結局、そんなこいつを止めることができず、そうやって制限するのが精一杯。

「時間も、そんなにあるわけじゃないからな」

「はい！」

それでもファルは元気良く頷いて。

そして、次の歌を待ち続ける観客に向かい、再びゆっくりと歌を紡ぎだしていった。

日は西に傾き始めている。元々、西側に近い方に窓のあるこの部屋には、この時間、もっとも多く光が射し込んでくる。

「はー……疲れました」

ファルはそう言いながら、ベッドの上で服を脱ぎ始めている。

多分。

「終わったら言えよ」

「あ、はい！ 了解しました！」

俺は無人のレベツカの部屋で、あいつが着替え終えるのを待つて
いる。

結局、一時間ほど歌い続けていただろうか。最後には倒れるんじゃないかというほど汗だくになっていて、いくら暖かくなつてきたとはいっても、そのままの格好でいられるはずもない。

本当は風呂に連れていければいいのだが、今はあまり時間もないので、水を張つた洗面器と手拭いを渡しておいた。

「あ」

少し衣擦れの音がして、ふとそれがピタツと止まると、

「カーライルさん、覗いたりしないでくださいねー」

「天地が逆さになつてもありえんから心配するな」

「うわ。即答ですね」

それからちよつと黙り込むと、

「で、でも、私は目が見えませんでしたので、覗かれてもわかりませんよー！」

「あのな」

覗かれないのか。

苦笑し、腕を組んだまま壁にもたれかかる。

……目を閉じると、先ほどの町角での光景が瞼の裏に浮かんた。

（歌、か）

顔を真つ赤にしながら何度も頭を下げるファルと、拍手を送りながら金を投げ入れてくれた客。

結局、どれほどの金額になつただろうか。

数えるまでもなく全てあいつに渡したので、正確なところはわからない。が、少なくとも、あいつが酒場で歌っていた頃の日当の軽く数倍はあつただろう。

（……惜しい、な）

もしも俺に金銭的な余裕があつたなら。……いや、それ以前にあいつの両親が健在で、もっとまともな環境で育っていたなら。

そして、きちんとした人物に師事し、きちんとした指導があつて、

相応の練習を積んでいたなら。

もしかしたら、と思う。

それが素人目であることと、そこからさらにひいき目を余分に多く省いたとしても……それでもあいつには、もっと大きな舞台が用意されていたんじゃないか、と、そう思えて仕方がない。

（とことんツイてない奴だよ、お前は……）

本心でそう思った。

他の誰にもないものをたくさん持っているのに。

神様から二物も三物も与えられているのに。

ただ一つ。人並みの環境だけ与えられなかったせいで、不幸な人生を歩むことになった。

いや、これからも歩かされようとしている。

あいつが今日から歩むであろう道も、おそらくあいつの持っている才能が生かされるようなことにはならない。

俺にはあいつをその方向へ導くための財力もコネもないから。

せめて俺なんかじゃなく。それなりの金を持っていて、もっと親身になってくれて、そしてその才能を生かす場所を提供してくれる、そんな奴と出会っていれば。

きつとあいつには輝かしい未来が待っていたはずだというのに。

コツ、と。

後頭部を軽く壁にぶつけて天井を見上げる。

「ふう……」

自然と口から息が漏れた。

俺は、どうすれば良かったのだろう。

どうすればこうならずに済んだのだろう。

もっと早くあいつの落ち着き先を見つけてやれば良かったのか。それとも死んだあの男のように、無理してでも大金を手に入れるよう努力すべきだったのだろうか。

……いや。

（わかってる）

答えは俺の中ですでに出ている。

正解は『どうしようもなかった』だ。

俺なんかにはどうすることもできなかった。

おそらくそれが正しい。

どっちにしても、たとえ最良の選択肢を選んだとしても、俺はあいつに『人並み以下の環境』しか与えてやることができなかっただろう。

そりゃそうだ。俺自身がそういう状況から抜け出せない人間なんだから。頑張れば人並み以上の環境を与えられたかもしれない、なんてのは、俺の妄想にすぎない。

だから　せめて。

「カーライルさん！　終わりましたよー！」

人並み以下であっても、今の俺に出来うる限りの環境をあいつに与えてやるつもりだ。

ゆっくりと壁から離れ、部屋に戻る。

そして、

「ファル」

「はい？」

終わったと言いながら、ファルはベッドの上に座って上着を着ている途中だった。

構わず俺はテーブルのそばに腰を下ろすと、話を切り出すことにする。

「お前の落ち着き先が見つかった」

「……え？」

ピタツと手が止まる。

そして、ゆっくりと視線が動いて、

「落ち着き先、ですか？」

上着が首の辺りに引っ掛かったまま、盲目の瞳が驚きの色を帯びてこちらに向けられた。

これは、ほぼ予想通りの反応。

もちろん俺はためらうこともなく言葉を続けていく。

「急な話だが色々と事情があつてな。出発は今日、これからすぐだ」
「あ……え？ えと……ま、待つてください！」

ファルは当然のごとく戸惑った顔をして、引っ掛かっていた上着をきちんと着ると、少しだけ身を乗り出してくる。

「と、突然すぎますよ！ それに……その、それってもう決まっちゃったんですか！？」

「……」

「その、他に選択肢とかは……！」

「ない」

嘘だ。

本当はもう一つだけ選択肢がある。

けど

（こいつの場合、絶対にそっち選ぶだろうから、な）

そしてそれは、こいつにとって最悪の事態を招きかねない選択肢だ。

だから、俺はその選択肢を提示する気はなかった。

「で、でも……その！」

ファルはグッと手元のシートを握り締めて、

「私、まだ準備もできてませんし！ それに……」

「身支度のことなら必要はない。心の準備なら、今すぐに済ませればいい」

「そ、そんな……」

「時間がないんだ」

いつもレベル力が帰ってくる時間まではあと一時間ほどあるが、早めに行動しておくに越したことはなかった。

「あ、あの、えっと……」

と、ファルは口をもごもごさせながら、

「じゃ、じゃあ……これから行く場所というのは、どういうところなんですか！？」

「……ああ」

どうも話を引き延ばそうとしているようだ。

その間になんとか新たな逃げ道を探そうというところか。

（相変わらずわかりやすいヤツだ……）

とはいえ。こいつの思惑は別にしても、それについてはとりあえず答えておかなきゃならないかもしれない。

そして俺は答えた。

「最初、お前を連れていこうとしてた場所と、似たようなところだ」

「最初……？」

「ああ」

昨日、一晩中あちこち駆けずり回って、色々考えて、その結果浮かび上がってきた一人の人物。

その人物とは以前、間接的にはあるが関わったことがあった。

だから、こういう人物なのかも把握しているし、向こうも俺のことを知っている。

その人物が、再び『捜し物』をしているらしいと耳にしたのだ。

そいつはご多分に漏れず金持ちで、そしてやはり少々倒錯した趣味の持ち主。

まさに『最初に連れていこうとしていた場所と似て』いる。……

いや、だからこそ、いきなりでも受け入れられる可能性が高いのだ。もちろん、今回は直接仕事のオフアールがあったわけじゃない。まだアポイントすら取っていない。

が、相手がそういう人物である以上、それでも多分、大丈夫だと思えた。

何故なら、こいつはこれだけの容姿を持っているから。

目が見えないということに氣にしない相手であれば、きっと氣に入られると思うから。氣に入られてしまいさえすれば、そうすればしばらく、上手く行けばずっと、生活に困ることはないだろうから。その意味で言えば、いつなくなるかわからないようなしょぼくれた孤児院などより、こいつの落ち着き先としては最善だと思えた。

ただ……一点だけ。

おそらくは、こいつの人間としての意志や尊厳が無視される場所だということにさえ、目を瞑ってしまえば。

（それで……いいんだな？）

自問する。

生きていくことは難しくなくなる。上手くいけば気に入られて、こいつ自身が体験したこともないような贅沢な暮らしすら出来るようになるかもしれない。

その点でいえば、これ以上ない環境だ。

少なくとも、レベツカの手によって何処ともわからない場所に売り飛ばされてしまうよりは。

ただ。

ただ、それはあくまで『人並み以下』だから。

決して恵まれたものではないから。

失うものも、もちろんある。

……その代償として失うものは、こいつにとってどれほどのものだろうか？

取るに足らない、少し慣れるだけで忘れてしまえるものなのか。あるいは

（……けど、どっちにしても同じことだ）

残ったもう一つの選択肢とて、ただの延命に過ぎない。

四ヶ月。

たったの四ヶ月を生き長らえるだけ。

そして、その先に待っているのはおそらく、それ以上の苦痛と困難だ。

それなら。

それなら

「俺は最初から言っていたはずだ。お前の面倒を見るのは一時的なことだ」

ためらいの表情を見せるファルに、俺はそう言った。

多分、殊更に冷たく。自分でも違和感を感じるほどに事務的な口調で。

「そ、そうですね……でも、それにしても突然すぎます……」
ベッド上での沈んだ表情には、まだ困惑が同居しているように見えた。

（突然、か。その通りだな）

だが、それは仕方のないことだった。

俺だって、こんなことにさえならなければ、もっと時間をかけて

（時間をかけて、か）

自嘲する。

俺はまだ、そんなことを考えてしまうのか、と。

その考え方が、今のこの状況を招いてしまったというのに。

……時間を確認。

（そろそろタイムリミットだな）

レベルカの奴が一体何を考えているのかはわからない。が、今、あいつに余計な口を挟まれることだけは避けるべきだ。

「カーライルさん……」

ファルは今にも泣き出しそうな表情だった。

その表情のまま、それでも一生懸命に考えを巡らせているかのように見える。

おそらくは、何とかこの場所に留まろうとして。

「さあ……」

手を伸ばす。

余計なことを考えさせないように。

考えれば考えるほど、おそらく悲しくなってくるだろうから。

「……」

ファルは動かない。

顔は伏せたまま。

おそらくは、最後の抵抗。

（そう、だよな）

やはりというか。

まあ、わかっていたことではある。

無責任で。

無計画で。

そんなんで綺麗な別れを演出しようだなんて、それこそ虫が良すぎる。

最初から、わかっていたことだ。

わかっていたから、躊躇することもない。

「……いい加減にしろ」

時間的にも躊躇することは許されない。

あとはただ、突き放すだけ。

……慣れている。

「何を勘違いしているのか知らんが、お前には選択権なんてハナからないんだ」

「っ……！」

ハッとして向けられた表情が小さく歪む。

瞳が悲しそうに揺れる。

……他人を拒絶することは、俺の得意技だ。

「モタモタするな」

グッとその腕を掴んで引っ張る。

「あ……痛っ……」

「っ……」

思わず力を緩めそうになるが、すぐに思い直して無理矢理立ち上がらせる。

そのまま有無を言わせぬ調子で手を引いた。

「あっ……」

もつれたようになりながらも、足は俺についてくる。

……そんなの別に、難しいことじゃない。

「カーライルさん……」

声が気になるのなら耳を塞げばいい。

表情が気になるのなら目を塞げばいい。

そもそも俺は、今までずっとそうやって生きてきたじゃないか。
何も見なければいいのだ。

見なかったことにすればいい。

こいつのことだつて。

「今朝も言っただろ。俺はトラブルのない生活が一番好きなんだ」

「……」

「お前は俺にとってトラブルそのものだ」

これは本心。

「これ以上、お前の面倒を見るのなんてゴメンだからな」

これはいつからか本心じゃなくなった。

「お前を養っていくのだって楽じゃない」

「お前は俺にとって疫病神みたいなもんだ」

「お前は」

「……」

ピタッ、と。

急に、ファルの足が止まった。

玄関で、丁度俺がドアノブに手をかけたところで。

「……おい」

少し強めに引っ張る。

だが、動かない。

「……」

ファルは小さな体で、懸命にそこに留まろうとしていた。

「おい！」

少し強めの声を出す。

が、やはりこいつはそこから一步も動こうとしないまま。

ゆっくりと呟くように。

「……おかしいです」

そう言った。

「それ、おかしいですよ……」
顔を上げて。

泣いているのかと思えばそうでもない。
悲しそうな顔をしながらも、その盲目の瞳には強い意志が宿って
いて。

いつか見た。

「なにが、おかしい……？」

動揺が胸を襲う。

あの夜と同じ。

(どうして……？)

俺はこいつに対してひどい言葉を投げ掛けているはずなのに。

あの夜と、同じ。

こいつは少しも揺らいでいない。

何故？

「言葉は」

ファルは答えた。

真剣な瞳を真っ直ぐ俺に向けながら。

「言葉は人の表面でしかないって……そう言ったのはカーライルさ
んじゃないですか」

「……だから、なんだってんだ」

さらなる動揺が俺を襲った。

だが、ファルはそのまま言葉を続ける。

「今のカーライルさん、おかしいです。……言葉に、心がこもって
ないです」

「っ……！」

その瞬間、頭にカツと血が上った。

怒りじゃない。

羞恥だ。

見透かされたことに対する、羞恥。

「……知った風なことを」

俺は殊更に語尾を強めた。

頭に上った血を、勢いに任せて言葉に乗せる。

「お前が俺の何をわかってるってんだ？　つまらねえこと言いやが
って」

「う……」

俺の厳しい口調に、ファルは少しだけたじろいだ。

だが、顔は上げたまま。

自分を奮い立たせるかのように、やはり口調を強めて。

「す、少しはわかってるつもりです！　カーライルさんはちょっと
ぶっくらばうだけど、本当は優しく、とっても暖かい人です！」

「……！」

もう一度、頭に血が上る。

今度は怒りだった。

理不尽な怒り。

「ふざけるな」

「ふざけてないです！　カーライルさんは　！」

「ふざけんじゃねッ！！」

怒声で言葉を遮り、乱暴に手を離して正面から向き合う。

「優しい！？　暖かい！？　はっ……メルヘンの世界に浸るの
もいい加減にしゃがれッ！」

「っ……！」

今度こそ、ファルは怯えの表情を見せた。

俺の剣幕に押されて。反射的に目を閉じて。

それを感じた俺は、勢いに任せて言葉を紡いでいく。

「てめえは何もわかつちやいない！　ここがどんな場所なのか！
俺がどんなことをして今日まで生き抜いてきたかッ！」

「……！」

脅えた表情。

顔が歪み、瞳が僅かに揺れる。

……望んでいた表情。

このまま突き放してしまえば、それでいい。

それで、全て終わりだ。

それで。

ためらっちゃいけない。

ためらっちゃ

「優しいとか暖かいとか、ここはそんなもんとは無縁の世界なんだ！ そんなもんいちいち大事にしてちゃ、自分一人が生きていくこともできやしねえ！！ まして他の奴の　！」

勢いのままに言いかけて、ハツと言葉を止めた。

これ以上は蛇足。

そう気付いたから。

……だが、その一瞬の判断の遅れが、致命的だった。

「ほか、の？」

「！」

消えた。

そこにあつた怯えの色が。

さっきまで見せていた『こいつの知らない俺』に対する怯えが。

ほんの一瞬で、消えてしまった。

「やっぱり……そうですよ」

そうして、ファルは少し誇らしげな表情を見せる。

「カーライルさんがそうやって苦しんできたのは、きっと別の誰かのため……私のような、別の誰かのためなんです」

「っ……違う」

「違うんです。確かに私、カーライルさんのこと全部わかってるわけじゃないです。でも……でもきつと、私が今感じていることは真実なんです。少なくとも、私にとってはそうなんです」

笑顔とともにそう言い切ったこいつの言葉に。

「……お前は　」

先ほどまで頂点にあつた怒りが、急速に冷めていった。

（……どうして）

わからない。

こいつはいつからこんなにも鋭く　強くなっただろうか？

以前はもっと単純で、俺の表面だけの言葉にも、もっと簡単に落ち込んでいたはずなのに。

どうして。

「見えないけど……見てたんですよ、ずっと」

まるでそんな俺の疑問に答えるかのように。

ファルはゆっくりと言った。

「ずっと見てたんです」

そつと、俺に向かって手を伸ばしてくる。

それが、腕に触れた。

「だから……なんとなくですけど、わかってきたんです。言葉だけじゃなくて、カーライルさんの本当のこと」

「……」

「最初は自惚れかと思ってました。でも、今なら自信を持って言えます」

グッ……と、俺の腕を掴む指に少しでも力が入る。

（……ああ、そうか）

その言葉と、こいつの強い意志のこもった表情を見て、ようやくわかった。

最初と今。

こいつの中で、何が変わったのか。

どうして揺るがなくなっただのか。

「カーライルさんは優しい人です。その……少なくとも私にとって
は」

絶対的な信頼。

ただ懐いていただけの頃の、薄っぺらいそれとは違って。

俺がこいつに対する想いを変化させたのと同じように、こいつの中のそれも確実に変化していった。そしていつからかそれが、こいつの中で絶対的なものになった。だから、上っ面だけの言葉じゃ揺

るがすることができなくなった。

俺の本心を見抜けるようになった。

……単純なことだ。

「私」

少し潜めたような声色でファルは言った。

「目が見えないから、その分、すごく耳がいいんです」

「……なんだ？」

突然の話題転換に、俺が怪訝な声を向けると、

「ですから。その」

少しためらってから。

そして思い切ったように口を開いた。

「私、少しだけカーライルさんの事情とか、わかってしまっているんです」

「……？」

『すごく耳がいい』

その意味を考えてようやく気付いた。

それはつまり、こいつに聞こえていないと思っていた会話が、もしかしたら聞こえていたかもしれないということ。

そんな俺の推測を裏付けるように、ファルは言った。

「細かいところまでは聞こえませんでした。でも……カーライルさんがお金に困っていることだけは何となくわかつちやいました」

「……」

俺が黙っていると、

「すつ、すみません！　で、でも聞こえちゃったから仕方ないんです！」

「……それで？」

良い気分ではなかったが、それは俺のミスだし別に怒るつもりはなかった。

「その……」

もう一度。

今度はさつきよりも長い時間をためらって。

そしてファルは言った。

「本当のこと、話して下さい。……突然こんなことになって、それでわけもわからずにサヨナラなんて、そんなの嫌なんです」

真摯な願いのこもった言葉で。

「本当のこと聞いて、それでどうしようもなかったなら……それはそれで諦められます。でも、本当のことを聞けないままだったら、私、きっと、そのことを一生後悔しながら生きていかなければならなくなってしまうです」

そんなこいつの言葉に。

「……」

思わず返したのは、数秒間の沈黙。

……どうすればいいのか。

……どうするべきなのか。

本当のことを話せば、こいつから返ってくる答えはわかりきっている。こいつは必ず、少しでも長くここにいられる方　四ヶ月、生き長らえる道を選ぶ。そして有りもしない、別の可能性に賭けることを望むだろう。

だが、

(……ダメだ)

何度考えたところでそれは変わらない。

こいつの子供じみた、後先考えない無謀な賭けを容認するわけにはいかない。

答えはすぐに出た。

そして迷いが出ないうちに、すぐさまそれを言葉にする。

「それは」

出来ない。

そう言おうとした、そのとき。

「欲しいものは」

小さく呟いて、ファルはゆっくりと俺の前に両手を差し出した。

「？」

怪訝に思つて視線を向けると、そこにあつたのは硬貨。今日、こいつが炎天下の中、懸命に歌つて手にした幾ばくかの金銭。

欲しいものがあるからと、少し無茶なことをしてまで手にした金。私の欲しいものは……これでは買えませんか？」

「……」

その意味は問わずとも明らかだった。

(……ああ)

俺が金に困っていることを知つて。

それが自分の存在そのものに起因しているものだ、こいつがそう考えたのはおそらく、ごく自然な結果。

だからこいつは今日、倒れる寸前まで頑張つたのだらう。

『欲しいもの』を手に入れるために。

それは　その判断は決して間違つたものじゃない。

こいつがここを離れなければならないのは、まさにそれが原因なのだから。

……だが。

「今日だけじゃなくて、明日も明後日もずっと……ずっと頑張つて
そしたら　」

ギョツと手に力が入る。

声が少し震えた。

「そうしたら　」

「……難しいな」

俺はすぐに答えた。

「それでは、おそらく難しい」

きっぱりと。

嘘ではない。

確かにこいつが毎日これだけの稼ぎをしてくれるのなら、こいつ自身の食費ぐらひはどうにかなる。

だが、それはあくまで、毎日これだけ稼ぐことができれば、だ。

いくらこいつの歌に魅力があるとはいえ、演奏もなにもない稚拙な路上のコンサート。レパートリーだって広くはないし、安定した収入は望めるはずもない。

たとえば万が一、噂が噂を呼んで新たな客の獲得に成功したとしても、これからほとんど雨が多くなり、気温も高くなってくるこの季節。雨が降ればもちろん路上コンサートなどできないし、炎天下の中を歌い続けるにはそれなりの体力が必要になってくる。

それに加え、俺の仕事だっていつ再開できるかわからないこの状況。

あまりにも難しすぎる条件だった。

所詮、何もしないよりは確率が上がるという程度のことではかない。

何もしないよりは。

……そう。

何もしないよりは、どうにかなる可能性がある

（なにを……考えてるんだ、俺は）

そう考えてしまった自分に驚愕する。

無理に、決まっている。

そんなことで上手くいくはずがない。

今までだって。今まで生きてきた中でだって、そんな賭けみたいなことが上手くいった試しはなかった。

いつも、やってみてから後悔するんだ。

あのときだって。

最初に孤児院を逃げ出そうとしたあのときだって、そうだった。

……ダメだ。

もっと計画的に、もっと正確に、もっと堅実に。

上手くいくかどうかかわからない、上手くいかない可能性の方が高い、そんな賭けなんて絶対にしちゃいけない。

「おそらく、ですか」

だが、ファルは深刻そうな顔で頷きながらも、再び俺の顔を見上げて、

「それってつまり、大丈夫かもしれない可能性があるってことですよね？」

「だっ……」

ダメだ。

その言葉が出てこない。

……可能性。

俺自身、それをアテにしようとしてしまっているのか。

全てが上手く行けば。

そうすればこいつにもっとまともな世界を与えてやることができるかもしれない。

俺も何も失わずに済む。

……まさか。

そんな都合のいい話が現実起こりうるはずもない。

この非情な世界は、いつでも希望を裏切るものだ。

少なくとも、俺が知っている世界ではそうだった。だけど。

もしかしたら。

でも。

きつと

……考えがまとまらない。

頭の中がグルグルと回って

「……」

そして最終的に導き出した結論。

「四ヶ月……だ」

「え？」

不思議そうな顔のファル。

それは あるいはとても自分勝手な結論だったかもしれない。

だけど、すでに出してしまった言葉を引っ込めることなどできなくて。

「失敗すれば四ヶ月後、お前はきつとひどい環境の場所に行かなきゃならなくなる。……おそらくお前が想像しているものよりもさらにひどい場所だ」

そして俺は、現在の事情を話して聞かせた。

俺が借金を抱えていること。

とある理由で、今は仕事ができない状況であること。

これ以上ここにいたら、四ヶ月後にはどこかで売り飛ばされてしまうこと。

……借金している相手がレベツカであることは敢えて割愛した。

こいつにとつてのあいつはまだ、優しいお姉さんという存在だろうから。ギリギリまではそれを話す必要もないと判断した。

「四ヶ月……ですか」

全てを聞いて、ファルは少し緊張したような顔で頷いた。

「はつきりと言っておくが、可能性は低い。それよりも今日、ここを出た方がお前にとつては何倍もいいはずだ」

「でも……」

言つて、こんな状況にも関わらず小さな笑顔を浮かべると、

「やっぱりカーライルさん、私のことを考えてくれてたんですね」

「……それはどうでもいい」

多分、俺の声は必要以上にぶっきらぼうだったかもしれない。

僅かな罪悪感。

（違う……）

こいつはやっぱり俺のことを過大評価している。

本当にこいつのことを考えているなら、こんなことを言い出すべきではなかったのだ。問答無用でここから引っぱり出し、連れて行くべきだった。

こんな賭けが成功するはずはないのだから。

「だから……俺はここに残ることは薦めない」

責任逃れ。

こいつにリスクを背負わせて、自分にとって都合のいい賭けに誘い込もうとしているのだ。

だって……わかってる。

「そんなの」

こいつがどう答えるかなんて、最初からわかってる。

「決まってます。私、ここに残ります」

どこにも絶望の色なんてない。

ただ、自分の気持ちに真っ直ぐに、正直に進もうとしている。

……目を逸らしたくなる。

「本当に、いいのか？」

いつかと同じ、無意味な聞き返し。

結局のところ、俺はそういう人間だということだ。

そしてそんな俺の言葉に、こいつはやはり迷うことなく答える。

強い意志をその言葉に込めて。

「だってこんな風にサヨナラしたら、絶対後悔します！ だから…

…！」

「そうか」

ツイてないヤツだ。

こんな俺に出会って。

俺の自己満足に付き合わされて。

……何も疑わずに信じ切って。

（ホントにツイてないな、お前は……）

もう後戻りはできない。

逃げ道はどこにもない。

あとはただ、目標に向かってがむしゃらにやるしかなかった。

俺が外道に堕ちるかどうかは、その結果次第。

「本当に……いいんだな？」

四ヶ月の契約延長。

その先にあるリスクはこいつにとって、とてつもなく大きいもの

だというのに。

多分、理解していないわけじゃないというのに。

「はい！」

満面の笑顔を浮かべて。

「ふつつか者ですが、これからもよろしくお願いします！」

弾んだ声で。

ファルは深く、深く、頭を下げたのだった

今日も夜がやってくる。

外の風は生ぬるく、空は晴れ上がって星々が輝いていた。

「カール」

「ん……？」

人気のない我が家の前。

何気なく空を見上げていた俺に声をかけてきたのは、言うまでもなくレベツカの奴だった。

「結論が出たみたいだな」

「ああ」

返答にレベツカは無言で頷くと、俺の隣に並んで、やはり同じように空を見上げた。

「歌、か。確かに彼女の歌なら少しはお金になるかもね」

「……」

まだ話してないはずなのに、こいつは知っていた。

あるいは俺とファルの会話をどこかで聞いていたのか。

……どっちにしても、大した問題ではなかった。

「でも」

レベツカはチラッと俺を見て、きつぱりと言う。

「無理だ。彼女がいくら頑張ったところで、君の借金を返すにはほど遠い。……まして、君はまだ仕事できない状況だろう」

「明日から再開する」

「……カール」

声が少し厳しくなった。

「約束を忘れたのか？ 無茶はするな。それに、少し再開を早めたからって、そんなに変わるものじゃない」

「……だろうな」

「わかつているなら、考え直すんだ。君に二つの荷物は重すぎる」
今日のこいつは妙に饒舌だった。

……いや、数日前からそうだったかもしれない。

「お前は……」

今は特に怒りを感じることもなく、俺はそう問いかけた。

「そんなに俺に捨てさせたいのか？ どうしてだ？」

「……」

レベツカは黙った。

そのまま二人ともが沈黙。

……生ぬるい風が再び吹き抜けていく。

少し開いた窓から、部屋で寝ているファルの寝息が聞こえてきそうなほどの、静寂。

そして数分の空白。

もう答えはないものだと思い始めた矢先、

「君は、まだ気付いてないんだな」

レベツカからそんな言葉が返ってきた。

「いや、本当はとづくにわかっているはずなのに」

「……何の話だ？」

俺が怪訝な顔を向けると、レベツカは小さく首を振って、

「言えない。君が自分で気付かない限りは」

「？」

「君は」

レベツカは壁から離れると、ズボンのポケットに手を入れてゆっくりと歩いた。

一步、二歩……三歩。

そこで立ち止まり、ゆつくりと肩越しに俺を振り返る。

「君は私と出会ったときのことを覚えているか？」

「お前と？」

そりゃ覚えている。

「俺が仕事を探してるときにそっちから声をかけてきたんだろ。家と仕事を紹介してやるから、コンビを組まないか、ってな」

コンビってのは実際には少し違った。

一人で住むには少し広く無駄の多いこの家の家賃を折半し、共同生活。

俺はこいつからの迅速な情報を手に入れられるようになり、こいつは顧客とちよつとした雑用兼ボディガードを手に入れた。

「だろうね」

そしてレベッカも頷く。

俺の言葉が真実であることを裏付けられるかのように。

……いや。

「君の中ではそういうことになってるだろうね」

「なに？」

まるで予想外の言葉だった。

「違うつてのか？」

そんなはずはない。

確かに何年も前の話ではあるが、俺の生活形態が大きく変わったほどの出来事だ。忘れるはずはない。

だが、こいつの口から続いた言葉はそんな俺の自信を裏付けるものではなかった。

「君はそうやって」

レベッカの目がすうっと細くなる。

「ずっとそうやって目を閉じて生きていくつもりか？」

「……なに言ってたんだ、お前？」

今日のこいつの言葉は、いつにも増して理解できないことばかり

だった。

まるで理解できない。

そりゃ確かに、俺は今まで色々なことに目を瞑って生きてきた。それはこの世界で生きていくために必要だった。罪悪感や良心を閉じ込めるために必要なことだった。

けど、それとこいつの言うこととは、まるで違うことのように思える。

「君が言う出会いより前に、君と私は会っている。……君は覚えてないようだけど」

「それより前、だと？」

驚いて、芸もなくただ言葉を返す。

そして記憶を巡らせた。

……ただ、がむしゃらに金を集めようとしていた時代。

……他人から物を奪うことでしか金を稼ぐことができなかった少年時代。

そうでなければ 孤児院。

だが記憶にない。まるで。

「いつの……話だ？」

考え込む俺に、レベツカは目を細めたままで答える。

「そんなに昔の話じゃない。君が言う出会いの、たった一週間前のことさ」

「はっ、馬鹿な」

それでようやく気付いた。

多分、これはこいつお得意の冗談なのだと。

俺を困らせて楽しんでいるだけなのだと。

「変装でもしてたってのか？ ま、確かにすっぽりフードでもかぶって、お前お得意の声マネでもされてちゃわからねえかもな」

「……」

レベツカの表情は変わらない。

ただ、冷たい視線が俺を射抜いているだけだ。

「……なんだよ」

「四ヶ月」

体ごと、こちらを向く。

一步……二歩……近付いて。

ポケットに入っていた手が、ゆっくりと俺の胸元に近付く。

「君にとっては短すぎるかもしれないな。だが……これ以上引き延ばす意味も、おそらくは、ない」

「……」

「ただ、もう一度だけ言っておく」

トン……と、人差し指が俺の胸板を押した。

「今の君に、二つの荷物を背負うことは不可能だ。必ず後悔する」

「……」

なんだ。

なんでこいつは……こんなにいつもと違う表情を、今日に限って。

そして俺は。

俺はどうして そんなこいつの表情に こんなにも気持ちが

落ち着かなくなるのだろうか。

わからない。

何もかも。

「……お前は」

そして思わず口をついた言葉。

それは以前から疑問に思っていたことを問いかけるものだった。

「お前はあいつのこと、どう考えているんだ」

「ファルのこと？ ……そうだね」

レベル力はそっと、ファルが寝ているであろう部屋の窓に視線を移動させて、

「可愛いよ、あの子は。まるで妹が出来たみたいだし、あの子といると色々と嫌なことを忘れられそうだ」

「……」

じゃあ、どうして。

そう問いかけようと思ったが、俺が口を開く前にレベツカは答えた。

「私にだって同時に二つも背負うことはできないよ」

俺は少し驚いて、

「お前にもあるのか？ 背負うものが？」

「そりゃあね」

妙に不敵な笑みを浮かべて、ゆっくりと俺の耳元に口を近付けてくる。手が俺の両肩に添えられて、ほとんど身長の変わらない体がピッタリとくっついた。

不思議に、引き離そうとか逆に抱きしめようとか、そういう感情は沸き上がってこなかった。

「カール……」

肩に添えられていた手が動いて、ゆっくり俺の頭を撫でる。

髪が、手の動きに合わせて揺れる。

くすぐったい。

変な感じだ。

こいつのこんな調子の声を聞くのは初めてかもしれない。

真っ新の、素の声。……いつも聞いていた、抑揚のないこいつの声は、実は作られたものなのかもしれない。

初めて、そんなことを思った。

「ふふっ……」

吐息がうなじにかかったかと思うと、そこに柔らかく生暖かい感触が重なる。

「愛してるよ、カール……」

「っ……！？」

さすがに驚いて少し反応すると、レベツカはすぐに俺から離れた。表情には相変わらぬの笑みが浮かんだまま。

「思ったよりいい反応だね」

「お前……な」

びっくりした。

別にドキドキしてるとかそういうことはないが、驚いたことは確かだ。

「冗談だよ、カール」

そう言ったときのレベツカは、すでにいつもの調子だった。さつきまでの雰囲気は微塵もない。

「……タチの悪い冗談だ」

言いながら、俺は軽く首筋を拭った。

そこにはまだ、少しでもこの唇の感触が残っている。

「契約さ。四ヶ月間の」

だが、レベツカは相変わらずのしれっとした表情で、

「悪魔との契約はキスが基本だろう？」

「悪魔、か」

なんとなく的を射ているようで少しおかしかった。

レベツカは俺に背中を向けて、

「君の仕事は二、三日中に再開できるみたいだ。もう少し我慢する
といい」

「……そうか」

ホッとした。

とりあえず一番危惧していた最悪の状態だけは抜け出ることができそうだ。

「やるだけやってみるのもいい。けど……」

そんな俺をもう一度振り返って、レベツカは言った。

まるで仕事の話をするときのような、事務的な声で。

「四ヶ月後、約束が果たされなければ私は間違いなくあの子を売り飛ばす。それだけは紛れもない事実だ」

「……ああ」

「情とか淡い期待とか、そういうものは抱かない方がいい。君は現実の中から、正しい道を選ばなきゃならない」

「正しい道、か」

こいつが言うところの正しい道。

それは俺が聞けば、ああそうか、と納得できるものなのか。

……言えない、とこいつは言った。

何故、言えないのか。

そもそも、こいつの言う正しい道と俺が望む道は果たして同一なのか。

なにもわからない。

けど。

「何にしてもやるしかないからな」

「……」

レベツカは黙った。

言いたいことを我慢しているかのようにも見えた。

言いたいのと言えない。

それが何なのか、俺にはさっぱりわからない。

けどきつと、それはこいつが『抱えているモノ』に起因するのだらう。

「俺とお前つてのは、意外と似たもの同士かもな」

俺はふとそんなことを思った。

同時に、思ったことを即座に口に出してしまった自分の行動にも驚く。

「似てる、か」

そんな俺を、レベツカは細めた目で見て、

「新しい口説き文句か？」

「……違うな、どう考えても」

「残念だね」

冗談なのか本気なのか区別のつかない表情だった。

「でも、君と私が似ているのは必然なのかもしれないよ」

「どういうことだ？」

俺が怪訝な声を返すと、レベツカは相変わらずのしれっとした顔で、

「だって、よく言うだらう？ ペットは飼い主に似るって」

「……いつから俺がお前のペットになった」

「なんだ。気付いてなかったのか」

「気付く気付かない以前に、そんな事実はねえ！」

しかし、考えれば考えるほど不思議な関係だ。

俺とレベツカ。

お互い基本的には一匹狼なのに、奇妙な共同生活をこうして送り始めて、若い男女であるにも関わらず色恋沙汰にはまるで発展する気配もなく。

破綻することもなく、それが何年も続いている。

（何年も、か）

家に戻っていくレベツカの後ろ姿を見送りながら考えた。

この生活 あいつとのこの生活は、これから先も続くのだろうか。

成功するにしろ失敗するにしろ、ファルがこの場所からいなくなつて……その後、俺たちはまた以前のような生活を続けているのだろうか。

……なんとなく、そうはならないような気がした。

四ヶ月という時間。

それは借金返済のタイムリミットであると同時に、今まで続けてきたこの生活の期限であるかのように、俺には思えて仕方なかった。その先に待っているのは、なんだろうか。

今までと大差ない生活か。

小悪党らしい、救われない結末か。

それとも

（……馬鹿馬鹿しい）

何であれ、訪れる現実はいつも過酷だ。

ただ、それがマシであるかそうじゃないかの違いに過ぎない。

……できるだけマシであるように。

あと四ヶ月。

多分。

多分レベッカの言うように無理だとわかっている。
そういうものだと、そんなことは百も承知で。
だけど。

だけど、それでも

その5『メルヘンの夜』

「……」

爽やかな歌声が軽やかなメロディに乗って流れていく。
初秋。

太陽がもつとも活発に活動している時期をようやく過ぎたとはいえ、日によってはまだ暑さは続いている。

残念なことに、今日は太陽が在りし日の夏を思い出したかのよう
な一日だった。

それでも、

「……」

その口から紡がれる透き通る歌声に翳りが見えることはなく、それはまるで波紋のように路上に広がって聞き入る観客を魅了していた。

ただそこを通り抜けるだけだった者も、一瞬だけ足を止めて。
パチパチパチパチ。

歌が終わると、聞き慣れた拍手と聞き慣れた賞賛の声。

だが、

「ど、どうもですー」

それを向けられる当人は未だに慣れていないらしく、暑さで真っ赤になった顔をさらに赤くしてペコペコと頭を下げていた。

（八曲目、か）

いつものように後ろでそれを眺めつつ、それから晴れ渡った青空
を見上げる。

今日は暑さもキツイ。そろそろ頃合だろう。

俺はそう判断して声をかけた。

「ファル。終わりだ」

「え……ま、まだ大丈夫ですよ!？」

返ってくるのはいつもと同じ答え。

だが、そんな我が儘を許していたらキリがない。

「終わりだ」

有無を言わず立ち上がる。曲が終わるたびに使用していたタオルは、すでにこいつの汗でぐっしょりになっていた。

客観的に見て、これ以上は許可できない。

「お。なんだ兄ちゃん。今日はもう終わりかい？」

そんな俺たちに声をかけてきたのは、もうすっかり顔なじみとなった近所のパン屋のオヤジだった。

おそらく一番最初の常連客といってもいい。

「ああ。こいつは放っておくと倒れるまでやるからな」

「うう……それだと私がまるで頭の弱い子みたいですよ」

「それを否定する勇気は俺にはない」

「そ、そんなぁ……」

まさに『シヨック』と言わんばかりのわかりやすい顔をして、フアルはガツクリとしゃがみ込む。

そんな俺たちのやり取りに、見慣れた幾人かの観客たちは声を上げて笑った。

……あれから三ヶ月以上の時間が流れて。

俺たちはすっかり、町角のちよつとした名物となっていた。

無愛想な男と無邪気な盲目の少女。

組み合わせ的にも人の目を引く要素があつたのかもしれない。

「はー……」

木陰に腰を下ろして体を休めるフアル。

その間に、俺は客から集まった幾ばくかの金銭をまとめておいた。「いや、今日もいいもんを聞かせてもらったよ」

最近はこの路上コンサートらしきものが終わってから、ここに留まって話しかけてくる客がたまにいる。

今日は前述のパン屋のオヤジが店のエプロン姿のままで残っていた。

「あ、こちらこそ、私の拙い歌をいつも聞いていただきまして」
ファルも幾人かの常連は声で判断できるようになっっているらしい。
まだ額に少しだけ汗を浮かばせたまま、オヤジを見上げて笑顔にな
った。

「最近はおジサンがいないと、何だか調子が出ないぐらいなのです」
「くうーっ！ 嬉しいこと言ってくれるねえっ！」

オヤジは大げさに喜んでみせる。俺がいなかったら、そのままこ
いつを抱きしめて頭でもナデナデしそうな勢いだ。

「ウチの娘もアンタぐらい可愛げがありやいいんだけどなあ……」

「……んなことよりアンタ、店の方はいいのか？」

俺が口を挟むと、オヤジは腕を組んだまま豪快に笑って、

「ああ、ああ、女房と娘に任せてるから全然平気よ！」

「そうか」

俺はチラッとオヤジの背後を見やって、

「俺の目にはちつとも平気そうに見えないが」

「ん？」

俺の目線に気付いたのだろう。

オヤジはキョトンとした顔をした後、

「……」

顔が青ざめて。

ゆっくりと後ろを振り返った。

そこに立っていたのは、

「……あなた？」

「お父さん？」

四十歳ぐらいの女性と、ファルと同年ぐらいの少女。

二人とも、鬼のような形相を浮かべていた。

「ひっ……！」

「また店を空けて何をしてるのかと思えば……」

「可愛くない娘で悪うございましたね！」

「そっ……それはっ、誤解だ！ なんとというか、言葉のアヤで

！」

比較的、見慣れた修羅場だった。

俺は呆れて。

ファルは苦笑。

……その後の展開はオヤジの名誉のためにも伏せておくでしょう。

「どうも、ウチの人がお世話になりました」

最後に奥さんがペコツと頭を下げ、

「機会があつたらまたパンを買いに来てくださいね」

娘の方はちゃっかり営業までして、ズルズルとオヤジを引きずりながら去っていった。

これも、見慣れた光景で。

「やれやれ」

それを見送って、俺は呟いた。

「騒がしい客だな」

「ホントですよー」

影が少しずつ長くなってくる。

空もほんの僅かに赤みを帯び始めて。

「でも、羨ましいですよ」

ようやく休憩を終えて、ファルもゆっくり立ち上がった。

「オジサンたち、すごく仲良さそうです」

「……そうか？」

羨ましい、か。

何となく、言いたいことは理解できなくなかった。

「でも、考えてみれば私も似たようなものですよね」

「何がだ？」

問うと、笑顔で見上げてきて、

「カーライルさんがお父さんで、レベツカさんがお母さんで、私が

そのこと」

「ちつとも似てないな」

「うわ、即答……」

「当たり前だ」

父親はぶつきらばうで他人を信じるこのできない、ケチな小悪党。

母親は酷薄で何を考えてるのかよくわからない、裏世界の腕利き情報屋。

……そんな家庭に憧れるというのか、こいつは。

「うっ、じゃあー」

キュッと、俺の手を握る。

少しだけ、その頬が赤みを帯びて、

「そ、その……カーライルさんが旦那様で、レベツカさんが小姑さんってのはどうでしょうか!？」

「どーでしょうかもなにも」
相変わらずだ。

だから俺も、いつものように素っ気なく返してやる。

「肝心の嫁がないぞ、その構図には」

「えっ……そ、それは、ですから」

顔を赤くしてしどろもどろに何事か呟いていたが、後半は俺の耳にはまったく届かなかった。

まあ、何を言いたいのかは十分にわかっている。

「それに、あんな小姑はゴメンだ」

「そーですか……残念です」

しゅん、と頂垂れる。

「さ、帰るぞ」

ゆっくり手を引いて、俺たちはようやくその場から移動することになった。

「えっと……」

途中、ファルは何事か決心した顔で俺を見上げて、

「じゃあ、私が小姑でもいいです」

「……」

それはもつと嫌だ。

「レ、レベツカさんっ！ こっ……ここの床が、よっ……汚れが残ってます！」

「……どーしたの？」

「知らん」

家に戻ってしばらくするとレベツカが帰ってきた。そして、こいつが戻ってくるとほぼ同時に俺は家を出ることになる。

だから、こうして三人が揃う時間はほんの僅かなのだが、この短い時間帯、この家は単純な足し算では辻褃が合わないほど賑やかになる。

「小姑というのは、お嫁さんに意地悪するものだと言ったことが！ 真っ赤な顔でそう主張するファル。

知識が偏りすぎだった。

「誰が小姑で誰がお嫁さん？」

「さあな」

それ以前に、こいつに床の汚れなんて見えてるわけもない。

仕事用の服に着替え、いくつか必要なものをポケットに詰める。

それを服の上からポンと叩いて、俺はベッドから立ち上がった。

「あのー……やっぱり私が小姑というのは無理がありますでしょうか？」

おずおず、といった様子でそう尋ねてくるファル。

俺は答えてやった。

「無理もなにも、小姑つてのは配偶者の兄弟姉妹のことだろ。お前は最初から当てはまってるじゃない」

「え……そ、そうだったんですか！？」

驚いたように目を見開いて、

「私てつきり、お嫁さんの恋敵が小姑になるものだと思ってました

！」

「……」

それはものすごい勘違いだ。

「なるほど」

レベツカはポンと手を打って、

「そうか。つまり私はファルの恋敵だったわけだな」

「……行ってくる」

またストレスの溜まる展開になりそうだったので、俺は早々に家を出ることにした。

……いや、レベツカにからかわれることは以前ほど苦ではなくなつたか。慣れてきたのもあるし、何より、そんな光景が最近ではすごく貴重に思えるようになってきたから。

家を出て、すぐ。

「カール」

追いかけるようにレベツカが家から出てきた。

俺は足を止め、

「なんだ？」

振り返らずに尋ねる。

昼間とは打って変わって涼やかな夜の空気。

夜空は相変わらず晴れ渡り、星も輝いている。

ぽっかりと浮かぶ月。

……とてつもなく不快になる。

パチパチという火の爆ぜる音が、今にも聞こえてきそうで

「八日」

こいつが言いたいことは予想できていた。

「あと八日だ」

「……そうだな」

八日。

あの日交わした、悪魔との契約。

その期日はあと八日後に迫っていた。

「順調だ」

俺はそう答えて夜空を見上げる。

「予想もしてなかったな。あいつの歌が、これほどに他人を惹き付

けるなんて」

「……」

レベツカは何も言わなかった。

ただ、無表情に俺を見つめている。……いや、俺は背中を向けているので実際にこいつの表情はわからなかったが、多分、そうだろうと思った。

「今日だってノルマ以上に稼げた。帰りに露店に寄ってく余裕があったぐらいだからな」

「それは良かった」

抑揚のないレベツカの声。

「何か、買ってやったのか？」

「今日はなにも。せっかくだから、もっと悩んで一番欲しいものを選びたいって、な」

「そうか」

口調は変わらない。

「貴金属の類はヤメた方がいい。すぐに失くす」

「……さすがにそこまでの余裕はねえな」

苦笑する。

何故だか、自嘲的な笑みになった。

そして一瞬の空白。

「私を恨むか？」

「……」

ファルは予想以上に頑張った。

実際、まだ八日を残した時点で、四ヶ月前にアテにしていた以上の金額をとくに稼いでいる。

順調だ。

俺の仕事もあれからは大きなトラブルもなく。

全く予定通りに進んでいる。

順調。

「お前は、ただ約束を守っているだけだろ？」

「ああ」

そして契約もまた、正確に履行されていた。
全て予定通り。

だから。

「……わかっていたから、な」

わかっていた。

そういうものだって、俺はイヤというほど理解している。

順調で。

想定通りだった。

だから。

「だから、不可能だと言った」

「……」

順調に進むだけじゃ無理なのは、最初からわかっていたことだ。

予想外に頑張ったとか、予想外に上手くいったとか。

そういうレベルじゃまったく話にならなかった。

……もちろん最初から諦めていたわけじゃない。少しでも収入が増えるようにと、様々な方面に手を伸ばしてみたりもした。

けど、返ってくる言葉はいつも決まっていた。

『悪いな。今んとこ、あんたに回せる仕事はないんだ』

この四ヶ月の間、何度も聞いたセリフ。

確かに俺は元々、それほど多方面に人脈を持っていたわけじゃない。持っていたとしても、それほど強い繋がりじゃなかった。

ただ、それを考慮に入れたとしても、異常と思えるほどの門前払い。

その原因ははっきりしている。

『そういう仕事を回すつもりはない』

こいつは確かにそう言っていて。

この地におけるヒエラルキーは、俺よりもこいつの方が遙かに高いから。

だから、やはりこの現状は必然だった。

「……行ってくる」
そのまま足を進める。
呼び止める声はなかった。

次の日。

（あと七日……）

「」

今日も晴れ。

ただし昨日と違って風があり、いくらか涼しい。

「」

ファルの伸びやかで澄んだ声は、今日も道行く人々の足を止め、
耳を傾けさせて。

「」

本日最後の歌は、明るく陽気で、希望に満ち溢れた曲。

それに合わせ、歌声も明るく弾みながら聞き手の鼓膜に心地よい
刺激を与えていく。

（希望に満ち溢れた曲、か）

刻一刻と迫り来る終焉の時を目の前にしてもなお、こいつの歌声
は翳らない。それどころか、日々強さを増しているようにさえ思え
た。

「……ファル」

いつもの路上コンサートが終わって。

「はい？」

タオルで汗を拭きながら、ファルは不思議そうにこちらを見た。
今日は留まる常連もなく。

「今日も、寄り道してくか？」

「あ……はい！」

明るい返事だった。

「……なんだか最近は涼しくなってきたです」
相変わらず賑わうメインストリート。

「あと一ヶ月もすれば、きっとお外で歌うのも楽になりますね!」

「ああ。……そうかもな」

意識したのか、あるいは無意識だったのか。

……意識してないはずはない。

こいつだって現状は十分に理解しているはずだった。

今日、これまでに集まった金額は、目標額の半分を少し超えた程度。

三ヶ月半以上が過ぎてようやく半分だ。

それが何を意味するのか、こいつにだってわからないはずはなかった。

「あ、でも冬になったらもつと厳しいかもですね」

それは現実逃避なのかもしれない。

……だが、こいつは別にそれでもいい。

あと七日。

絶望に打ちひしがれて湿っぽくそのときを待つよりは、こうして明るく過ごしていた方が何倍も有意義に違いない。

現実を見据えて、そして判断するのは俺の仕事だ。

(判断、か)

三ヶ月半前の俺の判断。

それが正しかったのかどうか、まだ答えは出ていないけど。

(間違ってたなかった、と思いたいな)

右手でファルの手を引いて。

左手はポケットの中。

……堅い紙の感触が指先に触れる。

(どんでん返し……とはいかないまでも)

そこにあるのは、数日前に手にした最後の希望だった。
レベルカにも知られてない、最後の希望。

『……私はこういう者だが』

路上コンサートが終わった後、俺に突然話しかけてきた初老の男。
『あの子を私に預けてみないか？』

手にした名刺は、この町にある有名な音楽関係の学舎のもの。

男はその学長だと名乗った。

それからの数日は仕事を休み、情報を得ることに費やして。その結果、一応の裏付けを取ることができた。男の語った素性がどうやら真実であり、さらにはその申し出が気まぐれなどではなく、今までにも才能のある子供を支援してきた人物であるということも。

それは予期してなかった奇跡的な幸運。

あとは俺が決心して、最後の判断を下すだけのことだった。

『何か欲しい物はないのか？』

露店を歩いていても、目の見えないこいつは自らそれらを見ることができない。だから興味を引きそうなものを俺が見つけ、それをこいつに触れさせてみる必要があった。

だが、

『今日は、いいです』

昨日に続き、今日も興味を引かれるものは見つからなかったようだ。

『そうか』

俺は頷いた。

まだ七日ある。

無理に急がせることもないだろう。

……あるいはこいつも気付いているのか。

俺が選ばせようとしているそれが、餞別の品であるということに。

『それなら、今日は帰るか』

『あ……』

手にしていたブローチを店先に戻すと、ファルは俺の腕を両手でギュツと掴み、それから俺を見上げた。

『その……もう少し一緒に歩いていただけませんか？』

「そりや家までは一緒に行ってやるが」

「そ、そーいうことではなくてですね！」

不満そうな顔をして、

「もう少しお散歩したいというか、お話したいというか……」

そう言つと、それを主張するかのようにさらに俺に体を預けてくる。

……恋人同士か、そうでなければ親子のような距離。

「お前、自分がさっきまで汗まみれになってたことを忘れてないか？」

「っ！」

ハッとした表情で、弾かれたように体を離すファル。

それからアタフタと顔を真っ赤にしながら、

「ごっ、ごめんなさいっ……！」

「……」

予想通りの反応をするこいつが、妙におかしかった。

「悪い。冗談だ」

笑いながら言つと、ファルは驚いた様子で、

「え？」

「前にも言つただろ。お前の汗の匂いなんて別に気にしない」

「あっ……」

その言葉を証明するように、今度は俺の方からその手を握ってやった。

「わっ……わわっ……」

軽く引くと、ファルはよろけたようにして、今度は逆に俺の胸に納まる。

「う、うぁ……」

「おい。しっかり立てって」

「そ、そー言われましても……」

しどろもどろになりながら、それでもなんとか俺から離れて定位置に戻る。

だが、顔はまだトマトのように真っ赤なままだ。

「なにやってんだよ、お前」

「だ、だって……」

「変な奴だ」

「っ……」

俺の言葉に、ファルは少し恨めしそうな顔を俺に向けると、

「……カ、カーライルさんは女の敵ですっ!」

「はあ?」

いきなり意味不明だった。

が、こいつはそんな俺の反応にも構わず……というかあまり余裕のなさそうな口調で、

「そ、そーいうのは、その、ちゃ、ちゃんと予告していただかないと、心の準備というものがですね!」

「……」

かろうじて言いたいことはわからないでもないが、

(……それほどのことをしたか?)

この年頃の少女の感覚というのはわかりづらいもんだ。

で、結局。

その日はファルの希望どおり、大きく回り道をして帰ることになった。

「あと七日」

「わかってるさ」

夜。

今日もレベツカは仕事に向かう俺の後を追って家を出てきた。

空は薄雲がかかっている、少し丸みを帯び始めた月もその裏に隠れて見えない。

野良犬の遠吠えがいつもよりうるさかった。

「ふむ」

レベツカは腕を組んで家の壁にもたれかかる。

窓は閉まっっていて、中のファルに会話が聞こえる心配はおそらくないだろう。

「もつと絶望感に満ち溢れた顔が見られるかと思ったのだが」

「……お前は悪鬼か」

「いや」

俺の返答に、レベルカは肩を竦めて首を横に振った。

「ロリコンの君ほど鬼畜ではないよ」

「……誰がロリコンだ？」

「まあ、それは大した問題じゃないからいいが」

「……ヤロウ」

大した問題じゃないどころか、俺としては朝まで徹底討論しても否定しておきたい不名誉だ。

やはり俺の精神的安息を確保するために、こいつは今、ここで駆逐しておくべきなのかもしれない。

（……駆逐、か）

そんな自分の考えに思わず苦笑。

現状を考えるに、それは決して冗談とも言い切れない考えだった。

「……」

空白。

そして次の瞬間。

まるで緊張の切れる一瞬を狙っていたかのようなタイミングで、奥の手でも見つかったか？」

「……！」

いきなり核心を突いた言葉に、ドキツとする。

直前までそんな素振りは全く見せずに。

……本当に油断できない奴だ。

でも大丈夫。顔には出てない。

いくらこいつでも、そこまで見破る事なんてできるはずもない。

頭に浮かぶのは、数日前のやり取り。

『あの子を私に預けてみないか？』

その申し出がなくとも、頭のどこかでは考えていたことだった。もしも金が集まらなければ、期限が訪れる前にあいつをどこかに預けてしまおうと。

候補地もすでにいくつか選別してあって、そこへたまたま、最良の条件が割り込んできただけのこと。

……だが、それをこいつに悟られるわけにはいかない。

俺がやるうとしていることは、明らかな契約違反。

だから、このことはファルにもまだ話していない。

最後の切り札。

慎重に慎重を重ねる必要があった。

だから俺は、こちらを見据える二つの瞳を真っ直ぐに見つめ返して、

「そんなもんがあるなら、こっちが教えてもらいたいぐらいだ」

平静を装ってそう答える。

「いくつか思いつくよ」

その反応を見るに、完璧にバレているとかそういうわけじゃないらしい。とすると、お得意の探りだろうか。

ボロを出さないように注意する必要がある。

「一つ」

レベツカはピツと人差し指を立てた。

「この場で私を殺し、金を奪って逃げればいい」

「……無茶言うな。そもそもお前の金の隠し場所なんて知らねえ」

それに俺は『小』悪党だ。人殺しなんてできるはずもない。

まして相手は曲がりなりにも数年を共に過ごしてきた相手だ。友愛とかそういう感情はなかったとしても、そんな大それたことはできない。

「二つ」

レベツカはまるで表情を変えることなく、淡々と続けた。

「私を騙して、そのまま逃げればいい」

「騙す?」

そっちはやはり核心だった。

笑って答える。

大丈夫。

まだ、どこも不自然じゃない。

「君が私との約束を破り、あの子をどこかに預けてしまえば、私は手が出せなくなるし」

「……そして俺は住む場所と、仕事を失うってわけか？」
平静のままでそう答えた。

「契約つてやつの重大さは、十分に理解している」

変な話だが、法律の支えがないこの社会では、表の社会よりもよっぽど『信用』が重要視される。

そして同業者間での裏切り行為は、そのまま信用の失墜を意味する。

俺とレベツカが交わした契約は正式なもので、この社会におけるルールの名の下、それは確実に執行されるべきものだった。

それを破るようなことがあれば。

ただでさえこの社会では、俺よりもこいつの方が権力が強い。

間違いなく俺の居場所はなくなるだろう。

「俺がそんな自殺行為をするってのか？」

少しだけ、手の平が汗を掻いている。

大丈夫。

『それ』を裏付けるモノはどこにもない。

「そうかな？」

レベツカは相変わらずの、何を考えてるのかわからない顔で、

「最初からそういう手段を考慮に入れているものだと思ってたよ、

私は」

「馬鹿馬鹿しい」

「あの子を守るには最良の手段だと思うけど？」

「はっ」

俺は即座に否定した。

「んなことになったら弟に金が送れなくなる。道理に合わないだろ」

「……三つ目は」

それについては何も答えず、レベツカは続けた。

「君が」

言いかけて。

珍しく言い淀んだ。

「……なんだ？」

組んでいたレベツカの腕が僅かに力を失い、視線が泳ぐ。少しの間、思考を巡らせ、まるで言葉を選ぶようにしてトン、トン、と足が地面を叩いた。

そして、

「……簡単なこと。君が、幸せを願えばいい」

「は？」

レベツカは全くの真顔で、思わず笑い飛ばしたくなるような言葉を発した。

いや、

「はっ……そりや楽な話だ」

考えるまでもなく、俺は笑い飛ばしていた。

「まさかお前の口からそんな夢物語が出てくるなんて思わなかったな。……最初の二つは前フリか？」

「そうかな？ 別に夢物語を語ったつもりはないよ」

レベツカの表情は変わらなかった。

「自分が幸せになることを想像できない人間が、他人を幸せにすることなんてできるはずもない。……これは真理だと思うよ」

「なんだ、そりや」

再び笑い飛ばす。

と、

「……そんなに怖いのか？」

組んでいた腕を下ろして、レベツカはゆっくりと近付いてきた。「幸せになるのが怖いのか、カール」

「……なに言っただ、お前？」

俺はそこで初めて気付いた。

飄々としたいつもの様子とは明らかに違う、その表情。

（……なんだ……？）

理解できない。

こいつの言葉の意味も。

それと。

……何故か込み上げてくる頭の奥の痛みも。

「理解できないなら」

十センチ。

それが今の俺とレベツカの顔の距離だった。

「足掻いてみるといい。けど、何をやろうとおそらく無駄だ」

無表情。

その瞳は恐ろしく鋭い光を放っていた。

「今の君には他人の行く末を思いやる資格など、ない。その力も……

……ない」

「……」

頭痛はすぐに消え失せて。

「わからないな。お前が何を言いたいのか」

「そうか」

相変わらずレベツカはそれについて答えることはなく。

俺の考えに気付いて牽制しているのか。

あるいは別の思惑があるのか。

……風が吹いて。

「じゃ、行つてらっしゃい」

その表情にほんの僅かな変化。レベツカはいつも通りの彼女に戻ると、まるで興味を失ったかのようにあっさりと背中を見せた。

「……ああ」

俺もそれ以上は声をかけずに、すぐにその場を離れる。
背後で家のドアが閉じて。

「……」

そして俺はいつもの仕事に出掛けた。
少し、計画を早めた方がいいのかもしれない　と、そんなこと
を頭の隅で考えながら。

薄氷の上を渡っているかのようだ

手の平にはじつとりと汗が滲んでいる。
どっちかという汗は少ない方なのに。
多分、緊張していたんだろう。

あの一瞬。

彼のあの一瞬の表情に、私の心臓は大きく跳ね上がった。
……彼の胸に根付いてしまった『それ』は相当なものだ。
わかつてはいたけど。

難しい。

「あ、レベツカさん」

薄暗い部屋の明かりの中。

その子は笑顔を見せていた。

「カーライルさん、もう行かれましたか？」

「ああ」

「そうですか」
笑顔。

……だけどそれは、彼がいたときのこの子とは違う。
私と二人だけのときには少しだけ本音を覗かせる。
その様子は、こんな私の目にも痛々しく映った。
「今日も、終わってしまいました」

ぼうつと、盲目の瞳で、まるで天井を見上げるようにして、

「……最近、カーライルさんの夢をよく見るのです」

「前から見ていただろう？」

「そ、それはそーなんですけど！」

そうやって彼のことを語るこの子は、本当に彼のことを信賴して、慕って……おそらく愛しているのだらうと、そう感じる。

それは多分、この私にも劣らないくらいに。

……腹立たしい。とてつもなく。

この想いを思いつきりぶつけることができたなら。それで全てが解決するのなら、どれほどスッキリすることだらう。

だけど、今の段階でそうすることは全ての破綻を意味している。

それはできない。

もう少し、確率を上げておかなきゃならない。

「夢を見ると、何だか一緒にいられる時間が倍になったみたいで、とても嬉しくなってしまうのです」

「そんなもん？」

「そんなもんなのです」

「ふうん」

笑顔の裏に懸命に隠した悲しみは、間近に迫った別れを察していること。

それをこの子に強いたのは、紛れもなくこの私。

苛々する。

……本当ならこんな手荒なことはしたくなかった。

私だつてこの子のことは気に入っている。もしかしたら、この世で二番目に大切な人間だと言っているのかもしれない。

だけど……一番目の『彼』とは比べものにならない。

彼は、少なくとも今の私にとっての、全てだ。

「レベツカさんはカーライルさんの夢を見たりします？」

「私？ ……見たことないな」

嘘だ。

私は毎晩のように彼の夢を見ていた。

それは決して楽しい夢なんかじゃないけれど。

「そ、そーですか」

「私とカールのことが、そんなに気になる？」

「えっ！？ い、いえ！ そーいう意味では　！」

「私に嘘はつかなくていいって。少なくとも君の恋敵だったりはないから安心していい」

「ち、違いますのにー……」

この子をここに住まわせ続けるのは簡単なことだ。

正直なところ、彼の借金なんて私にとってはどうでもいいことだったから。

でも、それじゃきつと私の願いは叶わない。

……この子には可哀想なことになるかもしれない。

けど、これだけはどうしても譲れなかった。

可哀想だけど、私と彼のために、この子にはひとまず犠牲になってもらう。

その結果がどうなるかは、運を天に任せるしかないけれど。

「レベツカさん……じゃあ、今日も昨日の続き、お願いできますか？」

「ん……ああ」

……あと七日。

彼は私のこの想いに応えてくれるだろうか。

私の長年の願いを叶えてくれるだろうか。

翌々日は午後から雨模様。

けど、俺にとっては都合の良い雨だった。

夜の闇と、雨。

万が一、尾行があつたときのことを考えると、身を隠すには好都合だ。

俺の行動が全て読まれているはずはない。が、一昨日、あんな話をしたところを見ると、レベツカはその可能性についてすでに想定済みということだ。

なら、こつちも慎重になる必要がある。

目指す先は、名刺に書いてあつたアドレス。

昨日、仕事前にアポイントを取つてある。遅い時間帯だが、仕事の都合だと話すと向こうは快諾してくれた。

もう、俺の胸の内は決まっている。

相手は有名な学舎の学長で、社会的にもしつかりとした地位と肩書きを持っている人物だ。一度、その手の中に送り込んでしまえば、いくらレベツカのヤツでも手を出すことはできないだろう。

それでファルのことは解決だ。

ただ、それはもちろんレベツカの奴との重大な契約違反で、しかも悪いのは一方的に俺であり。

その状況から考察される俺の近未来は一つしかない。

堅気っぽくいえば、失職。

ついでにホームレス。

もういっちょ言つておけば、島流しの刑つてとこか。

仕事と家を失うどころか、二度とこの町で暮らすことはできなくなるだろう。

だがまあ、それは大した問題じゃない。元々、何もないところから出発した。築いてきたものを全て失つたとしても、この町を出て生活していくことはできる。

少なくとも、あいつを　最愛の弟と天秤に架けるほど俺の中に入り込んでしまった少女を、この世の底辺に送ってしまうよりは　ずっと我慢できることだ。

で、問題はつまりそれ。

弟のことだ。

失職するってことは、弟に金を送ることもできなくなる。もちろんそれが最大の問題である。

が、それもなんとかなりそうだ。

というのも、レベツカとの契約はこうだったから。

『四ヶ月間、二人分の生活費を全て貸す。その後、既存の借金と四ヶ月の間に増えた借金をまとめて返す。返せなければファルを売り飛ばす』

つまりこの四ヶ月間、俺が出費したのは弟に送る分の金だけだ。

それ以外の、俺と、そしてファルが歌で稼いできた金は全て手元に残っている。レベツカへの借金には半分ほどまでしか及んでないが、それは決して少ない金額じゃなかった。

元々はあいつにまとめて返すはずの金で、俺のものではない。

だけどそれは今、俺のこの手の中にある。

（レベツカの奴には悪いが……どうせ裏切るんだ。徹底的にやらせてもらう）

まあ、客観的に見て最低の行為だ。

それはわかつている。

あいつは元々俺を信頼して金を貸してくれていて。

他じゃ考えられないほど長い間返済を待ってくれて。

今まで安定した仕事をやってこられたのもあいつのおかげ。

（……）

ふと冷静に思い返してみると、あいつはその印象とは裏腹に、俺に対してだけはひどく甘かったようにも思えてきた。

（……なんだろうな）

頭を過ぎったのは、この四ヶ月間のあいつの不可解な行動のこと。今になって考えたことじゃないが、おかしいことだらけだ。

不可解な言動もさることながら。ただ借金を返して欲しいだけなら、他にいくらかでも方法があったように思える。ファルがこうして稼ぐようになったのだから、四ヶ月という枷さえなければ、時間は

かかるにしろ俺の手から普通に返していくことだってできた。

俺の仕事に干渉してきたことだってそうだ。

『無茶して官憲にでも捕まったら、借金が返ってこなくなる』

あいつはそんなことを言ったが、そのときはそれこそ俺に遠慮することなくファルの奴を売り飛ばしてしまえばそれで済む話。

そのぐらいのこと、あいつが気付かないわけもなく。

とにかくおかしい。

おかしすぎる。

まるで……そう、まるで、俺にムリヤリ二者択一の選択肢を押しつけようとしているかのように。

『君に二つの荷物は重すぎる』

ふと耳の奥で響いたのは、いつかのあいつの言葉。

あいつの真意はやはりそこにあるような気がした。

いや、そうとしか考えられない。

どうしても俺に捨てさせたい。考えれば考えるほど、借金のは口実でしかないように思えてきた。

だとしたら、あいつが俺に捨てさせたいのは、どっちなのだろう。

弟か。

それともファルなのか。

(……言えない、か)

あいつの真意を聞きたい。

その欲求が徐々に強くなっていく。

けど、それも今となっては叶わないこと。

どっちにしても、今の俺にはどちらを捨てることもできない。あいつの望みが二者択一の選択である限り、俺の希望と相容れることはないのだから。

「……」

雨の中。

俺は小さく頭を振って、目的の場所に向かった。

全てはあの日の想いを遂げるために

危険な賭けだと理解している。

もしも全てが上手くいかなかったなら。

崩壊、失望、喪失。

失うモノは大きい。

これは私のエゴなのかもしれないけれど……でも譲れない。

あの薄暗い日々に残してきた、想いを遂げるために。

「レベツカさん。今日も続き、お願いできますでしょうか……？」

「ああ。別に構わないよ」

そろそろ最後の段階。

あと必要なのは。

この子の、真に彼を想う一途な心と。

それを踏み台にするための冷酷な心。

「カーライルさん、最近は毎日露店に寄ってくださるのです」

「何か買ってもらったのか？」

「いいえ、まだですけど……」

表情が少し沈んだ。

「その……多分、お別れの品だと思うのです」

「……そうか」

「あ、で、でも、その、後悔してるわけではないのです。あのとき、何もしないでサヨナラするよりはずっと良かったと思いますから」

そう言いながら、顔は泣きそうだった。

おそらくここ数日は、ずっとこの表情を笑顔の裏に隠してきたのだろう。

「私もそう思うよ」

多分、私は彼よりもこの子の気持ちを理解している。
……どうしてわかってくれない。

こんなにも、こんなにも一途に想っているのに。
痛いほど理解できてしまう。

それが腹立たしさに変わる。

「ファル」

「？」

「大事な話があるんだけど」

「え……？」

最終段階。

これから口にする私の嘘と真実は、きっとこの子の心を動かすだろう。

あとは、ただ待つだけだ。

翌日。

「ファル。今日も寄っていくか？」

「はい、もちろんです！」

コンサート帰りの寄り道は最近ずっと続いている。

昨日の雨は朝のうちに上がって、道端に小さな水たまりを残す程度。

少し涼しく、過ごしやすい一日だった。

「よお、お嬢ちゃん。今日も来てくれたのか」

これだけ連続で通っていると、露店の人間にも顔を覚えられる。

「あ、はい！ よろしくお願いします！」

そう言ってペコッと頭を下げるファル。

……何を願うんだか。

「で？ お前はいつまで俺を冷やかし客のままにしておくつもりなんだ？」

「え。……そ、そー言われましても」

こいつはただ単に歩き回ることが楽しいらしいが、俺としてはいい加減、何か見つけて欲しいところだった。

何しろ、タイムリミットまではあと一日しかない。

……昨日の夜。

例の学長と話をして、明日の夜、こいつを引き渡すことが決まっていた。

もちろん早ければ早いほどいいわけで、本当は今日でもいいぐら이었다のだが、こいつにその話をして、それからすぐにというのではさすがに突然すぎるだろうと思い、一日延ばすことにしたのだ。（こいつはあと四日あると思ってるんだろうな……）

とすれば、今のうちにそのことを話しておいた方がいいのかもしれない。

じゃなきゃ、こいつはきっと今日も何も選ばずに終わってしまう。一年。

それだけの期間を一緒に過ごしてきて、別れ際に何もしゃあんまりだとも思っただ。

（……よし）

少しだけ周囲に注意を払う。まさかこのタイミングで誰かが聞き耳を立てているとも思えないが、念には念を入れて。

「ファル」

「……はい？」

不思議そうに俺を見上げたファル。

……俺の声色、あるいはタイミング的に何か感じたのか。少しだけその表情は緊張しているようにも見えた。

「実は、な……」

そして切り出した。

手短に、要点だけ。

まずは幸運にもきちんとした落ち着き先が見つかったことから。借金については本当のことを話すわけにはいかなかったので、まだもう少し待ってもらえることになった、と誤魔化しておく。

そして明日の夜、その人物の元へ連れていくこと。

今日はそのための餞別をどうしても選んで欲しいこと。

できるだけ湿っぽくならないように、淡々と伝えることにした。

「……」

全てを話し終えた後。

ひゅう、と。

風が俺たちの間を吹き抜けていく程度の、一瞬の空白があつて。

「……そうですか」

返ってきた反応は、予想の範疇だった。

良い環境の元へ行けることを喜ぶなんてことはやっぱりなくて。

だが、その後。

少しだけ思案するように俯いたファルは、

「……ありがとうございます、カーライルさん」

ゆっくりと顔を上げて。

そこに浮かんでいたのは、笑顔だった。

「私、本当は諦めてました。きつと、ものすごくヒドイところに行

かなきゃいけないんだろうな、って」

「……ああ」

満面の笑み。

……ちよつとだけ面食らった。

確かに喜ぶべきことだとは思うが、こいつのことだし、予定よりも近くなった別れの方を惜しむかと思っていたのだ。

けど。

「あ、あのっ……」

すぐに、ギョツと俺の袖を掴む手に力が入って。

一瞬、言葉に詰まる。

……やはり無理しているようだった。

「え、えつと……その、カーライルさんと離れ離れになるのは嫌なんですけど!」

顔を上げる。

唇を噛みしめて。

「同じ町ですし……きつとまた……また、お会いできますよね?」

そう言つて、無理矢理浮かべようとした笑み。

泣き笑い。

まだ涙は流れてない。

……新しい環境で新しい生活が始まれば、その眩いばかりの光に覆われて、俺の記憶など薄れてしまふに違いない。

それなら。

今、ここで悲しませる必要なんてないはずだ。

「ああ」

頷いて。

こいつのためだと思つて答えた、真つ赤な嘘。

「会えるだろ。まあ……お前がそつちできちんと落ち着いたら」

「……っ!」

小さな唇が震えた。

「会いに行つてやる。暇なときに、な」

「う……っ……!」

俺の言葉と同時に、堰を切つたように涙が溢れた。

「……カーライルさんっ!」

そのまま抱き付いてきた小さな体に対し、抱き締める以外のことができないはずもなく。

「カーライルさんっ……カーライルさんっ……!!」

ぎゅうつとしがみついて。

何度も何度も俺の名前を呼んで。

「大袈裟な奴だな」

俺は苦笑して。

また嘘をつく。

「すぐ会えるって言ってるだろ」

それもやっぱりこいつを慰めるための言葉で。

……いつから俺はこんなセリフを平気で言えるようになったのだろうか。

「はい……！ はいっ……！！」

答えるファルはそれでも泣きやまなくて。

それどころからさらに激しく泣き続けていた。

ずっと俺にしがみついたままで。

……でも、俺は別におかしいとは思わなかったのだ。

こいつはただ、一時の別れを悲しんでいるだけなのだと。

そう信じて疑わなかった。

だからやっぱり大袈裟な奴だと。

そう思っていた。

だから、

「私……私、カーライルさんと出会えて幸せでした！ ですから……
……ですから、カーライルさんのことは一生忘れないです！ 絶対……
……絶対に……！」

二度と会えないことをこいつが知っていたなんて、そのときの俺は想像もしていなかったのだ。

その日、ファルが選んだのは小さな、何の変哲もない目立たない髪留めだった。

その夜。

「カーライルさん、もうお休みになれました？」

「いいや」

いつもはあるはずもない光景。

窓から微かに射し込む月明かりで、ベッドに横になったファルの姿がかるうじて確認できる。

俺は床の上に腰を下ろし、毛布を一枚かぶっている状態だ。

「珍しいですよ。レベツカさんがこんな夜中に出掛けるなんて」
「ああ、そうだな」
「そういうわけだ。」

あいつの突然の用事とやらで、俺は今日、こうして家にいなければならぬハメになっていた。

「で、でも、そのおかげでこうして最後の夜と一緒に過ごせるわけだ！」

「ま、そういうことか」

その辺は偶然に感謝というところかもしれない。

「……」

「……」

訪れる無言。

……考えてみりゃ、こうして同じ時間に布団に入っていることも数えるほどしかないが、その中でレベツカの奴がいない状況つてのはほとんど記憶にない。

（話すことはいくらでもあるはずなんだが、な）
最後の夜。

これでも一年間をともに過ごしてきた。

本当なら思い出話でもするべきところなのかもしれない。
けど、ファルが望んだのは別のことだった。

「あ……あのっ！」
どこかそわそわした様子で。

「ん？」

「お、お願いがあるのですがっ！」

「……なんだ？」
尋ねると、

「わ、私、その……どーしても叶えたい夢がありましてっ！」
「夢？」

なんとなく、予感はしていた。
この焦りようだし。

「その……」

上半身を起こしたこいつの、顔を真つ赤にする様子が薄暗闇の中でもはっきり捕らえることができた。

グツと拳に力が入って。

決心したように顔を上げて、

そして、言った。

「さっ、最後の夜はカーライルさんの胸の中で眠らせてくださいっ！」

「……もう少し言葉選べよ」

そのままうつかり永眠してしまいそうなセリフだ。

「いつ、いかがでしょうか!？」

だが、当の本人は俺のツッコミも耳に入ってないらしい。
よほどの決心だったのだろう。

「……それは」

仕方なく、俺も真面目に返してやることにした。

「どういう意味で言ってるんだ？　ただ単に添い寝して欲しいってことか？」

「そっ、それはもう、カーライルさんのお好きなように!」

「……」

そんなんでいいのか。

(……やれやれ)

結局、こいつは最後の最後までこのままだ。

(こんなんでこの先やっていけるのか、こいつ……)

つついっいそんなことまで心配になってくるが、それは俺にはもうどうにもできないことだった。

あとは後任に全てを任せるしかなく。

「わかった」

その申し出については特に断る理由も　いや、理由はありまくりだったが、さすがに断る気にはなれなかった。

毛布からゆっくりと体を起こし、ベッドへと向かう。

「……」

気配を感じたのか、ファルは布団を握り締めたまま俺を見上げていた。

緊張で顔が強張っているようにも見える。

「言っとくが」

勘違いされていたら困るので、先に言っておくことにした。

「お前が寝付くまでの間だ。……最後の最後にレベツカの奴に色々言われるのはゴメンだからな」

「は……」

一瞬、惚けたような返事をして。

「……はいっ」

空いたスペースに潜り込むと、生温い布団の感触と心地よい空気に包まれた。

（……久々だな、こういうの）

他人の傍で寝るなんて、果たして何年ぶりのことだろうか。

この家に来てからは一度もなかったこと。

「うぁ……」

「……お前、その体勢で寝られるのか」

自分から言っておきながら、いざとなるとファルは俺に背中を向け、ベッドの端っこで縮こまっていた。

壁側だから落ちることはないだろうが、俺の目にはかなり苦しそうに見える。

「背中向けたままでいいから、もっところちに寄れ」

「え、えっと、その……」

モゾモゾと布団の中で動く感触。

「できれば、その、カーライルさんのお顔を眺めながら眠りたいのですが！」

「いや、見えないだろ、お前」

「そ、それはそーなのですけど」

「というか、背を向けているのは俺じゃなくてお前の方だ」

「う……」

撃沈。

「そ、そーなんですけど……その、まるで蛇に睨まれた井の中の蛙のような状態でして！」

何だそれは。

「ったく……ほら」

「ひゃうっ!？」

仕方なく手を貸してやると、飛び跳ねそうになった後、瞬時に固まった。

「……変な声を出すんじゃない」

無視してゴロンと体を半回転させてやる。

「あう……」

ようやく向き合うことができた。

互いの息がかかりそうな距離で。

「……」

月の明かりに浮かび上がるその表情は、その容姿の端麗さも相まって、ひどく幻想的にさえ思えた。

（……幻想的、か）

いつの間に俺までメルヘンの世界に入り込んでしまったのだろうか。

いや、入り込んだというより引きずり込まれたと言った方が正しいかもしれない。

……そこから視線を逸らし、仰向けになる。

（危ないな、俺）

一瞬とはいえ。

頭を過ぎってしまった。

離したくない、と。

「カーライルさん……」

ファルの方も向き合ったことで吹っ切れたのか、今度は積極的に体を預けてきた。

手が俺の胸の上にピッタリと置かれて。

髪の毛の匂いを感じられるほどに距離が近付いて。

「その……これって、今度こそ恋人同士みたいですよね？」

「だから、ガキのお守りをしてるようにしか見えねえって」

「……くすん」

とはいえ。

例えばレベッカの奴に見られてもすれば、紛れもなく言い訳のしづらい状態ではある。

「……カーライルさん」

「なんだ？」

暗闇の中。

見えないはずの視線が、真っ直ぐにこっちを見つめていて。

「カーライルさんも、私のこと、忘れないでいてくださいますか？」

「ああ」

すぐに答えた。

多分、それは約束しても問題ないことだった。

たとえ二度と会えないとしても。

それは多分、意識しなくても守ることのできる約束だったから。

「絶対ですよ……絶対に、忘れないでください」

「……ああ」

胸に頬の柔らかい感触が触れて。

ほんの少しだけ、そこが湿り気を帯びた。

……俺たちが交わした言葉はそこまで。

窓から覗く夜空を俺はしばらくの間、無言で眺めていた。

（……懐かしいな）

懐かしい。

ふとそう考えて、何が懐かしいのかと考える。

（……ああ）

そして思い出した。

一つの布団。

体を寄せ合って。

……孤児院では毎晩こうして弟と眠っていたんだっただ。何もないあの暗い部屋の中で。

痛みさえも麻痺してしまいそんな苦しみの中で。

ただ一つだけ信じてきたことができた温もり。

ただ一つだけ、守りたかったモノ。

それは今でも変わってなくて。

「すう……すう……」

いつしか聞こえてきた安らかな寝息は、やっぱり懐かしさを感じさせた。

そして俺の意識も、いつしか微睡みの中へと。

全てはまるで、あの頃の再現であるかのように。

その6『傾く天秤』

賽は、投げられた

この手に預けられたそれは、実際よりも遙かに大きな重みを私に感じさせている。

広い部屋。

一人で住むには広すぎる、とは言わないまでも、少なくとも今の私には少々広く感じられた。

今朝、あの子がしていた髪留め。

……正しい選択だ。

あれならそれほど目に止まることもない。

贅沢だと罵られることも、妬まれて奪われる可能性も低いだろう。

他人にどう見えようと、あの子にとってのその価値は何ら変わることはない。

もしも絶望に満ちた世界に身を投じることになっても。

願わくば、それが彼女の支えになってくれますように。

「……さて」

太陽は西に傾きかけている。

「そろそろ、行くとするか」

急ぐ必要はないけれど。

私にも少々心の準備が必要な気がしていた。

今夜の空気は僅かに肌寒い。

「ふう……」

終わりは意外にあっさりしているものだ。

別れる瞬間のファルは、さすがに泣きそうだった。

多分、笑顔を浮かべようとはしていたのだろう。

それでも全然笑えてなくて。

結局、面と向かって『サヨナラ』とは言わなかった。

（一年、か）

あれから丁度一年。

いや、正確にいうとあと二、三日で丁度一年になるか。

「ふう……」

なんとも言えない気分だった。

寂しいような。ホッとしたような。

もちろん、まだ全てが終わったわけじゃない。

雲一つない、綺麗に晴れ渡った夜空。

ぽっかりと浮かぶ、丸い月。

パチパチという火の爆ぜる音と、赤く染まる

（っ！）

違う。

頭を振ってその情景を吹き飛ばす。

火の爆ぜる音なんて聞こえない。

空は今も真っ暗なままだ。

空模様が似てるだけ。

あの日は全然違う。

……だって俺は、今度こそきちんと守ることができたのだから。

（そう。すべて上手く行ったんだ）

あとは、俺がヘマすることなくこの町を逃げ出すことができれば、それで万事解決だ。

まあ、しばらくは不自由な生活を強いられるだろうと思うが。

『…………』

学舎へ向かう途中に、あいつが口ずさんでいた歌を思い出す。多分、別れの歌だったように思えた。

どこことなく、いつもよりも悲しく聞こえるメロディで。

『私、カーライルさんのこと、忘れません』

別れ際に再び口にした言葉。

『絶対に忘れませんから』

（忘れない、か）

その言葉を深く胸に刻み込む。

俺だって、おそらく忘れることはないだろう。

もう二度と会うことがないけれど。

あいつの表情。

笑顔。

そして歌声。

それらはきつと、いつまでも、どこか心の奥底に。

大事に綴じて

（…………え？）

思わず。

ピタッ、と、足が止まった。

冷たさを増した夜の風の中。

（…………なんだと？）

ふと感じたのは、とてつもない違和感。

耳の奥で、火の爆ぜる音。

（忘れない？ ……忘れない、だって…………？）

おかしい。

計画のことで頭がいっぱいだったせいかな、今まで疑問にも思わなかった。

が、考えてみれば、それはおかしいことだ。

そんなはずはない。

忘れるはずがない。

……いや、違う。

（なんだ、それ……）

胸を襲ったのはとてつもない不安。……あいつは俺がまた近いうちに関会に來ると思つてゐるはずだつた。

昨日、あれだけそのことを誓わせて。

また会えると信じてゐるはずなのに。

どうして繰り返したのだらう。

『忘れない』

『絶対に忘れない』

『忘れないで欲しい』

そんな言葉は必要ない。

ドクン……と、胸を打つ鼓動が強い痛みを伴つた。

本当に会えると思つてゐるのなら、忘れる心配なんて必要ないはずなのに！

「……っ！」

頭が痛い。

頭の奥で。

パチパチと。

俺はもしかすると とてつもない間違いを犯してしまつたのではないだらうか。

（冷静になれ……冷静に）

立ち止まつて深呼吸する。

とにかく落ち着いて、頭を働かせた。

……あいつは二度と俺に関えないことを知つてゐたというのか。

もし もしも、だ。本当にそうだつたと仮定するなら、どんな

状況が考えられるだろう。

まず確実なのは、少なくとも俺はそんなことを一言も口にしていないということ。そして、たとえあいつが俺の言葉の端々からそれを感じ取ったとしても、そこまでの確信はないはずだということ。だとすれば。

……思いつくのはただ一つ。

（レベツカ　　）

あいつが何かを喋ったとしか考えられなかった。

そして、あいつが何かを喋ったのだとすれば。

……不安が大きくなる。

（あいつは、全部見抜いていた……？）

マズイ。

確信できる材料は一つもなかったが、とてつもなくマズイ気がした。

これまで組み立ててきて、そして上手くいったと思っていた全てが今、真逆に反転しようとしている。

全て。

全てが悪い方向に向かおうとしている。

取り返しのつかないことになるうとしている。

あの日のように。

「くっ……！」

俺は身を翻した。

……何が起きているのか、はつきりとはわからない。けど、今はとにかく、ファルの元へ戻るべきだと思った。

ゆっくり考えるのは、それからでもいい。

地面を蹴って。

三步。

四歩。

五歩

人影が俺を遮ったのは、そのときだった。

「カール」

「っ……」

立ち止まって、目の前に現れた人物の姿を確認する。

「どこへ行くつもりなんだ？」

疑念は、確信へ。

「レベツカ……」

この時間のこいつは仕事中か、あるいは家で俺たちの帰りを待っているかのどちらかだ。

仕事中に偶然出会った　この状況で、そんな偶然が起きる確率はゼロに等しい。

とすれば。

「どうということなんだ、レベツカ！」

迷うことなく、問いかけた。

こいつは全ての事情を知っている。

間違いなく、そう確信できたから。

だが、

「なにがだ、カール？」

レベツカはいつもの表情だった。

「何が不思議なのか、私にはわからない」

「っ……ふざけるなっ！」

「ふざけてなんてないけど。……ああ」

それからチラッと背後に視線をやって、

「君があの子を送ってくれたんだっただか。そのぐらい、私がやって
もよかったのに」

「……なんだと？」

その言葉は、まるで鈍器のような衝撃で俺の脳を襲った。
頭の中がグルグル回る。

目眩がした。

「なにを言ってるんだ、お前……」

だが、レベツカは平然とした様子で、

「それは君だつてわかつてるんじゃないのか。……君は『情報』つてもものを甘く見過ぎたな」

片手を腰に当てて。

そして再び俺の顔に視線を合わせた。

「君の知らないことなんてこの世界にはいくらかもある。その道に關しては素人に毛が生えた程度の君が、相手の真の姿を見抜くなんて不可能だとは考えなかったのか？」

「な……！」

その言葉から徐々に形を成すのは、最悪の可能性。

そして、

「少し期限には早かったけど、契約はほぼ完璧に履行されたよ」

「……まさか」

その言葉によつて、その可能性は完全にその姿を現した。

(……馬鹿な)

確かに『その申し出』は向こうから、それも突然の話だった。タ
イミングも嫌というほど絶好だった。

けど、相手はきちんとした地位と肩書きを持った人物で。

それが偽物だったりしないことはちゃんと確認できていて。

だから

でも。

でも そいつが別の顔を持っていないと、どうして断言できる
？

少なくとも俺は、そういった例をいくつも知っていたはずで。

「つ……！」

まるで貧血のように目の前が暗くなった。

「君は自分で口癖のように言っていたじゃないか」

呆然としたままの俺に、レベル力はふうつと息を吐いて近付いてくる。

一步、二歩……

「この世界はいつも非情で『奇跡のどんでん返し』なんて絶対起こ

らないんだ、って」

「！」

「そんな君がこんな簡単な力ラクリにも気付かないとは、ね」

「……っ！」

地面を蹴る。

「何処に行くんだ、カール？」

「どけ、レベツカ」

立ちふさがるレベツカを、明確な敵意を込めて睨み付ける。

騙された。

騙すつもりが、逆に騙されていたのだ。

この怒りは理不尽なものかもしれないが、だからといって抑えることができるわけでもなかった。

「無駄だよ」

だが、そんな俺の剥き出しの怒りにさらされても、目の前のこいつは相変わらず何一つ動じることもなく、

「今から戻ったところで、君はあの子の姿を見つけることもできない。できたところで」

小さく、笑みを浮かべた。

「君には、あの子を取り戻す力なんて、ない」

「……貴様アツ！」

反射的に体が動いた。

襟首を掴んで、予想以上に軽いその体を近くの家壁に押しつける。

「っ……」

軽い衝撃とともに、レベツカは微かに苦悶の声を上げた。

「貴様は……何を考えてるんだ！ どうしてそうまでしてあいつを

……っ！」

「どうして……？」

だが、口調は変わらない。

「私はただ、契約を履行しただけ。……この道を選んだのは私じゃ

なく、君だ」

「！」

頭に血が上る。

「っ……」

拳に力が入って、それがそのまま襟首を締めていく。

抵抗はない。

「……カール」

そのまま。

レベル力は苦しそうな表情をしながらも、その目は俺を真っ直ぐに見据えていた。

「私を殺したければ殺してみるといい。抵抗はしない」

「っ……なんだと……？」

「君に殺されるのなら、私はそれで納得できるんだ」

「……」

真っ直ぐにこちらを見据える視線は、何故だか俺を激しく動揺させた。

……嘘だ。

そんな言葉が本気であるはずはない。

そんなはずはない。

……なのに。

なのに、その目を真っ向から否定できない

「もつとも……私が納得できても、君にとっては何の解決にもなりはしないだろうね……」

「っ……」

わかっている。

もともとこいつがしたことは正当防衛にも等しいこと。

騙されることがわかって、逆に騙し返した。

仕掛けたのは俺の方だ。

それに……こいつをどうこうしたところで、状況が好転するわけでもない。

自然と力が抜けた。

「……ふう」

俺の手から解放されるなり、レベツカは息を吐いて襟元を正して。

「それに……ね」

「……」

一步離れた俺を、やはり真っ直ぐに見据えて、レベツカは言った。

「知らなかったのは君だけだ。あの子は知っていたんだから」

「！」

そこから出てきたのは、信じられない言葉。

「なん……だつて？」

「私が全て話したよ。だから、これはあの子の自由意志でもある」

「！？」

出てきた言葉は、再び俺を驚愕させた。

「馬鹿な……そんなことが……！」

「本当にないと思うか？」

だが、レベツカはひどく真剣な様子のままで答えた。

「契約を破ったら君がどういう状況に陥るかを聞いて、それでもあの子がそういう行動を取るはずがない、と、確信を持ってそう言えるのか？」

「……！」

「あの子にとって大事なことは、君の傍を離れるかそうでないか、ただその一点だけだつて」

ゆっくりと、どこか哀しそくに目を閉じて。

「それなら……どうせ離れるのなら君のためになる方を選びたいと、そう考えたことがそんなに不自然か？」

「……」

即座に返す言葉が見当たらない。

（……馬鹿な）

だが、最悪なことに、こいつの言葉を裏付ける材料は確かにあった。

『忘れない』

あいつが口にした別れの言葉は、つまり、二度と会えないことを知っていたから。

だから……そういうことなら納得できるのだ。

昨日、露店で計画を話したときの、少しだけ奇妙な反応も。

昨晚、唐突にあんな申し出をしてきたことも。

『忘れない』と、あんなにしつこく繰り返したのも。

「つまり」

そう言ってレベルカが懐から取り出したのは、茶色の封筒。

それは少しだけ膨らんでいて。

「これが、あの子の答えだ」

その先から僅かに顔を覗かせていたのは　この数ヶ月、懸命に頑張つて稼いできた金額の数倍はあろうかという、紙幣の束。

「借金の分はすでに差し引いておいた。……ほら、受け取るといい」

「っ……！」

視界がブレた。

目眩。

吐き気。

「……ふざけるな」

「ふざけてないよ、カール。これはあの子の、人としての最後の意志だ。君はこれを受け取らなきゃならない」

その言葉はあくまで淡々としていて。

それがさらに、俺の混乱に拍車をかける。

「そんなもん、受け取れるはずないだろッ！」

払った手が、レベルカの右手を直撃する。

封筒が宙を舞う。

「……」

スローモーションのように落ちるそれを、レベツカは横目で追っていた。

無表情に。

「受け取るんだ」

封筒が地面に落ちた。

「受け取って、そして苦しむがいい」

「っ……！」

「君が選んだんだ。他の誰でもない、君が……君があの子の未来を奪った」

「違う！」

そうかもしれない。

そんなことはわかっていた。

けど、反論せずにはいらなかった。

「やれるだけのことはやった！　けど、どうにもならなかったただけだッ！」

そう。

そうだ。

「少なくとも、俺のこの四ヶ月間は全てがあいつのためだった！

俺は　俺はあいつのために仕事も、住む場所も捨てられたんだ！

なのに　！」

「全てが彼女のため？」

だが、そんな俺をレベツカは冷笑で見つめた。

「言い訳も大概にするんだな、カール。君にとつてのあの子は、全てどころか、その半分にも達していない。だろう？」

「なにを　！」

「君はもっと早く、もっと容易くあの子を救うことができた。でも君はそうしなかった」

「……！」

その言葉の意味に気付く。

「……けど、それは……」

「弟の方が大事だった、か？」
一瞬。

そう言ったレベツカの瞳に、明らかに異様な感情の色が生まれた。
けど、今の俺にはそんなことを疑問に思ふ余裕もなく。

「そんなの……どっちを捨てるとか、そういう話じゃないだろ……」

答える。

……そう。

俺はどっちも捨てられなかった。

どっちも助けてやりたかった。

ただ、それだけのことだ。

それが……いけなかったというのか。

「本来なら君の言うとおりかもしれないね」

レベツカは頷いた。

だが、すぐに、

「だけど、君の場合は違うよ」

また、その瞳が光を帯びる。

まるで、何かの決意を秘めたかのように。

「何故なら、君があの子と天秤に架けていたのは、君の弟なんかじゃないから」

「……なんだと？」

「君が架けていたのは」

そして一瞬の逡巡。

トン、トン、と、その足がゆっくりと地面を叩いて。

レベツカはきっぱりと、吐き捨てるように言った。

「君が天秤に架けていたのは、君の、君にとって都合のいい、ただの妄想だ」

「……妄想？」

一体何を言ってるのだろうか。

思わず浮かんだのは、困惑の笑み。

「何の話をしてるんだ、お前……？」

「君は」

もう一度、変化する。

今度は、今までに見たこともない表情。

「君は、この期に及んで、まだ逃げ回るつもりか」

「っ……！」

俺が知っている、どの表情でもない。

何年も一緒に暮らしてきて、初めて目の当たりにした怒りの面。

苛立たしげに唇を噛んで、そして俺を見据える視線は紛れもない憤りに満ちていて。

「……見ろ、カール」

そしてレベツカは懷から一枚の紙切れを出した。

くしゃくしゃになったものを、もう一度広げ直したような。

見覚えがある。

「……手紙？」

「そう。毎月、君の弟から送られてくる手紙……だったか。ゴミの中から私が拾っておいたものだ」

「それが……どうかしたってのか？」

少しずつ。

頭の奥の痛みが戻ってくる。

ズキ、ズキ、と。

視界がブレる。

ゴクリ、と喉を鳴らしたのは、俺だったか、あるいはレベツカだったか。

「何が書いてある？」

痛みがひどくなる。

耳の奥が痛い。

「弟の……近況だ。あいつは毎月、そうやって俺に様子を報告して」

「近況？」

雲一つない夜空。

ぽっかりと浮かぶ月。

……頭が痛い。

耳の奥でパチパチという音が聞こえる。

「私の目には」

レベツカは手紙を裏返し、そしてそれを見つめて言った。

「ただの白紙にしか見えない」

「……はっ」

頭の痛みを堪えながら、笑い飛ばす。

「なに言ってるんだ？ お前、字も読めなくなったのか？」

「……カール」

レベツカはもう一度、その手紙を俺の眼前に突きつけた。

「目を開けて、よく見るんだ」

「だから、なにを言ってるんだ」

全く理解できない。

何度見たって同じことだ。

診療所での様子。最近の体調。送金に対する礼と、『会いたいから尋ねてきてくれ』という言葉。

「何の冗談だ？ 俺にはお前が何を言っているのかさっぱり」

その瞬間。

「っ……！」

堰が切れた。

まさにそんな感じだった。

それまで懸命に押さえつけていたものが一気に溢れ出したような、そんな感情の波。

そしてレベツカは叫んだ。

「いい加減に目を覚ますんだッ……！」

手にした手紙を思いっきり握りつぶして。

その奥に見えるのは……今にも泣き出しそうな顔。

……ひどく、非現実的な光景。

「っ……！」

目眩がする。

体の感覚が少しずつぼやけていく。

増していく、非現実感。

夢のような。

「思い出せ、カール！ あの日も そう！ あの日もこんな夜だったんだろう！？」

「あの日……だ、と？」
そう。

あの日もこんな夜だった。

……雲一つない、綺麗に晴れ渡った夜空。

……ぽっかりと浮かぶ、丸い月。

……パチパチという火の爆ぜる音と、赤く染まる空

「っ！」

頭が痛い。

痛い。

痛い。

痛い

「くうっ……！」

「思い出せ！ その日のことをッ！」

声が混乱した頭の中に浸透して。

……浮かび上がる情景。

燃える建物から逃げ出して。

煤だらけになって。

歩けなくなつた弟を背負って。

走った。

走った。

そして

「あいつは……歩けない体になった」

ドス黒いものがせり上がってくる。

「だから俺は……あいつを診療所に預けたんだ」

「……」

レベツカは目を細めた。

僅かに表情が歪んで。

睫毛が震えている。

……何かを迷っている。

「……カール」

そして逡巡の後。

言葉は少し落ち着きを取り戻して。

一步。

まるで自らの心を奮い立たせるかのように、レベツカは俺に向かって踏み込んできた。

「君に、弟なんてものはいない」

「……？」

「いや、正確には」

すうつと息を吸い込んで、

「もう、いない」

「っ！」

一際大きな頭痛。

「思い出せ……君は思い出さなきゃならない」

耳の奥で火が爆ぜる。

「思い出さなきゃ、君はいつまでも前に進めない」

「くうっ……！」

全身から汗が噴き出して。

耳の奥がぼうっとなつて。

視界が真っ暗になつて。

「っ……！」

意識が……遠のく

最後に映った光景は

雲一つない、綺麗に晴れ渡った夜空。

ぽっかりと浮かぶ、丸い月。

パチパチという火の爆ぜる音と、赤く染まる空

ひゅう、ひゅう、と。

妙な音が薄暗い部屋に響く。

『兄ちゃん……』

そんな音に混じって、聞こえるのは弟の呼び声。

ひゅう、ひゅう、と。

弟がおかしくなったのは、数日前から。

暑くもないのに体中に汗が浮かんで。

咳をするのは珍しいことではなかったけど、それもいつもよりヒ

ドイ気がして。

多分、何かの病気だ。

どうにかしないといけない。

弟は大丈夫だと、全然苦しくないとは言っけれど。

ひゅう、ひゅう。

最近は喋ることも難しそうに見える。

『兄ちゃん……』

弟は時折、俺の存在を確認するかのように呼びかけてくる。

ここにいて、と答えると、安心したかのように再び眠りについた。

……どうすればいいのだろう。

ズキ、ズキ……と、昨日あの男に殴られた跡が痛む。

誰に訴えても、誰も取り合ってくれない。

話すら聞いてくれない。

いや、あいつらは最初から、弟がどうなろうと知ったことじゃないんだ。

俺がどうにかするしかない。

だけど、一体どうすれば。

『今日は……ずっと一緒だね……』

ひゅう、ひゅう。

ああ。

俺はここにいる。

心配しなくても。

俺がお前を守ってやる。

ひゅう、ひゅう。

俺が……守ってやる。

拾ったのはマツチ箱だった。

あいつが落としていった、マツチ箱。

中にはまだ数本のマツチが入っている。

ひゅう、ひゅう。

これがあれば、ここを出ることができるかもしれない。

『兄ちゃん……』

ひゅう、ひゅう。

もう少しの辛抱だ。

『最近、夢を見るんだ……』

医者に診せれば、きっとすぐに良くなる。

今はお金がないけど、いつか俺が稼いで。

お前が病氣しても大丈夫なように。

『父さんも母さんも姉さんもいて……みんなで仲良く暮らす夢……』

ああ。

でも……近い内にきつと、現実にしてやる。
父さんも母さんもいないけど。

俺がいる。

俺が代わりにそばにいてやるから。

チャンスは、次に部屋を出されたときだ。

ひゅう、ひゅう。

昨日の夜から弟は座って俯いたまま。

ひゅう、ひゅう。

時折、ぜえっ、ぜえっ、という音も聞こえるようになった。
肩を大きく揺らして、苦しそうにすることも増えた。

こいつは大丈夫だと言うけれど。

『兄ちゃん……』

ああ。わかってる。

俺はそばにいる。

『手を握って……』

ああ。

いつまでも握っててやる。

もう少しの辛抱だ。

もう少し。

……早く医者に診せてやりたい。

早く。

早く。

早く

ようやくチャンスが巡ってきた。

今日こそ必ずここを出て、弟を医者に連れていく。

いつかのように失敗するわけにはいかない。

見えて。

見ててくれよ。

お前を必ず、ここから出してやるから。

『……………』

ああ。

疲れているのか。

そういや、そうやって静かに眠るお前を見るのは久しぶりだ。

朝はいつも苦しそうだったのに。

今日は静かだ。

いつもより少し顔色が悪くて。

最近はまだご飯も食べてないみたいだけど。

でも……………いつもみたいに苦しがつているよりはずっといい。

それに、ようやくチャンスが巡ってきたんだ。

今日こそ。

今日こそ。

今日こそは

……………雲一つない、綺麗に晴れ渡った夜空。

……………ぽっかりと浮かぶ、丸い月。

……………パチパチという火の爆ぜる音と、赤く染まる空

パチパチ、と。

燃えていく。

燃えていく。

はぁっ……………はぁっ……………！

俺も弟も煤だらけ。

弟は自分で歩けないみたいだったので、俺が背負うことになった。

ずっしりと重くて走りづらかったけど、だけどそれ以上に、よう

やくあの場所を出られたという嬉しさの方がずっと強かった。

これで……………ようやく。

ようやく弟を医者に診せることができる。

歩くこともできなくなつて。

喋ることもできなくなつて。

目を開けることもなくなつたけど。

ああ。

これでようやく。

ようやく

「っ……！」

視界がぼやけた。

涙が込み上げてくる。

嬉しいはずなのに。

なんだろう？

どうして、泣いているんだろう？

涙が、止まらない。

止まらない。

……ああ。いや、そんなことはどうでもいいんだ。

とにかく、すぐに弟を医者に預けなきゃ。

そしてすぐにお金を集めなきゃ。

弟がまた、俺のことを呼んでくれるようになるまで。

弟がまた、自分の足で歩けるようになるまで。

弟がまた。

また、目を開いてくれる、そのときまで

あの日と、同じ

「あ……あ……！！」

彼は、顔に両手を当ててうずくまっていた。
いつか見た光景。

彼の見開いたその両眼が、徐々に輝きを失っていく。

……崩壊していく。

ドクンッ……。

心臓が大きく跳ね上がった。

……やはり、ダメなのか、と。

手紙を握りつぶしたまま、爪が食い込むほどに力を込めた拳が、
じつとりと汗に濡れる。

その光景は、私が彼を見つけたあの日と同じ。

彼の心に根付いた『それ』は相当深い。

真実は彼の心を傷つけ、思考を停止させ……そして忘れさせる。

それを知ったあの日　私が何も知らないまま、やはり彼に真実
を突きつけようとして失敗した、あの日　それ以来、私は徹底的
にそれを避けてきた。

私と出会ったことまで忘れ去った彼に、まるで初めて会うかのよ
うに接触して。

そして傍に居続けた。

いつか……彼自身が自ら克服してくれることを願いながら。

……だけど。

「カール……」

このままじゃ彼はいつまで経っても自分のために生きることがで
きない。

幼い頃、自分勝手な両親に捨てられ。

辿り着いた孤児院では虐待の限りを尽くされ。

そして今日まで、すでにこの世にいない人物への罪悪感に苛ま
れ。

……もう十分だ。

これ以上、見ていられない。

私の仮面も、もう限界だ。

この子はもう、この地獄から抜け出してもいいはずだ。

「目を開けるんだ」

呼びかける。

私の声に応えてくれないのは、あの日、すでに実証済みだった。

けど、今は違う。

「君がまた忘れてしまったら、あの子は本当に不幸になってしまう」

あのととき。

友人を失った憤りを理不尽にぶつけられながら、それでもこの子の優しさを信じてくれた、あの姿を見たとき。

彼女なら力になってくれるんじゃないかと思った。

何度突き放されても決して諦めず、そして少しずつでもそこに自分の居場所を作り出していった彼女なら、この子を悪夢から解放してくれるんじゃないかと思った。

だから。

「このままでいいのか？」

私は最後の最後まで彼女を利用する。

「昔は君も幼かったから、それは仕方ないことだった。けど、今は違うだろう？」

聞こえていなくても構わない。

……いや、聞こえているはずだ。

何故なら彼女は、この子にとつて、失った弟と天秤に架けて比較するほどに大きな存在となっていたはずだから。

グツと拳を握り締めて。

私は声を張り上げた。

「本当にいいのか！？ また同じことを繰り返すつもりかッ！！」
それがひどく自分勝手な言い草だという自覚は十分にあるが、それでも。

この子を助けるために。

そして、私自身の想いを遂げるためにも。
この最後のチャンスを。
この子が乗り越えてくれることを願って
私は、叫んだ。

痛い。

痛い。

痛い！

血液が流れ込むたび、こめかみに強烈なパンチを浴びたかのような衝撃が襲う。

体の感覚もどこかはつきりしない。

立っているのか。

座っているのか。

それとも横たわっているのか。

それさえもわからない。

いや……そもそも、俺は今どこにいるのか。

何をしていたのか。

……薄暗い視界がグニヤリと歪んで、強烈な吐き気が込み上げてきた。

なんだ？

なにが起こっている？

どうして俺はこんなところに

「……！……！」

誰かの声が聞こえる。

……誰だろう。聞き覚えがある。

確か……ずっと、ずっと、遠い昔に……
いや。

これは……そう。あいつの声だ。

「……カール！」

そう。

ちよつと前から一緒に暮らし始めた情報屋の女……レベッカか
いったか。

いまいち得体の知らない奴だが、腕は確かだし色々と役に立つ。

……ああ、そうか。

よく見るとここは町のどこかだ。空は暗くなってるが、おそらく
日が沈んでそれほど経ってない時間だろう。

どうやらいつもの頭痛に襲われて、一瞬、意識を失っていたらし
い。

(……ふう)

状況を把握すると、頭痛も徐々に収まってきた。

吐き気も引いていく。

やれやれ。

よりもよって、この女の前でこんな情けない姿を見せてしまう
とは。

とんだ失態だ。

あまり弱みを見せたくない相手だというのに。

とにかく、ここは適当に取り繕っておくしかないだろう。

「レベッカ……」

そして俺は口を開いた。

……だが、その直後。

「……！」

「っ……！」

レベッカが何かを言葉にした瞬間、再び激しい頭痛に襲われる。

「っ……！」

「……を助けたくはないのか　！？」

なんだ？

何を言っているんだ、こいつは。

聞こえない。

聞き取れない。

「は君にとって　！」

やめろ。

「しないと、君はいつまで経っても　！」

やめろ。

「……　！！」

痛い。

痛い。

痛い！

咄嗟に耳を塞いだ。

いや、塞いだつもりだった。

が、頭に響いてくる声はいつまでも途切れない。

頭が……割れそうだ。

……やめてくれ。

「カール！！　を　！！」

やめろ。

「！！」

やめろ。

「！！」

やめてくれ。

耐えられない。

もう、耐えられない。

「やめろ……！！」

「カール！！」

そして

「……　ヤメロオオオオオオオオオオオオッ！！」

聞こえたのは、まるで断末魔のような叫び声。

俺が……発したのだろうか。

わからない。

何も……わからない。

頭の中をスプーンで掻き回されているかのような。

グルグル。

グルグルと。

吐き気が止まらない。

ただ……それでも一つだけ、はっきりとしていたのは。

「……カール……」

その直後、何とも言えない眩きとともに。

俺を『攻撃』していた意味不明な言葉の羅列が途切れたというこ
と。

……再び、ぐにやりと意識が混濁して。

一瞬、遠のいて……また明るくなる。

ふと、気が付いて。

「……」

辺りにあったのは、奇妙な静寂。

「くっ……はあっ……！」

荒い息。

これは……俺の呼吸音か。

こめかみから冷たいものが首筋に流れ落ちる。

……汗。

頭痛が少しずつ収まってきた。

ようやく視界も明瞭になってくる。

（くそっ……）

いつにも増してひどい頭痛だった。

確かに俺はもともと原因不明の頭痛持ちだが、こんな、記憶が飛
びそうになるほどの頭痛は滅多にあるものじゃない。

（なんなんだよ、一体……）

そもそも、俺は何をしていたんだったか。

喉がカラカラに乾いている。

というか、痛い。

まるで思いつきり喉を酷使したかのようなうだ。

(ああ……)

そうだ。

思い出した。

俺は確か、いつものように仕事をしていて……それで、目の前のいる人物……そう。レベツカだ。

「ああ……レベツカ」

どうやら俺は地面に膝をついていたらしい。

妙にダルい感じがする体をゆつくりと起こして。

少し声は掠れていたが、喋れないほどじゃない。

もしかすると風邪でもひいたのだろうか。

……と、それはいいとして。

「なんだ、お前。珍しいな、お前と外で会うなんて」

「……カール」

レベツカは何故だかひどく動揺したような顔をした。

そして、拳をグツと握りしめると、

「君は……君は　！」

「なんだ？」

そして次に現れたのは、悲しみの表情。

「……？」

こいつがそんな表情を見せるなんて滅多にないことで、俺は少し驚いた。

いつも飄々としていて、超然としているはずのこいつが。

「……いや」

だが、一瞬の後。

その表情はいつものそれに戻った。

捕らえどころのない、まるで仮面のような表情に。

「なんでもないよ……カール」

目に灯っていた感情の色が姿を隠して。

「なんでもないんだ……」

いつもの表情に。

飄々として。

捕らえどころのない。

いつもの彼女。

別にどうということもない。

いつもの。

「……」

怪訝には思ったが、何となく追求する気にはなれず、

「……で？　こんなとこまで何の用だ？　俺は仕事なんだがな」
そう尋ねた。

正直なところ、今日は何の約束が入っているわけでもなく、それほど忙しいわけではないのだが。

「……ああ、そうそう」

レベツカは頷いて、そして左手に持っていた包みを俺に差し出した。

「君にプレゼントだ」

「……プレゼント？　お前が、俺にか？」
突然のことに驚く。

「何の冗談だ？　まさか命に関わるようなモノじゃないだろうな」
こいつからプレゼントをもらうような覚えはまったくなかった。
特に何の日というわけでもないし、例え俺にとって何かおめでたい日だったとしても、こいつがプレゼントなんてものを持つてくるはずはない。

が、そんな俺の疑問に答えるかのように、

「私からじゃない」

レベツカは淡々とした口調で言った。

「頼まれたものだ。……君に助けられて、君に感謝していた、とある女の子から」

「女の子？」

ますますわけのわからない話だ。

最近、人助けなんてした覚えはない。というか、基本的に慢性的な貧乏人である俺には、人助けなんてことをしている余裕はないのだ。

「全く心当たりがないな」

まさか客の誰かが……なんてことはないと思うのだが。

「別に怪しいモノじゃないから」

だが、そんな俺の反応にも構わず、レベツカは妙に不格好に包装されたそれを俺に押しつけた。

「中身はまともなものだよ。警戒する必要はない」

「何でお前が中身を知ってんだよ」

「それは」

少し。

不思議な反応を見せた。

「それを作るのに、私が少し手を貸したからだ」

「作る？」

受け取った包みはひどく軽かった。

感触も柔らかい。

怪訝に思いながらもとりあえず不格好な包装を開けてみる……と、中から出てきたのは毛糸で編んだらしい、細長いモノ。

「……マフラー？」

「そうみたいだね」

「そうみたいだって、な……」

手にとって眺めてみると、ところどころがぼつれていてひどいシロモノだ。まあ、かろうじてマフラー本来の役割は果たすかもしれないが、正直、人と会うときに身につけていられるようなものではない。

「随分と手の込んだ嫌がらせだな、おい」

「嫌がらせなんかじゃないよ」

相も変わらず、レベツカの奴は淡々として答えた。

こいつのこういうところは、冗談なのか本気なのかひどく分かりづらい。

「それはプレゼントだ。ものすごく心のこもった、ね」

「……」

確かに。こいつはこんな手の込んだ嫌がらせをする奴じゃない。こいつの嫌がらせはもっと単純で、かつ俺のストレスをもっと派手に上昇させてくれるものばかりだ。

とすると、いよいよ意味がわからない。

まさか本当に俺に感謝する何者かの贈り物だというのだろうか。

「大事にしてあげるといい。できれば一生、ね」

ひどく真面目な顔だった。

「大事に、ねえ。良くわからんが」

「わからなくてもいいよ。……そうでなければ、あの子があまりに可哀想だから」

「なんだ？」

変な奴だ。

いや、もともと変な奴ではあるが、それとは違う方向に変だった。いつもはこんな感傷的な表情なんて、滅多に見せない奴なんだが。

（マフラー、ね）

手の中のそれに視線を落とす。

……見れば見るほどひどい出来だ。

一色の毛糸で編まれた中に、まるで古代文字のように歪な二つのイニシャルが描かれている。

初めて母親に教わった子供でも、もう少し上手に編むだろうに。

「それと……もう一つ」

「ん？」

手にしたそいつを首に巻く気も起こらず弄んでいると、レベツカは付け加えるように言った。

「そいつは、餞別ではないそうだよ」

「？」

「賤別だと言ったら、本当に二度と会えない気がして嫌なんだそう
だ」

「……はあ？」

あまりに唐突すぎて、言ってる意味がわからなかった。
だが、レベツカは答えずに、

「だから、それは誕生日プレゼント」

「誕生日、プレゼント？」

「私も知らなかったよ。明日が君の誕生日だったなんて」

「……誕生日だと？」

その瞬間。

ドクン、と。

ほんの微かに、くすぶっていた『何か』が、頭の中で鼓動を打つ
た。

「誕生日……？ そんなはずないだろ」

引きつったように口元を歪めて答える。

そう。

そんなはずはない。

絶対にそんなことはありえない。

何故なら、

「俺は自分の誕生日なんて知らない」

「……そうなのか？」

レベツカは本当に不思議そうだったが、

「けど、それなら」

ゆっくりと目を閉じて答えた。

「何故かその子は、明日が君の誕生日だと勘違いしていたらしい」

ドクン。

どうして。

どうしてだ？

「なんだよ、そりゃ……」

何をどうしたら、そんな勘違いをするってんだ。

『誕生日？』

明日なんて俺にとって特別な日でも何でもない。

たとえ冗談でそういう話を誰かにしたのだとしても、そんな脈絡もない日を指定する意味がわからない。

『そんなに知りたいのなら教えてやる』

ドクンッ。

なんだ。

なんなんだ。

『俺の誕生日は 』

ドクンッ……

遠くに声が聞こえる。

目の奥の、脳の中の、そのさらに奥底で。

どこか遠い過去、どこか遠い場所で、見知らぬ誰かに語った真つ赤な嘘の言葉。

『俺の誕生日は、お前に会った日の前日だ 』

「っ!？」

耳の奥で聞こえたそれは、紛れもなく俺自身の声。

なんだ。

なんなんだ。

会った日の前日？

明日がその日だともいうのか？

いや。

そもそも『お前』ってのは、ダレだ

「……カール？」

怪訝そうなレベツカの声が聞こえている。

だが、それに言葉を返す余裕はなかった。

「なんで、こんな っ!？」

ズキズキと痛み始めた頭の奥で、何かが蠢いていた。

『兄ちゃん 』

その声は良く知っている。

それは、俺の弟だ。

最愛の、この世にたった一人の、俺の可愛い弟。
だけど、それと重なるように聞こえる、誰かの声。

『……さん 』

「っ……！」

ズキズキと。

頭が痛む。

吐き気が戻ってくる。

抑えきれない何かが、蠢いている。

……ダメだ。

それは。

それは

『……じゃあ、カールさん、ですね 』

『……ファリーナです。酒場の親父さんにはファルって呼ばれてます 』

『あの、ファルって呼んでいただければ 』

「っ……！！」

奥底に沈めた何かが、きっかけを掴んで浮かび上がってくる。
重りを外して、ゆっくりと、ゆっくりと。

……ファリーナ。

……ファル。

ああ。

それは。

それは、思い出しちゃいけない。

それは、俺の大事なものを奪ってしまう。

俺のもっとも大切なものを幻に変えてしまう。

思い出しちゃいけない。

それは。

それは

「……私、カーライルさんと出会えて幸せでした

知らない。

知らない。

俺は何も見てない。

何も聞いてない。

全ては幻覚だ。

全ては幻聴だ。

全て 全ては幻だ。

真実はたった一つだけ。

俺にとつての真実は、診療所にいる弟だけ。

だから。

だから

「……だから、絶対……絶対……」

ダメだ！

ダメだ、ダメだ！

俺はあいつを守ってやると誓った。

あの暗い部屋から連れ出してやると約束した。
心配するなつて。

夢を叶えてやるつて。

必ず助けてやるつて。

いつまでも一緒にいるつて。

だから。

だから。

だから

『……絶対に、忘れないでください』

何かが、頭の奥で弾けた。

「っ……あああああ……っ!!」

「カール!？」

頭痛。

「くっ……はあ……かはっ……っ!!」

吐き気。

いや、俺は実際に吐いていたのかもしれない。

誰かが俺の背中をさすっている。

激しい頭痛。

頭の中で銅鑼が鳴り響いているかのようだ。

……晴れ渡った夜空。

……ぽっかりと浮かぶ月。

……パチパチという火の爆ぜる音と、赤く染まる空。

「うあ……くうっ……!!」

……晴れ渡った夜空。

……ぽっかりと浮かぶ月。

……パチパチという火の爆ぜる音と、赤く染まる空。
あいつを背負った俺は……走って、走って

何度も、何度も。

同じ記憶が頭の中を駆け巡る。

……晴れ渡った夜空。

……ぽっかりと浮かぶ月。

……パチパチという火の爆ぜる音と、赤く染まる空。
走って、走って。

そして。

そして、あいつは

「っ……!!」

……ああ。

俺は。

俺は。

俺は

「カール……」

「……レ……ベッカ……」

指の隙間から見える地面には、やはり俺の胃の中の汚物が広がっていた。そこから異臭が漂ってくる。

覗き込むレベッカの顔は、いつもでは信じられないほどに心配そうで。

「……平気か、カール？」

「あ……あ……」

少し気分が落ち着いてきた。

「大丈夫……大丈夫だ……」

……晴れ渡った夜空。

……ぽっかりと浮かぶ月。

……パチパチという火の爆ぜる音と、赤く染まる空。

走って、走って。

……そう。

赤く染まる空。

黒い煙がそれを覆って。

背中にあいつを背負って。

裸足のまま、走って、走って。

泣きながら、走って、走って。

そして。

そして

「……あいつは……」

本当はわかっていた。

とつくの昔に理解していた。

「あいつはもう……冷たくなっていて……」

「……カール？」

目の奥が熱い。

「あいつ、昔より痩せてたのに、背負ってみたら昔よりもずっと重
くて」

「……カール？」

レベルカが驚きに目を見開いている。

「まさか、思い出したのか……？」

「あいつは……」

溢れ出した液体が、頬から指の隙間を伝っていった。

「あいつは……もう、いないんだ……」

わかっていた。

あの日、すでに気付いていたんだ。

息をしてないことだって。

鼓動が伝わってこないことだった。

本当はわかってた。

だけ。

だけ。

「……けど、俺にはあいつしかいなかったから……！」

「カール……」

「あいつがいなきゃ俺が生きる意味もなかったからッ！」

総てだった。

産まれてから途切れることなく続いた暗闇の中で。

唯一与えられた温もり。

唯一信じることできた安らぎ。

……総てだった。

あいつは俺が存在する上で、なくてはならないものだった。

無くしてはならないものだった。

だから、俺は。

「……それで、君は」

ゆっくりと、暖かい手が俺の背中を撫でていた。

今までに感じたこともないような、奇妙なほどに安らぐ感触。

「それで、遺体と手紙を診療所の前に置いていったのか」

「お前……」

どうしてそこまで知っているんだ、と、そう尋ねようとしたが、

「私は情報屋だ。そのぐらいことを調べるのは容易い」

先に答えた。

「……」

だが、それは可能なかただであって、どうして調べたのかということに対する答えではなく。

「君の弟は、診療所の人が丁寧に埋葬してくれたそうだよ。君から毎月送られる金の一部を使って、墓も建ててくれたらしい」

「……そうか」

少しだけ気持ちが悪くなった。

頭痛もいつしか収まって。

吐き気も消えている。

体は相変わらず重かったが、これもそのうち良くなるだろう。

「……約束だった」

足に力を込めてゆっくり立ち上がると、レベツカの手が離れた。

「医者に見せて、元気になって、そして一緒に幸せに暮らすんだって……」

向き直ると、向こうも真っ直ぐにこっちを見ている。

……いつもの表情のようだったが、少しだけ瞳が揺れているようにも見えた。

「けど……俺はその約束を守ってやれなかった。だから」

「それは仕方ない」

レベツカは小さく首を振った。

「君は子供だった。……結論からいうと、それはどうやっても実現できない約束だったと思う」

そうなのだろうか。

いや……それは今更言っても詮無きこと。

「君のせいじゃない。……いや、もしも君に罪があったとするなら」

頷いて、ピツと人差し指を立てると、

「叶えられない約束をしてしまったこと。そのことぐらいだ」

「……」

「例えるなら」

「……？」

そんな俺の疑問の表情に、レベツカはためらいもせず頷いて、
「プロポーズのときに『この世で一番幸せにしてやる』とか言うのと似ている」

「……は？」

一瞬、何の話だか理解できなかった。

「そんなの無理に決まってるというのに。それにあっさり頷く女も

女だ。そうは思わないか？」

思わず絶句して、

「……どこが似てんだよ」

一瞬遅れながらも、かろうじてそう突っ込むと、

「しかし血縁の上に同性とは、君もなかなかにぶっとなだ性癖を持つてるな」

「全然違うッ！」

湿った雰囲気がブチ壊れるのはアツという間だった。

どうやら俺たちの場合、どんな雰囲気になっても、結局行きつく先はこんなものらしい。

……いや、それはこいつなりに気を遣ってくれた結果なのか。

確かに今は、そんなしみじみとした雰囲気に浸っている場合でもなかったから。

「……とにかく」

手にしていたマフラー。

ところどころがほつれて、とても人前じゃ見せられないほど不格好。

思い出してみれば当たり前のこと。

……誕生日。

あいつは一年も前の、適当に受け答えた俺の嘘を覚えていたのだ。

「……こっちの約束は、守んなきゃ、な」

「なんだ？」

「絶対に忘れない。……昨日、あいつとそう約束したんだ」

「ほう」

レベッカは納得したように頷くと、

「いつの間にかロマンチストに転職したのか」

「うるせーよ」

「で？」

「助けに行く」

きつぱりと答えた。

『忘れない』という約束。

それをこうして、何とか守りきることができて、思い出した以上、放っておくわけにはいかない。

多分、俺が記憶を取り戻したのは、あの瞬間、俺の中で絶対的だった優先順位が入れ替わったから。

それはつまり、俺の存在に『新しい意義』が加わったということ。

迷うことなんて、あるはずもなかった。

「しかし」

レベツカはまるで俺を試すかのような目をして、

「さっきも言ったように、今から戻ったところであの子はもう連れ出された後だ」

「行き先、知ってんだろ？」

「ま、知ってるけど」

ちよつととぼけた感じで答えてから、いつものしれっとした表情で、

「また借金増えるよ？」

「この期に及んでまだ搾り取る気が、貴様は……」

とんでもない性悪女だった。

……いや、わかってたよ、そんなことぐらい。

「商売繁盛で結構なことだね」

平然とそう言って、レベツカはポケットに手をつ突っ込む。

「じゃあまずはこちら」

出てきたのは紙切れ。

「奴らの移動は馬車だ。時間的にはまだもう少し余裕があるから大丈夫だろう。……で、行き先だが、まずは今夜中に東の港町まで行って、そこから明後日の船で運ばれる手はずになっている」

「……」

受け取った紙切れには時間帯から馬車の走るルートまで、明確に

書かれていた。

……相変わらず恐ろしい奴だ。

「時間はそこに書いてある通り。大型の頑丈な馬車だから、ま、待ち伏せすれば見落とすことはないだろう。……はい、爆竹」

「……おい」

「ここから運ばれるのはあの子だけじゃなく、他に二人。色んなところから港町に運ばれて合流。ま、最終的には十数人になるらしい。

……はい、ナイフ」

「……おい。ちょっと……」

「はい、木槌」

「いや、木槌って……」

「馬車に鍵ついてるかもしれないし」

「つーかお前、いつの間にこんなもの用意して」

「御者の他に、中にも一人か二人ぐらい見張りがいると思うから。

……いざとなったら抜刀して」

「マジかよ……」

「爆竹で馬を混乱させて、相手が動きを止めたところを襲撃」

「暴走して止まらなかったらどうすんだよ」

「神に祈る」

「……ふざけんな、コノヤロウ」

「いや、正直な話、厳しいな」

「そこまで淡々と進めていたくせに、レベツカは急に厳しい顔になつて言った。

「相手も素人じゃないからね。一筋縄じゃいかない」

「……だろうな」

いくつかの町から集めて、それを船でどこかに売り飛ばそうって連中だ。そこそこデカイ組織がバックに付いているのは考えなくともわかること。

「つーかお前、ここまで用意周到だったってことは、最初から俺に協力するつもりだったんだろ？」

「ま、君が記憶を取り戻して、かつ情報料を払ってくれるなら」とことんあくどい奴だ。

まあ、それはいいとして。

「だったら、もっと奪還するのが楽な相手を選ぶとかなかったのか」

「ほほう」

レベツカはわざとらしくびっくりした声を出して、

「君が私を騙そうとしたから、それを回避するために仕方なくああいう方法を選んだのだが？」

「……そりゃそうだが」

「しかも君は、あの学長の申し出がなければ、私の目を盗んでとんでもないところにあの子を引き渡そうとしていた」

「とんでもないところ？」

「フリックⅡローバツク」

「……なんでそこまで知ってたんだよ」

そいつは俺が以前『バルバと大差ない男』と評し、四ヶ月前にファルを連れていこうとした例の金持ちのフルネームだった。

「しかもタダで」

「別に金が欲しかったわけじゃないからな。それに……お前が売ったようなところよりはマシだろ」

「わかってないな、カール」

レベツカは大袈裟なため息を吐くなり、首を横に振った。

「さつきも言った。……あの子にとって大事なことは、君と一緒にいられるかどうかであって、フリックの屋敷だろうがバルバの屋敷だろうが薄汚い娼楼だろうが、そんなのは大して変わらない」

「……」

「だったら君の手に金が渡る選択肢の方が、あの子にとってもよっぽど有意義な選択だと思わないか？」

「……」

反論したいのは山々だったが、実際にあいつ　ファルが望んで

そういう選択肢を選んでいる以上、俺が返す言葉なんてなかった。

「……それに」

そう言うと、レベツカは急に、ほんの少しだけ申し訳なさそうに目線を落とした。

「正直なところ、あの子を思いやる余裕などなかった。……君を追い込むことだけで私も頭が一杯だったからな」

「……お前は」

『追い込む』って言葉だけを聞くとイメージは悪いが。それはつまり、こいつがそれだけ俺の記憶を戻すことに真剣だったということだ。

「お前は……一体何なんだ？」

レベツカは真面目な顔で、

「失礼な質問だな。それでも人間らしい姿形をしていると思うよ」

「そういうことじゃない」

あまりふざける気にはなれなかった。

「お前は　いや。お前にとって、俺の記憶を戻すことは、そんなに大事なことであったのか？」

真剣にそう尋ねる。

……あくどいとか性悪とか色々言ったが、実際のところ、俺にこうして協力することは、こいつ自身にとってもとてもないハイリスクだ。

自分が仲介した『商品』を、別の人物に奪い返させようとしているのだから。

それはつまり詐欺行為であり。

依頼人に対する裏切りであり。

下手すりゃ俺同様、この界限では暮らしていけなくなる。

俺がファルのためにこいつを騙そうとしたのと、全く同じ状況なのだ。

仕事も住む場所も失うかもしれない。

それなのに、こいつは。

「前に言っただじゃないか」

だが、そんな俺の質問にもレベツカは冗談っぽい笑みを浮かべた。

「私は君を愛しているんだ。だから、愛する人間に幸せになって欲しいと願っただけのこと。だろ？」

「……真面目に答える気はなし、か」

肩を竦めると、レベツカは少し楽しそうに、

「ふふ……でも、少なくとも嘘ではないよ。他にも色々あるけど、それはわざわざ君に言うべきことでもない」

「そうか」

こいつらしい返答だった。

本当に大事なことは隠してしまう。

「でも、だから、正直なところ」

そしてすぐにいつもの表情に戻る。

「君があの子を助けに行くのには反対なんだけど」

「なんだよ、そりゃ」

「だってそうだろう？　きっとタダでは済まない。君には荷が重すぎる仕事だ」

「……言ってることがさっきまでと全然違うぞ」

呆れ顔で言うと、レベツカは真面目な顔のまま、

「それはまあ、君に記憶を取り戻させるために、あの子をダシに使っただけのことだしね。……私の第一希望を言うと、あの子のことは過去のこととして、君には新しい人生に踏み出して欲しいのだけだ」

悪びれもせずにあっさりとそんなことを言い放つ。

「……それは」

「でもね」

反論しようとした俺の言葉を遮って。

ゆっくりと目を閉じて。

……そして数秒。

冷たい風が俺たちの間を吹き抜けて。

目の前に立つこいつの髪を小さくなびかせて。
目を開けて。

その場の雰囲気、また少し変わった。

「……」

それを目の当たりにした瞬間、思わず言葉を失くす。

「長かったよ」

そこに浮かんでいたのは……見たことのない、微笑みだった。

まるで子供のような、何の意図も、何の思惑も感じられない、無邪気な微笑み。

「私も君も、これでようやく自由になれたんだ。……だから」

「……レベッカ……？」

「君は君の進みたい道を選ぶといい。私はただ、それを見守るだけだ」

「……」

そう言っただけを見つめる目は、優しく、暖かくて。

まるで母親のような。

俺にとっては初めての感覚。

（……どうして）

言葉が出ない。

様々な疑問が頭の中を渦巻いて、まとまらない。

「……それじゃあ、カール」

ゆっくりと背を向け。

俺から離れて。

「これでサヨナラだ。成功を祈っているよ。……そしてやるからには」

それから肩越しに振り返った。

「必ずあの子を助けてやるといい。今の君には、それが許されているのだからね」

「……」

一步。

二歩。

……離れていく。

「レベッカ……」

理由はわからない。

わからないが、何故か、こいつには二度と会えないような気がした。

……別れ。

俺にとっては二度目……いや、三度目の別れ。

一度目はわけもわからず一方的に与えられて。

二度目は自分の無力さに打ちのめされた。

そして三度目。

「……レベッカ！」

あるいはこれは、こいつがいつか俺に言ったように。

「なに？」

成長するために。

先に進むために必要な別れなのかもしれない。

「……世話になった」

本当はもつと言いたいことはたくさんあったが。

こういうとき、そういう言葉が素直に口をついてくる性格でもなく。

だが、そんな明らかに言葉足らずな俺のセリフにも、レベッカは怪訝そうな顔を見せて、

「君が素直に礼を言うなんて。今夜は雪か」

「……あのな」

「礼なら形に残るもので」

再び、視線が俺から離れて。

それが上空　晴れ渡った夜空へと向けられた。

「ま。本当は礼を言われる立場でもないんだけど……ね」
一步。

二歩。

三歩。

……今度こそ、彼女の足は止まることなく俺から離れていった。
離れていく。

「……」

俺は無言でそれを見送って。

残されたのは、予定の書かれた紙切れ、木槌、ナイフ、爆竹とマ
ツチ、マフラー……地面に落ちた茶封筒。

あとは俺が最初から身につけていたもの。

「じゃあ、な……」

聞こえるはずもなかったが、最後の別れの言葉を口の中だけで呟
いて。

そして俺もあいつの去った方角に背を向けた。

「……よし」

これ以上、別れを惜しんでいる時間はない。

あいつからもらった紙に書かれた時刻。

しくじるわけにはいかない。

作戦は……あいつが考えた通りにやるとしよう。

そうすればなんとなく、上手くいきそうな気がした。

（あまりに無茶すぎる作戦なんだが……）

とはいえ、そもそもたった一人でファルを奪還しようということ
自体が無茶な話でもあり。いくら無茶といったところで、四ヶ月で
借金返すよりは分のいい勝負だ。

とすると、状況は好転していると言っていいわけか。

（……いつの間にこんな樂觀主義者になったんだろうな、俺は）
ふと考えて、浮かぶのは苦笑ばかり。

胸につつかえていたものは全て消え失せた。

最優先にやらなきゃならないこともはっきりしている。

だったら、ためらうことに意味なんてない。

「行くか」

木槌を背中に背負って。

ナイフを懷に忍ばせて。

爆竹とマツチはポケットに。

不格好なマフラーはちょうど背負った木槌をカムフラージュしてくれた。

念のため、地面に落ちていた茶封筒も拾っておく。
上手く行きそうだ。

(……堅実が俺のウリだったのにな)

だが、何故だか上手くいきそうに思えてしまうのだ。
気持ちはすっきりしている。

夜空は晴れ渡っていて。

そこには丸い月がぼっかりと浮かんでいる。
だけど、火の爆ぜる音は聞こえてこない。

本当に、上手く行きそうだ。

なんとなく。

なんとなく

晴れ渡った夜空と、ぼっかり浮かぶ月

月影を追うように響く足音。

あの日もこんな夜だった。

手を差し伸べたくて、だけど臆病だった私にはそれができなくて。

そしてそのことを一番後悔した、あの日の夜。

あれから十数年。

……長かった。

あの日の悪夢をあれから何度見たことだろう。

親としては最低だったあの二人が、私を残して命を絶った日も、私が見たのはあの夜の夢。

……結局、私がどうしようと結末は変わらなかったのかもしれない。

あるいは、今よりももっと悪くなっていたのかもしれない。だけど。

助けを求める声は、いつまで経っても私の耳から離れなくて。そして私は今日、ようやく長年の想いを遂げることができた。あの子に手を伸ばし、触れて、導くことができた。

……そしてこれから訪れる結末。

これから後に私の眼前に広がっているであろう光景。

それがどんなものなのか、私にはわからない。

過剰な期待など、していなかった。

精一杯の努力や。

真っ直ぐで一途な想い。

あの子の言葉ではないが、それらは強固な現実の前にはひどく儚くて脆いものだ。

でも……それが私とあの子の選んだ道だから。

いざというときのために。もしかしたら最後になるかもしれない、あの子の願いだけは叶えてあげられるように。

準備しておこう。

幸い、そのための資金は十分にある。

あの子が診療所に送り続けていた金……それは十年以上の時を経て、一つの財産ともいえる額になっている。

これだけあれば、何をするにしてもしばらくは困ることもないだろう。

できれば。

できればあの子が自ら彼女の手を引いて欲しいとは思っけれど。もしそれが叶わなかったら。

……とにかく。

どちらにしても今は、色々と準備しておかなきゃならない。

……ガタアンツ!!

盲目である彼女の視界は、朝でも夜でも、夏でも冬でも、どんな時であつても等しく暗闇で。

だから、状況を把握するには人一倍の時間がかかる。

それが物音だけで明白な状況だったりしない限り、自ら現状を把握するのはとても難しいこと。

だからそのときも一体何が起きたのか、すぐには把握できなかった。

『その瞬間』までは、ほぼ一定のリズムで揺れていた馬車。

すぐ近くにいた見張りらしき一人と、どうやら同じ境遇らしい二人分の少女の気配は、一言も言葉を発することはなく。

この先待っているであろう運命に、色々と思いを巡らせて。挫けそうになる心を誤魔化すために、何度も髪留めに手を伸ばして。

……それは、その矢先のことだった。

ガタンツ!

馬車が大きく揺れて。

響いたのは、パンパン! という立て続けの爆裂音。

「っ……!!」

誰かが小さな悲鳴を上げた。

外からは御者らしき男性の怒鳴り声が聞こえて。

馬車がようやくその動きを止めると、中にいた男性が外に飛び出

していった。

……何が起ったのか。

もう一度髪留めをギュツと握る。

聞こえるのは外の怒鳴り声と、おそらくは近くにいた同い年ぐらいの少女たちの小さな悲鳴。

盲目である彼女には全く状況が把握できていなかった。

金属音のようなものも聞こえて。

誰かが激しく争っているのを理解できたぐらい。

「……」

そしてそれ以上、状況を理解しようとはしなかった。

意外にも恐怖心はそれほどなく。

それは、これ以上どうなるかと大して変わらないという諦めに似た気持ちと。

もう一つ。

あるいは

もしかしたら

そんな、まるでおとぎ話のような奇跡の展開を頭の片隅で妄想していたから。

……おとぎ話。

そう。まさにそんな感じだ。

お姫様のピンチに駆けつける白馬の王子様。

……いや。

彼女はこんな状況にも関わらず、小さな笑みを浮かべていた。

どちらかというと、村娘のピンチを気まぐれで助ける浪人さんかなあ、と。

……ガタアンツ!!

いつの間にか外での争いの音は止んでいた。

激しい物音は、馬車のドアが乱暴に開けられた音。

ぎしっ……と、床が鳴る。

(……?)

その瞬間、彼女は顔を上げた。

ぎしっ……

足音。

誰かが馬車の中に入ってきた音。

……いや、彼女にとって重要だったのはそこではない。

「ひっ……！」

「やああ……！」

そばにいる二人が小さな悲鳴を上げた。

そこから察するに、入ってきたのは最初からここにいた男性ではない。

……そんなはずはない。

何故なら、

「あ……」

その足音は、彼女が良く知っている人物のものと非常によく似たリズムを刻んでいたから。

そして次の瞬間、

「あの野郎……木槌なんて必要なかったじゃねえか……」
声がして。

今度こそは、どうやっても間違いない。

彼女にとっては『明白な』状況。

「ファル、平気か？」

「……あ、えと」

妄想が現実になってしまった。

全く現実味のない妄想だったはずなのに。

その展開にどう反応してよいものやら、彼女には全く判断がつかない。

「そ、その……」

そしてかろうじて口をついた言葉は、

「……こ、この度は危ないところを助けていただきまして」

「なんだそりゃ」

呆れたような声がして。

手が触れた。

グッ……と力がこもって、自然と少女の体は彼の腕の中に収まる。

「あ、あのー……」

まだいまいち現状が把握できてない。

いや、把握はできているのだが、まだ脳がそれを吸収しきれていなかった。

「騒がせて悪いな」

彼が発した言葉は、どうやら彼女ではない他の二人に向けたものらしい。

同時にパサツという、何かが床に落ちる音がして、

「ついでに悪いが、俺にはお前らの面倒まで見る余裕はない。このまま外の奴らが動き出すまで待つのもよし。その金を持って逃げるもよし。……お前らの自由だ」

「っ……」

「……あ」

その二人から明確な返事が戻ってくることはなかった。

「行くぞ、ファル」

「わっ……」

そして彼女がようやく状況を把握できたのは、強引に馬車の外に連れ出されてから。

しかも、しばらく走った後のことだった。

「もっ、もしかして……カーライルさんですかッ!？」

「誰だと思ってたんだよ、お前」

声質。

口調。

反応。

何度聞いてみても、それは彼女が良く知っているものだ。
おそらくは誰かの声マネでもない。

なにより……繋いだ手の温もりが、それを明確に示している。

だが、明白であっても、彼女にとってそれはにわかには信じ難い出来事だった。

「ど、どーして！ カーライルさんは今頃大金を手に入れて悠々自適の生活を送っていらっしやるはずでは！？」

「……それ、遠回しに俺を非難してるのか？」

「そ、そーではなくて……」

少し早足で引っ張られて、懸命にそれに付いていきながら、

「だ、だって、こ、こんなことしたら……」

上手く口が回らない。

「カ、カーライルさん、お仕事なくしちゃって、弟さんが……！」

「……あいつ、そのことも喋ったのか」

独り言のように呟いて舌打ちすると、それでも足を緩めることはなく、

「それはもういいんだ」

「もう、いいって……」

嬉しくないわけではない。

それどころか、かなり、ちょっと言葉では言い表せないぐらい嬉しかった。

だって、おとぎ話だと思っていたことが現実になって。再びこうして、触れ合って、言葉を交わすことができたのだから。

けど……それとは別に、かなり複雑な心境も存在しているわけで。

「だってカーライルさん、あんなに弟さんのこと」

「それは……」

答える口調は少し苦々しげだった。

「俺の勘違いだった」

「え……？」

「俺には弟なんていなかった。それに気付いただけのことだ」

はあ、はあ、と。

少しだけ息が荒い。

彼女が付いていけているほどだから、彼にとってはそれほど速いペースではないはずだったが、どうやらそれ以前にかなり体力を消耗していたようだ。

「……」

「納得……できないのか？」

「でっ……できるわけないです！」

「だったら……」

ふっ……と。

盲目である彼女には確認できなかったが。

彼が小さく微笑ったような気がした。

「弟よりもお前の方が大事だと気付いた、ってのはどうだ？」

「は」

一瞬、何を言われたのか理解できずに。

その直後、早足で駆けているのとは別の意味で全身に血が巡った。

「そっ……それは非常に喜ばしいことなのですが！　そ、そんなのは絶対嘘に決まっています！」

「……いや。少なくとも嘘じゃあないな」

「で、ですが！」

どうしたらいいのだろう。

転ばないよう走りながら懸命に返す言葉を考えたが、頭の中がグルグルと回って、いまいちまとまらず。

いつそのこと、考えることを放棄してしまいたかった。

たとえ向かう先がどんなところであっても。

何も考えずに、このままついていければそれでいい。

グッ、と、繋いだ手に力を込める。

それは二度と手に入らないと思っていた、彼女にとって唯一の温もり。悲壮な決意とともに手放したそれが期せずして帰ってきて、それをもう一度投げ捨てられるほど彼女の心は強くない。

ただ、その一方で いや、だからこそ、彼にとっての弟がどれだけ大事だったかというのも理解できていた。
ジレンマだ。

……だが。

「ファル」

そんな彼女の苦悩も、彼のたった一言で全て吹き飛んでしまった。

「だから言っただろ。またすぐ会えるって、な」

「」

ギョツ、と。

もう一度、繋いだ手に力を込める。

自然と、考えることなんて出来なくなつて。

「これでも約束は守る方なんだ」

……涙が込み上げた。

それは、おそらくどちらもが嘘だとわかっていた約束で。

叶わないことがわかっていて交わした約束だった。

それなのに。

「っ……！」

言葉にならない。

言いたいことはたくさんあったのに、何も言葉が出てこなかった。

はぁ、はぁ、と。

二人分の吐く息が静かな路上に響く。

涼しげな風が吹いて。

少し、速度が緩んだ。

「……ファル」

はぁ、はぁ、と。

息を切らせていた。

「この道は……お前の……良く知っている場所だ……」
そう言つて、導かれた手の先。

手に触れた冷たい感触は、ツタの這う家の壊れかけた塀だった。それは彼女が今までいた家から、公衆浴場へ向かう途中にある目印。

つまりそこは……すでに家の近くのようなだった。

「……？」

それを理解して、少し怪訝に思う。

彼女が聞いていた話と少し食い違っている。

……彼はこうすることによって、住む場所も仕事も失うはずだった。

はあ、はあ、と。

荒い呼吸音が止まらない。

「……情けないな……」

「え……？」

進む速度はすでに、歩いているのとはほとんど変わらなくなっていた。

「カーライル、さん？」

ギュツ、と握る手に力を込める。

だが、向こうからは反応が返ってこない。
力なく。

風を切る音が小さくなって。

ポタツ。

「え……？」

代わりに聞こえてきたのは、水滴のようなものが滴り落ちる音。

「最後の最後まで……あいつに頼ることになっちまうとは……」
はあ、はあ、と。

息が荒い。

「え？　なんで……？」

速度が落ちて、彼女の息はとつくに落ち着いていた。

そもそも、元からしてそれほど全力疾走していたわけではない。
そんな速度で、彼女よりもずっと体力のある彼が、こんな状態になるのはどう考えてもおかしい。

絶対に、おかしかった。

「なんで……！ カーライルさんッ！！」

足を止めて彼の前に回り込む。

繋いでいた彼の右手を離して。

「……おい、ファル……」

最初に触れたのは、おそらく彼の右脇辺り。

異常は、ない。

次に触れたのは、その逆の左脇。

ぬるっ……という、嫌な感触がした。

「あ……！！」

ポタツ、と、生暖かい液体が彼女の手を伝って落ちる。

「これ……カーライルさん……」

自らの手の平を見つめる。

見えるはずもない、手の平。

何故かはつきりと、視界が赤く染まって見えた。

「血が……出て……！！」

「……ファル」

ゆっくりと。

彼の右手が頭の上に。

「約束は……守ったからな……」

「……カーライルさん！？」

がくん、と。

膝が落ちて。

だらりと力なくぶら下がった左腕が、彼女の体に触れる。

同時に嗅覚を覆い尽くす、紛うことなき血の匂い。

「な、なんで……！！ どうしてこんなっ……！！」

怪我をしている。それも彼女の乏しい知識ですら異常だとわかる、

それほどの出血量。

頭の中が熱くなった。

「ど、どーすれば！ どーすればいいんですか！？ カーライルさんッー！」

何も考えられない。

「お、お医者さん！ お医者さんはどこに ー！」

「……ファル……」

頭に乗せられたままの右手が、ゆっくりと動いた。

髪の上を滑って、首筋に触れ……それから、グツと力がこもって顔が近付く。

そして、言った。

「家に戻れ……後のことは、きっとレベッカの奴がどうにかしてくれる……」

「レ、レベッカさんですね！？」

その言葉に、大きく反応する。

「レベッカさんなら、カーライルさんを助けてくれますよね！？
レベッカさんなら っー！」

「……行け、ファル」

「そしたら……そうしたら、今度はずっと一緒に……ー！」

「……行くんだ……」

ゆっくりと。

触れていた手が離れる。

「いや……いやです！ カーライルさんー！」

返事をして欲しかった。

大丈夫だと。

約束を交わして欲しかった。

そうすれば、彼は必ず約束を守ってくれるはずだったから。
だが、

「……ファル」

おそらく微笑んで。

そして返ってきた言葉は、彼女の期待していたものではなく。

「実を言うと、結構キツいんだ……だから、これ以上、下手な荷物を背負わせないでくれ……」

「カーライルさん」

「ったく……約束なんて、軽々しくするもんじゃねえよ、ホントに、な……」

「っ　　！！」

ハッとして首を振った。

どうにもできない。

ここにいても、どうにもならない。

これは現実だから。

都合の良い妄想でもおとし話でもないから。

約束だけじゃ、どうにもならない。

約束を果たすためには、行動しないとイケない。

グツと拳に力を込めて。

胸にあつたのは、一つの決意。

「……行きます！！」

彼が約束を守れたのは、きっとそうなるように行動してきたから。

今度は自分も行動しなきゃならない。

そう思った。

「レベツカさんのところに行ってきます！！」

行動しなきゃ何も始まらない。

やれるだけのことをやる。

現実を動かすにはそれしかないのだ。

「……ああ……」

まるで力のない彼の返事を背中に聞いて。

……それでも思うとおり動いてくれないのが現実なのだけど。最初から諦めるよりはよっぽどマシだと。

そう、信じて。

そして彼女は暗闇の中を懸命に駆け出した。

……晴れ渡った夜空。

……ぽっかりと浮かぶ月。

……静まり返った夜の町。

溢れ出しそうになる涙を堪え。

息を切らしながら。何度も転びそうになりながら。

走って。

走って。

その7『エピソード』

隅々まで広がった青空。

爽やかな小鳥の鳴き声。

暖かい日射しの中に、はしゃいだ子供たちの声が溢れている。

「先生、先生っ！　せーんーせーいーっ！」

近くには小さな教会が建ち、その脇には広い庭と大きな一本の木がある。

そしてその根元に、数人の子供と一人の女性がいた。

「はいはい。どうしたんですかー？」

先生と呼ばれた人物は、子供たちの方に顔を向けて、それから二ツコリと微笑んだ。

そこにいるのはフリーナ　ファルという名の女性。

盲目で、だけどそんな暗い印象など全く与えない、暖かな笑顔の持ち主だった。

「昨日のお歌！　もう一回聞きたい！」

「あ、わたしもー！」

ファルの膝に入り込んだ四、五歳の少年に、そばにいた二人の少女が同意する。

「え、昨日のがいいんですかー？」

少年を抱いたファルは、にこやかな笑顔で聞き返しながら、

「今日は違うお歌を準備してたんですけど……」

「あ、わたし、そっちがいい！」

「わたしも！」

すぐさま態度を翻す女の子二人。

だが、膝の中の少年は反論した。

「ええー！　ボク、昨日のお歌が聴きたいなあー……」

「うーん」

と、ファルは少しだけ困った顔をして、

「じゃあ、まず最初に今日のお歌を歌って、それから昨日のお歌にしますか？」

「うん！」

これには誰も異論を挟まなかった。

「じゃ、いきますねー」

コホン、と軽く咳払いをして、目を閉じ、息を吸い込む。

その一瞬、子供たちもしいんと静まり返って。

そして、

「……………」

その小さな口から歌が流れ出す。

爽やかな風に乗って、透き通った声とどこか懐かしいメロディ。

忙しく道行く人々も、思わず足を止めて聞き入ってしまいそうな、そんな歌だった。

パチパチパチパチ。

二曲歌い終わって、少年少女たちから惜しめない拍手が送られる。

「どうもありがとうございますー」

子供たちの拍手に、照れ笑いを浮かべながら嬉しそうな顔のファル。

「やっぱり先生、すごい！」

一番近くで聞いていた、彼女の膝の中の少年が尊敬の眼差しを彼女に向けた。

同時に、やはり憧れの目で少女たちも声を上げる。

「ねえねえ。私も大きくなったら先生みたいに上手になれるかなあ？」

「頑張ってたくさん練習すればなれると思いますよ」

にこやかに答えるファルに、少しだけ年長の少女が不思議そうな顔をして、

「ファル先生もやっぱりたくさん練習したの？」

「もちろんです。というより、私の場合はそれしか取り柄がなかったの……」

「そんなことないよ!」

冗談っぽく答えたその言葉に、子供たちが真面目な顔で反論した。「先生つてお歌だけじゃなくて、優しいし、すごく美人だもん!」

「あはは……どうもです」

やはり照れくさそうにすると、

「では、誉められてしまったので、調子に乗ってもう一曲歌っちゃいますよー」

ワアッ、という、子供たちの歓声が上がって。

ファルはゆつくりと目を閉じた。

ほんの少し、先ほどまでとは雰囲気が変わって。長い髪が春風に泳ぐ。

「……」

そして流れたのは、ほんの僅かに悲しげなメロディだった。

「……」

「……」

「……」

「……」

目を閉じ、まるで歌の主人公になりきっているかのように歌うファルに、はしゃいでいた子供たちもやがて静かになっていった。

……ポカンと口を開けて見上げる膝の中の少年。

……じつと黙ったまま耳をそばだてて聞き入る少女。

……途中から少しだけ瞳を潤ませ始めた年長の少女。

やがて歌が終わると、

「……ね、先生?」

子供たちから浴びせられたのは賞賛ではなく質問だった。

「はい。なんででしょうか?」

「今のはどんなお歌なの?」

そう問いかけたのは年下の少女。どうやら歌詞の内容が彼女にと

つては難解だったらしい。

それに対し、ファルよりも先に年長の少女が答えた。

「お別れの歌、だよな？」

「はい。正解ですよー」

ファルはそう言っただけで頷いた。

「これは、大事な人とお別れする寂しさを歌った歌なのです」
「お別れ？」

膝の中の少年が不思議そうな顔で見上げる。

「だから先生、泣きそうになりながら歌ってたの？」

「え。……そーですね」

指摘されたのが意外だったのか、ファルはちよつとだけびっくりにした顔をしてから、

「ちよつとだけ昔のことを思い出してしまいました」

答えてから、やはり照れたように笑った。

「先生も誰かとお別れしたの？」

そう言ったのは年下の少女。

ファルはゆっくりと頷いて、

「はい。とても大事な方とお別れしたことがあるのです」

「先生、泣いた？」

「いえ。本当は泣きたかったのですが、そのときは泣きませんでした」

「どうして？」

「うーん、そーですね」

少女の問いに、ファルは少し考えてから、

「泣いてお別れしたら、その人が安心できないかな、と、そう思いました。グツと我慢したのです。……結局、後で一人になったときにたくさん泣いてしまいましたけど」

「ふうん？」

よくわからない顔で少女が首をかしげる。

そこへ、膝の中の少年が少し身を持ち出して口を挟んだ。

「ねえねえ！ それじゃあ先生が悲しくならないように、ボクが先生のおヨメさんになつてずっと一緒にいてあげるよ！」

「うーん。お嫁さんですかー……」

と、ファルは当然のように少し困った顔をする。

「馬鹿ねー」

そこへ、年下の少女が口を挟んだ。

「男の子はおヨメさんじゃなくておムコさんなの」

「え？ そうなの？」

少年はびっくりしたような顔をして、

「じゃあ、おムコさん！ いい！？」

「ダメよ、そんなの」

そこへ口を挟んだのは年長の少女だった。

「ファル先生にはちゃんと、心に決めた人がいるんだから」

「こころにきめたひと……？」

よくわからない顔で少年が首をかしげる。

「先生？ そーだよね？」

「え？ ……そうですねー」

ファルは曖昧な笑顔を浮かべた。

「えー、だれなのー？」

理解してない様子ながらも、少年がそう問いかけた。

「決まってるじゃない。そんなのー……」

年長の少女がそう言つて。

ふと、その視線がクルツと振り返る。

「あ、来た！ 先生っ！」

気付かれたようだ。

少女がこちらに向かって手を振ってくる。

「カーライル先生！ こっちこっちー！」

「あー……」

その声で全員、遠くで眺めていた俺の存在に気付いてしまった。

……どうにも『先生』って呼ばれ方は未だに背中がむず痒くなっ

て仕方ないのだが、ひとまず呼ばれるままに子供たちのところへと向かうことにした。

「カーライルさん？　神父様の御用は終わったんですか？」

ファルも笑顔のまま、盲目の瞳をこちらに向けてくる。

「ああ」

駆け寄ってきた子供たちに手を引かれ、半ば強引にファルの座る木の陰まで連れてこられた。

「子供たちにあまり危ない遊びを教えないでくれって説教喰らったよ」

「……あはは」

ファルがおかしそうに苦笑する。

仕草を別にすると、外見的にはもう子供っぽいところはすっかり影をひそめていて。

……三年だ。

俺がこいつと出会ってから、すでにそれだけの月日が流れている。

あの日　目を覚ました先は見覚えのない薄暗い部屋のベッドの上だった。後から聞いたところによると、そこはレベツカの奴が懇意にしている医者家で、最初から俺が運び込まれることが予定されていたらしい。

相変わらず準備のいい奴で。

もちろん『医者』といつても、あいつと親しいことからわかるように真つ当な医者などではなく　まあ、だからこそ、俺みたいな色んな意味でのお尋ね者でも長いこと匿ってもらえた。

一時は結構危なかったらしい。というか俺自身、気を失う直前に、おそらくダメだろうなと感じていたぐらいだし、当然と言えば当然のことだ。

むしろ助かったことの方が未だに不思議なぐらい。

ファルのヤツは俺が意識を取り戻すまでの間、ずっとベッドの横

で泣きながら看病を続けていたらしく、意識が戻ったときには、寝不足だか泣き疲れたかよくわからない顔になっていた。

で、動けるようになってからようやく、左腕が途中からなくなっていることに気付いたが、それ自体は大した問題でもなく。

あのときの左腕からの出血や傷の深さを考えるとむしろ納得だったし、腕の一本ぐらい、こいつの盲目に比べれば大したハンデでもない。

手を引いてやるには右腕一本があれば十分だったから。

そして俺が動けるようになるとはほぼ同時に、俺たちは町を出た。

幸い、俺が診療所に送り続けていた金（これもファルがレベツカの奴から預かっていた）はかなりの額になっており、当座の資金にそれほど困ることはなく。

結局、レベツカの奴には会えずじまいだった。

どうしても会いたくて去り際にほんの少しだけ探ってみたが、前の家はすでに引き払っており。俺の行動を読んだ上でわざと姿を隠ませたのだとしたら、自由に動くことのできない俺の力で探し出すことは到底不可能で。

あいつに聞きたいことは、まだ山ほどあった。

意識を失っていた間、あいつは自分の行動の理由を『罪滅ぼしだ』とファルに語ったらしい。

……最近になって、あるいは、と想像することがなくもない。

すでに薄れかけた最初の記憶の中。両親とともに確かに存在していた、俺にとってはあまりにも印象の薄い年上の少女。

それがあいつだったのだとしたら　なんて。

それらはすべて憶測に過ぎないし、そうだとしたら出来すぎている。

ただもし、万が一にでも再び会うことがあったなら、そのときは試しに名前でなく、もっと一般的な呼び方であいつのことを呼んでみようかと思っている。

憶測が事実だったとするなら、きっとあいつの驚く顔が見られる

に違いない。

もちろん礼も言わなきゃならないだろう。

たとえばあいつの言う『罪滅ぼし』が憶測通りだったとしても、あいつには何の罪もないはずだった。

あいつが俺に対して同じことを言ったように。

その頃はあいつだって何の力もない、ただの子供でしかなかったのだから。

手を差し伸べたくても、それが許されない立場だったのだから。

……旅は一年以上にも及んだ。

学もなく、人脈もない。俺は片腕を失っていたし、旅のパートナーは盲目。

途中には数え切れないほどの困難があった。

が、今はもうそれについてわざわざ考えることもないだろう。

この町に辿り着いて、この教会の神父と出会い、そして孤児院を兼ねるこの場所でファルと共に子供たちの面倒を見ることになったのが、やはり一年前。

孤児院を毛嫌いし、あんな仕事をしていた俺には最も似合わない職業だと思ったが、こいつに言わせると、

「多分、天職だと思います」
だそうだ。

昔は同じ孤児だったとはいえ、かなり鬱屈していた俺に子供らの気持ちができるかどうかはかなり不安だったのだが……まあ、今のところは上手くやれてると思う。

神父たち老夫妻には今日のように時折説教を食らうが、関係は比較的良好。子供のいない彼らは、俺のことをまるで実の息子のように扱ってくれる。

……今までやってきたことを全て告白して、彼らがそれでも俺を受け入れると言ってくれたときは、不覚にも涙が込み上げた。

まあ、そんなこんなで、なんというか。

月並みな言葉で言うと、今は『幸せ』だ。

受け入れることをためらってしまうほどの安らぎ。

生活自体は決して楽じゃないし、子供たちの面倒を見る以外にも色々仕事があつて大変ではあるが、それでも。

俺はかつてないほどの安らぎを、ここで感じているのだ。

「……ね、ファル先生。先生はカーライル先生と結婚するんだよね？」

「ええ、そうなのー？」

子供たちの言葉は、どうやらさっきの続きらしい。

……まあ、そういう会話内容だったからこそ、俺は巻き込まれないように遠くから眺めていたのだが。

「うーん」

子供たちの言葉に、ファルは笑顔のまま少し考えて、

「そうですね。そうなたらいいですねー」

「ならないの？」

不思議そうに首をかしげる少女。

「ええ、それは」

その問いかけに、ファルは微笑みながら、

「カーライルさんのお心次第ですからー……」

「……」

それは決して、子供たちに対するリップサービスなんかじゃなく、不思議なことに、俺は未だに慕われているようだった。

……こいつはもう、俺の庇護下にはない。神父たちという新たな保護者を得たし、もう俺に頼り切らなくても生きていけるはずだ。それなのに。

ここでの一年間の生活。

俺の手を離れてからの、こいつの態度。

……何も変わっていなかった。

「私は、ですね」

神父に呼ばれ、そばにいた子供たちが全員いなくなる。

どうやら勉強の時間らしい。

「ん？」

ほんの少し出来た、静かな空白の時間。

涼やかな風の中、ファルは俺を見上げていた。

……月日が流れるにつれ、こいつは当初の期待を何ら裏切ることなく、当たり前のように美しく成長していく。

もう、子供だ子供だと一蹴することも難しくなってきた。

「カーライルさんのおそばに一生お仕えできるなら、きっとこれ以上ないほど幸せだと思うのです」

「……」

だから最近は、そうならそうならでいいのかもしれない、とも考えるようになった。

こいつがいなければ、今の俺の幸せはなかった。だから、もしも俺がこいつを幸せにしてやれるのなら、ためらう理由なんてないんじゃないか、と。

多分、相手がこいつなら、俺もそれなりの態度で応えてやること出来るだろうし。

……ただ、

「別に召使いを雇う気はないんだがな」
今はまだ。

まだもう少し慎重に様子を見ておこうと思っている。

もしかしたらこの新天地で、新しい生活の中で、もっとこいつに相応しい相手が現れるかもしれない。他の人間と見比べて、俺の嫌なところや未熟なところに気付いて愛想を尽かすかもしれない。

……いや、それも結局、結論を引き延ばすための口実でしかないのか。

詰まるところ、俺は自分に自信が持てないだけなのかもしれない。

「召使いでも、構わないですよ」

それでもにこやかにそう答えるこいつは、もうずっと以前から心を決めているかのようで。

「ただ、お側にいられることが幸せなんです。……あ、と言いましても、その」

言ってから、少しだけためらうと、

「カーライルさんが他の方とご結婚なさったりしたら、ちょっとぐらいは泣いちゃうかもしれないですけどー……」

「……」

無言の俺に、ファルは慌てたように付け加える。

「で、でも、一晩ぐらいです！ その後は、ちゃんと祝福できますから！」

「……アホか」

真顔でそんなことを言うこいつが、俺には可笑しくて仕方ない。

それこそ余計な心配だ。こいつを受け入れることさえためらう俺が、他の女を愛することなんてできようはずもないというのに。

だが、

「……私の中では、カーライルさんはものすごいハンサムさんで、きつと女の方にモテるはずなんです」

ファルは目を閉じて、緩やかな風に髪を小さくなびかせながら呟くようにそう言った。

「ほう」

「ですからきつと、私と並ぶと月とすっぽんだったりするわけです」

「月とすっぽん、か」

あまり異性間で使う表現じゃない気もする。それに、もしもそういう表現を使うとしたら、どっちかというところこいつが思ってるのは立場が逆だろう。

ま、言っても信じないから言わないが。

「なので、その……」

言ってからやはり少しためらいつつも、人差し指、中指、薬指の三本を俺の目の前で立ててみせた。

「特典付き、ってことでどうでしょう？」

「……特典？」

怪訝な声を返してやると、

「はい。……その、本当なら私だけを見て欲しいのですが、それはたぶん、カーライルさんにとってはとても難しいことだと思いますので」

「……」

もしかしてこいつは、俺のことをプレイボーイかなにかと勘違いしてるんじゃないだろうか。

俺はそういった関係はかなりきちんとしている方なのだが。

「そこで、これです」

そんな俺の思いも余所に、ファルは先ほど立てた三本の指を、俺の目の前でもう一度強調してみせる。

「もしも私をもらっていたら、三回までは見て見ぬフリを」

「なにが」

何となく想像できるが、それでも敢えて聞き返すと、

「え……あ、ですから、その」

ちよつと困ったような顔をしながら、ファルは答えた。

「三回までは浮気をして大丈夫ということ……どうでしょうか？」

どうでしょうか、じゃない。

（……アホだな）

三年経つても治らないのだから、やはりこいつはいつまでもこのままなのだろう。

ま、今となつては、それはそれで……という気がしないでもないが。

「……う」

俺が無言だったのを勘違いしたのか、ファルは少し泣きそうな顔をしながら親指と小指を広げて、

「じゃ、じゃあ……五回で……」

「その五回つてのは」

俺は真面目な声で聞き返してやった。

「文字通り五回なのか。それとも五人つてことか？」

「えっ……えっと、五人だと、私は六分の一ってことですよね……？」

自分で言つて、勝手に悲しそうな顔をしている。

そして少し考えた末、

「うう……ぐすっ……じゃ、じゃあそれで……」

「……あのな」

涙ぐむぐらいなら言わなければいいものを。

そもそも、俺はそんなに器用な人間じゃない。

（つつく）

しゃがみ込む。

「え？」

俺の行動に気付いたファルが、不思議そうな顔になった。

そして次の瞬間。

「……わ！ カ、カーライルさんっ！？」

「暴れるな」

飛び跳ねそうになった小さな体を抑え、右手で軽く頭を抱いてやる。

心なしか以前よりも柔らかかみを増した暖かい感触を腕に感じつつ、そっと目を閉じた。

……悪くない。

いや……多分、俺には勿体ない。

「俺なら、許さない」

「……え？」

ゆっくりと目を開けて言った。

「お前の旦那になる奴が浮気なんかしようもんなら、腕の一、二本はへし折るかもしれん」

「……？」

ファルは一瞬、理解できないというような顔をしたが、

「あつ、あああああ！ それってどういう！？」

「そのままの意味だ」

ポンと頭を叩いて、離れる。

「そつ、そのままと言われましても！ つまり、その、喜ぶべきなのか、それともガツカリするべきなのかという、もっとも重大な部分がはつきりしてないわけでした！」

「好きなように想像しておけ」

それで多分、大きく間違っちゃいない。

「す、好きなように……」

惚けたように呟くと、その頬に徐々に赤みが差してくる。

……なんとなく付け加えておきたくなった。

「想像するだけならタダだからな」

「うう……カーライルさん、意地悪……」

不満そうに言つて、拗ねた顔で俺を見上げる。

「……」

なんといえいいのか、こう 以前に比べると色々やりづらくなつてしまった。

推定年齢もとくにボーダーラインを越えてしまったようだし。

正直な話、たまに心穏やかでいられないときがあるのも確かなことで。

転機は、そう遠くない未来に訪れるのかもしれない。

……ひゅう、と。

風が吹く。

「カーライルさん」

「なんだ？」

澄み切った青空。

燦々と輝く太陽。

子供たちのはしゃぐ声と。

風に揺られながら微笑むこいつがいて

「現実つて、意外とメルヘンチックですよね？」

「そうか？」

「はい」

ニッコリと笑って、そしてファルは言った。

「私にとつては、カーライルさんに出会えたこと自体がメルヘンなのです」

「……」

言われてみればそんな気もしてくる。

陳腐な言い方になるが、数え切れないほどの人間がいる中で、俺とこいつが出会う確率なんてどれほどのものだっただろうか、と。

そう考えてみれば、確かにこの世は意外にメルヘンで溢れているのかもしれない。

もちろんそれ以上に、辛いことも苦しいことも存在してはいるけれど。

（けど、ま……）

こんなのも悪くはない。

澄み切った青空。

燦々と輝く太陽。

子供たちのはしゃぐ声と。

風に揺られながら微笑むこいつがいて。

もう目を閉じる必要はなかったし、耳を塞ぐ必要もない。

バチが当たりそうで、自らを不幸だと自嘲することさえ出来なくなつた。

「なあ、ファル」

言つて、俺はファルの隣に腰を下ろした。

額に手をかざし、青々とした天空を見上げる。

「はい？」

「近いうちに、少し遠出しようかと思つてる」

「え？」

ファルはきょとんとした顔をした。

「神父にはもう許可ももらつてあつてな。生活も落ち着いてきたし、

そろそろ行つとかなきゃならないと思つてたんだ」

「……あ」

どうやら俺の言いたいことがわかったらしい。

「かれこれ、十五年ぐらいにもなるからな。そろそろ顔出ししとかねーと」

「……そーですか」

ファルは黙つて、何事か考えているようだった。

「なんだ？」

問いかけると、ファルは躊躇した。

膝の上に置いた手の指が少し忙しない動きを見せて、

「あ、あの……それって、私がついていたりしても大丈夫でしょうか？」

「なに？」

少し驚く。

「あのな。遠出つつつても、せいぜい半月ぐらいで……」

「あ、あの！ 別に寂しいからとかそーいうことではなくてですね！」

指の動きが止まり、顔を真っ赤にして俺を見上げる。

「その、ご、ご挨拶をしておかなければならないかと思ひまして」

「」

「はあ？」

何の挨拶だ。

全く理解できない俺に、ファルは意味不明の身振りを加えながら、
「つ、つまりですね！ 私はその方にとって、カーライルさんを奪つてしまった憎き恋敵みたいな感じなわけですね！ 御報告とお詫びをしなければ……」

「……違うだろ」

まだ何も奪われてないし。

ついでに言うと、恋敵つてのもかなり違う。

「い、一応、面通しをしておくべきかと！」

「お前、多分面通しの意味がわかってない」
それは犯人を割り出すための方法だ。

「うう……」

どうやら違う理由があるらしい。

相変わらずわかりやすい奴だった。

「なんだ？」

「そ、その……」

やはりためらって。

それからギュッと俺の服の袖を掴んで、言った。

「カ、カーライルさん、ちゃんと私のところに帰ってきてください
ますか……？」

「……」

思わず無言を返すと、ファルは心配そうな顔で、

「そ、その、どーしても不安で！ 私、未だにカーライルさんにご
迷惑をかけてばかりですし、もしかしたらまたいつの間にか嫌われ
てるんじゃないかとか、愛想を尽かされてどこかに行ってしまうん
じゃないかとか、散々弄ばれた挙げ句に飽きられて手酷く捨てられ
てしまうんじゃないかとか！」

「……おい」

最後のはなんだ。

どうやら錯乱しているらしい。

「余計な心配するな」

ため息をついて。

自然と浮かんできたのは、やはり苦笑だった。

「最後のはともかく、他のは全く心配する必要はない」

「さ、最後のはともかく！？」

顔に縦線が入った。

……ま、冗談はおいとこう。

「そうだな」

考えてみればそれもいいのかもしれない。

今までのことを全て報告して。

ずっと顔を見せてやれなかったことを詫びて。

最後にこいつのことを紹介しよう。

あいつがどう思うか、それはわからないが。

「じゃあ神父たちの許可がもらえたら、一緒に行くか」

「ほつ……ホントですかっ!？」

「ああ」

多分、祝福してくれると思う。

ああ……そうだ。

それまでに色々と決心しておくのもいいかもしれない。

こいつのこととか。

これからのこととか

ひゅう、と風が吹いた。

空はどこまでも澄み切っていて。

「カーライルさん」

遠くが騒がしい。

どうやら勉強に耐えられなくなった子供たちが、逃げ戻ってきた

ようだ。

「……ん？」

決して優しくはなかったこの世界の中で。

長い、長い暗闇をさまよい歩いて、ようやく手に入れたもの。

「私、あなたと出会うことができ、ホントに幸せです」

見慣れた、掛け替えのない笑顔。

「……ああ」

俺も、そうだ。

疫病神だった少女は、いつの間にか幸せの女神へと姿を変えていたのだ。

「青虫がアゲハチョウになるのよりひどいな……」

「？」

「いや、なんでもない」

ひゅう、と。

もう一度、風が吹いて。

「きゃー！ 先生、助けてーっ！！」

「お、おい……二人とも！ 頼むからその子達を捕まえてくれっ！
」

駆け寄ってきた子供たちと。

息を切らしながら追いかけてきた老神父。

「さて。休憩時間も終わりだな」

「……はい。そうみたいです」

クスツと笑って。

俺はその小さな手を取り、ゆっくりと立ち上がった。

そこから感じる温もりは、きつとこれからも俺を支え、励ましてくれるだろう。

この世界がどれだけ冷たかろうと。

この先、どんな苦難があろうとも。

それだけは絶対に、二度と手放すことはない。

そして。

幸せで騒がしい一日が、また続いていく

- 了 -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4566w/>

或る小悪党の苦悩

2011年10月11日03時24分発行